

Oracle Calendar

リファレンス・マニュアル

リリース 2 (9.0.4)

2003 年 12 月

部品番号 : J07728-02

Oracle Calendar リファレンス・マニュアル, リリース 2 (9.0.4)

部品番号: J07728-02

原本名: Oracle Calendar Reference Manual, Release 2 (9.0.4)

原本部品番号: B10891-02

原本著者: Steve Carbone, Ingrid Pitchen, Robb Surridge, Jennifer Waywell, David Wood

原本協力者: George Babics, Mario Bonin, Chady Chaar, Tanya Correia, Manon Delisle, Bernard Desruisseaux, Patrice Lapierre, Benoit Martel, Alain Petit, Ridwan Tan

Copyright © 1993, 2003, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、**Oracle Corporation**（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である **Oracle Corporation**（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『**Restricted Rights**』と共に提供してください。この場合次の **Notice** が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

はじめに	vii
対象読者	viii
このマニュアルの構成	viii
関連ドキュメント	ix
表記規則	ix
A カレンダー・ユーザーおよびリソースのパラメータ	
概要	A-2
表示設定	A-6
リフレッシュ、通知およびリマインダの設定	A-7
他のユーザーに付与されるデフォルトのセキュリティ権限	A-10
グループおよび管理権限（ユーザー・プロフィールのみ）	A-11
X.400 アドレス情報（ユーザー・プロフィールのみ）	A-11
管理グループおよびパブリック・グループ	A-11
代理	A-12
その他	A-13
リソースの属性	A-13
B イベント・カレンダー・パラメータ	
概要	B-2
表示設定	B-5
リフレッシュ頻度および通知の設定	B-6
ユーザーのデフォルト・セキュリティ	B-7
その他	B-7
代理	B-8

C Calendar Server パラメータ

構成パラメータ	C-2
サーバー動作の制御	C-17
サーバーとディレクトリ・サーバーとの相互作用の制御	C-79
クライアント動作の制御	C-99
サーバーへのクライアント接続の制御	C-147

D Oracle Calendar Administrator パラメータ

構成パラメータ	D-2
---------------	-----

E カレンダ・アプリケーション・システム・パラメータ

OCAS.CONF	E-7
OCWC.CONF	E-21
OCWS.CONF	E-54
OCST.CONF	E-57

F Calendar Server ユーティリティ

UNIACCESSRIGHTS	F-4
UNIADDNODE	F-12
UNIADMRIGHTS	F-16
UNIARCH (UNIX 専用)	F-25
UNIB2LENDIAN	F-27
UNICHECK (UNIX 専用)	F-31
UNICKSUM	F-33
UNICLEAN (UNIX 専用)	F-34
UNICPINR	F-35
UNICPINU	F-41
UNICPOUTR	F-48
UNICPOUTU	F-53
UNICPR	F-59
UNICPU	F-63
UNIDB2LDIF	F-68
UNIDBBACKUP	F-74
UNIDBCONV	F-77
UNIDBFIX	F-79
UNIDBRESTORE	F-88

UNIDSACISETUP	F-92
UNIDSDIFF	F-94
UNIDSSEARCH	F-97
UNIDSSYNC	F-99
UNIDSUP	F-104
UNIENCRYPT	F-105
UNIGROUP	F-106
UNIICAL	F-113
UNIL2BENDIAN	F-124
UNIOLOGONS	F-127
UNIMMIMPSRV	F-132
UNIMVUSER	F-139
UNINODE	F-144
UNIOIDCONF	F-152
UNIPASSWD	F-155
UNIPING	F-158
UNIREQDUMP	F-162
UNIRESTORE	F-166
UNIRMOLD	F-169
UNIRNDEL	F-175
UNIRNSYNCH	F-176
UNISIZEOF	F-178
UNISLICE (UNIX 専用)	F-180
UNISNAPSHOT	F-182
UNISNCDUMP	F-185
UNISTART	F-188
UNISTAT	F-191
UNISTATS	F-193
UNISTATUS	F-200
UNISTOP	F-205
UNISTRCONV	F-209
UNISYNCREFRESH	F-211
UNITZINFO	F-213
UNIUSER	F-215
UNIVERSION	F-234
UNIWHO	F-235

G タイムゾーン表

H Calendar のディレクトリ・サーバー・スキーマの拡張機能

オブジェクト・クラス拡張機能	H-2
Calendar Server のオブジェクト・クラス	H-2
ctCalUser オブジェクト・クラス	H-2
ctCalAdmin オブジェクト・クラス	H-4
ctCalResource オブジェクト・クラス	H-5
属性の定義	H-6
属性名のデフォルト・マッピング	H-10

I カレンダ・エラー・コード・カテゴリ

J Calendar Server エラー・コード

索引

表リスト

A-1	ユーザー・プロファイルおよびリソース・プロファイル	A-2
A-2	リソース固有の属性	A-6
A-3	使用可能なキー	A-12
B-1	イベント・カレンダー・プロファイル・パラメータ	B-2
B-2	代理を指定するための承認済キー	B-8
C-1	unison.ini 構成パラメータ	C-2
D-1	ocad.ini 構成パラメータ	D-2
E-1	ocas.conf (アプリケーション・システム構成)	E-2
E-2	ocwc.conf (Web Client 構成)	E-3
E-3	ocws.conf (Web Services 構成)	E-6
E-4	ocst.conf (同期サーバー構成)	E-6
F-1	Calendar Server のユーティリティ	F-1
F-2	使用可能なキー: UNIACCESSRIGHTS	F-9
F-3	UNIACCESSRIGHTS -designate オプションに使用可能なキーおよび値	F-10
F-4	UNIACCESSRIGHTS -eventview オプションに使用可能なキーおよび値	F-10
F-5	UNIACCESSRIGHTS -taskview オプションに使用可能なキーおよび値	F-10
F-6	UNIACCESSRIGHTS -scheduling オプションに使用可能なキーおよび値	F-11
F-7	使用可能なキー: UNIADMRIGHTS	F-20
F-8	UNIADMRIGHTS -user オプションに使用可能なキーおよび値	F-21
F-9	UNIADMRIGHTS -resource オプションに使用可能なキーおよび値	F-21
F-10	UNIADMRIGHTS -eventcal オプションに使用可能なキーおよび値	F-22
F-11	UNIADMRIGHTS -admgrp オプションに使用可能なキーおよび値	F-22
F-12	UNIADMRIGHTS -pubgrp オプションに使用可能なキーおよび値	F-23
F-13	UNIADMRIGHTS -node オプションに使用可能なキーおよび値	F-23
F-14	UNIADMRIGHTS -server オプションに使用可能なキーおよび値	F-23
F-15	UNIADMRIGHTS -csm オプションに使用可能なキーおよび値	F-24
F-16	使用可能なキー: UNICPINR	F-38
F-17	使用可能なキー: UNICPINU	F-44
F-18	使用可能なキー: UNICPOUTR	F-50
F-19	使用可能なキー: UNICPOUTU	F-56
F-20	使用可能な行: UNICPR <resource identification>	F-59
F-21	使用可能な行: UNICPR <event descriptions>	F-61
F-22	使用可能な行: UNICPR <user identification>	F-63
F-23	使用可能な行: UNICPU <event description>	F-65
F-24	使用可能な行: UNICPR <task description>	F-66
F-25	イベント・カレンダーを指定するために使用可能なキー: UNIDB2LDIF	F-70
F-26	リソースを指定するために使用可能なキー: UNIDB2LDIF	F-70
F-27	ユーザーを指定するために使用可能なキー: UNIDB2LDIF	F-70
F-28	userfilterfmt パラメータに使用可能な値	F-71
F-29	unidbfix モード	F-81
F-30	イベント・カレンダーを指定するために使用可能なキー: UNIDSSYNC	F-101
F-31	リソースを指定するために使用可能なキー: UNIDSSYNC	F-102
F-32	ユーザーを指定するために使用可能なキー: UNIDSSYNC	F-102

F-33	リソースを指定するために使用可能なキー: UNIGROUP	F-110
F-34	ユーザーを指定するために使用可能なキー: UNIGROUP	F-110
F-35	グループを指定するために使用可能なキー: UNIGROUP	F-111
F-36	-u オプションに使用可能なイベント・カレンダー・キー: UNIICAL	F-121
F-37	-u オプションに使用可能なリソース・キー: UNIICAL	F-121
F-38	-u オプションに使用可能なユーザー・キー: UNIICAL	F-122
F-39	使用可能なキー: UNIMVUSER	F-142
F-40	使用可能なキー: UNIPASSWD	F-157
F-41	使用可能なキー: UNIPING	F-161
F-42	使用可能なキー: UNIRMOLD	F-172
F-43	使用可能なキー: UNIRMOLD	F-173
F-44	削除されるログ・ファイル	F-190
F-45	使用可能なキー: UNISTATS	F-196
F-46	unistats の CLIENT 出力フィールド	F-197
F-47	unistats の FUNCTION NAME 出力フィールド	F-198
F-48	unistatus 出力フィールド	F-203
F-49	タイムゾーン・フィールド	F-214
F-50	UNIUSER -eventcal オプションに使用可能なキー	F-227
F-51	UNIUSER -resource オプションに使用可能なキー	F-227
F-52	UNIUSER -user オプションに使用可能なキー	F-227
G-1	タイムゾーン	G-1
H-1	Calendar Server のオブジェクト・クラス	H-2
H-2	ctCal* 属性の定義	H-6
H-3	継承される属性の定義	H-9
H-4	LDAP 属性名の構成パラメータ	H-10

はじめに

Oracle Calendar は、オープン・スタンダードに基づくスケーラブルなカレンダー・ソフトウェアで、人およびリソースのスケジュール調整を効率的に行うことができます。その他の機能としては、専用サーバー、リアルタイム検索およびフリータイム検索、複数の国への配置をサポートする複数のタイムゾーンのサポートおよび UTF-8 エンコーディング、電子メールおよびワイヤレス・アラート、複数プラットフォームのサポート、およびセキュリティを強化するための拡張可能な Authentication, Compression and Encryption (ACE) フレームワークがあります。

Oracle Calendar Server は、統合された一連のカレンダー製品およびスケジューリング製品に対するバックエンドになります。ネットワークに接続したユーザーは、Desktop Client (Windows、Macintosh、Motif)、Web Client または Microsoft Outlook を使用してカレンダーを管理できます。モバイル・ユーザーは、予定表を様々な PDA または Oracle のワイヤレス・テクノロジーの追加機能を使用して同期させることや、携帯電話を使用してカレンダーのエントリを送信および受信することができます。

Oracle Calendar は Oracle Collaboration Suite の一部で、統合された電子メール、ボイス・メール、カレンダーおよびワイヤレス・サービスを提供します。Oracle Collaboration Suite のその他のコンポーネントの詳細は、Oracle の Web サイトまたは関連する製品のドキュメントを参照してください。

対象読者

このリファレンス・マニュアルでは、Calendar Server で使用される構成パラメータおよびユーティリティについて説明します。このマニュアルは、通常 Oracle Calendar をインストール、構成、使用およびメンテナンスし、特に Oracle Calendar Server についてこれらの作業をする管理者を対象としています。このマニュアルは、Calendar Server についての配置、構成およびメンテナンス手順を説明した『Oracle Calendar 管理者ガイド』とセットになるマニュアルです。

このマニュアルの構成

このマニュアルは、次の 10 の付録で構成されています。

付録 A 「カレンダー・ユーザーおよびリソースのパラメータ」

この付録では、ユーザーおよびリソースの属性のデフォルト値を設定する構成パラメータについて説明します。

付録 B 「イベント・カレンダー・パラメータ」

この付録では、イベント・カレンダーの属性のデフォルト値を設定する構成パラメータについて説明します。

付録 C 「Calendar Server パラメータ」

この付録では、Calendar Server の動作を制御する構成パラメータについて説明します。

付録 D 「Oracle Calendar Administrator パラメータ」

この付録では、Calendar Administrator インタフェースを制御するパラメータについて説明します。

付録 E 「カレンダー・アプリケーション・システム・パラメータ」

この付録では、Oracle Calendar アプリケーション・システム（OCAS）およびそのコンポーネントの構成に使用できるすべての調整可能なパラメータをリストし、これらのパラメータについて説明します。

付録 F 「Calendar Server ユーティリティ」

この付録では、Calendar Server を管理するために提供されるコマンドライン・ユーティリティの使用法および構文を示します。

付録 G 「タイムゾーン表」

この付録では、地域と対応するタイムゾーンのマッピングを示します。

付録 H「Calendar のディレクトリ・サーバー・スキーマの拡張機能」

この付録では、Oracle Internet Directory に格納される Calendar 固有の情報の詳細を説明します。

付録 I「カレンダー・エラー・コード・カテゴリ」

この付録では、Calendar Server のエラー・コードの各カテゴリに関連する機能部分の概要を説明します。

付録 J「Calendar Server エラー・コード」

この付録では、最も高い頻度で発生する Calendar Server のエラー・コードについて、エラー・コード ID、エラー名、考えられる原因の説明、および推奨される処置などについて説明します。

関連ドキュメント

詳細は、次の Oracle Calendar ドキュメントを参照してください。

- 『Oracle Calendar 管理者ガイド』
- Oracle Collaboration Suite のリリース・ノート

表記規則

このマニュアルでは、Windows および NT は、Windows 95、Windows 98 および Windows NT オペレーティング・システムを指しています。

例では、特に指定しないかぎり、各行の末尾で暗黙的に改行されます。入力行の末尾で [Enter] キーを押す必要があります。

このマニュアルでは、次の表記規則が使用されています。

表記規則	意味
.	コード例での垂直の省略記号は、例に直接関連しない情報が省略されていることを示します。
...	文またはコマンドでの水平の省略記号は、例に直接関連しない文またはコマンドの一部が省略されていることを示します。
太字	太字は、本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、コンピュータの画面に表示されるテキスト、またはユーザーの入力文字列に使用されます。ファイル名、パス名および関数にも使用されます。

表記規則	意味
/	スラッシュは、UNIX 構文を使用したパス名のディレクトリの区切り文字として使用されます。Windows オペレーティング・システムの場合は、特に記載がないかぎり、スラッシュのかわりに円記号 (¥) を使用する必要があります。
<>	山カッコは、ユーザーが指定する名前や変数を囲みます。
[]	大カッコは、オプション句を囲みます。オプション句からは、0 個または 1 個の句を選択できます。

カレンダー・ユーザーおよびリソースの パラメータ

この付録では、デフォルトのユーザー・プロファイルおよびリソース・プロファイルの構成に使用できるパラメータについて説明します。これらのパラメータは、それぞれ \$ORACLE_HOME/ocal/misc/user.ini ファイルおよび \$ORACLE_HOME/ocal/misc/resource.ini ファイルに含まれています。ユーザー・プロファイルおよびリソース・プロファイルの実装方法は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』を参照してください。

各パラメータの指定デフォルト値は、そのパラメータが構成ファイルから省略された場合に使用されます。これらのデフォルト値は、それぞれのインストールに最適な設定であるとはかぎりません。ソフトウェアに含まれている初期設定ファイルの設定を使用して、詳細な構成を行うことができます。これらのファイルを変更する前に、印刷物または電子形式のファイルのコピーを参照用に保存しておくことをお勧めします。

概要

指定可能な情報：

- 表示設定
- リフレッシュ頻度、通知およびリマインダの設定
- 他のユーザーに付与される表示およびスケジューリング用のアクセス権
- タイムゾーン（ノードと異なる場合）
- 新しいユーザーおよびリソースが含まれる、パブリック・グループおよび管理グループのリスト
- ユーザーまたはリソースの代理のリスト
- グループ、休日およびリソースの管理権限（ユーザーのみ）
- デフォルトのディレクトリ・アドレス・フィールド（ユーザーのみ）

次の表は、ユーザーおよびリソースに対して設定できる値の一部を示しています。完全なリストを表示するには、`uniuser` ユーティリティおよび `-info` パラメータと、`-user` パラメータまたは `-resource` パラメータを使用します。付録 F「[Calendar Server ユーティリティ](#)」の `uniuser` の説明を参照してください。

表 A-1 ユーザー・プロフィールおよびリソース・プロフィール

パラメータ	可能な値	デフォルト値	説明
ENABLE	TRUE、FALSE	TRUE	カレンダー・アカウントを有効にする。
ShowSunday	TRUE、FALSE	TRUE	日曜日を表示する。
ShowSaturday	TRUE、FALSE	TRUE	土曜日を表示する。
TimeFormat	1（24 時間） 2（AM/PM）	2（AM/PM）	時間の表示形式を設定する。
StartDay	00h00 ～ 24h00	08h00	表示する予定表の開始時間を設定する。
EndDay	00h00 ～ 24h00	18h00	表示する予定表の終了時間を設定する。
TimeInc	5、10、15、20、30、 60（分）	30（分）	日表示および週表示の時間の増分を定義する。
RefreshFrequency	0 ～ 65536（分）	15（分）	クライアントのリフレッシュ頻度を設定する。

表 A-1 ユーザー・プロフィールおよびリソース・プロフィール (続き)

パラメータ	可能な値	デフォルト値	説明
MailNotification	TRUE、FALSE	FALSE	ユーザーが電子メール通知を受信できるかどうかを指定する。
PUBLISHEDTYPE	PUBLISHED、NOTPUBLISHED	NOTPUBLISHED	ユーザーの予定表を公開できるかどうかを指定する。
GLOBALREADACCESS	TRUE、FALSE	FALSE	ユーザーが予定表を他のインターネット・ユーザーと共有できるかどうかを指定する。
Language	en (英語) fr (フランス語) it (イタリア語) es (スペイン語) fi (フィンランド語) de (ドイツ語) pt (ポルトガル語) ja (日本語) zh-CN (中国語) ko (韓国語) sv (スウェーデン語) pt (ポルトガル語 (ブラジル)) nl (オランダ語)	en	通知メッセージおよびリマインダ・メッセージに使用する言語を決定する。
DefaultReminder	0 (無効) 1 (ポップアップ) 2 (ポップアップおよび音声)	2 (ユーザー) 0 (リソース)	ポップアップ・リマインダの使用を制御する。
TimeBeforeReminder	0、2、5、10、60、120、240 (分) 12、24、48、96 (時間) 7、14、31 (日)	0	デフォルトのリマインダのリマインダ時間を設定する。
ALERT-ENABLE SMSServiceEnable	TRUE、FALSE	FALSE	すべてのアラート (サーバー側リマインダおよび通知) を有効にする。ユーザー限定。

表 A-1 ユーザー・プロフィールおよびリソース・プロフィール（続き）

パラメータ	可能な値	デフォルト値	説明
ALERT-NOTIFMEETING	TRUE、FALSE	TRUE	通常のイベントのアラートを有効にする。ユーザー限定。
ALERT-NOTIFDAYEVENT	TRUE、FALSE	FALSE	終日イベントのアラートを有効にする。ユーザー限定。
ALERT-NOTIFDAILYNOTE	TRUE、FALSE	FALSE	メモのアラートを有効にする。ユーザー限定。
ALERT-NOTIFJOURNAL	TRUE、FALSE	FALSE	履歴のアラートを有効にする。ユーザー限定。
ALERT-NOTIFOWNER	TRUE、FALSE	TRUE	ユーザーが所有するエントリのアラートも有効にする。ユーザー限定。
ALERT-NOTIFDECLINED	TRUE、FALSE	TRUE	ユーザーが辞退したエントリのアラートも有効にする。ユーザー限定。
ALERT-SUSPENDRANGE	HH:MM-HH:MM	なし	停止期間を定義する。ユーザー限定。
ALERT-SUSPENDRANGEACTION	NONE、HOLD、DISCARD	NONE	停止アクションを定義する。ユーザー限定。
ALERT-HOLD	TRUE、FALSE	FALSE	ただちにすべてのアラートを保留する。ユーザー限定。
ViewNormalEvent	YES、NO、TIME	NO	他のユーザーに与えられるデフォルト・セキュリティ
ViewPersonalEvent	YES、NO、TIME	NO	ViewNormalEvent と同様。
ViewConfidentialEvent	YES、NO、TIME	NO	ViewNormalEvent と同様。
CanBookMe	TRUE、FALSE	FALSE	出席を依頼できるユーザーかどうかを指定する。
ViewNormalTask	YES、NO	NO	他のユーザーに与えられるデフォルト・セキュリティ
ViewPersonalTask	YES、NO	NO	ViewNormalTask と同様。
ViewConfidentialTask	YES、NO	NO	ViewNormalTask と同様。
CreatePublicGroups	TRUE、FALSE	FALSE	パブリック・グループの作成を制御する。
ManageAdmGroups	TRUE、FALSE	FALSE	管理グループの作成を制御する。
ManageHolidays	TRUE、FALSE	FALSE	休日の管理を制御する。

表 A-1 ユーザー・プロフィールおよびリソース・プロフィール（続き）

パラメータ	可能な値	デフォルト値	説明
OU1	<組織単位 1>	N/A	ディレクトリ・アドレス・フィールドの値。
OU2	<組織単位 2>	N/A	OU1 と同様。
OU3	<組織単位 3>	N/A	OU1 と同様。
OU4	<組織単位 4>	N/A	OU1 と同様。
O	<組織>	N/A	OU1 と同様。
C	<国>	N/A	OU1 と同様。
A	<管理ドメイン>	N/A	OU1 と同様。
P	<プライベート・ドメイン>	N/A	OU1 と同様。
TimeZone	<タイムゾーン>	unison.ini で定義された値	ユーザーまたはリソースに限定されるタイムゾーンを定義する。
Group0 ～ Group9	<管理グループ名またはパブリック・グループ名>	N/A	ユーザーまたはリソースを含めるグループを指定する。
Designate0 ～ Designate9	<ユーザー名>	N/A	新しいユーザーまたはリソースの代理として作業できるユーザーを定義する。
EMAIL	有効な電子メール・アドレス	N/A	ユーザー： ユーザーの電子メール・アドレス。 リソース： リソースの電子メール・アドレス（リソースの連絡先電子メールではない）。

表 A-2 リソース固有の属性

パラメータ	可能な値	デフォルト値	説明
NOTIFY-APPROVER	TRUE、FALSE	FALSE	リソースの予約に承認が必要であることを示す。
APPROVER-EMAIL	有効な電子メール・アドレス	N/A	リソースに対する要求を承認するユーザーの電子メール・アドレスを指定する。
ALLOW-CONFLICT	YES、NO、 DEFAULT（すべてのリソースを同じ値に設定）	NO	リソースの重複予約を許可する。DEFAULT を使用すると、サーバー・パラメータ (unison.ini) [ENG] allowresourceconflict で設定されたデフォルト値が再ソートされます。
CATEGORY	有効なリソース・カテゴリ名	N/A	リソース・カテゴリ。

表示設定

ShowSunday = TRUE/FALSE
ShowSaturday = TRUE/FALSE

これらのパラメータは、クライアント上の週表示にこれらの曜日を含めるかどうかを決定します。デフォルト値は TRUE です。

TimeFormat = 1/2

このパラメータは、時間を 24 時間時計 (24h) または標準時計 (AM/PM) のどちらで表示するかを決定します。デフォルト値は 2 (AM/PM) です。

StartDay = <time of day>

このパラメータは、ユーザーの予定表 (日表示および週表示のみ) に表示される最初のタイム・スロットを決定します。垂直スクロール・バーを使用すると、以前のタイム・スロットも表示できます。この設定によるユーザーの通常の業務時間への影響はありません。デフォルト値は 08h00 です。

EndDay = <time of day>

このパラメータは、ユーザーの予定表 (日表示および週表示のみ) に表示される、最後のタイム・スロットの定義に使用されます。この設定によって、StartDay、タイム・スロットの増分および間隔の高さなどのその他の設定が多少の影響を受けます。また、画面に表示される 1 日のうちの分量が左右されます。垂直スクロール・バーを使用すると、以降のタイム・スロットも表示できます。この設定によるユーザーの通常の業務時間への影響はありません。デフォルト値は 18h00 です。

TimeInc = <time_in_minutes>

このパラメータは、日表示および週表示のタイム・スロットの増分を定義します。このパラメータの値を調整すると、画面に表示される 1 日のうちの分量が変わります。指定できるのは、次の値のみです。5、10、15、20、30、60（分）。デフォルト値は 15 分です。

リフレッシュ、通知およびリマインダの設定

RefreshFrequency = <time_in_minutes>

このパラメータは、クライアントのリフレッシュ頻度を分単位で設定します。値を 0 にすると、実質的にリフレッシュが無効になります。デフォルト値は 15 分です。

MailNotification = TRUE/FALSE

このパラメータは、ユーザーが電子メール通知の受信を希望するかどうかを指定します。このパラメータを FALSE に設定した場合、カレンダー・クライアントによって送信される受信者のリストに自動的にユーザー名を追加する際、そのユーザー名が除外されます。これは、Outlook クライアント用の Oracle Connector には適用されません。この設定は、ユーザーからの電子メール通知の送信には影響しません。デフォルト値は FALSE です。

ALERT-ENABLE=TRUE

ALERT-HOLD=TRUE/FALSE

ALERT-SUSPENDRANGEACTION=NONE/HOLD/DISCARD

ALERT-SUSPENDRANGE=HH:MM-HH:MM

電子メールおよびアラートのリマインダは、リソースおよびイベント・カレンダーではサポートされていません。ALERT-ENABLE パラメータは、アラート通知およびサーバー側のリマインダがこのユーザーに対して有効かどうかを決定します。デフォルト値は TRUE です。

ALERT-HOLD を TRUE に設定すると、すべてのアラート通知およびサーバー側リマインダの配信がただちに停止され、このユーザー属性が FALSE にリセットされるまで再開されません。アラート通知およびサーバー側リマインダの配信を一定期間停止させる場合は、ALERT-SUSPENDRANGEACTION パラメータを HOLD に設定します。期間は、ALERT-SUSPENDRANGE を使用して指定します。指定した期間内に起動されたアラートを保留せずに削除するには、ALERT-SUSPENDRANGEACTION を DISCARD に設定します。停止期間は ALERT-SUSPENDRANGE を使用して指定します。

ALERT-NOTIFMEETING=TRUE/FALSE

ALERT-NOTIFDAYEVENT=TRUE/FALSE

ALERT-NOTIFDAILYNOTE=TRUE/FALSE

ALERT-NOTIFJOURNAL=TRUE/FALSE

ALERT-NOTIFOWNER=TRUE/FALSE

ALERT-NOTIFDECLINED=TRUE/FALSE

これらのパラメータは、(追加、変更または削除によって) 更新された会議、終日イベント、メモ、履歴のアラート通知の受信を、ユーザーが希望するかどうかを指定します。ユーザーが所有するカレンダー・エントリを除外するには、ALERT-NOTIFOWNER を FALSE に設定します。ユーザーが辞退したカレンダー・エントリを除外するには、ALERT-NOTIFDECLINED を FALSE に設定します。

```
Language = en (英語)
           fr (フランス語)
           it (イタリア語)
           es (スペイン語)
           fi (フィンランド語)
           de (ドイツ語)
           pt (ポルトガル語)
           ja (日本語)
           zh-CN (中国語)
           ko (韓国語)
           sv (スウェーデン語)
           pt-BR (ポルトガル語 (ブラジル))
           nl (オランダ語)
```

サーバー側リマインダ・メッセージに使用する言語を決定します。サーバー側リマインダの詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』の「アラート」の章を参照してください。

```
DefaultReminder = 0/1/2
```

1 に設定した場合、予定表エントリおよび終日イベントのデフォルトのリマインダが、ポップアップ・リマインダに設定されます。2 に設定した場合、リマインダはポップアップになり、ビープ音が含まれます。タスクでは、デフォルトのタスクの終了予定リマインダだけがポップアップ・リマインダに設定され、デフォルトのタスクの開始時間リマインダは設定されません。また、メモのデフォルトのリマインダも設定されません。デフォルト値は 0 で、リマインダは設定されません。

```
TimeBeforeReminder = <time_in_minutes>
```

このパラメータは、デフォルトのリマインダ時間の設定に使用されます。つまり、値が 24 であれば、デフォルトのリマインダは、イベントが開始する 24 時間前に表示されます。指定できるのは、次の値のみです。0、2、5、10、60、120、240 (分)、12、24、48、96 (時間)、7、14、31 (日)。

```
REMINDER-SERVERALERT = TRUE/FALSE
REMINDER-VISUAL = TRUE/FALSE
REMINDER-AUDIBLE = TRUE/FALSE
REMINDER-SERVERMAIL = TRUE/FALSE
REMINDER-UPCOMING = TRUE/FALSE
REMINDER-LEADTIME = <time_in_minutes>
```

これらのパラメータは、このユーザーの通常のイベントに対してリマインダが有効かどうかを決定します。これらのリマインダのリードタイムは、REMINDER-LEADTIME を使用して設定されます。休日、タスクの開始時間、タスクの終了予定時間、メモおよび終日イベントのリマインダの設定用に、次のような類似したパラメータが存在します。

```
REMINDERHOLIDAY-SERVERALERT = TRUE/FALSE  
REMINDERHOLIDAY-VISUAL = TRUE/FALSE  
REMINDERHOLIDAY-AUDIBLE = TRUE/FALSE  
REMINDERHOLIDAY-SERVERMAIL = TRUE/FALSE  
REMINDERHOLIDAY-UPCOMING = TRUE/FALSE  
REMINDERHOLIDAY-LEADTIME = <time_in_minutes>
```

```
REMINDERTASKSTART-VISUAL = TRUE/FALSE  
REMINDERTASKSTART-AUDIBLE = TRUE/FALSE  
REMINDERTASKSTART-UPCOMING = TRUE/FALSE  
REMINDERTASKSTART-LEADTIME = <time_in_minutes>
```

```
REMINDERTASKDUE-VISUAL = TRUE/FALSE  
REMINDERTASKDUE-AUDIBLE = TRUE/FALSE  
REMINDERTASKDUE-UPCOMING = TRUE/FALSE  
REMINDERTASKDUE-LEADTIME = <time_in_minutes>
```

```
REMINDERDAILYNOTE-SERVERALERT = TRUE/FALSE  
REMINDERDAILYNOTE-VISUAL = TRUE/FALSE  
REMINDERDAILYNOTE-AUDIBLE = TRUE/FALSE  
REMINDERDAILYNOTE-SERVERMAIL = TRUE/FALSE  
REMINDERDAILYNOTE-UPCOMING = TRUE/FALSE  
REMINDERDAILYNOTE-LEADTIME = <time_in_minutes>
```

```
REMINDERDAYEVENT-SERVERALERT = TRUE/FALSE  
REMINDERDAYEVENT-VISUAL = TRUE/FALSE  
REMINDERDAYEVENT-AUDIBLE = TRUE/FALSE  
REMINDERDAYEVENT-SERVERMAIL = TRUE/FALSE  
REMINDERDAYEVENT-UPCOMING = TRUE/FALSE  
REMINDERDAYEVENT-LEADTIME = <time_in_minutes>
```

他のユーザーに付与されるデフォルトのセキュリティ権限

```
ViewNormalEvent = YES/NO/TIME
ViewPersonalEvent = YES/NO/TIME
ViewConfidentialEvent = YES/NO/TIME
ViewNormalTask = YES/NO (user profiles only)
ViewPersonalTask = YES/NO (user profiles only)
ViewConfidentialTask = YES/NO (user profiles only)
```

これらのパラメータは、これらのイベントまたはタスクを作成する際に、他のユーザーに付与されるデフォルトのセキュリティ権限を決定します。たとえば、**ViewNormalEvent** が **TIME** に設定されている場合、他のユーザーに対してイベントのタイム・スロットだけが表示され、イベントのタイトル、場所および説明は表示されません。逆に、**ViewNormalEvent** が **YES** に設定されている場合、イベントのすべての詳細が、他のユーザーに表示されます。**ViewNormalEvent** が **NO** に設定されている場合は、このイベントに関して他のユーザーには何も表示されません。

これらのパラメータのデフォルト値は、すべて **NO** です。

パブリック・イベントのすべての詳細は、他のユーザーに常に表示されます。この特性は、これらのパラメータを使用しても変更できません。

ViewNormalEvent および **ViewNormalTask** の設定は、クライアント上の標準アクセス・レベルにマップされます。

ViewPersonalEvent および **ViewPersonalTask** の設定は、クライアント上の個人用アクセス・レベルにマップされます。

ViewConfidentialEvent および **ViewConfidentialTask** の設定は、クライアント上の社外秘アクセス・レベルにマップされます。

```
CanBookMe = TRUE/FALSE
```

このパラメータを **TRUE** に設定すると、定義されていないユーザーのスケジュールをそのユーザーに合わせることができます。ただし、クライアント内のユーザーの方が優先されます。デフォルト値は **FALSE** です。

リソースの **CanBookMe** 属性を **FALSE** に設定すると、リソースが制限されます。リソースが制限されると、全員がリソースを予約できなくなります。この設定は、読取り専用の **RESTRICTED** 属性によって反映されます。

グループおよび管理権限（ユーザー・プロフィールのみ）

CreatePublicGroups = FALSE

このパラメータは、ユーザーがパブリック・グループ（データベースのすべてのユーザーが使用できるグループ）を作成できるかどうかを決定します。ユーザーが削除されると、そのユーザーが所有するパブリック・グループも削除されます。デフォルト値は FALSE です。

ManageAdmGroups = FALSE

このパラメータは、ユーザーが管理グループを作成できるかどうかを決定します。パブリック・グループと同様に、管理グループはデータベースのすべてのユーザーが使用できます。ただし、管理グループは、作成したユーザーではなくシステム・オペレータが所有します。ユーザーが作成した管理グループは、そのユーザーが削除されると削除されます。デフォルト値は FALSE です。

ManageHolidays = FALSE

このパラメータは、ユーザーがシステム上で休日进行管理（作成、変更または削除）できるかどうかを決定します。

X.400 アドレス情報（ユーザー・プロフィールのみ）

次のパラメータを定義すると、同じ X.400 アドレス情報を共有する多数のユーザーを、データベースに移入する際に役立ちます。

OU1 = <Org_unit_1>
 OU2 = <Org_unit_2>
 OU3 = <Org_unit_3>
 OU4 = <Org_unit_4>
 O = <Organization>
 C = <Country>
 A = <Administrative_Domain>
 P = <Private_Member_Domain>

管理グループおよびパブリック・グループ

このセクションでは、ユーザーおよびリソースがシステムに追加される場合の追加先のグループを定義できます。セクションごとの最大グループ数は 10 で、これらのグループはあらかじめ作成しておく必要があります。

Group0 = <group_name>
 Group1 = <group_name>
 Group2 = <group_name>
 ...
 Group9 = <group_name>

代理

代理は、別のユーザーまたはリソースの予定表を変更する権限が割り当てられたユーザーです。

このセクションでは、ユーザーおよびリソースの代理を定義できます。セクションごとの代理の最大数は 10 で、これらの代理はあらかじめデータベースに存在している必要があります。

```
Designate0 = <designate_name>
Designate1 = <designate_name>
Designate2 = <designate_name>
...
Designate9 = <designate_name>
```

<designate_name> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は任意の文字列です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。value 文字列はワイルド・カード文字「*」で終了する場合があります。スラッシュ「/」が文字列に含まれる場合は、キーと値のペアのデリミタとして解釈されることを防ぐため、文字「¥」でエスケープする必要があります。たとえば、
"S=Hoopla/OU1=R¥/D" のようになります。

UNIX 環境でシェルが文字列を処理する場合（たとえば文字列がコマンドラインで提供される場合や、ユーティリティに引数として渡される場合）、文字列は引用符で囲む必要があります。また、シェルにとって意味をなす文字が文字列に含まれる場合は、シェルが解釈することを防ぐためその文字をエスケープ（つまり、エスケープ文字「¥」を前に付ける）します。

注意： ID のキーと値のペアが <user> 引数で指定されている場合は、ともに指定されている他のキーと値のペアはすべて無視されます。

指定する場合の例は、"S=Kilpi/G=Eeva"、"S=B*/G=Nicole/O=Acme"、
"O=Acme/ID=1111/OU1=authors" および "S=Austen/G=Jane/
EMAIL=mr_darcy@freemail.org" のようになります。

表 A-3 使用可能なキー

キー	フィールド
S	姓
G	名
I	イニシャル
ID	識別子
EMAIL	電子メール・アドレス

表 A-3 使用可能なキー（続き）

キー	フィールド
UID	固有の識別子
X	世代
OU1	組織単位 1
OU2	組織単位 2
OU3	組織単位 3
OU4	組織単位 4
O	組織
C	国
A	管理ドメイン
P	プライベート・ドメイン

その他

TimeZone = <time zone>
このパラメータは、そのユーザーの異なるタイムゾーンを定義する場合に使用します。

リソースの属性

ALLOW-CONFLICT=YES

このパラメータは、このリソースが重複予約可能かどうかを決定する際に使用します。Calendar Server 上のすべてのリソースの属性を同じ値にするには、このパラメータを DEFAULT に設定します。デフォルト値は、サーバー・パラメータ [ENG] allowresourceconflict を使用して指定します。このマニュアルの付録 C「Calendar Server パラメータ」を参照してください。

NOTIFY-APPROVER=TRUE

このパラメータは、リソースの予約にリソース管理者の承認が必要なことを指定します。この属性がオンになっている場合（uniaccessrights を使用）、リソースは管理者の承認を受けた後で予約されます。APPROVER-EMAIL 属性を使用して、このリソースの管理者の電子メール・アドレスを指定します。リソース承認メカニズムを有効にするには、ALLOW-CONFLICT 属性も YES に設定する必要があります。

`CATEGORY=<category>`

このパラメータは、リソースへのカテゴリの割当てに使用します。カテゴリは、リソースの検索を簡略化するために使用されます。カテゴリ名は、カテゴリ・ファイル `$ORACLE_HOME/ocal/misc/category.ini` で定義されているカテゴリのいずれかである必要があります。『Oracle Calendar 管理者ガイド』も参照してください。

イベント・カレンダー・パラメータ

この付録では、\$ORACLE_HOME/ocal/misc/eventcal.ini ファイルのデフォルト・イベント・カレンダー・プロファイルの構成に使用できるパラメータについて説明します。イベント・カレンダー・プロファイルの実装方法は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』を参照してください。

各パラメータの指定デフォルト値は、そのパラメータが構成ファイルから省略された場合に使用されます。これらのデフォルト値は、それぞれのインストールに最適な設定であるとは限りません。ソフトウェアに含まれている初期設定ファイルの設定を使用して、詳細な構成を行うことができます。これらのファイルを変更する前に、印刷物または電子形式のファイルのコピーを参照用に保存しておくことをお勧めします。

概要

指定可能な情報：

- クライアントの表示設定
- リフレッシュ頻度およびリマインダの設定
- ユーザーに付与される表示およびスケジューリング用のアクセス権
- タイムゾーン（ノードと異なる場合）
- イベント・カレンダーの代理のリスト

イベント・カレンダーはユーザーのカレンダー・アカウントと類似しており、任意のカレンダー・クライアントを使用し、アカウント・パスワードを入力してログインすることでアクセスできます。この場合、表示設定、リフレッシュ頻度およびリマインダの設定が適用されます。次の表は、イベント・カレンダーに対して設定できる値の一部を示しています。完全なリストを表示するには、uniuser ユーティリティおよび -eventcal パラメータと -info パラメータを使用します。付録 F「Calendar Server ユーティリティ」の uniuser の説明を参照してください。

表 B-1 イベント・カレンダー・プロファイル・パラメータ

パラメータ	可能な値	デフォルト値	説明
ShowSunday	TRUE、FALSE	TRUE	日曜日の表示 / 非表示を切り替える。
ShowSaturday	TRUE、FALSE	TRUE	土曜日の表示 / 非表示を切り替える。
TimeFormat	1（24 時間） 2（AM/PM）	2（AM/PM）	時間の表示形式を設定する。
StartDay	00h00 ～ 24h00	08h00	表示する予定表の開始時間を設定する。
EndDay	00h00 ～ 24h00	18h00	表示する予定表の終了時間を設定する。
TimeInc	5、10、15、20、30、 60（分）	30（分）	日表示および週表示の時間の増分を定義する。
RefreshFrequency	0 ～ 65536（分）	15（分）	クライアントのリフレッシュ頻度を設定する。
DefaultReminder	0（無効） 1（ポップアップ） 2（ポップアップおよび 音声）	2	ポップアップ・リマインダおよび音声リマインダの使用を制御する。

表 B-1 イベント・カレンダー・プロファイル・パラメータ（続き）

パラメータ	可能な値	デフォルト値	説明
TimeBeforeReminder	0、2、5、10、60、 120、240（分） 12、24、48、96（時間） 7、14、31（日）	10（分）	デフォルトのリマインダのリマインダ時間を設定する。
SMSServiceEnable	TRUE、FALSE	TRUE	ワイヤレス・リマインダを有効にする。
Language	en（英語） fr（フランス語） it（イタリア語） es（スペイン語） fi（フィンランド語） de（ドイツ語） pt（ポルトガル語） ja（日本語） zh-CN（中国語） ko（韓国語） sv（スウェーデン語） pt（ポルトガル語 （ブラジル）） nl（オランダ語）	en	リマインダ・メッセージに使用する言語を決定する。
ViewNormalEvent	YES、NO、TIME	YES	他のユーザーに与えられるデフォルト・セキュリティ。
ViewPersonalEvent	YES、NO、TIME	YES	他のユーザーに与えられるデフォルト・セキュリティ。
ViewConfidentialEvent	YES、NO、TIME	TIME	他のユーザーに与えられるデフォルト・セキュリティ。
ViewNormalTask	YES、NO	NO	他のユーザーに与えられるデフォルト・セキュリティ。
ViewPersonalTask	YES、NO	NO	他のユーザーに与えられるデフォルト・セキュリティ。
ViewConfidentialTask	YES、NO	NO	他のユーザーに与えられるデフォルト・セキュリティ。

表 B-1 イベント・カレンダー・プロファイル・パラメータ（続き）

パラメータ	可能な値	デフォルト値	説明
OU1	< 組織単位 1>	N/A	ディレクトリ・アドレス・フィールドの値。
OU2	< 組織単位 2>	N/A	OU1 と同様。
OU3	< 組織単位 3>	N/A	OU1 と同様。
OU4	< 組織単位 4>	N/A	OU1 と同様。
O	< 組織 >	N/A	OU1 と同様。
C	< 国 >	N/A	OU1 と同様。
A	< 管理ドメイン >	N/A	OU1 と同様。
P	< プライベート・ドメイン >	N/A	OU1 と同様。
TimeZone	< タイムゾーン >	unison.ini で定義された値	イベント・カレンダーに限定されるタイムゾーンを定義する。
Designate0 ~ Designate9	< ユーザー名 >	N/A	新しいイベント・カレンダーの代理として作業できるユーザーを定義する。

表示設定

ShowSunday = TRUE/FALSE

ShowSaturday = TRUE/FALSE

これらのパラメータは、クライアント上の週表示にこれらの曜日を含めるかどうかを決定します。デフォルト値は TRUE です。

TimeFormat = 1/2

このパラメータは、時間を 24 時間時計 (24h) または標準時計 (AM/PM) のどちらで表示するかを決定します。デフォルト値は 2 (AM/PM) です。

StartDay = <time of day>

このパラメータは、イベント・カレンダーの予定表（日表示および週表示のみ）に表示される最初のタイム・スロットを決定します。垂直スクロール・バーを使用すると、以前のタイム・スロットも表示できます。この設定は、イベント・カレンダーの予定表の通常の業務時間には影響しません。デフォルト値は 08h00 です。

EndDay = <time of day>

このパラメータは、イベント・カレンダーの予定表（日表示および週表示のみ）に表示される、最後のタイム・スロットの定義に使用されます。この設定によって、StartDay、タイム・スロットの増分および間隔の高さなどのその他の設定が多少の影響を受けます。また、画面に表示される 1 日のうちの分量が左右されます。垂直スクロール・バーを使用すると、以降のタイム・スロットも表示できます。この設定は、イベント・カレンダーの予定表の通常の業務時間には影響しません。デフォルト値は 18h00 です。

TimeInc = <time_in_minutes>

このパラメータは、日表示および週表示のタイム・スロットの増分を定義します。このパラメータの値を調整すると、画面に表示される 1 日のうちの分量が変わります。指定できるのは、次の値のみです。5、10、15、20、30、60（分）。デフォルト値は 15 分です。

リフレッシュ頻度および通知の設定

RefreshFrequency = <time_in_minutes>

このパラメータは、クライアントのリフレッシュ頻度を分単位で設定します。値を 0 にすると、実質的にリフレッシュが無効になります。デフォルト値は 15 分です。

Language = en (English)
fr (French)
it (Italian)
es (Spanish)
fi (Finnish)
de (German)
pt (Portuguese)
ja (Japanese)
zh-CN (Chinese)
ko (Korean)
sv (Swedish)
pt-BR (Brazilian Portuguese)
nl (Dutch)

サーバー側リマインダ・メッセージに使用する言語を決定します。サーバー側リマインダおよびユーザー言語の詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』を参照してください。

DefaultReminder = 0/1/2

1 に設定した場合、予定表エントリおよび終日イベントのデフォルトのリマインダが、ポップアップ・リマインダに設定されます。2 に設定した場合は、ポップアップおよび音声（ビープ）になります。タスクでは、デフォルトのタスクの終了予定リマインダだけがポップアップ・リマインダに設定され、デフォルトのタスクの開始時間リマインダは設定されません。また、メモのデフォルトのリマインダも設定されません。デフォルト値は 0 で、リマインダは設定されません。

TimeBeforeReminder = <time_in_minutes>

このパラメータは、デフォルトのリマインダ時間の設定に使用されます。つまり、値が 24 であれば、デフォルトのリマインダは、イベントが開始する 24 時間前に表示されます。指定できるのは、次の値のみです。0、2、5、10、60、120、240（分）、12、24、48、96（時間）、7、14、31（日）。

ユーザーのデフォルト・セキュリティ

```
ViewNormalEvent = YES/NO/TIME  
ViewPersonalEvent = YES/NO/TIME  
ViewConfidentialEvent = YES/NO/TIME  
ViewNormalTask = YES/NO (user profiles only)  
ViewPersonalTask = YES/NO (user profiles only)  
ViewConfidentialTask = YES/NO (user profiles only)
```

これらのパラメータは、イベント・カレンダーでこれらのイベントまたはタスクを作成する際に、ユーザーに付与されるデフォルトのセキュリティ権限を決定します。たとえば、ViewNormalEvent が TIME に設定されている場合、ユーザーに対してイベントのタイム・スロットだけが表示され、イベントのタイトル、場所および説明は表示されません。逆に、ViewNormalEvent が YES に設定されている場合、イベントのすべての詳細がユーザーに表示されます。ViewNormalEvent が NO に設定されている場合は、このイベントに関してユーザーには何も表示されません。

これらのパラメータのデフォルト値は、すべて NO です。

パブリック・イベントのすべての詳細は、ユーザーに常に表示されます。この特性は、これらのパラメータを使用しても変更できません。

ViewNormalEvent および ViewNormalTask の設定は、クライアント上の標準アクセス・レベルにマップされます。

ViewPersonalEvent および ViewPersonalTask の設定は、クライアント上の個人用アクセス・レベルにマップされます。

ViewConfidentialEvent および ViewConfidentialTask の設定は、クライアント上の社外秘アクセス・レベルにマップされます。

その他

```
TimeZone = <time zone>
```

このパラメータは、そのイベント・カレンダーの異なるタイムゾーンを定義する場合に使用します。

代理

代理は、イベント・カレンダーのコンテンツを変更する権限が割り当てられたユーザーです。

このセクションでは、イベント・カレンダーの代理を定義できます。セクションごとの代理の最大数は 10 で、これらの代理はあらかじめデータベースに存在している必要があります。

```
Designate0 = <designate_name>
Designate1 = <designate_name>
Designate2 = <designate_name>
...
Designate9 = <designate_name>
```

<designate_name> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は任意の文字列です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。value 文字列はワイルド・カード文字「*」で終了する場合があります。スラッシュ「/」が文字列に含まれる場合は、キーと値のペアのデリミタとして解釈されることを防ぐため、文字「¥」でエスケープする必要があります。たとえば、
"S=Hoopla/OU1=R¥/D" のようになります。

UNIX 環境でシェルが文字列を処理する場合（たとえば文字列がコマンドラインで提供される場合や、ユーティリティに引数として渡される場合）、文字列は引用符で囲む必要があります。また、シェルにとって意味をなす文字が文字列に含まれる場合は、シェルが解釈することを防ぐためその文字をエスケープ（つまり、エスケープ文字「¥」を前に付ける）します。

注意： ID のキーと値のペアが <user> 引数で指定されている場合は、ともに指定されている他のキーと値のペアはすべて無視されます。

指定する場合の例は、"S=Kilpi/G=Eeva"、"S=B*/G=Nicole/O=Acme"、
"O=Acme/ID=1111/OU1=authors" および "S=Austen/G=Jane/
EMAIL=mr_darcy@freemail.org" のようになります。

表 B-2 代理を指定するための承認済キー

キー	X.400 フィールド
S	姓
G	名
I	イニシャル
ID	識別子
X	世代
OU1	組織単位 1

表 B-2 代理を指定するための承認済キー（続き）

キー	X.400 フィールド
OU2	組織単位 2
OU3	組織単位 3
OU4	組織単位 4
O	組織
C	国
A	管理ドメイン
P	プライベート・ドメイン

Calendar Server パラメータ

この付録では、Calendar Server の構成に使用できるすべての調整可能なパラメータをリストし、これらのパラメータについて説明します。リストされているすべてのパラメータは、初期設定ファイル `$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini` に含まれています。

各パラメータの指定デフォルト値は、そのパラメータが構成ファイルから省略された場合に使用されます。これらのデフォルト値は、それぞれのインストールに最適な設定であるとはかぎりません。ソフトウェアに含まれている初期設定ファイルの設定を使用して、詳細な構成を行うことができます。これらのファイルを変更する前に、印刷物または電子形式のファイルのコピーを参照用に保存しておくことをお勧めします。

構成パラメータ

変更可能な動作のタイプは、次のセクションに分類されます。

- サーバー動作の制御
- サーバーとディレクトリ・サーバーとの相互作用の制御
- クライアント動作の制御
- サーバーへのクライアント接続の制御

次の表では、すべてのパラメータを、セクションごとにアルファベット順で示しています。

表 C-1 unison.ini 構成パラメータ

セクション	パラメータ	説明
[ACE]	frameworkenable	ACE フレームワークの有効化
	minbufsizetocompress	圧縮の最小バッファ・サイズ
	slibcachecount	タイプごとの共有ライブラリの最大数
	workbufsize	圧縮および暗号化のバッファ・サイズ
[ACE_PLUGINS]	sasl_KERBEROS_V4_useridneeded または sasl_GSSAPI_useridneeded	SASL - 必要なユーザー ID
	sasl_KERBEROS_V4_mac_realm	SASL - Mac クライアント用 Kerberos レルム
	sasl_KERBEROS_V4_srvtab	SASL - Kerberos 「srvtab」 ファイルのパス
[ACE_PLUGINS_CLIENT]	web_attribute_name	Web 認証 - ユーザー属性名
	web_attribute_type	Web 認証 - ユーザー属性タイプ
	web_attribute_valuemax	Web 認証 - ユーザー属性名の最大サイズ
	web_cacheexpiresec	Web 認証 - タイムアウト
	web_cachesize	Web 認証 - キャッシュ・サイズ
	web_CAL_sharedkey	Web 認証 - Web:CAL 共有キー
	web_custom_script	Web 認証 - ユーザー ID および属性のカスタム・マッピング・スクリプト
	web_tmppath	Web 認証 - カスタム・スクリプトの一時ファイルのパス

表 C-1 unison.ini 構成パラメータ (続き)

セクション	パラメータ	説明
[ACE_PLUGINS_SERVER]	web_CAL_sharedkey	Web 認証 - 共有キー
	cs-standard_coexistence	cs_standard 認証のサポートの有効化
[AUTHENTICATION]	admindefault	管理者のデフォルト認証方式
	default	クライアントのデフォルト認証方式
	keepresourcepwdincaldb	認証用リソース・パスワードの位置
	servicedefault	その他のサーバーのデフォルト認証方式
	supported	サポートするクライアントの認証方式
[CLIENT]	itemcacherefreshrate	ユーザー・キャッシュのリフレッシュの最小間隔
	minrefreshrate	新しい予定表エントリの最小チェック間隔 (サーバー側の強制)
	oc_minidlerefreshrate	予定表エントリの最小リフレッシュ間隔 (Oracle Connector for Outlook)
	oc_minofflinerefreshrate	オフラインの予定表エントリの最小リフレッシュ間隔 (Oracle Connector for Outlook)
	securitycacherefreshrate	セキュリティ・データ・キャッシュのリフレッシュの最小間隔
[CLUSTER]	excludednodes	オンライン登録のノードの除外
	masternode	マスター・ノード
	remotemasternode	リモート・マスター・ノード
[COMPRESSION]	admindefault	管理者のデフォルト圧縮方式
	default	クライアントのデフォルト圧縮方式
	servicedefault	その他のサーバーのデフォルト圧縮方式
	supported	サポートされる圧縮方式
[CONFERENCING]	enable	カレンダーでの Oracle Web Conferencing の有効化
	siteauthkey	Oracle Web Conferencing アカウントのパスワード

表 C-1 unison.ini 構成パラメータ (続き)

セクション	パラメータ	説明
	siteid	Oracle Web Conferencing アカウント ID
	url	Oracle Web Conferencing Server への URL
	walletfile	Oracle Web Conferencing Server に接続するための Wallet の位置
	walletpassword	Oracle Web Conferencing Server に接続するための SSL Wallet のパスワード
[CSM]	enable	CSM デーモン / サービスの自動起動
	password	Calendar Server Manager のリモート管理用パスワード
	port	Calendar Server Manager のポート番号
[CWS]	banner	メール通知およびリマインダのメッセージ・バナーの有効化
	dirsyncmigrate	ディレクトリ・ユーザー設定項目の移行
	dirsynctime	ディレクトリ同期化処理の予定時間
	enable	CWS デーモン / サービスの自動起動
	eventsyncinterval	変更されたカレンダー・データ・リストの更新頻度の設定 (同期化ツール用)
	galsyncinterval	GAL の更新頻度の設定
	log_activity	アクティビティ・ロギング
	log_modulesinclude	アクティビティ・ロギング:モジュールの指定
	mailfiledelete	最後のメール・メッセージ用一時ファイルの自動削除
	mailhdroriginatorfromuser	メール・ヘッダーの「From:」フィールドのコンテンツ
	mailhdrtoname	メール・ヘッダーの「To:」フィールドに入力される名前の UTF-8
	mailhost	SMTP メール・サーバーのホスト名 (廃止)

表 C-1 unison.ini 構成パラメータ (続き)

セクション	パラメータ	説明
	maxnodepertask	メッセージ要求の処理に費やす最大時間
	maxtimepernode	ノードごとの要求処理に費やす最大時間
	messaging_maxtime	メッセージ要求の処理に費やす最大時間
	messaging_waitonerror	エラー状態にあるメッセージ要求を処理するまでの最大待機時間
	mimecontentcharset	メール・メッセージのコンテンツ部分のキャラクタ・セット-デフォルト
	mimecontentcharset_force	メール・メッセージのコンテンツ部分のキャラクタ・セット-強制
	noreqsleep	要求キュー・チェックの間のスリープ時間
	noreqsleep_replication	レプリケーション要求の要求キュー・チェック間のスリープ時間
	prioritizedjobs	優先させる unicwsd ジョブ
	sendmailpath	メール・プログラムのパス名 (廃止)
	smsignoreerror	(SMS) 通知プログラムで無視するエラー
	smsnotifyprogram	ショート・メッセージ・サービス (SMS) 通知プログラム
	smsnotifyprogramparam	ショート・メッセージ・サービス (SMS) 通知プログラムの引数
	smtpmailhost	SMTP メール・サーバーのホスト名
	smtpmailmaxcommandlinesize	sendmail コマンドラインの最大サイズ
	smtpmailmaxrecipients	最大受信者数
	smtpmailpath	メール・プログラムのパス名
	smtpmailprogram	メール・プログラム
	startupsleep	スタートアップ時のスリープ時間
	unixmail	メール転送の設定 (廃止)
	unixmailprogram	メール・プログラム (廃止)

表 C-1 unison.ini 構成パラメータ（続き）

セクション	パラメータ	説明
[DAS]	dir_connectrecycletime	ディレクトリ接続のリサイクル頻度の設定
	dir_updcalconly	カレンダー属性のみの更新をユーザーに許可
	dir_usewritednforadmin	writedn およびパスワードを使用した管理者としてのログイン
	enable	DAS デーモン / サービスの自動起動
	port	ディレクトリ・アクセス・サーバーのポート
[DB]	db_files	ユーザーごとのデータベース・ファイルの最大数
	db_pages	データベース・キャッシュ内のページ数
[DBI]	dbi_name	ノード・データベースのテンプレート
	dbversion	ノード・データベースのバージョン
[ENCRYPTION]	admindefault	管理者のデフォルト暗号化方式
	default	クライアントのデフォルト暗号化方式
	needsauthenticate	事前の認証が必要な暗号化方式
	servicedefault	その他のサーバーのデフォルト暗号化方式
	supported	サポートされる暗号化方式
[ENG]	activity	統計のロギング: ユーザー接続
	allowpasswordchange_eventcal	イベント・カレンダーのパスワード変更の許可
	allowpasswordchange_reserved	予約済ユーザーのパスワード変更の許可
	allowpasswordchange_resource	リソースのパスワード変更の許可
	allowpasswordchange_user	ユーザーのパスワード変更の許可
	allowresourceconflict	リソースの重複予約（サーバー側）
	allowsysoplogon_capi	Oracle Calendar SDK（CAPI）アプリケーションの SYSOP ログインの許可

表 C-1 unison.ini 構成パラメータ (続き)

セクション	パラメータ	説明
	<code>allowsysoplogon_unicp</code>	unicp ユーティリティからの SYSOP ログインの許可
	<code>allowsysoplogon_uniical</code>	uniical からの SYSOP ログインの許可
	<code>authcache_cachesize</code>	クライアント・ログインのキャッシュ・サイズ
	<code>authcache_expiredelay</code>	クライアント・ログイン・キャッシュのエントリのタイムアウト
	<code>authcache_passwordsize</code>	クライアント・ログイン・キャッシュのパスワードのサイズ
	<code>authcache_stats</code>	クライアント・ログイン・キャッシュの統計ロギング
	<code>autoacceptresource</code>	リソースの (「承認済」への) 自動返信
	<code>calendarhostname</code>	クラスタ・ホスト名
	<code>capi_storage</code>	サポートされている Oracle Calendar SDK バージョン
	<code>coexist_cwsbasicauth</code>	古い CWS 認証メカニズムの使用
	<code>coexist_unidentifiedsessions</code>	識別されない古いクライアントのサポート
	<code>dac_configerrlog</code>	構成エラーのロギング
	<code>dac_failederrlog</code>	障害エラーのロギング
	<code>dac_ignorederrlog</code>	致命的でないエラーのログ
	<code>dac_maxretry</code>	SNC から DAS への接続の再試行
	<code>dac_miscerrlog</code>	その他のエラーのロギング
	<code>dir_internal_nodes</code>	LDAP ノードおよび非 LDAP ノードの混在
	<code>eventrefreshintervals</code>	リフレッシュ間隔および予定表の範囲
	<code>eventsearch_clientwindowsize</code>	クライアント・イベントの検索結果ウィンドウのサイズ
	<code>eventsearch_commentsearchlength</code>	イベント・コメントの検索
	<code>eventsearch_maxlookthroughlimit</code>	イベント検索のタイムアウト
	<code>evsearch_maxcount</code>	返すイベントの最大数

表 C-1 unison.ini 構成パラメータ (続き)

セクション	パラメータ	説明
	gal_enable	GAL の有効化
	gal_enableldapsearch	GAL 内のカレンダー・ユーザーではないユーザーの許可
	gal_refreshinterval	GAL のリフレッシュ間隔の設定
	gal_view	GAL の一連の属性の定義
	invalidlogin_countinterval	無効なログインのカウント間隔の設定
	invalidlogin_deactivationtime	無効なログインの非アクティブ化時間の設定
	invalidlogin_enable	無効なログインのカウント・メカニズムの有効化
	invalidlogin_invalidcount	無効なログインの最大許容回数の設定
	itemuidmap	UID の X.400 フィールド
	NLS_LANG	ログ・ファイルのキャラクタ・セット
	max_addrlogons	特定のインターネット・アドレスからの同時セッションの数
	maxinstances	繰返し会議、繰返しメモまたは繰返し終日イベントのインスタンスの最大数 (サーバー側)
	maxsessions	セッションの最大数
	maxsessionsfornode	各ノードごとのセッションの最大数
	max_userlogons	特定のユーザーによる同時セッションの最大数
	numsessionsstoppedpersecond	シャットダウン時に 1 秒ごとに停止するエンジンの数
	passwords	パスワードの大 / 小文字の区別
	port	Calendar Server のポート番号
	readlocktimeout	終了までの最大読取りロック時間
	readmaxlocktime	解除までの最大読取りロック時間
	resourceemailmap	リソース・メール・マッピング
	sss_cacheexpiredelay	サーバー側セキュリティ・レコード・キャッシュのエントリのタイムアウト

表 C-1 unison.ini 構成パラメータ (続き)

セクション	パラメータ	説明
	sss_cachesize	サーバー側セキュリティ・レコードのキャッシュ・サイズ
	standards	カレンダー標準
	stats	統計のロギング: ユーザー・セッション
	userlookthroughlimit	検索する項目の最大数
	usermailmap	ユーザー・メール・マッピング
	usermobilemap	ユーザーの携帯電話番号のマッピング
	usermobiletypemap	ユーザーの携帯電話タイプのマッピング
	usersearchmaxreturn	返す項目の最大数
	usersmscprefmap	ユーザー・アラート環境設定のマッピング
	utf8_autoconvert	UTF-8 形式へのデータ変換の有効化
	utf8_onfailprintmesg	UTF-8 変換機能のインスタンス化失敗のロギング
	writelocktimeout	終了までの最大書込みロック時間
	writemaxlocktime	解除までの最大書込みロック時間
[GENPREFS]	offlineab	アドレス帳の有効化
[LCK]	lck_users	エンジンの最大数 (廃止)
	maxnodesperlistener	ロック・マネージャ・リスナーの数
[LDAP]	admin	Calendar Server 管理者の位置
	admingroup	Calendar Server 管理者のグループ・エントリ
	attr_country	国属性の名前
	attr_organization	組織名属性の名前
	attr_generation	世代修飾子属性の名前
	attr_givenname	名属性の名前
	attr_mail	メール属性の名前
	attr_uid	UID 属性の名前

表 C-1 unison.ini 構成パラメータ (続き)

セクション	パラメータ	説明
	<code>attrpreservelist</code>	属性保存リスト
	<code>basedn</code>	Calendar Server エントリが含まれるサブツリーの識別名
	<code>binddn</code>	無名の接続に使用する識別名
	<code>bindpwd</code>	無名の接続に使用するパスワード
	<code>charset</code>	ディレクトリ・サーバーが使用するキャラクタ・セット
	<code>dsa</code>	ディレクトリ・サーバーの名前
	<code>eventcalrelativedn</code>	イベント・カレンダの相対識別名
	<code>group_dlenable</code>	Oracle Mail 配信リストのサポートの有効化
	<code>group_dlfilter</code>	Oracle Mail 配信リストのフィルタ
	<code>group_dlsearchbase</code>	Oracle Mail 配信リストの位置
	<code>group_enable</code>	カレンダの LDAP グループの有効化
	<code>groupfilter</code>	グループの検索フィルタ
	<code>groupmemberlistattribute</code>	グループ・メンバーシップ属性のリスト
	<code>group_membersizelimit</code>	メンバーの検索時に返される最大エントリ数
	<code>group_searchbase</code>	グループの位置
	<code>group_sizelimit</code>	グループの検索時に返される最大エントリ数
	<code>host</code>	ディレクトリ・サーバー・ホストの名前
	<code>mgrdn</code>	ディレクトリ・サーバー管理者の識別名
	<code>port</code>	LDAP ディレクトリ・サーバーのポート番号
	<code>resourcerelativedn</code>	リソースの相対識別名
	<code>secure-port</code>	SSL 接続に使用するポート
	<code>security</code>	SSL 接続の有効化

表 C-1 unison.ini 構成パラメータ (続き)

セクション	パラメータ	説明
[LIMITS]	timelimit	LDAP コールの最大待機時間
	writedn	書き込み操作に使用する識別名
	writednpassword	LDAP 書き込み接続に使用するパスワード
	agendaview	デフォルトの予定表の表示
	allowattachments	予定表の添付の許可
	autocontrol	新しい予定表エントリの最小チェック 間隔 (クライアント側の強制)
	groupviewmax	グループ・ビュー内のユーザーの最大 数
	mail	メール通知ダイアログ・ボックスの有 効化
	maxattachmentsize	添付の最大サイズ
	maxfavorites	お気に入りリストのエントリの最大数
	maxmaildistr	メール通知配信リストに含まれる最大 人数
	maxpasswordage	パスワード・エイジング
	maxpersabentries	個人用アドレス帳エントリの最大数
	maxrecur	繰り返し会議、繰り返しメモまたは繰り返し 終日イベントのインスタンスの最大数 (クライアント側)
	maxremleadtime	リマインダの最大リードタイム
	maxsearchresult	LDAP 検索結果の最大数
	maxwinopen	開いているウィンドウの最大数
	mincharsearch	「姓」編集ボックスの最小文字数
	page-backward	検索ダイアログ・ボックスの「前」ボ タン
	page-forward	検索ダイアログ・ボックスの「次へ」 ボタン
	pubgroups	パブリック・グループの作成権限
	publishab	アドレス帳の公開の有効化

表 C-1 unison.ini 構成パラメータ (続き)

セクション	パラメータ	説明
	remotemaxretry	サーバーへのリモート・データ要求の再試行回数
	remotewait	サーバーへのリモート・データ要求の再試行間隔
	resourceconflicts	リソースの重複予約 (クライアント側)
	secure-login	ログインの保護
	settimezone	デフォルト・タイムゾーンの変更許可
	signinmaxattempts	ログインの最大試行回数
	singlelst	単一のローカル記憶域
	ssignin	自動ログインの許可
	ssigninrestrictions	自動ログインの制限
	userlist_login	ログイン時に一致した複数のユーザーの表示
[NOTIFY]	alert_instantmessaging	インスタント・メッセージングのアラート
	alert_sms	ショート・メッセージ・サービス (SMS) のアラート
	checkreminderinterval	リマインダのチェック間隔
	ignoreoldreminders	無視するリマインダ
	limitremindercheck	リマインダのノードの最大チェック時間
	sms	ショート・メッセージ・サービス (SMS) のアラート (廃止)
[OUTLOOK_CONNECTOR]	eventselectbegin	問合せで検索したり返す対象となる現在の日付から遡った日数
	eventselectend	問合せで検索したり返す対象となる現在の日付以降の日数
	multi-day-event	所要時間が 24 時間を超す終日イベント作成の許可
[PRODUCT]	installtype	製品のインストール・タイプ
	name	製品名

表 C-1 unison.ini 構成パラメータ (続き)

セクション	パラメータ	説明
	version	製品バージョン番号
[QUOTA]	maxfolderentryperuser	フォルダ内のエントリの最大数
[RESOURCE_APPROVAL]	url	リソースの設定の承認通知に使用する URL
	enable	リソースの設定の承認メカニズムの有効化
[SNC]	enable	SNC デーモン / サービスの自動起動
	max_socket	最大接続数
	port	SNC デーモン / サービスのポート番号
	request_chunk_size	一度にリセットされる要求の数
	snc_so_keepalive	アイドル接続
	snc_so_rcvbuf	ソケット・レイヤー受信バッファのサイズ
	snc_so_sndbuf	ソケット・レイヤー送信バッファのサイズ
	snc_tr_block	通信のブロック・サイズ
	snc_tr_rcv_timeout	受信した転送のタイムアウト
	snc_tr_send_timeout	送信した転送のタイムアウト
	wait_sbh	リモート・ノード接続の待機時間 (分)
[SYS]	sys_owner	プロセスの実行に使用されるユーザー名 (UNIX のみ)
[TIMEZONE]	checksum	タイムゾーン・ルール・ファイルのチェックサム
	default	デフォルト・タイムゾーン
	rules	タイムゾーン・ルール
[URL]	caladmin	Calendar Administrator の位置
	portal	Web ポータルの位置
[UTL]	backupatonce	外部バックアップのコール側プロシージャ
	backup_timeout	バックアップ操作のタイムアウト

表 C-1 unison.ini 構成パラメータ (続き)

セクション	パラメータ	説明
	ca_maxsearchresult	Calendar Administrator の LDAP 検索結果の最大数
	charset	ユーティリティの代替キャラクタ・セットの指定
	external_backup	代替バックアップ・ユーティリティの指定
	external_restore	代替リストア・ユーティリティの指定
	restore_timeout	リストア操作のタイムアウト
	unidbfix_logfile	すべての unidbfix インスタンスに 1 つのログ・ファイルを指定
[WEBLINK] および [WEBLINK-XXXXX]	browser-path-win	Windows クライアント用に起動するブラウザ
	command-description-offline	オフライン・コマンドの説明
	command-description-online	オンライン・コマンドの説明
	command-name	「ヘルプ」メニューおよび「ツールチップ」に表示されるテキスト
	download-fail	ダウンロードが失敗した場合に表示するエラー・メッセージ
	download-mode	FTP
	mode	Web アクセスの有効化
	offline-source-mac	オフライン・モードでの Mac クライアント用 Web ページのソース
	offline-source-version	オフライン Web ページのバージョン
	offline-source-win	オフライン・モードでの Windows クライアント用 Web ページのソース
	online-url	オンラインで作業中のクライアント用にロードする Web ページ
[YOURHOSTNAME, unidas]	connect_timeout	ディレクトリ・サーバーへの接続のタイムアウト
	numconnect	ディレクトリ・サーバーへの接続数

表 C-1 unison.ini 構成パラメータ（続き）

セクション	パラメータ	説明
[YOURNODEID]	aliases	ノードの別名
	lck_dedicated	ノード専用のロック・マネージャ・リスナー
	localnodes	リモート・ノード内のリソースをローカルとして表示
	maxsessionsfornode	ノードごとのセッションの最大数
	name	ノード名
	timezone	ノードのタイムゾーン
	version	データベースのバージョン番号

製品名

セクション

[PRODUCT]

パラメータ

name

説明

製品の名前を指定します。この値はインストール中に設定されます。編集または削除できません。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

N/A

製品バージョン番号

セクション	[PRODUCT]
パラメータ	version
説明	Calendar Server のバージョン番号を指定します。この値を編集または削除しないでください。
使用可能な値	N/A
デフォルト値	N/A

製品のインストール・タイプ

セクション	[PRODUCT]
パラメータ	installtype
説明	Calendar Server のインストールのタイプを指定します。この値を編集または削除しないでください。
使用可能な値	Standalone CollaborationSuite
デフォルト値	なし

サーバー動作の制御

クラスタ・ホスト名

セクション

[ENG]

パラメータ

calendarhostname

説明

システム定義のホスト名が使用できない場合に使用する、Calendar Server の代替ホスト名を指定します。

このパラメータの主な用途は、フェイルオーバー保護のために同じクラスタ内で複数のホストが Calendar Server を実行している場合に、オペレーティング・システムのクラスタを使用して UNIX 環境の Calendar Server のホストを識別することです。この場合、このパラメータの値を、物理的な Calendar Server のホスト名ではなく、オペレーティング・システムのクラスタ自体の名前に設定する必要があります。

使用可能な値

有効な（完全に指定された）ホスト名

デフォルト値

なし

Calendar Server のポート番号

セクション

[ENG]

パラメータ

port

説明

着信ネットワーク接続に使用するポートを指定します。このパラメータは、同じマシンに Calendar Server の複数のインスタンスがインストールされている場合に役立ちます。

使用可能な値

有効なポート番号

デフォルト値

インストール時に入力された値（通常は 5730）

カレンダー標準

セクション

[ENG]

パラメータ

standards

説明

サポートされているインターネット標準および関連テクノロジーのリストです。中カッコ {} で囲まれ、カンマで区切られます。アプリケーションのドキュメントまたはオラクル社のサポート担当員による明示的な指示がないかぎり、このパラメータの値を変更しないでください。

使用可能な値

- { } （Oracle Calendar SDK サポートなし）
- { CAPI } （Oracle Calendar SDK サポートおよび ICAL2.0 属性の一部のサポート）
- { CAPI, ICAL2.0 } （Oracle Calendar SDK サポートおよびすべての IETF ICAL 2.0 属性のサポート）

デフォルト値

{ }

サポートされている Oracle Calendar SDK バージョン

セクション

[ENG]

パラメータ

capi_storage

説明

サーバーがサポートする Oracle Calendar SDK (CAPI) のバージョンを指定します。[ENG] standards の値に ICAL2.0 が含まれている場合のみ、サーバーがこのパラメータを読み取ります。

使用可能な値

BASIC (4.0 より前の Oracle Calendar SDK のサポート)

FH (Oracle Calendar SDK (CAPI) 1.0 のサポート)

OPTFH (Oracle Calendar SDK (CAPI) 1.1 以上のサポート)

デフォルト値

OPTFH

プロセスの実行に使用されるユーザー名 (UNIX のみ)

セクション

[SYS]

パラメータ

sys_owner

説明

このパラメータは UNIX 専用で、Calendar Server の処理の実行に使用するユーザーの名前を指定します。あらゆる場合において、Calendar Server では、unison に設定されたセキュリティを制御する有効なユーザーによって、サービスが実行されます。

Windows NT では、すべてのサービスがシステム・アカウントとして実行されるように、インストール時に設定されます。インストール後にこのサービス設定を変更し、特定のアカウントとして実行することが可能です。

使用可能な値

(UNIX)

unison

root

デフォルト値

(UNIX)

unison

Calendar Server Manager のリモート管理用パスワード

セクション

[CSM]

パラメータ

password

説明

Calendar Server をリモート管理する場合に、Calendar Server Manager へのアクセスに必要なパスワードを指定します。Calendar Server のスタンドアロン・インストールのみで使用されます。Oracle Collaboration Suite の一部として Oracle Internet Directory を使用している場合は不要です。

パスワードは、`uniencrypt` ユーティリティを使用して暗号化してから `unison.ini` ファイルに入力する必要があります。付録 F「[Calendar Server ユーティリティ](#)」の `uniencrypt` の説明を参照してください。暗号化されたパスワードの前には、暗号化に使用した暗号化メソッドを二重引用符で囲んで配置する必要があります。

使用可能な値

"{STD}<encrypted_value>"

デフォルト値

なし

Calendar Server Manager のポート番号

セクション

[CSM]

パラメータ

port

説明

着信 CSM ネットワーク接続に使用するポートを指定します。このパラメータは、同じマシンに Calendar Server の複数のインスタンスがインストールされている場合に役立ちます。

使用可能な値

有効なポート番号

デフォルト値

インストール時に入力された値（通常は 5734）

CSM デーモン / サービスの自動起動

セクション

[CSM]

パラメータ

enable

説明

Calendar Server Manager のデーモン / サービスである unicsmd を、Calendar Server の起動時に自動的に起動させるかどうかを指定します。サーバーをリモートで管理（起動操作および停止操作）する場合は、TRUE に設定する必要があります。

使用可能な値

TRUE（unicsmd を自動的に起動する）

FALSE（unicsmd を自動的に起動しない）

デフォルト値

TRUE

CWS デーモン / サービスの自動起動

セクション

[CWS]

パラメータ

enable

説明

コーポレート・ワイド・サービス・デーモン / サービスである unicwsd を、Calendar Server の起動時に自動的に起動させるかどうかを指定します。サーバー構成に複数のノードが含まれる場合、またはメール通知を使用している場合は、TRUE に設定する必要があります。

使用可能な値

- TRUE (unicwsd を自動的に起動する)
- FALSE (unicwsd を自動的に起動しない)

デフォルト値

TRUE

SNC デーモン / サービスの自動起動

セクション

[SNC]

パラメータ

enable

説明

同期ネットワーク接続デーモン / サービスである unisncd を、Calendar Server の起動時に自動的に起動させるかどうかを指定します。サーバー構成に複数のノードが含まれる場合、またはディレクトリ・サーバーを使用している場合は、TRUE に設定する必要があります。FALSE に設定した場合、CWS デーモン / サービスも自動起動されなくなります。

使用可能な値

- TRUE (unisncd を自動的に起動する)
- FALSE (unisncd を自動的に起動しない)

デフォルト値

TRUE

SNC デーモン / サービスのポート番号

セクション

[SNC]

パラメータ

port

説明

着信 SNC ネットワーク接続に使用するポートを指定します。このパラメータは、同じマシンに **Calendar Server** の複数のインスタンスがインストールされている場合に役立ちます。

使用可能な値

有効なポート番号

デフォルト値

インストール時に入力された値（通常は 5731）

DAS デモン/サービスの自動起動**セクション**

[DAS]

パラメータ

enable

説明

ディレクトリ・アクセス・デーモン / サービスである **unidasd** を、**Calendar Server** の起動時に自動的に起動させるかどうかを指定します。**unidasd** デモン / サービスは、ディレクトリ・サーバーに接続されるインストールのみで必要になります。

使用可能な値

TRUE（**unidasd** を自動的に起動する）

FALSE（**unidasd** を自動的に起動しない）

デフォルト値

FALSE

ディレクトリ・アクセス・サーバーのポート**セクション**

[DAS]

パラメータ

port

説明

着信 DAS ネットワーク接続に使用するポートを指定します。このパラメータは、同じマシンに **Calendar Server** の複数のインスタンスがインストールされている場合に役立ちます。

使用可能な値

1 ～ 65535 の任意の値

デフォルト値

インストール時に入力された値（通常は 5732）

スタートアップ時のスリープ時間

セクション

[CWS]

パラメータ

startupsleep

説明

コーポレート・ワイド・サービス・デーモン / サービスが、スタートアップ時に要求処理を試みるまでの待機（スリープ）時間を、秒数で指定します。この遅延は、SNC デーモン / サービスがスタートアップしてから、必要なノードへの接続を確立するのに必要な時間を提供するためのものです。多数のノードまたは接続を使用するサーバー、あるいは帯域幅が低いサーバーでは、このパラメータの値を大きくする必要があります。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

300

要求キュー・チェックの間のスリープ時間

セクション

[CWS]

パラメータ

noreqsleep

説明

ローカル・キューに要求が存在しない場合の、コーポレート・ワイド・サービス・デーモン / サービスの待機（スリープ）時間を、秒数で指定します。指定の時間が経過した後、unicwsd はペンディングされた要求がキューに存在するかを再びチェックします。この設定は、リマインダなどのデータを他のノードに伝播する際の速度に影響します。値が小さい場合は、uniengd の速度が低下します。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

15

レプリケーション要求の要求キュー・チェック間のスリープ時間**セクション**

[CWS]

パラメータ

noreqsleep_replication

説明

ローカル・キューにレプリケーション要求が存在しない場合の、コーポレート・ワイド・サービス・デーモン / サービスの待機（スリープ）時間を、秒数で指定します。指定の時間が経過した後、unicwsd はペンディングされた要求がキューに存在するかを再びチェックします。この設定は、リモート・ユーザーの出席依頼などのデータを、他のノードに伝播する際の速度に影響します。値が小さい場合は、uniengd の速度が低下します。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

60

ノードごとの要求処理に費やす最大時間

セクション

[CWS]

パラメータ

maxtimepernode

説明

CWS デーモン / サービスが同じノードの要求処理に費やす最大時間を、秒単位で指定します。それぞれの要求が処理されると、CWS デーモン / サービスは、そのノードの要求処理にかかった合計時間をチェックします。合計時間が maxtimepernode を超えると、CWS デーモン / サービスは、現行の要求キューが空になっているかどうかにかかわらず、別のノードの要求処理に移ります。これにより、すべてのノードが CWS デーモン / サービスによって平等に処理され、カレンダー・データのレプリケーション遅延がより均一になります。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

30

メッセージ要求の処理に費やす最大時間

セクション

[CWS]

パラメータ

messaging_maxtime

説明

CWS デーモン / サービスがメッセージ（メール、アラートおよび Web Conferencing）要求を処理するのに費やす最大時間を、秒単位で指定します。それぞれのメッセージ要求が処理されると、CWS デーモン / サービスは、そのノードの要求処理にかかった合計時間をチェックします。合計時間が messaging_maxtime を超えると、CWS デーモン / サービスは、現行の要求キューが空になっているかどうかにかかわらず、別のノードの要求処理に移ります。これにより、すべてのノードが CWS デーモン / サービスによって平等に処理され、カレンダー・データのレプリケーション遅延がより均一になります。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

30

エラー状態にあるメッセージ要求を処理するまでの最大待機時間

セクション

[CWS]

パラメータ

messaging_waitonerror

説明

CWS デーモン / サービスがエラー状態にあるメッセージ要求（メール、アラートまたは Web Conferencing）の処理を試みるまでの最大待機時間を、秒単位で指定します。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

60

1 つの CWS タスクが管理するノードの最大数

セクション

[CWS]

パラメータ

maxnodepertask

説明

1 つのコーポレート・ワイド・サービス・タスクが保守するノードの最大数を指定します。21 以上のノードが存在する場合は、2 番目の unicwsd タスクが起動します。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

20

優先させる unicwsd ジョブ

セクション

[CWS]

パラメータ

prioritizedjobs

説明

CWS タスクを関連付ける必要があるジョブのリストを指定します。デフォルトでは、ジョブを処理する 2 つの CWS タスクがあります。1 つはレプリケーション専用で、もう 1 つは電子メールおよびサーバー側リマインダを含むその他のジョブをすべて処理します。

たとえば、レプリケーション要求がほとんどなく、送信するサーバー側リマインダが多数あるような環境では、管理者は CWS をサーバー側リマインダ専用にすることができます。この場合は、このパラメータを {SSR} に設定する必要があります。1 つのタスクをレプリケーションに関連付け、別のタスクをサーバー側リマインダに関連付けるには、このパラメータを {Replication,SSR} に設定します。

CWS タスクを特定のジョブ専用にする場合、CWS ではより多くのエンジンが必要になることに注意してください。それぞれの CWS タスクには、優先されるジョブごとに 1 つのプロセスが含まれます。それぞれの CWS タスクは、保守する各ノードに対して、1 つのエンジンを起動させます。使用できるジョブおよびその内容は、次のとおりです。

Replication: ノードからノードへのデータ・レプリケーション

Messaging: 電子メール、ワイヤレス・アラート、Web Conferencing などのメッセージ要求

SSR: サーバー側リマインダ

Snooze: スヌーズ状態の要求の処理

DirSync: OID との同期化

EventSync: 最近変更されたイベントの同期化データの更新

GALSync: グローバル・アクセス・リストの同期化

指定するリストでは、有効なジョブ名をカンマで区切り、{ } で囲む必要があります。たとえば、{Replication, Messaging} のようになります。

使用可能な値

Replication
Messaging
SSR
Snooze
DirSync
EventSync
GALSync

デフォルト値

{Replication}

ディレクトリ同期化処理の予定時間**セクション**

[CWS]

パラメータ

dirsynctime

説明

自動ディレクトリ同期化処理が実行される時間のリストを指定します。この時間は、できるかぎりピーク時間以外に設定する必要があります。

使用可能な値

24 時間形式で表記した時間をカンマで区切り、{ } で囲んだリスト。次に例を示します。

{ 03:00, 22:00 }

デフォルト値

{ 05:00 }

ディレクトリ・ユーザー設定項目の移行

セクション

[CWS]

パラメータ

dirsyncmigrate

説明

ユーザー設定項目を、ディレクトリからカレンダー・データベースに移行するかどうかを指定します。このパラメータは、アップグレード処理の実行中に、自動的に設定および削除されます。オラクル社のサポート担当員の指示がないかぎり、このパラメータを手動で設定しないでください。データが破損する可能性があります。

使用可能な値

TRUE（移行する）

FALSE（移行しない）

デフォルト値

FALSE

リマインダのチェック間隔

セクション

[NOTIFY]

パラメータ

checkreminderinterval

説明

CWS デーモン / サービスによるリマインダのチェック間隔を、分単位で指定します。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

2

無視するリマインダ

セクション

[NOTIFY]

パラメータ

ignoreoldreminders

説明

CWS デーモン / サービスが、リマインダをチェックする際に無視するリマインダを指定します。現在の時刻から遡って、このパラメータで指定された分数より時間が経過したリマインダは、すべて無視されます。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

30

リマインダのノードの最大チェック時間

セクション

[NOTIFY]

パラメータ

limitremindercheck

説明

CWS デーモン / サービスが、1 回のリマインダのノード・チェックに費やす最大時間を、秒単位で指定します。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

30

ディレクトリ・サーバーへの接続数

セクション

[<YOURHOSTNAME>, unidas]

パラメータ

numconnect

説明

確立するディレクトリ・サーバーへの接続数を指定します。このパラメータは、次のような多数の変要素を考慮して設定する必要があります。

- ソフトウェアの要求を十分にサポートするハードウェア構成
- Web ベースのクライアント（つまり Windows、Mac または Motif のクライアント）以外のクライアントの使用
- ディレクトリ・サーバーの応答時間

このパラメータは、5 または値 [ENG] maxsessions の 2% のうち、大きい方の値に設定してください。

このパラメータの値が小さすぎると、ディレクトリ・サーバーの操作用に作成されたすべての要求を、サーバーが処理できなくなります。この場合、エンド・ユーザーに「Unable to contact directory server」というエラーが表示されます。このようなエラーが発生した場合、ログ・ディレクトリにあるログ・ファイル eng.log に、次のメッセージが書き込まれます。

```
uniengd: Unable to obtain a connection from the unisncd
server.
```

```
- the unisncd could be down
- there is not enough available unidasd servers
- there were too many concurrent connection requests
- the number of unidasd server to be spawned has not
  been reached
```

The last two may be temporary.

使用可能な値

最大値 255 以下の正の整数

デフォルト値

5

ディレクトリ・サーバーへの接続のタイムアウト

セクション

[<YOURHOSTNAME>,unidas]

パラメータ

connect_timeout

説明

ディレクトリ・サーバーに接続するために unidasd を起動しようとして、タイムアウト・エラーが返されるまでの unisnacd の待機時間を、秒数で指定します。

使用可能な値

0 (タイムアウトなし)

正の整数

デフォルト値

10

SNC から DAS への接続の再試行

セクション

[ENG]

パラメータ

dac_maxretry

説明

SNC デーモン / サービスが DAS デーモン / サービスへの接続を確立する際の、最大再試行回数を指定します。

使用可能な値

0 (再試行なし)

最大値 231 以下の正の整数

デフォルト値

3

最大接続数

セクション

[SNC]

パラメータ

max_socket

説明

ノード・ネットワーク内のノード間で、SNC デーモン / サービスがブローカとなる接続の最大数を指定します。

このパラメータを設定する前に、オラクル社カスタマ・サポート・センターに問い合わせてください。ほとんどの場合、nodes.ini ファイルで構成されたすべての接続をインスタンス化します。同じマシン上に多数のノードが設定されている一部の構成では、このパラメータによって使用する接続数を減らし、結果的に必要なメモリ容量を減らして、ノード・ネットワークをインスタンス化できます。各接続には 1 つのソケットおよびソケットに関連付けられた 1 つの uniengd プロセスがあるため、接続数が少ないほど必要なプロセスおよびソケットの数も少なくなります。nodes.ini ファイルで構成する接続の数のガイドラインは、『Oracle Calendar 管理者ガイド』を参照してください。

このパラメータは、ネットワークの各ノードからその他の全ノードへの接続が少なくとも 1 つずつ確保される値に設定してください。使用統計に基づいて調整してください。

[<YOURHOSTNAME>, unidas] numconnect パラメータは、SNC デーモン / サービスがブローカとなる DAS デーモン / サービスへの接続の合計数を構成します。

使用可能な値

(UNIX)

次の式によって制限される最大値以下の正の整数

<flimit> - <#nodes> - 5 - numconnect

ここでは次のようになります。

- <flimit> は、プロセスごとに使用できるオープン・ファイルの最大数で、オペレーティング・システムによって課せられる制限です。
- <#nodes> は、ノード・ネットワークに含まれているノードの数です。
- numconnect は、[<YOURHOSTNAME>, unidas] numconnect パラメータの値です。

この式によって、ノードおよび DAS デーモン / サービスへの両方の接続を確立するのに十分なリソースを、SNC デーモン / サービスが確保できるようになります。オペレーティング・システムの制限に近い値を使用した場合に発生する問題を回避するため、この最大値よりも十分に低い値を使用することをお薦めします。

(NT)

最大値 250 以下の正の整数

デフォルト値

(UNIX)

`<flimit> - <#nodes> - 5 - numconnect`

(NT)

250

リモート・ノード接続の待機時間（分）

セクション

[SNC]

パラメータ

`wait_sbh`

説明

SNC デーモン / サービスがリモート・ノードに接続できない場合の待機時間を分単位で指定します。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

5

一度にリセットされる要求の数

セクション

[SNC]

パラメータ

`request_chunk_size`

説明

SNC デーモン / サービスによって一度にリセットされる要求の数を指定します。接続を確立するとき、SNC デーモン / サービスは各ローカル・ノードの要求キューを調査して、CANTSERVICE というラベルのすべてのリクエストをNOTSERVICED にリセットします。SNC デーモン / サービスが（ノード・データベース内にある）要求キューをリセットする間に、別のプロセスがノード・データベースへのアクセスを待機する時間を最小限にするため、このパラメータは一固まりの要求としてリセットの実行を可能にします。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

25

通信のブロック・サイズ

セクション

[SNC]

パラメータ

snc_tr_block

説明

uniengd サーバーと unidasd サーバーの間の通信に使用するブロック・サイズを、バイト単位で指定します。この値は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに問い合せてから変更してください。

使用可能な値

0 （内部デフォルト値を使用）

正の整数

デフォルト値

0

受信した転送のタイムアウト

セクション

[SNC]

パラメータ

snc_tr_recv_timeout

説明

受信した転送のタイムアウト値を、秒数で指定します。

使用可能な値

0 （即時応答を要求）

正の整数

デフォルト値

5

送信した転送のタイムアウト

セクション

[SNC]

パラメータ

snc_tr_send_timeout

説明

送信した転送のタイムアウト値を、秒数で指定します。

使用可能な値

0 （即時応答を要求）

正の整数

デフォルト値

0

ソケット・レイヤー受信バッファのサイズ

セクション

[SNC]

パラメータ

snc_so_rcvbuf

説明

ソケット・レイヤー受信バッファのサイズを、バイト単位で指定します。この値は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに問い合せてから変更してください。

使用可能な値

0 （内部デフォルト値を使用）

正の整数

デフォルト値

0

ソケット・レイヤー送信バッファのサイズ

セクション

[SNC]

パラメータ

snc_so_sndbuf

説明

ソケット・レイヤー送信バッファのサイズを、バイト単位で指定します。この値は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに問い合せてから変更してください。

使用可能な値

0 （内部デフォルト値を使用）

正の整数

デフォルト値

0

アイドル接続

セクション

[SNC]

パラメータ

snc_so_keepalive

説明

システムがアイドル接続をアクティブにしておくかどうかを指定します。

このパラメータを TRUE に設定した場合、アイドル接続のもう一方の端でプロセスがまだ実行されているかを判断するために、ネットワーク・パケットが定期的送信されます。プロセスからの確認応答が指定の時間内に受信されない場合、プロセスが終了したと見なされ、接続は保持されません。

このパラメータを FALSE に設定した場合、アイドル接続の定期的なチェックは行われず、接続は無期限に保持されます。

使用可能な値

TRUE (アイドル接続をチェックする)

FALSE (アイドル接続をチェックしない)

デフォルト値

TRUE

統計のロギング: ユーザー接続

セクション

[ENG]

パラメータ

activity

説明

Calendar Server へのサインオンおよびサインオフを記録するかどうかを指定します。生成されるログは、サーバーの使用状況の追跡、および起こりうるセキュリティ違反の監視に役立ちます。ロギングを有効にする場合、ログ・ファイル (\$ORACLE_HOME/ocal/log/act.log) のサイズを注意深く監視する必要があります。ログ・ファイルのサイズは短時間で大きくなります。

使用可能な値

- TRUE (ロギングを有効化)
- FALSE (ロギングを無効化)

デフォルト値

FALSE

統計のロギング: ユーザー・セッション

セクション

[ENG]

パラメータ

stats

説明

ユーザー・セッションの統計 (CPU 使用量、ユーザー待機時間およびネットワーク通信量) を記録するかどうかを指定します。ロギングを有効にする場合、ログ・ファイル (\$ORACLE_HOME/ocal/log/stats.log) のサイズを注意深く監視する必要があります。ログ・ファイルのサイズは短時間で大きくなります。

使用可能な値

- TRUE (ロギングを有効化)
- FALSE (ロギングを無効化)

デフォルト値

FALSE

ログ・ファイルのキャラクタ・セット

セクション

[ENG]

パラメータ

NLS_LANG

説明

ログ・ファイルのデータに使用するキャラクタ・セットを定義します。たとえば、このパラメータを MSCP932 に設定した場合、サーバーはすべてのログを \$ORACLE_HOME/ocal/log ディレクトリに MSCP932 で出力します。

このパラメータは、[ENG] utf8_autoconvert が TRUE に設定されている場合のみチェックされます。

このパラメータを、クライアントで使用しているものと異なるキャラクタ・セットに設定した場合、1 つではなく 2 つのキャラクタ・セットをメモリにロードする必要があります。2 つの異なるキャラクタ・セットを使用した場合、必要なメモリ容量が増えるため、パフォーマンスに影響します。

使用可能な値

[CWS] mimecontentcharset の使用可能な値を参照してください。

デフォルト値

.WE8ISO8859P1

注意： Oracle Calendar リリース 2 (9.0.4) の初期バージョンでは、NLS_LANG のデフォルト値として US7ASCII を使用しました。US7ASCII では複数のアクセント記号付き文字はサポートされていないため、Patch Set 1 から .WE8ISO8859P1 が実装されました。Oracle Calendar Server が Patch Set 1 より前のバージョンで、デフォルトとして US7ASCII を使用している場合は、NLS_LANG を .WE8ISO8859P1 に設定することをお勧めします。

アクティビティ・ロギング

セクション

[CWS]

パラメータ

log_activity

説明

リスト log_modulesinclude で指定されたモジュールの、unicwsd デーモン / サービスのアクティビティ情報を記録するかどうかを指定します。アクティビティ情報の記録対象となるモジュールおよびモジュールの数によっては、ログ・ファイルが急速に大きくなる可能性があります。そのため、ログ・ファイルはテストまたはデバッグ用に、短時間だけ使用することが必要です。log_modulesinclude で指定されたリストが空の場合、情報は記録されません。

ログ・ファイルは、ログ・ディレクトリ（`$ORACLE_HOME/ocal/log/cws.log`）にあります。

使用可能な値

TRUE（アクティビティ・ロギングを有効化）

FALSE（アクティビティ・ロギングを無効化）

デフォルト値

FALSE

アクティビティ・ロギング：モジュールの指定

セクション

[CWS]

パラメータ

`log_modulesinclude`

説明

アクティビティ情報の記録が許可されるモジュールのリストを指定します。このリストはデフォルトでは空です。そのため、たとえば `log_activity=TRUE` を設定しても、リストに特定のアクティビティ・モジュールを含めないかぎり、アクティビティ・ロギングを生成できません。

使用可能な値

次のうちの1つ、またはカンマで区切った複数の値を、`{ }` で囲んだリスト

`CWS_DIRSYNC`

`CWS_EVENTSYNC`

`CWS_MESSAGING`

`CWS_REPL`

`CWS_SCHEDULER`

`CWS_SNOOZE`

`CWS_SSR`

デフォルト値

`{ }`

障害エラーのロギング

セクション

[ENG]

パラメータ

`dac_failederrlog`

説明

クライアント・インタフェースに予期しないエラーとして表示されるディレクトリ・サーバー・アクセス関連のエラーを、`$ORACLE_HOME/ocal/log/eng.log` ファイルに記録するかどうかを指定します。

使用可能な値

TRUE (ロギングを有効化)

FALSE (ロギングを無効化)

デフォルト値

TRUE

構成エラーのロギング

セクション

[ENG]

パラメータ

`dac_configerrlog`

説明

3つのディレクトリ・サーバー・アクセス・エラーを `$ORACLE_HOME/ocal/log/eng.log` ファイルに記録するかどうかを指定します。エラーは、「unable to connect to the SNC daemon/service」、「no connections to the directory access (DAS) daemon/service are currently available」および「the number of retries to obtain a connection has been attained; no connections to the directory access (DAS) daemon/service are configured」の3つです。

使用可能な値

TRUE (ロギングを有効化)

FALSE (ロギングを無効化)

デフォルト値

TRUE

その他のエラーのロギング

セクション

[ENG]

パラメータ

`dac_miscerrlog`

説明

クライアントに関連する 3 つのタイプのディレクトリ・サーバー・アクセス・エラーを `$ORACLE_HOME/ocal/log/eng.log` ファイルに記録するかどうかを指定します。エラーは、「password discrepancy due to changes made in the directory server through another application」、「an LDAP client-side error」および「an LDAP server-side error」の 3 つです。

使用可能な値

TRUE (ロギングを有効化)

FALSE (ロギングを無効化)

デフォルト値

TRUE

致命的でないエラーのログ

セクション

[ENG]

パラメータ

`dac_ignorederrlog`

説明

致命的でないディレクトリ・サーバー・アクセス・エラーを `$ORACLE_HOME/ocal/log/eng.log` ファイルに記録するかどうかを指定します。

使用可能な値

TRUE (ロギングを有効化)
FALSE (ロギングを無効化)

デフォルト値

TRUE

UTF-8 変換機能のインスタンス化失敗のロギング**セクション**

[ENG]

パラメータ

utf8_onfailprintmesg

説明

サーバーが特定のユーザー・セッションのために UTF-8 変換機能をインスタンス化できない場合に、エラー・メッセージを \$ORACLE_HOME/ocal/log/eng.log に記録するかどうかを指定します。この機能を作成できなかった原因を判断するために必要な情報が、エラー・メッセージに記録されます。

使用可能な値

TRUE (エラー・メッセージを記録する)
FALSE (エラー・メッセージを記録しない)

デフォルト値

TRUE

UTF-8 形式へのデータ変換の有効化**セクション**

[ENG]

パラメータ

utf8_autoconvert

説明

サーバーがクライアントからの入力データを変換し、UTF-8 形式で保存するかどうかを指定します。

警告： このパラメータを FALSE に設定した場合、複数のプラットフォームでクライアントをサポートしているインストール、または複数の言語のクライアントをサポートしているインストールに悪影響を及ぼす可能性があります。

使用可能な値

TRUE（入力データを UTF-8 に変換する）

FALSE（入力データを変換しない）

デフォルト値

TRUE

データベース・キャッシュ内のページ数

セクション

[DB]

パラメータ

db_pages

説明

データベース・キャッシュのページ数を指定します。値が大きいほど使用するメモリ容量が大きくなるため、パフォーマンスが向上します。ページ数が一定の値を超えると、パフォーマンス強化による効果が減少します。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

8

ユーザーごとのデータベース・ファイルの最大数

セクション

[DB]

パラメータ

db_files

説明

1つのユーザー・セッションに対して常にオープン状態にあるデータベース・ファイルの数を指定します。この制限値に繰り返し到達する場合には、この数を増やしてパフォーマンスを向上させることができます。

使用可能な値

プロセスごとのオープン・ファイル数に対して、オペレーティング・システムが設定した最大値以下の、正の整数

デフォルト値

(UNIX)

30

(NT)

170

ノード・データベースのテンプレート**セクション**

[DBI]

パラメータ

dbi_name

説明

ノード作成用テンプレートとして使用する、空のノード・データベースの名前を指定します。この値はインストール中に設定されます。編集または削除できません。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

N/A

ノード・データベースのバージョン

セクション

[DBI]

パラメータ

dbversion

説明

ノード・データベースのバージョン番号を指定します。この値はインストール中に設定されます。編集または削除できません。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

N/A

データベースのバージョン番号

セクション

[<YOURNODEID>]

パラメータ

version

説明

ノード・データベースのバージョンを指定します。これは、ノードの作成時に自動的に設定される参照値です。決して手動で編集しないでください。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

N/A

代替バックアップ・ユーティリティの指定

セクション

[UTL]

パラメータ

external_backup

説明

unidbbackup を起動させるための、代替バックアップ・ユーティリティを指定します。サーバーは、このパラメータの値を使用して次のコマンドラインを構成します。

<external_backup の値> [-f] -s <src> -d <dst>

ここでは次のようになります。

- <external_backup の値> は、このパラメータの値です。
- -f は、ソースがファイルであることを示します（このフラグが使用されていない場合、ソースはディレクトリです）。
- -s は、バックアップするソースを指定します（<src> は、任意の有効なファイルまたはディレクトリの名前になります）。
- -d は、バックアップ先を指定します（<dst> は、任意の有効なファイルまたはディレクトリの名前になります）。

生成されるコマンドラインは有効であることが必要です。場合によっては、このコマンドラインを使用して有効なコマンドラインを作成し、有効なコマンドラインを起動するための中間スクリプトが必要になります。この場合は、external_backup の値を中間スクリプトの起動に適した値に設定します。

使用可能な値

有効なパスおよびファイル名

デフォルト値

なし

代替リストア・ユーティリティの指定

セクション

[UTL]

パラメータ

`external_restore`

説明

`unidbrestore` を起動するための、代替リストア・ユーティリティを指定します。サーバーは、このパラメータの値を使用して次のコマンドラインを構成します。

`<external_restore の値> [-f] -s <src> -d <dst>`

ここでは次のようになります。

- `<external_restore の値>` は、このパラメータの値です。
- `-f` は、ソースがファイルであることを示します（このフラグが使用されていない場合、ソースはディレクトリです）。
- `-s` は、リストアするソースを指定します（`<src>` は、任意の有効なファイルまたはディレクトリの名前になります）。
- `-d` は、リストア処理の出力先を指定します（`<dst>` は、任意の有効なファイルまたはディレクトリの名前になります）。

生成されるコマンドラインは有効であることが必要です。場合によっては、このコマンドラインを使用して有効なコマンドラインを作成し、有効なコマンドラインを起動するための中間スクリプトが必要になります。この場合は、`external_restore` の値を中間スクリプトの起動に適した値に設定します。

使用可能な値

有効なパスおよびファイル名

デフォルト値

なし

バックアップ操作のタイムアウト

セクション

[UTL]

パラメータ

`backup_timeout`

説明

外部のバックアップ・ユーティリティを使用する場合に、`unidbbackup` がすべてのノード・データベースをロックしておく最大時間を、秒単位で設定します。ノード・データベースがこの値より長い間ロックされた場合、`unidbbackup` はバックアップ操作全体を強制終了します。このパラメータは、[UTL] `external_backup` パラメータを使用して代替バックアップ・ユーティリティが指定されている場合のみ、使用されます。`unidbbackup` ユーティリティがカレンダー・データベース自体をバックアップする場合、ノードのバックアップ時間は制限されません。

複数のノードが関与している場合、この最大時間が個々のノードに適用されます。そのため、バックアップの合計時間が簡単にこの値を超える可能性があることに注意してください。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

3600

リストア操作のタイムアウト**セクション**

[UTL]

パラメータ

`restore_timeout`

説明

外部のリストア・ユーティリティを使用している場合の、データベース上のリストア操作のタイムアウトを、秒単位で設定します。リストア操作の時間がこの値より長くなると、リストア操作が強制終了されます。このパラメータは、[UTL] `external_restore` パラメータを使用して代替リストア・ユーティリティが指定されている場合のみ、使用されます。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

3600

外部バックアップのコール側プロシージャ

セクション

[UTL]

パラメータ

backupatonce

説明

このパラメータは、external_backup パラメータが指定されている場合のバックアップ方法を制御します。

TRUE に設定した場合、カレンダー・インストール・ディレクトリに設定されたパスを使用して、unidbbackup によって external_backup が 1 回だけ起動されます。external_backup が設定されていない場合、このパラメータは無効になります。この処理が実行されている間は、完全なノードのセットがロックされます。external_backup が非常に高速の場合のみ、このパラメータを TRUE に設定することをお薦めします。

FALSE に設定した場合、各ノード・データベース・ディレクトリおよび misc ディレクトリに対して、unidbbackup によって external_backup が起動されます。バックアップ中は、各ノードが順次ロックされます。

使用可能な値

TRUE (バックアップを 1 回コール)

FALSE (各ノードでバックアップをコール)

デフォルト値

FALSE

すべての unidbfix インスタンスに 1 つのログ・ファイルを指定

セクション

[UTL]

パラメータ

unidbfix_logfile

説明

unidbfix ユーティリティのロギング出力を書き込むためのログ・ファイルを指定します。デフォルトでは、unidbfix ユーティリティが書込みを行うログ・ファイルの名前は、処理されるノードに基づいて設定されます。これは、多数の unidbfix のインスタンスを異なるノードで同時に実行するために必要です。

このパラメータを使用すると、すべてのノードのロギング情報が、同じファイルにすべて記録されます。このパラメータは互換性に関してのみ存在するため、unidbfix が異なるノードで同時に実行される場合は、使用しないでください。

使用可能な値

有効なパスおよびファイル名

デフォルト値

なし

ユーティリティの代替キャラクタ・セットの指定**セクション**

[UTL]

パラメータ

charset

説明

このパラメータは、ローカルで実行されるすべてのユーティリティで、現行のロケール環境のキャラクタ・セットではなく、このキャラクタ・セットを使用するキャラクタ・セット変換が使用されるようにします。このパラメータは、検出されたキャラクタ・セットが正しくない場合に使用することを前提にしています。

一度このパラメータを指定すると、すべてのユーティリティでこのキャラクタ・セットが使用されます。Windows 用 telnet クライアント、もしくは UNIX または Linux 用 telnet クライアントのどちらを使用した場合でも、クライアント・サーバーへのアクセスには同じキャラクタ・セットが使用されます。異常な動作を回避するために、telnet セッションがこのキャラクタ・セットに適合することを確認してください。

使用可能な値

[CWS] mimecontentcharset の使用可能な値を参照してください。

デフォルト値

なし

ノードの別名

セクション

[<YOURNODEID>]

パラメータ

aliases

説明

サーバー上で構成されているノードの名前を指定します。サーバー上で複数のノードが構成されている場合、ユーザーは接続先のノードを指定する必要があります。通常、数値で表されたノード ID よりも名前の方が覚えやすいため、別名を構成できます。

使用可能な値

最大 255 文字までの、カンマで区切られた 1 つ以上の別名のリスト。各別名は、少なくとも 1 つの文字を含み、スペースを含まない英数字の文字列です。

デフォルト値

なし

ノード名

セクション

[<YOURNODEID>]

パラメータ

name

説明

\$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/<name> の下にあるノード・データベースのルート・ディレクトリの名前を指定します。このパラメータの値は、ノードの作成時に自動的に生成されます。最初に作成されるノードには N0、2 番目のノードには N1 というラベルが付けられ、それ以降も N9 までラベルが付けられます。後続のノードでも、アルファベットの O ～ Z でこれが繰り返され、その後 A ～ L で繰り返されます。

使用可能な値

1 つの文字（A ～ Z）および 1 つの数字（0 ～ 9）で構成されるコード

デフォルト値

N/A

ノードのタイムゾーン**セクション**

[<YOURNODEID>]

パラメータ

timezone

説明

ノードのタイムゾーンを示します。サーバーは、ノードの作成時にこのパラメータを設定します。この値は決して変更しないでください。

サーバーは、このパラメータを管理者がノードの作成時に指定したタイムゾーンに設定しますが、管理者による指定がない場合は、[TIMEZONE] default パラメータの値に設定します。

timezone パラメータは、ノード・ネットワーク内ノードが異なるタイムゾーンを使用できるようにします。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

なし

LDAP ノードおよび非 LDAP ノードの混在**セクション**

[ENG]

パラメータ

dir_internal_nodes

説明

LDAP ディレクトリを使用するノードと固有の内部ディレクトリを持つノードをネットワークで混在させる必要がある場合に、インストールで内部ディレクトリを持つすべてのノードを識別します。このパラメータは、Calendar Server がスタンドアロン・モードでインストールされている場合のみ使用されます。

使用可能な値

カンマで区切られ、{ } で囲まれた有効なノード ID。次に例を示します。
`dir_internal_nodes = {10000,10001}`

デフォルト値

なし

ユーザー・メール・マッピング

セクション

[ENG]

パラメータ

usermailmap

説明

ユーザーの電子メール・アドレスが含まれているユーザー・レコード内の属性を指定します。Calendar Server の内部ディレクトリのみを使用した（LDAP ディレクトリを含まない）インストール用です。

使用可能な値

有効な X.400 キー

デフォルト値

"0"

リソース・メール・マッピング

セクション

[ENG]

パラメータ

resourcemailmap

説明

リソースの電子メール・アドレスが含まれているリソース・レコード内の属性を指定します。Calendar Server の内部ディレクトリのみを使用した（LDAP ディレクトリを含まない）インストール用です。

使用可能な値

有効な X.400 キー

デフォルト値

"O"

ユーザーの携帯電話番号のマッピング

セクション

[ENG]

パラメータ

usermobilemap

説明

ユーザーの携帯電話番号が含まれているユーザー・レコード内の属性を指定します。Calendar Server の内部ディレクトリのみを使用した（LDAP ディレクトリを含まない）インストール用です。

使用可能な値

有効な X.400 キー

デフォルト値

"R"

ユーザーの携帯電話タイプのマッピング

セクション

[ENG]

パラメータ

usermobiletypemap

説明

ユーザーの携帯電話タイプが含まれているユーザー・レコード内の属性を指定します。Calendar Server の内部ディレクトリのみを使用した（LDAP ディレクトリを含まない）インストール用です。

使用可能な値

有効な X.400 キー

デフォルト値

"N"

ユーザー・アラート環境設定のマッピング

セクション

[ENG]

パラメータ

usersmscprefmap

説明

ユーザーの優先通知形式が含まれているユーザー・レコード内の属性を指定します。Calendar Server の内部ディレクトリのみを使用した（LDAP ディレクトリを含まない）インストール用です。

使用可能な値

有効な X.400 キー

デフォルト値

"OU3"

UID の X.400 フィールド

セクション

[ENG]

パラメータ

itemuidmap

説明

Calendar Server の一意の UID を保持する X.400 フィールドを指定します。この情報に対して 64 バイトが必要なインストールでは、2 つの X.400（OU1 および OU2）を使用できます。このパラメータの値は、一度設定した後に変更しないでください。設定後に変更すると、データベースが破損する可能性があります。Calendar Server の内部ディレクトリのみを使用したインストール用です。

使用可能な値

有効な X.400 キー

OU1_OU2

デフォルト値

"P"

検索する項目の最大数

セクション

[ENG]

パラメータ

userlookthroughlimit

説明

Calendar Server が検索を終了し、結果をクライアントに返すまでに検索する項目（ユーザーまたはリソース）の最大数を指定します。

使用可能な値

最大値 ($2^{32}-1$) 以下の正の整数

デフォルト値

$2^{32}-1$

返す項目の最大数

セクション

[ENG]

パラメータ

usersearchmaxreturn

説明

検索結果に含める項目（ユーザーまたはリソース）の最大数を指定します。この数の項目が検索結果に含まれると、サーバーは検索を終了し、結果をクライアントに返します。

使用可能な値

最大値 ($2^{32}-1$) 以下の正の整数

デフォルト値

$2^{32}-1$

イベント検索のタイムアウト

セクション

[ENG]

パラメータ

eventsearch_maxlookthroughlimit

説明

イベントの検索に費やす最大時間を、ミリ秒単位で指定します。バージョン 9.0.4 以上のネイティブ・クライアント用です。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

5000

返すイベントの最大数

セクション

[ENG]

パラメータ

evsearch_maxcount

説明

検索結果として返すイベントの最大数を指定します。バージョン 9.0.4 以上のネイティブ・クライアント用です。

使用可能な値

10 以上の正の整数

デフォルト値

25

イベント・コメントの検索

セクション

[ENG]

パラメータ

eventsearch_commentsearchlength

説明

イベントのコメント内を検索するときの、先頭部分からの最大バイト数を指定します。バージョン 9.0.4 以上のネイティブ・クライアント用です。

使用可能な値

0 (コメント内の検索を無効化)

正の整数

デフォルト値

4096

メール転送の設定（廃止）

セクション

[CWS]

パラメータ

unixmail

説明

このパラメータは現在使用されていません。

メール・プログラム

セクション

[CWS]

パラメータ

smtpmailprogram

説明

SMTP メール・サーバーへのメッセージ転送に使用する、メール・ユーティリティを指定します。このパラメータは、`unixmailprogram` より優先されます。下位互換性のために、`smtpmailprogram` が未設定で `unixmailprogram` パラメータの値が検出された場合は、その値が使用されます。

使用可能な値

(UNIX)

`sendmail`

`postmail`

(NT)

`sendmail.exe`

デフォルト値

(UNIX)

`sendmail`

(NT)

`sendmail.exe`

メール・プログラム（廃止）

セクション

[CWS]

パラメータ

`unixmailprogram`

説明

このパラメータのかわりに、[CWS] `smtpmailprogram` が使用されます。

メール・プログラムのパス名

セクション

[CWS]

パラメータ

`smtpmailpath`

説明

ローカル・メール・ユーティリティのディレクトリ・パス名を指定します。このパラメータは、`unixmailpath` より優先されます。下位互換性のために、`smtpmailpath` が未設定で `unixmailpath` パラメータの値が検出された場合は、その値が使用されます。

使用可能な値

有効なパス名

デフォルト値

(UNIX)

`/usr/lib`

(NT)

`$ORACLE_HOME/ocal/bin`

メール・プログラムのパス名（廃止）**セクション**

[CWS]

パラメータ

`sendmailpath`

説明

このパラメータのかわりに、[CWS] `smtpmailpath` が使用されます。

SMTP メール・サーバーのホスト名**セクション**

[CWS]

パラメータ

`smtpmailhost`

説明

SMTP メール・サーバーが実行されるホストの名前を指定します。このパラメータは NT でのみ機能します。[CWS] `mailhost` より優先されます。下位互換性のために、`smtpmailhost` が未設定で `mailhost` パラメータの値が存在する場合は、この値が使用されます。

使用可能な値

有効なホスト名

デフォルト値

Calendar Server が実行されるマシンのホスト名

SMTP メール・サーバーのホスト名（廃止）

セクション

[CWS]

パラメータ

mailhost

説明

このパラメータのかわりに、[CWS] smtpmailhost が使用されます。

最大受信者数

セクション

[CWS]

パラメータ

smtpmailmaxrecipients

説明

メール・メッセージの受信者の最大数を指定します。このパラメータの値より多い受信者にメールが送信される場合、CWS は受信者のリストを分割し、sendmail プログラムを複数回コールします。

[CWS] [smtpmailmaxcommandlinesize](#) パラメータも参照してください。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

100

sendmail コマンドラインの最大サイズ

セクション

[CWS]

パラメータ

smtpmailmaxcommandlinesize

説明

コマンドラインの引数として `sendmail` プログラムに渡されるバッファの最大サイズを指定します。必要なバッファ・サイズがこの値より大きい場合、CWS は受信者のリストを分割して、`sendmail` プログラムを複数回コールします。

[CWS] `smtpmailmaxrecipients` パラメータも参照してください。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

1024

最後のメール・メッセージ用一時ファイルの自動削除

セクション

[CWS]

パラメータ

mailfiledelete

説明

最後に送信されたメール・メッセージが含まれる一時ファイルを、メールの送信後に削除するかどうかを指定します。このパラメータは、メール配信に問題がある場合に `Calendar Server` の動作をチェックするのに役立ちます。

サーバーが最後のメール・メッセージを書き込む一時ファイルは、`$ORACLE_HOME/ocal/tmp/MAILMSG` にあります。

使用可能な値

TRUE (メール・メッセージを自動的に削除する)

FALSE (メール・メッセージを自動的に削除しない)

デフォルト値

TRUE

メール・ヘッダーの「From:」フィールドのコンテンツ

セクション

[CWS]

パラメータ

mailhdroriginatorfromuser

説明

メール・ヘッダーの「From:」フィールドを送信者の電子メール・アドレスにするどうかを指定します。

使用可能な値

TRUE（「From:」フィールドを「reply-to」フィールドと同じに設定）

FALSE（「From:」フィールドを "unison,unison" に設定）

デフォルト値

TRUE

メール・ヘッダーの「To:」フィールドに入力される名前の UTF-8

セクション

[CWS]

パラメータ

mailhdrtoname

説明

メール・ヘッダーの「To:」フィールドに、アドレスと一緒に名前も含めるかどうかを指定します。アドレスは ASCII 文字を使用して構成されるため、メール・リーダーで表示の問題が発生しませんが、名前には ASCII 以外の文字が含まれる可能性があります。メール・リーダーが ASCII 以外の文字を正しく表示できない場合は、「To:」フィールドから名前を完全に削除する方が賢明です。

使用可能な値

TRUE (名前を含める)
FALSE (名前を含めない)

デフォルト値

TRUE

メール・メッセージのコンテンツ部分のキャラクタ・セット - デフォルト

セクション

[CWS]

パラメータ

mimecontentcharset

説明

このパラメータは、CWS デーモン / サービスによって送信されるすべての MIME メール・メッセージでコンテンツおよび件名部分のエンコードに使用する、デフォルトのキャラクタ・セットを指定します。通常、通知メール・メッセージに使用するキャラクタ・セットは、送信元のクライアント・アプリケーションによって異なります。メール・リマインダの場合は、送信先ユーザーの言語によって異なります。

送信先の言語がサポートされていない場合は、このパラメータが定義するキャラクタ・セットが使用されます。

使用可能な値

UTF8
WE8ISO8859P1
英語 :
US7ASCII
WE8MSWIN1252
AL32UTF8
WE8ISO8859P15
ポルトガル語 (ブラジル)、フランス語、ドイツ語、イタリア語 :
WE8ISO8859P1
WE8MSWIN1252 :

AL32UTF8

WE8ISO8859P15

日本語：

ISO2022-JP

JA16EUC

JA16SJIS

AL32UTF8

韓国語：

KO16MSWIN949

KO16KSC5601

AL32UTF8

中国語（簡体字）：

ZHS16CGB231280

ZHS16GBK

ZHS32GB18030

AL32UTF8

中国語（繁体字）：

ZHT16MSWIN950

ZHT16BIG5

ZHT16HKSCS

AL32UTF8

その他の値：

"MAC-ROMAN"

"ISO-8859-1"

引用符は省略できないので注意してください。

デフォルト値

"ISO-8859-1"

メール・メッセージのコンテンツ部分のキャラクタ・セット - 強制

セクション

[CWS]

パラメータ

mimecontentcharset_force

説明

CWS デーモン / サービスによって送信されるすべての MIME メール・メッセージでコンテンツおよび件名部分のエンコードに使用するキャラクタ・セットを、強制的にこのパラメータで定義した値に設定します。

使用可能な値

[CWS] mimecontentcharset の使用可能な値を参照してください。

デフォルト値

なし

メール通知およびリマインダのメッセージ・バナーの有効化

セクション

[CWS]

パラメータ

banner

説明

ユーザーに送信する通知電子メール・メッセージの最後に、メッセージ・バナーを含めるかどうかを指定します。デフォルトのバナーは、`$ORACLE_HOME/ocal/etc/banner` ディレクトリに含まれるファイルで定義されます。このディレクトリには、使用可能なユーザー言語ごとに 1 つのファイルが含まれています。そのため、送信者のクライアントでメール通知に使用する言語、および受信者がメール・リマインダに使用する優先言語で、バナーを送信できます。

バナー・ファイルには、UTF-8 テキストが含まれている必要があります。文字列を UTF-8 に変換するには、`unistrconv` ユーティリティを使用します。[付録 F「Calendar Server ユーティリティ」](#)の `unistrconv` の説明を参照してください。

使用可能な値

TRUE (バナーを含める)
FALSE (バナーを含めない)

デフォルト値

TRUE

ショート・メッセージ・サービス (SMS) 通知プログラム

セクション

[CWS]

パラメータ

smsnotifyprogram

説明

Oracle 9iAS Wireless PIM 通知ディスパッチャにアラート (つまり通知およびリマインダ) を送信する際にカレンダー・サービスが使用するユーティリティの、ファイル名および位置を指定します。この機能は、完全な Collaboration Suite がインストールされている (つまり、Calendar Server のスタンドアロン・インストールではない) 場合のみ、使用できます。smsnotifyprogramparam および smsignoreerror も参照してください。

使用可能な値

有効なパスおよびファイル名

デフォルト値

\$ORACLE_HOME/ocal/sbin/sendalert

ショート・メッセージ・サービス (SMS) 通知プログラムの引数

セクション

[CWS]

パラメータ

smsnotifyprogramparam

説明

[CWS] smsnotifyprogram パラメータによって構成されたアラート・ユーティリティに渡される、コマンドラインの引数を指定します。

このパラメータは、Oracle 9iAS PIM 通知ディスパッチャのホスト名およびポートを、アラート・ユーティリティに示すために使用します。Oracle 9iAS PIM 通知ディスパッチャのホスト名およびポート番号の検索方法の詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』の「アラート」の章を参照してください。

使用可能な値

"-host <hostname> -port <portnumber>"

デフォルト値

なし

(SMS) 通知プログラムで無視するエラー**セクション**

[CWS]

パラメータ

smsignoreerror

説明

アラート・ユーティリティが返すエラーの中で無視するエラーを指定します。smsnotifyprogram も参照してください。

使用可能な値

カンマで区切られたエラーの値を {} で囲んだリスト。次に例を示します。

{ 10, 14 }

デフォルト値

{ }

デフォルト・タイムゾーン**セクション**

[TIMEZONE]

パラメータ

default

説明

ローカル・タイムゾーンを指定します。この値は、新しく作成されたノードのタイムゾーンとして使用されます。[YOURNODEID] セクションの `timezone` も参照してください。

使用可能な値

`$ORACLE_HOME/ocal/misc/timezone.ini` ファイルに表示される任意のタイムゾーン（たとえば、EST-5EDT）

デフォルト値

なし

タイムゾーン・ルール

セクション

[TIMEZONE]

パラメータ

rules

説明

タイムゾーン・ルールが含まれるファイルの名前を指定します。

使用可能な値

有効な、完全に指定されたファイル名

デフォルト値

`$ORACLE_HOME/ocal/misc/timezone.ini`

タイムゾーン・ルール・ファイルのチェックサム

セクション

[TIMEZONE]

パラメータ

checksum

説明

タイムゾーン・ルール・ファイルのチェックサムが含まれます。この値は事前に設定されます。いかなる状況においても変更しないでください。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

N/A

マスター・ノード**セクション**

[CLUSTER]

パラメータ

masternode

説明

このサーバー上の指定されたノードが、クラスタのマスター・ノードであることを示します。クラスタ内の1つのノードだけが、マスター・ノードになります。このパラメータは、ネットワークで結ばれた **Calendar Server** の1つでのみ設定する必要があります。また、ノードは同じホスト上に存在する必要があります。

使用可能な値

このサーバー上にある任意のノードに属する有効なノード ID

デフォルト値

なし

リモート・マスター・ノード**セクション**

[CLUSTER]

パラメータ

remotemasternode

説明

クラスタ内のマスター・ノードを指定します。このパラメータは、**uniuser**を使用してユーザーが作成される場合の、マスター・ノードへの情報のレプリケーションを迅速化します。

使用可能な値

クラスタ内にある任意のノードに属する有効なノード ID

デフォルト値

なし

オンライン登録のノードの除外

セクション

[CLUSTER]

パラメータ

excludednodes

説明

オンライン・ユーザー登録から除外するノードを指定します。サーバーは、リスト内のノードではユーザーを作成しません。このパラメータは、クラスタのマスター・ノード上、または最大容量に到達するノード上でのユーザー登録を回避するために使用します。

使用可能な値

クラスタ内の任意のノードに属する有効なノード ID または別名をカンマで区切り、{ } で囲んだリスト。次に例を示します。

{ 14, 446, 447 }

デフォルト値

{ }

uniical からの SYSOP ログインの許可

セクション

[ENG]

パラメータ

allowsysoplogon_uniical

説明

uniical ユーザーが SYSOP としてサーバーにログインできるかどうかを指定します。

使用可能な値

TRUE (SYSOP ログインを許可する)

FALSE (SYSOP ログインを許可しない)

デフォルト値

TRUE

unicp ユーティリティからの SYSOP ログインの許可

セクション

[ENG]

パラメータ

allowsysoplogon_unicp

説明

unicp* ユーティリティ・ファミリのユーザーが SYSOP としてサーバーにログインできるかどうかを指定します。

使用可能な値

TRUE (SYSOP ログインを許可する)

FALSE (SYSOP ログインを許可しない)

デフォルト値

TRUE

Oracle Calendar SDK (CAPI) アプリケーションの SYSOP ログインの許可

セクション

[ENG]

パラメータ

allowsysoplogon_capi

説明

Oracle Calendar SDK (CAPI) を使用するアプリケーションが SYSOP としてログインできるかどうかを指定します。

使用可能な値

- TRUE (SYSOP ログインを許可する)
- FALSE (SYSOP ログインを許可しない)

デフォルト値

FALSE

GAL の更新頻度の設定

セクション

[CWS]

パラメータ

galsyncinterval

説明

CWS デーモン / サービスがグローバル・アドレス一覧 (GAL) の更新を起動させる頻度を、秒単位で指定します。現行の GAL が無効化された場合 (たとえば新しいノードがネットワークに追加されたり、現行の改訂が古すぎた場合) のみ、サーバーによって更新が生成されることに注意してください ([ENG] gal_refreshinterval パラメータを参照)。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

300 (5 分)

変更されたカレンダー・データ・リストの更新頻度の設定 (同期化ツール用)

セクション

[CWS]

パラメータ

eventsyncinterval

説明

サーバーがカレンダー・エントリの同期化情報の更新を起動させる間隔を、秒単位で指定します。この情報は、変更され、ローカル・クライアント・データとの同期化が必要なカレンダー・エントリのリストを、同期化クライアントがサーバーに要求する際に使用されます。

使用可能な値

0 （無効）
正の整数

デフォルト値

900（「0（無効）」のアップグレードの場合を除く）

古い CWS 認証メカニズムの使用**セクション**

[ENG]

パラメータ

coexist_cwsbasicauth

説明

古い Calendar Server を混在させる必要があるかどうかを指定します。完全な Oracle Collaboration Suite がインストールされている場合、CWS 認証には Oracle Trusted Midtier (OTMT) という新しい方式が使用されます。Calendar Server のスタンドアロン・インストール、および古いバージョンの Calendar Server では、この新しい認証がサポートされていないため、CWS の Basic 認証を引き続きサポートする必要があります。Basic 認証はデフォルトでは許可されていませんが、このパラメータを TRUE に設定することで有効化できます。このパラメータは、OTMT がサポートされていないサーバーが混在しているときだけ使用してください。

使用可能な値

TRUE（古い認証を許可）
FALSE（新しい認証）

デフォルト値

FALSE（完全な Collaboration Suite がインストールされている場合）
TRUE（Calendar Server のスタンドアロン・インストールの場合）

識別されない古いクライアントのサポート

セッション

[ENG]

パラメータ

coexist_unidentifiedsessions

説明

サーバーが、古いクライアントまたは古いサーバーからの識別されないセッションを拒否するかどうかを指定します。バージョン 9.0.4 以上のクライアントおよびサーバーは、常に自らを正しく識別します。

使用可能な値

TRUE (古いクライアントをサポートする)

FALSE (古いクライアントをサポートしない)

デフォルト値

TRUE

サーバーとディレクトリ・サーバーとの相互作用の制御

ディレクトリ接続のリサイクル頻度の設定

セクション

[DAS]

パラメータ

dir_connectrecycletime

説明

DAS サーバーとディレクトリ・サーバーの接続が保持される最大時間を、時間数で指定します。この時間が経過すると、DAS サーバーはディレクトリ・サーバーへの接続をリフレッシュします。

このパラメータは、パラメータ [LDAP]host で複数のホスト（およびポート）を提供することにより、フェイルオーバー・シナリオで DAS が設定されている場合に役立ちます。このシナリオでは、dir_connectrecycletime により、DAS サーバーを再起動せずに接続をリサイクルできます。

このパラメータのデフォルト値は 0 ですが、フェイルオーバー設定にそのディレクトリ・サーバーが使用されていることをパラメータが検出した場合、デフォルト値は 24（時間）に設定されます。このパラメータが明示的に任意の値に設定されると、すべてのシナリオでこの値が優先されることに注意してください。

使用可能な値

任意の正の整数値

値 0 は、DAS 接続がまったくリサイクルされないことを意味します。

デフォルト値

0

ディレクトリ・サーバーの名前

セクション

[LDAP]

パラメータ

dsa

説明

LDAP ディレクトリ・サーバーの名前を指定します。このパラメータは、インストール時に設定されます。このパラメータの値を変更すると、ディレクトリ・サーバーが破損する可能性があります。

使用可能な値

OID (Oracle Internet Directory)
Netscape (Netscape および SunOne)
CDS_GDS500 (Syntegra)
ISOCOR_GDS (Critical Path の InJoin)
OPENLDAP

デフォルト値

なし

ディレクトリ・サーバー・ホストの名前

セクション

[LDAP]

パラメータ

host

説明

LDAP ディレクトリ・サーバーをホスティングするマシンの名前を指定します。このディレクトリ・サーバーのフェイルオーバーが構成されている場合は、それらのフェイルオーバーをこのリストに含めることができます。デフォルトでは、Calendar Server がリストの最初のサーバーへの接続を確立しようと試みます。そして、確立できなかった場合は次のサーバーへの接続を試みます。

使用可能な値

有効なホスト名、完全修飾されたドメイン名、または IP アドレス

ディレクトリ・サーバーをブランクで区切り、"<hostname>[:<port>]"
<hostname>[:<port>]" 形式で表したリスト。次に例を示します。

"host1:389 host2:389"

デフォルト値

なし

LDAP ディレクトリ・サーバーのポート番号

セクション

[LDAP]

パラメータ

port

説明

LDAP ディレクトリ・サーバーのポート番号を指定します。[LDAP] host パラメータにポート番号が含まれている場合、[LDAP] port パラメータの値は無視されます。

使用可能な値

有効なポート番号

デフォルト値

389

ディレクトリ・サーバーが使用するキャラクタ・セット

セクション

[LDAP]

パラメータ

charset

説明

このパラメータは、Calendar Server のスタンドアロン・インストールのみで使用され、LDAP ディレクトリ・サーバーが使用するキャラクタ・セットを示します。これは、Calendar Server が、LDAP ディレクトリ・サーバー用のデータに必ず使用するキャラクタ・セットです。

使用可能な値

サーバーがサポートする任意のキャラクタ・セット。[CWS]
mimecontentcharset を参照してください。

デフォルト値

UTF-8

属性保存リスト

セクション

[LDAP]

パラメータ

attrpreservelist

説明

属性のリスト（保存リスト）を指定します。このリストは、カレンダー・ユーザーが削除されても（つまり、ユーザーのカレンダー属性およびそれらの属性の `ctCalUser` オブジェクト・クラスが削除されても）削除されません。カレンダー・ユーザー・エントリでも `inetOrgPerson` オブジェクト・クラスが使用される場合は、このパラメータを次のように構成する必要があります。

```
{employeeNumber, givenName, initials, mail, ou}
```

`ctCalUser` オブジェクト・クラス以外の属性（たとえば `attr_organization = uid`）にマッピングされたすべてのフィールドも、このリストに追加する必要があります。

このパラメータは、Oracle Internet Directory ではなく LDAP ディレクトリを使用している場合のみ適用されます。

使用可能な値

カンマで区切られ、`{ }` で囲まれた文字列のリスト。リスト内の各文字列は、ユーザー属性の名前を示します。値は、LDAP ディレクトリのベンダーによって異なります。

デフォルト値

```
{ }
```

UID 属性の名前

セクション

[LDAP]

パラメータ

attr_uid

説明

Calendar Server が一意のユーザー識別子（UID）として使用する、ディレクトリ・サーバーの属性名を指定します。

Oracle Internet Directory では、Oracle Internet Directory が Single Sign-On（SSO）ログインの認証に使用する属性も変更しないかぎり、このパラメータの値を変更しないでください。ディレクトリ・サーバーでこの属性を変更した場合は、このパラメータの値を変更する必要があります。

空の文字列が使用された場合、この属性の読取りまたは書込みは行われません。

使用可能な値

LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義された任意の属性名

デフォルト値

uid

国属性の名前

セクション

[LDAP]

パラメータ

attr_country

説明

LDAP ディレクトリ・サーバーが国属性に使用する属性名を指定します。

空の文字列が使用された場合、この属性の読取りまたは書込みは行われません。

使用可能な値

LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義された任意の属性名

デフォルト値

" "（スタンドアロンの Calendar Server）

"C"（Oracle Internet Directory）

世代修飾子属性の名前

セクション

[LDAP]

パラメータ

attr_generation

説明

LDAP ディレクトリ・サーバーが世代修飾子属性に使用する属性名を指定します。
空の文字列が使用された場合、この属性の読取りまたは書込みは行われません。

使用可能な値

LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義された任意の属性名

デフォルト値

"gq" (Syntegra ディレクトリ・サーバー)

"generationQualifier" (その他のディレクトリ)

組織名属性の名前

セクション

[LDAP]

パラメータ

attr_organization

説明

LDAP ディレクトリ・サーバーが組織名属性に使用する属性名を指定します。
空の文字列が使用された場合、この属性の読取りまたは書込みは行われません。

Calendar Server のスタンドアロン・インストールでは、一部のノードにディレクトリ・サーバーが存在しないため (内部ディレクトリのみ)、このパラメータを "" に設定する必要があります。

使用可能な値

LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義された任意の属性名

デフォルト値

" " (スタンドアロンの Calendar Server)
 "O" (Oracle Internet Directory)

名属性の名前

セクション

[LDAP]

パラメータ

attr_givenname

説明

LDAP ディレクトリ・サーバーが名属性に使用する属性名を指定します。
 空の文字列が使用された場合、この属性の読取りまたは書込みは行われません。

使用可能な値

LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義された任意の属性名

デフォルト値

"gn" (Critical Path ディレクトリ・サーバー)
 "givenName" (その他のディレクトリ)

メール属性の名前

セクション

[LDAP]

パラメータ

attr_mail

説明

LDAP ディレクトリ・サーバーがメール属性に使用する属性名を指定します。空の文字列が使用された場合、この属性の読取りまたは書込みは行われません。

使用可能な値

LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義された任意の属性名

デフォルト値

"rfc822mailbox" (Critical Path ディレクトリ・サーバー)
"mail" (その他のディレクトリ)

グループ・メンバーシップ属性のリスト

セクション

[LDAP]

パラメータ

groupmemberlistattribute

説明

グループ・メンバーシップ情報を保存する属性のリストを指定します。この属性のリストは、グループの検索時にディレクトリ・サーバーに渡されます。これらの属性の値には、メンバーの情報が含まれている必要があります。パラメータ [LDAP]group_enable を TRUE に設定する必要があります。

動的なグループのサポートを有効にする場合は、単純に、URL を含む属性を追加します。たとえば、次のようになります。

Netscape:

```
{"uniqueMember", "member", "memberURL"}
```

その他:

```
{"uniqueMember", "member", "labeledURI"}
```

カスタム属性を指定することもできます。ただし、この値のタイプは DN 文字列または LDAP URL である必要があります。

使用可能な値

有効な LDAP 属性 (DN 文字列または LDAP URL) のリスト

デフォルト値

```
{"uniqueMember", "member"}
```

Calendar Server 管理者の位置

セクション

[LDAP]

パラメータ

admin

説明

Calendar Server 管理者が作成される位置の、LDAP ディレクトリ識別名 (DN) の一部を指定します。この位置の DN は、basedn パラメータの値を admin パラメータの値に追加して構成されます。たとえば、admin = "ou=calendar servers" および basedn = "o=acme" の場合、Calendar Server 管理者が作成される位置の DN は、"ou=calendar servers, o=acme" になります。

このパラメータは、Oracle Internet Directory ではなく LDAP ディレクトリを使用している場合のみ適用されます。ノードを追加してノードの SYSOP の配置先を決める場合のみ、使用されます。

使用可能な値

有効な識別名または相対識別名 (正しい形式の詳細は、使用している LDAP ディレクトリ・サーバーのドキュメントを参照してください)。

デフォルト値

ou=OracleCalendarAdministrator

Calendar Server 管理者のグループ・エントリ

セクション

[LDAP]

パラメータ

admingroup

説明

Calendar Server 管理者用グループ・エントリの識別名 (DN) の一部を指定します (管理者はこのグループに追加されます)。グループ・エントリの DN は、basedn パラメータの値を admingroup パラメータの値に追加して構成されます。たとえば、admingroup = "cn=calendar server admins" および basedn = "o=acme" の場合、Calendar Server 管理者のグループ・エントリに対応する DN は "cn=calendar server admins, o=acme" になります。

このパラメータは、Oracle Internet Directory ではなく LDAP ディレクトリを使用している場合のみ適用されます。これは、新しいノードの追加時に、管理グループが存在しない場合の管理グループの作成先を決める場合に使用されます。

このパラメータを変更した場合、ユーティリティ `unidsacissetup` を使用して新しいグループに適した ACI を設定する必要があります。

使用可能な値

有効な相対識別名（正しい形式の詳細は、使用している LDAP ディレクトリ・サーバーのドキュメントを参照してください）。

値を空の文字列に設定した場合、管理者エントリはベース DN の直下に作成されます。

デフォルト値

""

Calendar Server エントリが含まれるサブツリーの識別名

セクション

[LDAP]

パラメータ

`basedn`

説明

カレンダー・エントリが含まれる LDAP ディレクトリ・サーバーのサブツリーの識別名を指定します。

使用可能な値

最大 255 文字の有効な識別名（正しい形式の詳細は、使用している LDAP ディレクトリ・サーバーのドキュメントを参照してください）。

デフォルト値

Calendar Server のスタンドアロン・インストール時に設定されます（管理者が入力した値）。

Oracle Internet Directory をインストールしている場合は、デフォルトのサブスクライバが使用されます。

リソースの相対識別名

セクション

[LDAP]

パラメータ

resourcerelatedn

説明

Calendar Server のベース DN（[LDAP] basedn パラメータの値で指定される）に対応する LDAP ディレクトリでのリソースの位置を指定します。

新しいリソースの作成時に完全な識別名が指定されている場合は、その値が使用され、このパラメータの値は無視されます。

使用可能な値

有効な識別名（正しい形式の詳細は、使用している LDAP ディレクトリ・サーバーのドキュメントを参照してください）。

デフォルト値

なし

イベント・カレンダーの相対識別名

セクション

[LDAP]

パラメータ

eventcalrelatedn

説明

Calendar Server のベース DN（[LDAP] basedn パラメータの値で指定される）に対応する LDAP ディレクトリでのイベント・カレンダーの位置を指定します。

新しいイベント・カレンダーの作成時に完全な識別名が指定されている場合は、その値が使用され、このパラメータの値は無視されます。

使用可能な値

有効な識別名（正しい形式の詳細は、使用している LDAP ディレクトリ・サーバーのドキュメントを参照してください）。

デフォルト値

なし

無名の接続に使用する識別名

セクション

[LDAP]

パラメータ

binddn

説明

読み込み操作の際に、LDAP ディレクトリ・サーバーへの無名の接続に使用する識別名を指定します。Calendar Server のスタンドアロン・インストールのみで使用されます。

使用可能な値

有効な識別名（正しい形式の詳細は、使用している LDAP ディレクトリ・サーバーのドキュメントを参照してください）。

デフォルト値

なし

ディレクトリ・サーバー管理者の識別名

セクション

[LDAP]

パラメータ

mgrdn

説明

LDAP ディレクトリ・サーバー管理者の識別名を指定します。Calendar Server のスタンドアロン・インストールのみに適用されます。

使用可能な値

有効な識別名（正しい形式の詳細は、使用している LDAP ディレクトリ・サーバーのドキュメントを参照してください）。

デフォルト値

なし

無名の接続に使用するパスワード**セクション**

[LDAP]

パラメータ

bindpwd

説明

Calendar Server のスタンドアロン・インストールで、[LDAP] binddn パラメータの値によって指定される LDAP ユーザーのパスワードを指定します。

パスワードは、uniencrypt ユーティリティを使用して暗号化してから unison.ini ファイルに入力する必要があります。付録 F「[Calendar Server ユーティリティ](#)」の uniencrypt の説明を参照してください。暗号化されたパスワードの前には、暗号化に使用した暗号化メソッドを二重引用符で囲んで配置する必要があります。

使用可能な値`"{STD}<encrypted_value>"`**デフォルト値**

なし

書き込み操作に使用する識別名**セクション**

[LDAP]

パラメータ

writedn

説明

Calendar Server が、ディレクトリ・サーバー上のすべての書き込み操作に使用する識別名を指定します。[LDAP] writednpasspassword も参照してください。

使用可能な値

有効な識別名（正しい形式の詳細は、使用している LDAP ディレクトリ・サーバーのドキュメントを参照してください）。

デフォルト値

なし

LDAP 書き込み接続に使用するパスワード

セクション

[LDAP]

パラメータ

writednpassword

説明

[LDAP] writedn パラメータの値で指定される LDAP ユーザーのパスワードを指定します。

パスワードは、uniencrypt ユーティリティを使用して暗号化してから unison.ini ファイルに入力する必要があります。付録 F「[Calendar Server ユーティリティ](#)」の uniencrypt の説明を参照してください。暗号化されたパスワードの前には、暗号化に使用した暗号化メソッドを二重引用符で囲んで配置する必要があります。

使用可能な値

"{STD}<encrypted_value>"

デフォルト値

なし

グループの検索フィルタ

セクション

[LDAP]

パラメータ

groupfilter

説明

ディレクトリ・サーバーでのグループの検索時に、Calendar Server が使用する LDAP フィルタを指定します。パラメータ [LDAP] group_enable を TRUE に設定する必要があります。

このパラメータのデフォルト値は、すべてのグループをカレンダー・クライアントに公開します。ユーザーはディレクトリ・サーバー上のすべてのグループ、および同じカレンダー・ユーザーであるこれらのグループのすべてのメンバーを参照することができます。ただし、カレンダー・ユーザーでないユーザーだけで構成されるグループがディレクトリ・サーバーに存在する場合、カレンダー・クライアントは、これらのグループを、メンバーを含めずに表示します。

これを回避するために、calendarGroup などのカスタム・オブジェクト・クラスを作成し、このオブジェクト・クラスを、カレンダー・クライアントを介して表示させる LDAP グループだけに適用できます。その後、このパラメータの値を拡張してそのオブジェクト・クラスを組み込みます。たとえば、新しい値は次のようになります。

```
(&(member=*)(objectclass=groupOfNames)(objectclass=calendarGroup))
```

詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』の「Oracle Calendar のディレクトリ・サーバー」の章を参照してください。

使用可能な値

最大 150 文字までの任意の有効なフィルタ

デフォルト値

Critical Path の InJoin:

```
(&(member=*)(objectclass=groupOfNames))
```

その他:

```
(&(uniqueMember=*)(objectclass=groupOfUniqueNames))
```

カレンダーの LDAP グループの有効化

セクション

[LDAP]

パラメータ

group_enable

説明

ディレクトリ・グループのサポートを有効にします。このパラメータを TRUE に設定した場合、グループ検索操作の実行時に、フィルタ [LDAP]groupfilter と一致するすべてのディレクトリ・グループが、パブリック・グループとしてカレンダー・クライアントに返されます。[LDAP]group_membersizelimit、[LDAP]group_searchbase および [LDAP]group_sizelimit も参照してください。

使用可能な値

TRUE (ディレクトリ・グループを有効化)

FALSE (ディレクトリ・グループを無効化)

デフォルト値

スタンドアロンの Calendar Server がインストールされている場合：

TRUE

完全な Collaboration Suite がインストールされている場合：

FALSE

メンバーの検索時に返される最大エントリ数

セクション

[LDAP]

パラメータ

group_membersizelimit

説明

グループのメンバーの検索時に、サーバーによってクライアントに返されるエントリの最大数を指定します。パラメータ [LDAP]group_enable を TRUE に設定する必要があります。

使用可能な値

0 (制限なし)

任意の正の整数

デフォルト値

500

グループの検索時に返される最大エントリ数

セクション

[LDAP]

パラメータ

group_sizelimit

説明

グループの検索時に、サーバーによってクライアントに返されるグループの最大数を指定します。パラメータ [LDAP]group_enable を TRUE に設定する必要があります。

使用可能な値

0 (制限なし)

任意の正の整数

デフォルト値

500

LDAP コールの最大待機時間

セクション

[LDAP]

パラメータ

timelimit

説明

クライアントにタイムアウト・エラーが返されるまでの、サーバーが LDAP コールを待機する最大時間を、秒単位で指定します。ディレクトリ・サーバーのタイムアウト設定の方が、このパラメータより優先されることに注意してください。

使用可能な値

0 または正の整数。値を 0 に設定した場合はタイムアウトが発生しません。そのため、ディレクトリ・サーバーから結果またはエラーが返されるまで、サーバーは待機します。

デフォルト値

120

SSL 接続の有効化

セクション

[LDAP]

パラメータ

security

説明

LDAP ディレクトリ・サーバーへの SSL 接続の有効化

使用可能な値

TRUE (SSL 接続を有効化)

FALSE (SSL 接続を無効化)

デフォルト値

FALSE

SSL 接続に使用するポート

セクション

[LDAP]

パラメータ

secure-port

説明

ディレクトリ・サーバーへの SSL 接続に使用するポートを指定します。このパラメータは、[LDAP] security が TRUE に設定されている場合のみチェックされます。

使用可能な値

1 ～ 65535 の任意の値

デフォルト値

636

Oracle Mail 配信リストのサポートの有効化

セクション

[LDAP]

パラメータ

group_dlenable

説明

配信リストのサポートを有効または無効にします。Oracle Mail Server および Oracle Internet Directory のみで使用できます。group_dlfilter および group_dlsearchbase も参照してください。

使用可能な値

TRUE (有効化)

FALSE (無効化)

デフォルト値

TRUE

Oracle Mail 配信リストのフィルタ

セクション

[LDAP]

パラメータ

group_dlfilter

説明

Oracle Mail 配信リストの検索に使用する LDAP フィルタを指定します。

使用可能な値

任意の有効な LDAP フィルタ

デフォルト値

(&(objectClass=orclMailGroup) (! (objectClass=orclMailGroupRef)))

Oracle Mail 配信リストの位置

セクション

[LDAP]

パラメータ

group_dlsearchbase

説明

配信リストの検索の実行対象となる、Oracle Internet Directory 内の位置を指定します。

使用可能な値

任意の有効な DIT（ディレクトリ情報ツリー）

デフォルト値

cn=UM_SYSTEM,cn=EmailServerContainer,cn=Products,
cn=OracleContext

グループの位置

セクション

[LDAP]

パラメータ

group_searchbase

説明

グループ検索の実行対象となるディレクトリ内の位置を指定します。このパラメータは、検索範囲を特定の DIT（ディレクトリ情報ツリー）に絞り込むのに役立ちます。パラメータ [LDAP]group_enable を TRUE に設定する必要があります。

使用可能な値

任意の有効な DIT（ディレクトリ情報ツリー）

デフォルト値

[LDAP]basedn パラメータの値

クライアント動作の制御

予定表の添付の許可

セクション

[LIMITS]

パラメータ

allowattachments

説明

クライアント・アプリケーションで会議またはタスクの添付を許可するかどうかを指定します。Oracle Connector for Outlook、Oracle Calendar Desktop Client および Oracle Calendar Web Client に適用されます。

使用可能な値

TRUE（添付を許可する）

FALSE（添付を許可しない）

デフォルト値

FALSE

添付の最大サイズ

セクション

[LIMITS]

パラメータ

maxattachmentsize

説明

会議、タスクおよびその他の予定表エントリの最大サイズを、バイト単位で指定します。このパラメータは、[LIMITS] allowattachments が TRUE に設定されている場合のみチェックされます。推奨値は 102400（100K）です。Oracle Connector for Outlook、Oracle Calendar Desktop Client および Oracle Calendar Web Client に適用されます。

使用可能な値

最大値（ $2^{32}-1$ ）以下の正の整数

デフォルト値

$2^{32}-1$

新しい予定表エントリの最小チェック間隔（クライアント側の強制）

セクション

[LIMITS]

パラメータ

autocontrol

説明

サーバーへの予定表リフレッシュ・コールの間隔としてユーザーが設定できる最小時間を、分単位で指定します。

この値が lck_users/60 より小さい場合、lck_users/60 の値が優先され、最大値は 45 になります。たとえば、autocontrol = 15 および lck_users = 1200 の場合、20（つまり 1200/60）分経過するまでリフレッシュは発生しません。

このパラメータは、クライアント側ではなくサーバー側の動作を強制する [CLIENT] minrefreshrate パラメータに代替されることに注意してください。ここでは、古いクライアントとの下位互換性のためにこのパラメータを含めています。

使用可能な値

任意の正の整数

デフォルト値

15

新しい予定表エントリの最小チェック間隔（サーバー側の強制）

セクション

[CLIENT]

パラメータ

minrefreshrate

説明

サーバーへの予定表リフレッシュ・コールの間隔としてユーザーが設定できる最小時間を、分単位で指定します。

この値は [LIMITS] autocontrol パラメータを上書きするため、autocontrol とは異なり [LCK] lck_users パラメータの値を考慮しないことに注意してください。

また、このパラメータの値が小さすぎると、カレンダー・システムのパフォーマンスに深刻な影響を及ぼす可能性があることに注意してください。自動アイドル・リフレッシュに充てるシステム・リソースおよびデータベースのアクセス時間が多いほど、オンデマンド要求のパフォーマンスは遅くなります。ピーク時間にログインしている実際のユーザー数、およびハードウェアが無理なく対応できる 1 秒ごとのデータベース要求数に基づいて、このパラメータの値を調整してください。

たとえば、テストの結果、許容されるパフォーマンスの基準が毎秒 1 回の自動リフレッシュ要求である場合、1000 人のユーザーがいる環境では、このパラメータを 1000 秒つまり約 17 分より短い間隔に設定しないことが必要です。インストール時に指定された値はきわめて例外的なインストールを除くすべてのインストールで許容される制限値です。

使用可能な値

任意の正の整数

デフォルト値

15

予定表エントリの最小リフレッシュ間隔 (Oracle Connector for Outlook)

セクション

[CLIENT]

パラメータ

oc_minidlerefreshrate

説明

サーバーに対する予定表リフレッシュ・コールの間隔（つまり、新しい予定表エントリのチェック間隔）の最小時間を、分単位で指定します。このパラメータは、Oracle Connector for Outlook のみで使用されます。

使用可能な値

任意の正の整数

デフォルト値

15

オフラインの予定表エントリの最小リフレッシュ間隔 (Oracle Connector for Outlook)

セクション

[CLIENT]

パラメータ

oc_minofflinerefreshrate

説明

サーバーに対する予定表リフレッシュ・コールの間隔（つまり、新しい予定表エントリのチェック間隔）の最小時間を、分単位で指定します。このパラメータは、Oracle Connector for Outlook のみでオフライン・ファイルに使用されます。

使用可能な値

任意の正の整数

デフォルト値

15

ユーザー・キャッシュのリフレッシュの最小間隔

セクション

[CLIENT]

パラメータ

itemcacherefreshrate

説明

クライアントが内部のユーザーおよびリソースのキャッシュをリフレッシュする頻度を、分単位で指定します。通常、ユーザー情報が頻繁に変更されることはないため、キャッシュのリフレッシュを頻繁に行う必要はありません。値を 0 に設定した場合、キャッシュはまったくリフレッシュされなくなります。値を 1 に設定した場合、キャッシュは、クライアントがグローバル・リフレッシュを行うたびにリフレッシュされます。

ユーザー情報が変更されることはほとんどないため、このパラメータの値が低すぎる場合、サーバーへの不必要なコールが行われることに注意してください。

使用可能な値

任意の正の整数

デフォルト値

1440

セキュリティ・データ・キャッシュのリフレッシュの最小間隔**セクション**

[CLIENT]

パラメータ

securitycacherefreshrate

説明

クライアントがセキュリティ・データのキャッシュをリフレッシュする頻度を、分単位で指定します。通常、セキュリティ情報が頻繁に変更されることはないため、キャッシュのリフレッシュを頻繁に行う必要はありません。値を 0 に設定した場合、キャッシュはまったくリフレッシュされなくなります。値を 1 に設定した場合、キャッシュは、クライアントがグローバル・リフレッシュを行うたびにリフレッシュされます。

このパラメータの値が低すぎる場合、サーバーへの不必要なコールが行われることに注意してください。

使用可能な値

任意の正の整数

デフォルト値

1440

繰返し会議、繰返しメモまたは繰返し終日イベントのインスタンスの最大数（クライアント側）**セクション**

[LIMITS]

パラメータ

maxrecur

説明

クライアントがユーザーに作成を許可する、単一の繰返し会議、繰返しメモまたは繰返し終日イベント用のインスタンスの最大数を指定します。

このパラメータは現在では使用されていないため、バージョン 9.0.4 より前のクライアントを使用している場合以外は使用しないでください。かわりに、この動作の制御には [ENG] `maxinstances` パラメータを使用してください。[LIMITS] `maxrecur` パラメータおよび [ENG] `maxinstances` パラメータを同じ値に設定し、すべてのクライアントで完全な互換性が保たれるようにしてください。このパラメータは、Oracle Calendar SDK、Oracle Calendar Desktop Client および Oracle Calendar Web Client に適用されます。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

60 （会議、メモまたは終日イベントごとに 60 インスタンス）

繰返し会議、繰返しメモまたは繰返し終日イベントのインスタンスの最大数（サーバー側）

セクション

[ENG]

パラメータ

`maxinstances`

説明

Calendar Server によって作成される、繰返し会議、繰返しメモまたは繰返し終日イベントのインスタンスの最大数を指定します。[LIMITS] `maxrecur` パラメータを [ENG] `maxinstances` と同じ値に設定し、すべてのクライアントで完全な互換性が保たれるようにしてください。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

100

リマインダの最大リードタイム

セクション

[LIMITS]

パラメータ

maxremleadtime

説明

ユーザーがイベントの何日前にリマインダが鳴るように設定できるかを示す、最大日数を指定します。Oracle Calendar Desktop Client と Oracle Calendar Web Client に適用されます。

使用可能な値

最大値 ($2^{32}-1$) 以下の正の整数

デフォルト値

21

リソースの重複予約（クライアント側）

セクション

[LIMITS]

パラメータ

resourceconflicts

説明

クライアントがユーザーにリソースの重複予約を許可するかどうかを指定します。このパラメータは常に、[ENG] allowresourceconflict パラメータと同じ値に設定しておく必要があります。Oracle Calendar Desktop Client と Oracle Calendar Web Client に適用されます。

使用可能な値

TRUE（重複予約を許可する）

FALSE（重複予約を許可しない）

デフォルト値

TRUE

リソースの重複予約（サーバー側）

セクション

[ENG]

パラメータ

`allowresourceconflict`

説明

サーバーがリソースの重複予約を許可するかどうかを指定します。このパラメータは常に、[LIMITS] `resourceconflicts` パラメータと同じ値に設定しておく必要があります。

使用可能な値

TRUE（重複予約を許可する）

FALSE（重複予約を許可しない）

デフォルト値

FALSE

リソースの（「承認済」への）自動返信

セクション

[ENG]

パラメータ

`autoacceptresource`

説明

このパラメータは、リソースの重複予約が許可されていない場合に使用されます。（[ENG] `allowresourceconflict` を参照してください）。デフォルトでは、リソースが予約されると、リソースの返信状況は自動的に「承認済」に設定されます。返信状況を「後で決定」のままにしておく場合は、このパラメータを FALSE に設定します。

使用可能な値

TRUE（返信状況を「承認済」に自動設定）

FALSE（返信状況を「後で決定」のままにしておく）

デフォルト値

TRUE

リソースの設定の承認通知に使用する URL**セクション**

[RESOURCE_APPROVAL]

パラメータ

url

説明

リソースの設定の承認通知に使用する URL を指定します。この URL は、リソース管理者に送信される電子メール・メッセージに組み込まれ、承認が必要なリソースをユーザーが要求していることを通知します。この URL は、リソース管理者が代理として作業し、リソースの予約を辞退することを許可する Oracle Calendar Web Client を指します。

使用可能な値

Web カレンダ・クライアントを指す有効な URL

たとえば、"http://host:1234/ocas-bin/ocas.fcgi" のようになります。ここで、host は Web サーバーの名前、1234 は Web サーバー上のポート、およびocas-bin は Web アプリケーション ocas.fcgi が含まれているディレクトリを示します。

デフォルト値

""

リソースの設定の承認メカニズムの有効化**セクション**

[RESOURCE_APPROVAL]

パラメータ

enable

説明

リソースの設定の承認メカニズムを有効または無効にします。このオプションを無効にした場合、通知電子メールがリソースの代理に送信されることはありません。

使用可能な値

- TRUE（リソースの設定の承認メカニズムの有効化）
- FALSE（リソースの設定の承認メカニズムの無効化）

デフォルト値

TRUE

デフォルトの予定表の表示

セクション

[LIMITS]

パラメータ

agendaview

説明

クライアントが予定表ウィンドウを開くときに使用する、デフォルトの表示を指定します。Oracle Calendar Desktop Client に適用されます。

使用可能な値

- 0（日表示）
- 1（週表示）
- 2（月表示）

デフォルト値

0

開いているウィンドウの最大数

セクション

[LIMITS]

パラメータ

maxwinopen

説明

ユーザー・インタフェースで同時に開くことができるウィンドウ（表示）の最大数を指定します。Oracle Calendar Desktop Client に適用されます。

使用可能な値

最大値 ($2^{32}-1$) 以下の正の整数

デフォルト値

7

グループ・ビュー内のユーザーの最大数**セクション**

[LIMITS]

パラメータ

groupviewmax

説明

クライアントがグループ・ビューで表示できるカレンダー・アカウントの最大数を指定します。Oracle Calendar Desktop Client に適用されます。

使用可能な値

値 ($2^{32}-1$) 以下の正の整数

デフォルト値

100

リモート・ノード内のリソースをローカルとして表示**セクション**

[<YOURNODEID>]

パラメータ

localnodes

説明

クライアントのスケジューリング用にローカルと見なすリモート・リソースを指定します。接続されている独立したノード上のユーザーが、すべてのリソースをローカルとして処理できるようにする場合は (2 つ以上のノードが地理的にきわめて近接している場合に一般的な状況)、このパラメータの後に関連するノード ID を入力します。この機能を有効にするには、ノードが接続されている必要があります。

使用可能な値

カンマで区切られた有効なノード ID

デフォルト値

N/A

パスワードの大 / 小文字の区別

セクション

[ENG]

パラメータ

passwords

説明

クライアントのパスワード認証で大 / 小文字を区別するかどうかを指定します。
LDAP ディレクトリを使用しない（内部ディレクトリを使用する）インストールでのみ使用されます。

使用可能な値

- case（大 / 小文字を区別する）
- ignorecase（大 / 小文字を区別しない）

デフォルト値

case

イベント・カレンダーのパスワード変更の許可

セクション

[ENG]

パラメータ

allowpasswordchange_eventcal

説明

イベント・カレンダーのパスワードを変更できるかどうかを指定します。

使用可能な値

TRUE（パスワードの変更を許可する）

FALSE（パスワードの変更を許可しない）

デフォルト値

TRUE

予約済ユーザーのパスワード変更の許可**セクション**

[ENG]

パラメータ

allowpasswordchange_reserved

説明

SYSOP などの予約済ユーザーのパスワードを変更できるかどうかを指定します。

使用可能な値

TRUE（パスワードの変更を許可する）

FALSE（パスワードの変更を許可しない）

デフォルト値

TRUE

リソースのパスワード変更の許可**セクション**

[ENG]

パラメータ

allowpasswordchange_resource

説明

リソースのパスワードを変更できるかどうかを指定します。

使用可能な値

- TRUE (パスワードの変更を許可する)
- FALSE (パスワードの変更を許可しない)

デフォルト値

TRUE

ユーザーのパスワード変更の許可

セクション

[ENG]

パラメータ

allowpasswordchange_user

説明

ユーザーのパスワードを変更できるかどうかを指定します。

使用可能な値

- TRUE (パスワードの変更を許可する)
- FALSE (パスワードの変更を許可しない)

デフォルト値

TRUE

自動ログインの許可

セクション

[LIMITS]

パラメータ

ssignin

説明

ユーザーが Desktop Client の自動ログイン機能を使用して、パスワードを入力せずに Calendar Server にログインできるかどうかを指定します。Oracle Calendar Desktop Client に適用されます。

[LIMITS] [ssigninrestrictions](#) パラメータも参照してください。

使用可能な値

TRUE（自動ログインを許可）

FALSE（常にユーザーにパスワードを入力させる）

デフォルト値

FALSE

自動ログインの制限**セクション**

[LIMITS]

パラメータ

ssigninrestrictions

説明

Desktop Client の自動ログイン機能を制限して、オペレーティング・システムを保護します。TRUE に設定した場合、Windows 95/98 および Mac OS 7/8 で実行している Oracle Calendar Desktop Client では、自動ログイン機能が使用できなくなります。

[LIMITS] [ssignin](#) パラメータも参照してください。

使用可能な値

TRUE（自動ログインを制限してオペレーティング・システムを保護）

FALSE（すべてのオペレーティング・システムからの自動ログインを許可）

デフォルト値

TRUE

パスワード・エイジング**セクション**

[LIMITS]

パラメータ

maxpasswordage

説明

パスワード・エイジングを制御します。この値は、ユーザーがパスワードの変更を要求されるまでの、パスワードの存続日数を表します。Oracle Calendar Desktop Client に適用されます。

使用可能な値

最大値 ($2^{32}-1$) 以下の正の整数

デフォルト値

76543 (実質的にパスワード・エイジングはオフ)

ログインの最大試行回数

セクション

[LIMITS]

パラメータ

signinmaxattempts

説明

ログインしようとしたときの失敗が、クライアントがクローズするまでに何回まで許可されるかを指定します。バージョン 9.0.4 以上のネイティブ・クライアント用です。Oracle Calendar Desktop Client に適用されます。

使用可能な値

1 ～ 2^{32} の整数

デフォルト値

5

ログイン時に一致した複数のユーザーの表示

セクション

[LIMITS]

パラメータ

userlist_login

説明

複数のユーザーが指定のログイン資格証明と一致した場合に、一致したユーザーのリストを表示するかどうかを指定します。Oracle Calendar Desktop Client と Oracle Calendar Web Client に適用されます。

使用可能な値

TRUE (一致したユーザーのリストを表示する)

FALSE (リストを表示しない)

デフォルト値

TRUE

ログインの保護**セクション**

[LIMITS]

パラメータ

secure-login

説明

不正なログイン資格証明に関して提供する情報を制限するかどうかを指定します。Oracle Calendar Desktop Client と Oracle Calendar Web Client に適用されます。

使用可能な値

TRUE (提供された資格証明が不正であることをだけを表示)

FALSE (ユーザーによりわかりやすい、不正なログインのエラー・メッセージを表示)

デフォルト値

FALSE

無効なログインのカウント・メカニズムの有効化**セクション**

[ENG]

パラメータ

invalidlogin_enable

説明

無効なログインのカウンタ・メカニズムを有効または無効にします。このメカニズムは、ログインに何度も失敗したユーザーを、その後指定された時間だけ無効にします。[ENG] セクションの `invalidlogin_countinterval` パラメータおよび `invalidlogin_deactivationtime` パラメータも参照してください。

使用可能な値

TRUE（無効なログインのカウンタを有効化）

FALSE（無効なログインのカウンタを無効化）

デフォルト値

FALSE

無効なログインの最大許容回数の設定

セクション

[ENG]

パラメータ

`invalidlogin_invalidcount`

説明

アカウントが無効になるまでの、無効なログインの最大許容回数を定義します。アカウントが非アクティブ化される時間の長さは、`invalidlogin_deactivationtime` で定義されます。[ENG] セクションの `invalidlogin_enable` パラメータおよび `invalidlogin_countinterval` パラメータも参照してください。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

5

無効なログインのカウント間隔の設定

セクション

[ENG]

パラメータ

invalidlogin_countinterval

説明

無効なログインがカウントされる時間の長さを、秒単位で定義します。この時間が経過しても無効なログインが発生しなかった場合、カウンタは0にリセットされます。[ENG] セクションの invalidlogin_enable パラメータおよび invalidlogin_deactivationtime パラメータも参照してください。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

60

無効なログインの非アクティブ化時間の設定

セクション

[ENG]

パラメータ

invalidlogin_deactivationtime

説明

無効なログインの回数によりアカウントが非アクティブ化される時間の長さを、秒単位で定義します。[ENG] セクションの invalidlogin_enable パラメータおよび invalidlogin_countinterval パラメータも参照してください。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

300

単一のローカル記憶域

セクション

[LIMITS]

パラメータ

singlelst

説明

クライアントの「ローカルの保存ファイルが違います」ダイアログを無効にします。このパラメータを TRUE に設定した場合、1 人のユーザーだけが特定のクライアント・マシンから **Calendar Server** にアクセスできます。別のユーザーがログインしようとしても、そのユーザーはローカル記憶域およびアドレス帳を使用せずに作業することを強いられます。**Oracle Calendar Desktop Client** (Windows および Mac) に適用されます。

使用可能な値

TRUE (異なるローカル記憶域を無効化)

FALSE (異なるローカル記憶域を許可)

デフォルト値

FALSE

カレンダー属性のみの更新をユーザーに許可

セクション

[DAS]

パラメータ

dir_updcalonly

説明

ユーザーがディレクトリ内のカレンダー属性のみを更新できるようにするか、カレンダー属性およびカレンダー以外の属性も更新できるようにするかを指定します。

使用可能な値

TRUE (カレンダー属性のみの更新を許可)

FALSE (すべての属性の更新を許可)

デフォルト値

FALSE

writedn およびパスワードを使用した管理者としてのログイン**セクション**

[DAS]

パラメータ

dir_usewritednforadmin

説明

SYSOP 以外のユーザーによってディレクトリ管理操作が行われる場合に、Calendar Server が writedn およびパスワードを使用してディレクトリ・サーバーにログインできるかどうかを指定します。

使用可能な値

TRUE (writedn およびパスワードの使用を許可する)

FALSE (writedn およびパスワードの使用を許可しない)

デフォルト値

FALSE

パブリック・グループの作成権限**セクション**

[LIMITS]

パラメータ

pubgroups

説明

必要なアクセス権を持つユーザーが、クライアントを介してパブリック・グループを作成できるかどうかを指定します。Oracle Calendar Desktop Client for Mac のみに適用されます。

使用可能な値

TRUE (クライアントを介したパブリック・グループの作成を許可する)

FALSE (クライアントを介したパブリック・グループの作成を許可しない)

デフォルト値

TRUE

デフォルト・タイムゾーンの変更許可

セクション

[LIMITS]

パラメータ

settimezone

説明

将来のクライアント・セッションのために、タイムゾーンの変更をユーザーが保存できるかどうかを指定します。Oracle Calendar Desktop Client と Oracle Calendar Web Client に適用されます。

使用可能な値

TRUE（異なるタイムゾーンの設定をユーザーに許可する）

FALSE（異なるタイムゾーンの設定をユーザーに許可しない）

デフォルト値

FALSE

メール通知ダイアログ・ボックスの有効化

セクション

[LIMITS]

パラメータ

mail

説明

クライアント・インタフェースで、メール通知機能を有効にするかどうかを指定します。この機能を無効にした場合、ネイティブ・クライアントによって、メール・メッセージ・ダイアログ・ボックスへのアクセスが削除されます。このパラメータは、Oracle Calendar Desktop Client のみに適用されます。

使用可能な値

TRUE（メール通知を有効化）

FALSE（メール通知を無効化）

デフォルト値

TRUE

インスタント・メッセージングのアラート**セクション**

[NOTIFY]

パラメータ

alert_instantmessaging

説明

インスタント・メッセージングのアラートを有効にするかどうかを指定します。使用できるアラート・サービスの詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』を参照してください。alert_sms パラメータも参照してください。

使用可能な値

TRUE（インスタント・メッセージングのアラートを有効化）

FALSE（インスタント・メッセージングのアラートを無効化）

デフォルト値

FALSE

ショート・メッセージ・サービス（SMS）のアラート**セクション**

[NOTIFY]

パラメータ

alert_sms

説明

ショート・メッセージ・サービスのアラートを有効にするかどうかを指定します。使用できるアラート・サービスの詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』を参照してください。alert_instantmessaging パラメータも参照してください。

使用可能な値

- TRUE (SMS のアラートを有効化)
- FALSE (SMS のアラートを無効化)

デフォルト値

FALSE

ショート・メッセージ・サービス (SMS) のアラート (廃止)

セクション

[NOTIFY]

パラメータ

sms

説明

このパラメータのかわりに、[NOTIFY] alert_sms が使用されます。

メール通知配信リストに含まれる最大人数

セクション

[LIMITS]

パラメータ

maxmaildistr

説明

メール通知配信リストに含まれるユーザーの最大数を指定します。Oracle Calendar Desktop Client と Oracle Calendar Web Client に適用されます。

使用可能な値

最大値 ($2^{32}-1$) 以下の正の整数

デフォルト値

30

「姓」編集ボックスの最小文字数

セクション

[LIMITS]

パラメータ

mincharsearch

説明

ディレクトリ検索をクライアントから実行する場合に、ユーザーが名前制御フィールドで指定する必要がある最小検索文字数を指定します。この制限は、ユーザーの姓また名前、およびリソース名に適用されます。デフォルト値 0 では、ユーザーが制限を受けずに検索を実行し、ユーザーおよびリソースの完全なデータベースを取り出せます。Oracle Calendar Desktop Client と Oracle Calendar Web Client に適用されます。

使用可能な値

0

最大値 ($2^{32}-1$) 以下の正の整数

デフォルト値

0

LDAP 検索結果の最大数

セクション

[LIMITS]

パラメータ

maxsearchresult

説明

LDAP ディレクトリが検索要求を作成したカレンダー・クライアントに返すエントリ（ユーザー、リソースおよびイベント・カレンダー）の最大数を指定します。このパラメータは、Oracle Connector for Outlook、Oracle Calendar Desktop Client および Oracle Calendar Web Client に適用されます。

Oracle Connector for Outlook では、このパラメータは、「ユーザー」および「リソース」のリストでの検索操作による検索結果に表示する、エントリの最大数を指定します。

このパラメータの値は、独自のインストールのサイズに応じて調整してください。外部のディレクトリ・サーバーを使用する場合は、ディレクトリ・サーバーで構成された検索制限と一致するように、このパラメータの値を調整してください。検索制限および検索制限の構成方法は、ディレクトリ・サーバーのドキュメントを参照してください。

使用可能な値

値 ($2^{32}-1$) 以下の正の整数

デフォルト値

100 (一度に 100 エントリのみを表示)

Calendar Administrator の LDAP 検索結果の最大数

セクション

[UTL]

パラメータ

`ca_maxsearchresult`

説明

LDAP ディレクトリが検索要求を作成した Calendar Administrator WEB クライアントに返すエントリ (ユーザー、リソースおよびイベント・カレンダー) の最大数を指定します。このパラメータは、Calendar Administrator のみに適用されます。

Calendar Administrator を使用するユーザーは非常に少ないため、このパラメータは、[LIMITS] `maxsearchresult` パラメータより大きい値に設定できます。[LIMITS] `maxsearchresult` も参照してください。

使用可能な値

値 ($2^{32}-1$) 以下の正の整数

デフォルト値

100 (一度に 100 エントリのみを表示)

検索ダイアログ・ボックスの「次へ」ボタン

セクション

[LIMITS]

パラメータ

page-forward

説明

カレンダー・クライアントのユーザーおよびリソースに対して、項目検索ダイアログ・ボックスの「次へ」ボタンを有効にするかどうかを指定します。

検索を実行すると、[LIMITS] maxsearchresult パラメータによって、クライアントに返す検索結果の最大数が指定されます。page-forward が TRUE、maxsearchresult が 100 に設定されており、姓が S で始まるすべてのユーザーを検索すると仮定します。データベース内の 220 のユーザーがこれに当てはまる場合、検索ダイアログに最初の 100 人が表示されます。「次へ」ボタンをクリックすると次の 100 人が表示され、もう一度クリックすると最後の 20 人が表示されます。

この機能は、サーバーがディレクトリ・サーバーに接続されている場合には無効です。このパラメータは、Oracle Calendar Desktop Client に適用されます。

使用可能な値

TRUE（「次へ」ボタンを有効化）

FALSE（「次へ」ボタンを無効化）

デフォルト値

TRUE

検索ダイアログ・ボックスの「前」ボタン

セクション

[LIMITS]

パラメータ

page-backward

説明

ユーザーおよびリソースに対して、検索ダイアログ・ボックスの「前」ボタンを有効にするかどうかを指定します。このボタンは、[LIMITS] `page-forward` パラメータの逆の操作を実行し、ユーザーが前に表示された検索結果のエントリに戻ることを可能にします。

この機能は、Calendar Server がディレクトリ・サーバーに接続されている場合には無効です。このパラメータは、Oracle Calendar Desktop Client に適用されます。

使用可能な値

TRUE（「前」ボタンを有効化）

FALSE（「前」ボタンを無効化）

デフォルト値

TRUE

クライアント・イベントの検索結果ウィンドウのサイズ

セクション

[ENG]

パラメータ

`eventsearch_clientwindowsize`

説明

カレンダー・エントリの検索を要求したクライアントに、サーバーが一度に返すエントリの数を指定します。クライアントは、サーバーを数回コールして、すべての検索結果を取得します。結果のエントリは、この値で定義されたサイズを1回分として返されます。バージョン 9.0.4 以上のネイティブ・クライアント用です。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

20

問合せで検索したり返す対象となる現在の日付から遡った日数**セクション**

[OUTLOOK_CONNECTOR]

パラメータ

eventselectbegin

説明

Oracle Connector for Outlook 専用です。すべてのデータベース問合せで、検索したり返す対象となる、現在の日付から遡った日数を設定します。

使用可能な値

現在の日付から 1991 年 1 月 1 日までの日数以下の正の整数

デフォルト値

180

問合せで検索したり返す対象となる現在の日付以降の日数**セクション**

[OUTLOOK_CONNECTOR]

パラメータ

eventselectend

説明

Oracle Connector for Outlook 専用です。すべてのデータベース問合せで、検索したり返す対象となる、現在の日付以降の日数を設定します。

使用可能な値

現在の日付から 2037 年 12 月 31 日までの日数以下の正の整数

デフォルト値

730

所要時間が 24 時間を超す終日イベント作成の許可

セクション

[OUTLOOK_CONNECTOR]

パラメータ

multi-day-event

説明

Oracle Connector for Outlook 専用です。クライアントで、所要時間が 24 時間を超す終日イベントの作成をユーザーに許可するかどうかを指定します。

使用可能な値

- TRUE (24 時間を超す所要時間を許可する)
- FALSE (24 時間を超す所要時間を許可しない)

デフォルト値

TRUE

GAL の有効化

セクション

[ENG]

パラメータ

gal_enable

説明

グローバル・アドレス一覧 (GAL) の使用を有効または無効にします。

使用可能な値

- TRUE (GAL を有効化)
- FALSE (GAL を無効化)

デフォルト値

TRUE

GAL のリフレッシュ間隔の設定

セクション

[ENG]

パラメータ

gal_refreshinterval

説明

グローバル・アドレス一覧（GAL）のリフレッシュ間隔を、秒単位で指定します。GAL 内のエントリの検索はコストがかかる上、頻繁に行われます。優れたパフォーマンスを実現するために、検索結果はキャッシュに格納され、サーバーによって再使用されます。

キャッシュが更新されていることを確認するために、CWS は定期的に（[CWS] galsyncinterval を参照）結果セットの更新要求をサーバーに送信します。結果セットは、（新しいノードがネットワークに追加されるなどして）無効化された場合、または現行の改訂がパラメータ gal_refreshinterval の値より古い場合のみ、再ビルドされます。パラメータ [CWS] galsyncinterval は、各リフレッシュの間隔の構成に使用されます。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

7200（2 時間）

GAL の一連の属性の定義

セクション

[ENG]

パラメータ

gal_view

説明

グローバル・アドレス一覧（GAL）に対して返される一連の属性を指定します。使用可能な値は、basic、extended1 および extended2 です。basic 表示はデフォルトで、最も効率的な設定です。extended1 表示および extended2 表示にはより多くの属性が含まれますが、より多くのネットワーク帯域幅を使用します。

basic 表示には、次の属性が含まれます。

姓、名、イニシャル、リソース名、リソース番号、カテゴリ、電子メールおよび一部の内部属性。

extended1 表示には、basic の属性に加えて、次の属性が含まれます。

組織単位 1、組織名、タイトル、国、リソース容量。

extended2 表示には、extended1 の属性に加えて、次の属性が含まれます。

組織単位 2、組織単位 3、組織単位 4、管理ドメイン、プライベート・ドメイン、世代。

使用可能な値

basic

extended1

extended2

デフォルト値

basic

GAL 内のカレンダー・ユーザーではないユーザーの許可

セクション

[ENG]

パラメータ

gal_enableldapsearch

説明

グローバル・アドレス一覧 (GAL) でカレンダー・ユーザー以外のユーザーの選択を有効または無効にします。デフォルトでは、このパラメータは有効化されています。管理者は、このパラメータを無効にして、LDAP ディレクトリへの通信量を最小限に抑えることができます。

使用可能な値

TRUE (GAL を有効化)

FALSE (GAL を無効化)

デフォルト値

TRUE

アドレス帳の有効化

セクション

[LIMITS]

パラメータ

offlineab

説明

アドレス帳の使用を有効または無効にします。このパラメータは、Oracle Calendar Desktop Client に適用されます。

使用可能な値

TRUE (アドレス帳を有効化)

FALSE (アドレス帳を無効化)

デフォルト値

TRUE

アドレス帳の公開の有効化

セクション

[LIMITS]

パラメータ

publishab

説明

アドレス帳の公開を有効にします。このパラメータは、Oracle Calendar Desktop Client for Windows および Mac に適用されます。

使用可能な値

TRUE (アドレス帳の公開を有効化)

FALSE (アドレス帳の公開を無効化)

デフォルト値

TRUE

個人用アドレス帳エントリの最大数

セクション

[LIMITS]

パラメータ

maxpersabentries

説明

個人用アドレス帳エントリの最大数を指定します。このパラメータは、Oracle Calendar Desktop Client に適用されます。

使用可能な値

最大値 (2³²-1) 以下の正の整数

デフォルト値

2000

フォルダ内のエントリの最大数

セクション

[QUOTA]

パラメータ

maxfolderentryperuser

説明

サーバーによって許可される、ユーザーの個人用アドレス帳の最大エントリ数を指定します。

使用可能な値

0 (エントリなし)

最大値 (2³²-1) 以下の正の整数

デフォルト値

2000

リフレッシュ間隔および予定表の範囲

セクション

[ENG]

パラメータ

eventrefreshintervals

説明

サーバーに対し、他のユーザーの予定表のオープン、および出席者の予定ページを問い合わせる際に、**Oracle Connector for Outlook** で使用するリフレッシュ間隔および予定表の範囲を、秒単位で構成します。

このパラメータは、間隔をカンマで区切り、`{ }` で囲んだリストです。リストに含まれるそれぞれの間隔は、次の形式で表記されます。

: `<下限>+<上限>`

ここで、`<間隔>`、`<下限>` および `<上限>` は、すべて秒単位で表示されます。`<間隔>` は、リフレッシュの間隔を指定します。`<下限>` および `<上限>` は、時間の範囲を指定します。

それぞれの `<間隔>` は、**Calendar Server** が **Outlook** の関連する範囲の予定表データをリフレッシュする時間を指定します。たとえば、エントリ `{900: -0 +172800}` は、15 分 (900 秒の `<間隔>`) ごとに、現在の時間 (0 秒の `<下限>`) から開始して 2 日後 (172800 秒の `<上限>`) までの予定表を、**Outlook** でリフレッシュすることを指定しています。

使用可能な値

`<間隔>`、`<下限>` および `<上限>` ともに 0 ～ 65535 の整数

デフォルト値

`{0: -86400 +518400, 2700: -604800 +10886400, 79200: -0 +0}`

最初の間隔は、クライアントが開始したすべてのイベントの問合せの最小予定表範囲が、問合せ時間の 1 日前 (-86400) から 6 日後 (+518400) までであることを示しています。2 番目の間隔は、問合せ時間の 1 週間前 (-604800) から 6 週間後 (+10886400) までのイベントに対し、45 分 (2700) ごとにサーバーに問合せを行うことをクライアントに要求しています。3 番目の間隔は、すべてのイベントに対して 22 時間 (79200) ごとにサーバーに問合せを行うことをクライアントに要求しています。

お気に入りリストのエントリの最大数

セクション

[LIMITS]

パラメータ

maxfavorites

説明

ユーザーがお気に入りリストに含めることができるエントリの最大数を指定します。このパラメータは、Oracle Calendar Web Client のみに適用されます。

使用可能な値

任意の正の整数

デフォルト値

15

Web アクセスの有効化

セクション

[WEBLINK]

[WEBLINK-XXXXXX]

パラメータ

mode

説明

クライアントで Web アクセスを有効にするかどうかを指定し、その構成方法を指定します。英語のクライアントが実行されている場合、[WEBLINK] セクションのパラメータが使用されます。それ以外の場合は、[WEBLINK-XXXXXX] セクション (XXXXXX は言語名) を使用します。たとえば、フランス語のネイティブ・クライアントを実行する場合は、[WEBLINK-FRENCH] セクションのパラメータを設定します。その他の言語では、XXXXXX のかわりにセクション名として次の文字列を使用します。

FRENCH (フランス語)

GERMAN (ドイツ語)

JAPANESE (日本語)

言語をあえて指定しない場合は、セクション名 [WEBLINK-INTERNATIONAL] を使用できます。英語以外の指定言語に固有のセクションが存在しない場合、[WEBLINK-INTERNATIONAL] セクションが存在すれば、これが使用されます。

この機能は、Windows クライアントおよび Macintosh クライアントから Web ページにアクセスし、Web ページを表示できるようにします。このパラメータを custom に設定した場合は、同じセクションのパラメータ browser-path-win、command-description-online、command-name および online-url の値を指定する必要があります。これらのパラメータに値が指定されていない場合、mode パラメータはデフォルト値 (off) に戻ります。

使用可能な値

off (Web アクセスを無効化)
custom (Web アクセスを有効化)

デフォルト値

off

Calendar Administrator の位置

セクション

[URL]

パラメータ

caladmin

説明

このパラメータは Web Client で使用され、Calendar Administrator を検索する場所を指定します。

使用可能な値

有効なパスおよびファイル名

デフォルト値

Collaboration Suite をインストールしている場合、このパラメータにはインストール時に正しい値が設定されます。

Web ポータルの位置

セクション

[URL]

パラメータ

portal

説明

このパラメータは Calendar Administrator で使用され、Web ポータルを検索する場所を指定します。

使用可能な値

有効なパスおよびファイル名

デフォルト値

なし

Windows クライアント用に起動するブラウザ

セクション

[WEBLINK]

[WEBLINK-XXXXX]

パラメータ

browser-path-win

説明

Windows クライアントで、このパラメータは Web アクセス用に起動するブラウザを指定します。9.0.4 以上の Windows クライアントでは、Microsoft HTML Help Viewer がインストールされていない場合に、オンライン・ヘルプ用のブラウザも指定します。このパラメータは、ログイン中の各ユーザーのローカル・マシン上で、Web ブラウザの位置を指定します。mode パラメータが custom に設定されている場合には、このパラメータを設定する必要があります。[WEBLINK] mode も参照してください。

使用可能な値

有効なパスおよびファイル名

デフォルト値

なし

「ヘルプ」メニューおよび「ツールチップ」に表示されるテキスト**セクション**

[WEBLINK]

[WEBLINK-XXXXXX]

パラメータ

command-name

説明

Web アクセス項目の「ヘルプ」メニュー、および「ツールバー」Web アクセス・アイコンに添付されているポップアップ・ツールチップに表示されるテキスト文字列を指定します。mode パラメータが custom に設定されている場合には、このパラメータを設定する必要があります。[WEBLINK] mode も参照してください。

使用可能な値

最大 150 文字までの文字列

デフォルト値

なし

オンライン・コマンドの説明**セクション**

[WEBLINK]

[WEBLINK-XXXXXX]

パラメータ

command-description-online

説明

Windows クライアントでは、クライアントのオンライン中にステータス・バーに表示される、Web アクセス・コマンドの説明を指定します。mode パラメータが custom に設定されている場合には、このパラメータを設定する必要があります。[WEBLINK] mode も参照してください。

使用可能な値

最大 150 文字までの文字列

デフォルト値

なし

オフライン・コマンドの説明

セクション

[WEBLINK]

[WEBLINK-XXXXX]

パラメータ

command-description-offline

説明

Windows クライアントでは、クライアントのオフライン中にステータス・バーに表示される、Web アクセス・コマンドの説明を指定します。

このセクションおよびパラメータは、クライアントのローカル構成ファイル（Mac 用 Oracle Calendar 作業環境、Windows 用 unison.ini）で設定されます。

使用可能な値

最大 150 文字までの文字列

デフォルト値

なし

FTP

セクション

[WEBLINK]

[WEBLINK-XXXXX]

パラメータ

download-mode

説明

オフライン・モードで表示するために、Web ページをダウンロードする際に使用する FTP を指定します。

使用可能な値

file（ファイル共有プロトコルを使用）

デフォルト値

file

オンラインで作業中のクライアント用にロードする Web ページ**セクション**

[WEBLINK]

[WEBLINK-XXXXX]

パラメータ

online-url

説明

オンラインで作業中のクライアント用にロードする Web ページを指定します。
mode パラメータが custom に設定されている場合には、このパラメータを設定する必要があります。[WEBLINK] mode も参照してください。

使用可能な値

最大 150 文字までの有効な URL

デフォルト値

なし

オフライン・モードでの Windows クライアント用 Web ページのソース**セクション**

[WEBLINK]

[WEBLINK-XXXXX]

パラメータ

offline-source-win

説明

Windows クライアント用です。オフライン・モードでの作業中に表示する Web ページのソースを指定します。このパラメータは、mode パラメータが custom に設定されている場合のみチェックされます。このセクションおよびパラメータは、クライアントのローカル構成ファイルで設定されます。

使用可能な値

最大 150 文字までの有効なパスおよびファイル名

デフォルト値

なし

オフライン・モードでの Mac クライアント用 Web ページのソース

セクション

[WEBLINK]

[WEBLINK-XXXXX]

パラメータ

offline-source-mac

説明

Macintosh クライアント用です。オフライン・モードでの作業中に表示する Web ページのソースを指定します。

使用可能な値

次の形式および制限に従っている最大 150 文字の文字列

```
<user>:<pw>@[<zone>]:<AFP Server Name>[,<ip>[,<port>]];
<volume path>:
```

ここでは次のようになります。

- <user> は最大 31 文字です。
- <pw> は最大 8 文字です。
- <zone> は最大 31 文字で、デフォルト値はアスタリスク "*"（二重引用符を含まない）です。
- <AFP Server Name> は最大 31 文字です。
- <ip> は最大 31 文字です。
- <port> は 0 以上 32767 以下の数値で、デフォルト値は 548 です。

- <volume path> は最大 64 文字です。

このパラメータは、mode が custom に設定されている場合のみチェックされます。
このセクションおよびパラメータは、クライアントのローカル構成ファイルで設定されます。

デフォルト値

なし

オフライン Web ページのバージョン

セクション

[WEBLINK]

[WEBLINK-XXXXX]

パラメータ

offline-source-version

説明

オフライン Web ページのバージョンを指定します。このパラメータは、管理者が、アクセスするオフライン Web ページが最も新しいバージョンであることを確実にする方法として使用できます。このパラメータは、mode パラメータが custom に設定されている場合のみチェックされます。このセクションおよびパラメータは、クライアントのローカル構成ファイルで設定されます。

使用可能な値

最大 150 文字までの文字列

デフォルト値

なし

ダウンロードが失敗した場合に表示するエラー・メッセージ

セクション

[WEBLINK]

[WEBLINK-XXXXX]

パラメータ

download-fail

説明

ダウンロードが失敗した場合に表示するエラー・メッセージを指定します。

使用可能な値

最大 150 文字までの文字列

デフォルト値

なし

カレンダーでの Oracle Web Conferencing の有効化

セクション

[CONFERENCING]

パラメータ

enable

説明

Oracle Web Conferencing への Calendar の統合を有効または無効にします。このパラメータは、完全な Collaboration Suite がインストールされ、Oracle Web Conferencing Server が有効になっている場合のみ、TRUE に設定できます。パラメータ siteid、siteauthkey および url も参照してください。

使用可能な値

- TRUE (Oracle Web Conferencing を有効化)
- FALSE (Oracle Web Conferencing を無効化)

デフォルト値

- スタンドアロンの Calendar Server がインストールされている場合 :
FALSE
- 完全な Collaboration Suite がインストールされている場合 :
TRUE

Oracle Web Conferencing アカウントのパスワード

セクション

[CONFERENCING]

パラメータ

siteauthkey

説明

Oracle Web Conferencing Server へのアクセスに Calendar Server が使用する、Web Conferencing アカウントのパスワードを指定します。アカウント ID は、[CONFERENCING] siteid パラメータの値で指定されます。

パスワードは、uniencrypt ユーティリティを使用して暗号化してから unison.ini ファイルに入力する必要があります。付録 F「Calendar Server ユーティリティ」の uniencrypt の説明を参照してください。暗号化されたパスワードの前には、暗号化に使用した暗号化メソッドを二重引用符で囲んで配置する必要があります。siteid パラメータも参照してください。

使用可能な値

"{STD}<encrypted_value>"

デフォルト値

なし

Oracle Web Conferencing アカウント ID

セクション

[CONFERENCING]

パラメータ

siteid

説明

Oracle Web Conferencing Server へのアクセスに Calendar Server が使用する、Web Conferencing アカウント ID を指定します。siteauthkey パラメータも参照してください。

使用可能な値

有効な Oracle Web Conferencing ID

デフォルト値

101

Oracle Web Conferencing Server への URL

セクション

[CONFERENCING]

パラメータ

url

説明

Oracle Web Conferencing Server を指す URL を指定します。カレンダーは、HTTP または HTTPS を介して Web Conferencing Server と通信します。セキュアな通信を行うためには、HTTPS URL を使用する必要があります。

使用可能な値

有効な URL

次に例を示します。

"https://myhost.com:7815/imtapp/app/prelogin.uix"

デフォルト値

" "

Oracle Web Conferencing Server に接続するための Wallet の位置

セクション

[CONFERENCING]

パラメータ

walletfile

説明

Calendar Server が SSL を使用して Web Conferencing Server に接続する際に使用する Wallet の位置を指定します。SSL を使用しない場合、このパラメータを設定する必要はありません。

[CONFERENCING] walletpassword、url も参照してください。

使用可能な値

有効なパス

次に例を示します。"/private/OraHome1/ocal/etc/wallet/"

デフォルト値

" "

Oracle Web Conferencing Server に接続するための SSL Wallet のパスワード**セクション**

[CONFERENCING]

パラメータ

walletpassword

説明

Calendar Server が SSL を使用して Web Conferencing Server に接続する際に使用する Wallet のパスワードを指定します。

パスワードは、`uniencrypt` ユーティリティを使用して暗号化してから `unison.ini` ファイルに入力する必要があります。付録 F「[Calendar Server ユーティリティ](#)」の `uniencrypt` の説明を参照してください。暗号化されたパスワードの前には、暗号化に使用した暗号化メソッドを二重引用符で囲んで配置する必要があります。

SSL を使用しない場合、このパラメータを設定する必要はありません。

[CONFERENCING] `walletfile`、`url` も参照してください。

使用可能な値

"{STD}<encrypted_value>"

デフォルト値

" "

サーバー側セキュリティ・レコードのキャッシュ・サイズ

セクション

[ENG]

パラメータ

sss_cachesize

説明

キャッシュ内の、読取りアクセス・レコードのエントリ数を指定します。サーバーはこれらのレコードを使用して、所有していないカレンダー・データの読取り権限をユーザーが持つかどうかを判断します。このキャッシュは、サーバー側セキュリティを処理する際に、サーバーがセキュリティ・アクセス・レコードをより迅速に読み取るために使用されます。キャッシュはユーザー・セッションごとに1つ存在します。

[ENG] sss_cacheexpiredelay も参照してください。

使用可能な値

0 (キャッシュを無効化)

1000003 未満の正の整数

デフォルト値

101

サーバー側セキュリティ・レコード・キャッシュのエントリのタイムアウト

セクション

[ENG]

パラメータ

sss_cacheexpiredelay

説明

キャッシュに保存されたエントリが期限切れになるまでの秒数を指定します。

[ENG] sss_cachesize も参照してください。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

900

サーバーへのクライアント接続の制御

ACE フレームワークの有効化

セクション

[ACE]

パラメータ

frameworkenable

説明

認証、圧縮および暗号化を有効にします。ACE モジュールを無効にした場合は、Calendar Server で組み込み `cs-basic` 認証方式が使用されることに注意してください。つまり、Calendar Server では常に認証方式が使用されます。

使用可能な値

TRUE（認証、圧縮および暗号化を有効化）

Oracle Internet Directory の使用時にはこの値だけが承認されます。

FALSE（認証、圧縮および暗号化を無効化）

デフォルト値

TRUE

タイプごとの共有ライブラリの最大数

セクション

[ACE]

パラメータ

slibcachecount

説明

それぞれのタイプの方式（認証、圧縮、暗号化）に対して、同時にロードできる共有ライブラリの数を指定します。

IBM AIX では、メモリから一度削除された共有ライブラリを再ロードできないという制限があるため、このパラメータのデフォルト値はその他のプラットフォームより高く設定されています。

使用可能な値

最大値 32768 以下の正の整数

デフォルト値

20 (IBM AIX のみ)

3 (その他のすべてのプラットフォーム)

圧縮の最小バッファ・サイズ

セクション

[ACE]

パラメータ

`minbufsizetocompress`

説明

バッファが圧縮されるために必要な最小サイズをバイト単位で指定します。

使用可能な値

最大値 32768 以下の正の整数

デフォルト値

700

圧縮および暗号化のバッファ・サイズ

セクション

[ACE]

パラメータ

`workbufsize`

説明

圧縮および暗号化に割り当てるバッファのサイズを、バイト単位で指定します。

使用可能な値

最大値 32768 以下の正の整数

デフォルト値

4096

サポートするクライアントの認証方式**セクション**

[AUTHENTICATION]

パラメータ

supported

説明

Calendar Server がクライアントに対してサポートする認証方式のリストを指定します。

cs-basic 方式および cs-standard 方式は、ともに Calendar Server 名およびユーザーのパスワードを使用して、ユーザーを認証します。これらの両方の方式では、ユーザー・パスワードが暗号化されます。さらに、cs-standard 方式ではユーザー名も暗号化されます。この暗号化は、折衝済暗号化方式とは無関係です。サーバーは、この暗号化に加えて、折衝済暗号化を適用します。

cs-basic 認証方式は、クライアントのバージョンに関係なく、すべてのカレンダー・クライアントで機能します。この方式は、Calendar Server の ACE モジュール以前のものです。

cs-standard は、クライアントがサポートしている場合の推奨認証方式です。この方式では、cs-basic より高いレベルのセキュリティ（より優れた認証および暗号化）が提供されます。

使用可能な値

次のうちの 1 つ、またはカンマで区切った複数の値を、{ } で囲んだリスト

cs-basic

cs-standard

その他のサポートされている認証方式は次のとおりです。

web:CAL、web:OTMT、challenge:SYNCMLMD5101、
challenge:SYNCMLMD5110

デフォルト値

Calendar Server のスタンドアロン・インストール:

```
{cs-standard}
```

Oracle Internet Directory インストール:

```
{cs-standard, web:OTMT, challenge:SYNCMLMD5_V101,  
challenge:SYNCMLMD5_V110}
```

クライアントのデフォルト認証方式

セクション

[AUTHENTICATION]

パラメータ

default

説明

Calendar Server がクライアントに使用するデフォルトの認証方式を指定します。サポートされている方式の詳細は、[AUTHENTICATION] supported パラメータの説明を参照してください。

使用可能な値

[AUTHENTICATION] supported パラメータで指定されたリストに含まれる任意の方式。

デフォルト値

cs-standard

管理者のデフォルト認証方式

セクション

[AUTHENTICATION]

パラメータ

admindefault

説明

Calendar Administrator を使用した管理セッション用に Calendar Server が使用する、デフォルトの認証方式を指定します。サポートされている方式の詳細は、[AUTHENTICATION] supported パラメータの説明を参照してください。

使用可能な値

[AUTHENTICATION] supported パラメータで指定されたリストに含まれる任意の方式。Oracle Internet Directory を使用している場合、使用可能な値は cs-standard のみです。

デフォルト値

cs-standard

その他のサーバーのデフォルト認証方式

セクション

[AUTHENTICATION]

パラメータ

servicedefault

説明

接続要求を行うその他の Calendar Server との通信に Calendar Server が使用する、デフォルトの暗号化方式を指定します。

要求を開始した別の Calendar Server と ACE 方式を折衝する場合、サーバーはこのデフォルト値を、サポートされている暗号化方式のリストと一緒に使用します。

使用可能な値

[AUTHENTICATION] supported パラメータで指定された、サポートされる暗号化方式のリストに含まれる任意の方式。Oracle Internet Directory を使用している場合、使用可能な値は cs-standard のみです。

デフォルト値

cs-standard

認証用リソース・パスワードの位置

セクション

[AUTHENTICATION]

パラメータ

keepresourcepwdincaldb

説明

リソース・パスワードが、Calendar Server の内部データベース、または構成済認証メカニズムのデータベースのどちらに格納されるかを指定します。

使用可能な値

TRUE (リソース・パスワードを Calendar Server のデータベースに格納)

FALSE (リソース・パスワードを認証メカニズムのデータベース (例 : Kerberos) に格納)

デフォルト値

TRUE

サポートされる圧縮方式

セクション

[COMPRESSION]

パラメータ

supported

説明

Calendar Server がサポートする圧縮方式のリストを指定します。現在のところ、サポートされているのは Oracle の `cs-simple` 圧縮方式のみです。この方式では、単純なランレングス・エンコーディング圧縮が使用されます。これは、カレンダー・データの圧縮方式として非常に高速で、効率的です。

使用可能な値

次のうちの 1 つ、またはカンマで区切った複数の値を、{ } で囲んだリスト

`cs-simple`

`none`

デフォルト値

{`cs-simple`, `none`}

クライアントのデフォルト圧縮方式

セクション

[COMPRESSION]

パラメータ

default

説明

Calendar Server がクライアントに使用するデフォルトの圧縮方式を指定します。

使用可能な値

[COMPRESSION] supported パラメータで指定されたリストに含まれる任意の方式。

デフォルト値

cs-simple

管理者のデフォルト圧縮方式

セクション

[COMPRESSION]

パラメータ

admindefault

説明

Calendar Administrator を使用した管理セッション用に Calendar Server が使用する、デフォルトの圧縮方式を指定します。サポートされている方式の詳細は、[COMPRESSION] supported パラメータの説明を参照してください。

使用可能な値

[COMPRESSION] supported パラメータで指定されたリストに含まれる任意の方式。

デフォルト値

[COMPRESSION] default パラメータの値

その他のサーバーのデフォルト圧縮方式

セクション

[COMPRESSION]

パラメータ

servicedefault

説明

このサーバーへの接続を試みるその他のサーバーとの通信に使用する、デフォルトの圧縮方式を指定します。

要求を開始した別の **Calendar Server** と ACE 方式を折衝する場合、サーバーはこのデフォルト値を、サポートされている圧縮方式のリストと一緒に使用します。

使用可能な値

次のうちの 1 つ、またはカンマで区切った複数の値を、{ } で囲んだリスト

cs-simple

none

デフォルト値

[COMPRESSION] default パラメータの値

サポートされる暗号化方式

セクション

[ENCRYPTION]

パラメータ

supported

説明

Calendar Server がサポートする暗号化方式のリストを指定します。

cs-light 方式は、ランダムに生成されたキーを使用してデータの順序を変更します。この方式は非常に高速で、パフォーマンスへの影響が最小限に抑えられますが、最低限のセキュリティを伴うインストールでしか推奨されません。

cs-acipher1 方式は cs-light 方式より低速ですが、はるかにセキュアな暗号化を提供します。

使用可能な値

次のうちの1つ、またはカンマで区切った複数の値を、{ } で囲んだリスト

```
cs-light  
cs-acipher1  
none
```

デフォルト値

```
{cs-light, cs-acipher1, none}
```

事前の認証が必要な暗号化方式**セクション**

```
[ENCRYPTION]
```

パラメータ

```
needsauthenticate
```

説明

使用する前に認証が必要な、暗号化方式のリストを指定します。これらの方式は、カレンダー・クライアントまたは別のサーバーが、この **Calendar Server** に対して自らを認証した後にだけ使用できます。最初の ACE 折衝には、このパラメータのリストに含まれる方式を含めることはできません。

使用可能な値

[ENCRYPTION] `supported` パラメータで指定されたリスト内の任意の方式をカンマで区切り、{ } で囲んだリスト

デフォルト値

```
{ }
```

クライアントのデフォルト暗号化方式**セクション**

```
[ENCRYPTION]
```

パラメータ

```
default
```

説明

Calendar Server がクライアントに使用するデフォルトの暗号化方式を指定します。

使用可能な値

[ENCRYPTION] supported パラメータで指定されたリストに含まれる任意の方式。

デフォルト値

なし

管理者のデフォルト暗号化方式

セクション

[ENCRYPTION]

パラメータ

admindefault

説明

Calendar Administrator を使用した管理セッション用に Calendar Server が使用する、デフォルトの暗号化方式を指定します。サポートされている方式の詳細は、[ENCRYPTION] supported パラメータの説明を参照してください。

使用可能な値

[ENCRYPTION] supported パラメータで指定されたリストに含まれる任意の方式。

デフォルト値

[ENCRYPTION] default パラメータの値

その他のサーバーのデフォルト暗号化方式

セクション

[ENCRYPTION]

パラメータ

servicedefault

説明

接続要求を行うその他の Calendar Server との通信に Calendar Server が使用する、デフォルトの暗号化方式を指定します。

要求を開始した別の Calendar Server と ACE 方式を折衝する場合、サーバーはこのデフォルト暗号化方式を使用します。

使用可能な値

システムにインストールされている任意の方式

デフォルト値

[ENCRYPTION] default パラメータの値

SASL - 必要なユーザー ID**セクション**

[ACE_PLUGINS]

パラメータ

sasl_KERBEROS_V4_useridneeded

sasl_GSSAPI_useridneeded

説明

指定された SASL のサブメカニズムによって、クライアントが認証のためにユーザー ID を提供する必要があるかどうかを指定します。次に例を示します。

sasl_KERBEROS_V4_useridneeded = FALSE

使用可能な値

TRUE (ユーザー ID が必要)

FALSE (ユーザー ID は不要)

デフォルト値

TRUE

SASL - Kerberos「srvtab」ファイルのパス

セクション

[ACE_PLUGINS]

パラメータ

sasl_KERBEROS_V4_srvtab

説明

Kerberos 4 プラグイン用の srvtab ファイルのパスを指定します。

使用可能な値

有効なパス

デフォルト値

\$ORACLE_HOME/ocal/misc/srvtab

SASL - Mac クライアント用 Kerberos レルム

セクション

[ACE_PLUGINS]

パラメータ

sasl_KERBEROS_V4_mac_realm

説明

Mac のネイティブ・クライアント用の Kerberos レルムを指定します。

使用可能な値

有効な Kerberos レルム

デフォルト値

なし

Web 認証 - ユーザー属性名

セクション

[ACE_PLUGINS_CLIENT]

パラメータ

web_attribute_name

説明

カレンダー・ユーザーの識別に使用する、Web サーバー環境変数を指定します。次に例を示します。

```
web_attribute_name = SSL_CLIENT_S_DN_UID
```

使用可能な値

任意の環境変数

デフォルト値

なし

Web 認証 - ユーザー属性タイプ

セクション

[ACE_PLUGINS_CLIENT]

パラメータ

web_attribute_type

説明

web_attribute_name で指定された環境変数のユーザー属性タイプを指定します。このタイプは、Web Client ユーザーの認証に使用されます。その他の一意のユーザー識別子を指定するには、値 custom を使用します。

使用可能な値

userid

email

fullname

mobile (携帯電話番号)

custom

デフォルト値

userid

Web 認証 - ユーザー属性名の最大サイズ

セクション

[ACE_PLUGINS_CLIENT]

パラメータ

web_attribute_valuemax

説明

web_attribute_name で指定された環境変数のコンテンツの最大サイズを定義します。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

128

Web 認証 - タイムアウト

セクション

[ACE_PLUGINS_CLIENT]

パラメータ

web_cacheexpiresec

説明

キャッシュ内のエントリが期限切れになるまでの秒数を指定します。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

900

Web 認証 - キャッシュ・サイズ

セクション

[ACE_PLUGINS_CLIENT]

パラメータ

web_cachesize

説明

認証を迅速化するために使用される共有メモリ・キャッシュ内のエントリ数を指定します。この値を 0 に設定すると、キャッシュが無効になります。

これは、aut_web プラグインによってクライアント側で保持されるキャッシュです。このキャッシュは、web_attributename が userid に設定されていない場合のみ使用されます。たとえば、web_attributename が custom の場合、プラグインによってスクリプトがコールされ、ユーザーのユーザー ID が検出されて、その結果がキャッシュされます。このキャッシュはセッションごとに使用するものではなく、Web Client のすべての FCGI 処理に使用するもので、共有メモリ内にあります。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

503

Web 認証 - Web:CAL 共有キー

セクション

[ACE_PLUGINS_CLIENT]

パラメータ

web_CAL_sharedkey

説明

Web:CAL プラグインを使用した場合の共有キーを指定します。たとえば、次のようになります。

web_CAL_sharedkey = mypassword

使用可能な値

任意の文字列

デフォルト値

なし

Web 認証 - ユーザー ID および属性のカスタム・マッピング・スクリプト

セクション

[ACE_PLUGINS_CLIENT]

パラメータ

web_custom_script

説明

ユーザー ID および属性値のマッピングに使用する、カスタム・スクリプトのパス名を指定します。

次に例を示します。

```
web_custom_script = /usr/local/apache/ctw-bin/lexacal/custom.sh
```

使用可能な値

有効なパス

デフォルト値

なし

Web 認証 - カスタム・スクリプトの一時ファイルのパス

セクション

[ACE_PLUGINS_CLIENT]

パラメータ

web_tmppath

説明

カスタム・スクリプトからの出力の検索時に、一時ファイルの作成に使用するパスを指定します。

使用可能な値

有効なパス

デフォルト値

なし

Web 認証 - 共有キー**セクション**

[ACE_PLUGINS_SERVER]

パラメータ

web_CAL_sharedkey

説明

クライアントの webcal.ini [ACE_PLUGINS_CLIENT] web_CAL_sharedkey パラメータの値と比較するための、共有キーを指定します。

次に例を示します。

```
web_CAL_sharedkey = mypassword
```

使用可能な値

任意の文字列

デフォルト値

なし

cs_standard 認証のサポートの有効化**セクション**

[ACE_PLUGINS_SERVER]

パラメータ

cs-standard_coexistence

説明

古いサーバーの cs_standard 認証のサポートを有効にします。このパラメータは、Oracle 以前の cs-standard 認証プラグインに付属されていた古いクライアントとの互換性を実現します。以前のバージョンの cs-standard では、資格証明の送信および暗号化は行われません。

アップグレード・インストールでは、このパラメータは TRUE に設定されます。これは、古い cs-standard 認証を使用している 9.0.4 MAC などのクライアントのサポートに必要です。

使用可能な値

TRUE (サポートを有効化)

FALSE (サポートを無効化)

デフォルト値

TRUE

エンジンの最大数 (廃止)

セクション

[LCK]

パラメータ

lck_users

説明

このパラメータは現在使用されていません。かわりに、[ENG] maxsessions が使用されます。

ロック・マネージャ・リスナーの数

セクション

[LCK]

パラメータ

maxnodesperlistener

説明

このパラメータは、ノードの数に基づいて要求される、ロック・マネージャ・リスナーの数を計算する際に使用します。リスナーの数は、maxnodesperlistener より多い数のノードを処理するリスナーが発生しない範囲で、最小限に抑えられます。

キーワードが指定されていない場合、リスナーの数は動的に計算されます。10 以下のノードの場合、ノードごとに 1 つのリスナーが使用されます。ノードが 10 を超える場合、10 のリスナーに加えて、ノードが 15 増えるたびに 1 つのリスナーが追加されます。たとえば、8 つのノードの場合、8 つのリスナーがそれぞれ 1 つの

ノードを処理します。22 のノードがある場合、10 のリスナーがそれぞれ 2 つまたは 3 つのノードを処理します。25 のノードがある場合、11 のリスナーがそれぞれ 2 つまたは 3 つのノードを処理します。

専用のロック・マネージャ・リスナーを持つノードは、前述の計算ではカウントされません。[YOURNODEID] セクションの `lck_dedicated` パラメータを参照してください。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

なし

ノード専用のロック・マネージャ・リスナー**セクション**

[YOURNODEID]

パラメータ

`lck_dedicated`

説明

ロック・マネージャ・リスナーをノード専用にするかどうかを指定します。[LCK] セクションの `maxnodesperlistener` パラメータも参照してください。

使用可能な値

TRUE (リスナーを専用にする)

FALSE (リスナーを専用にしない)

デフォルト値

FALSE

セッションの最大数**セクション**

[ENG]

パラメータ

`maxsessions`

説明

Calendar Server に対して許可されるセッションの最大数を指定します。このパラメータの値は、慎重に考慮する必要があります。このパラメータでは、クライアント・アクセスおよび SNC 接続の両方を保守するのに十分なセッションを許可する必要があります。しかし、値を必要以上に大きく設定すると、システム・リソースを浪費してしまいます。

使用可能な値

2000 (NT) または 5000 (UNIX) 以下の正の整数

デフォルト値

(NT)

500

(UNIX)

2500

各ノードごとのセッションの最大数

セクション

[ENG]

パラメータ

maxsessionsfornode

説明

各カレンダー・ノードに対して許可されるセッションの最大数を指定します。このパラメータの値は、慎重に考慮する必要があります。このパラメータでは、クライアント・アクセスおよび SNC 接続の両方を保守するのに十分なセッションを許可する必要があります。しかし、値を必要以上に大きく設定すると、システム・リソースを浪費してしまいます。[YOURNODEID] maxsessionsfornode も参照してください。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

[ENG] maxsessions で定義された値

ノードごとのセッションの最大数

セクション

[YOURNODEID]

パラメータ

maxsessionsfornode

説明

特定のカレンダー・ノードに対して許可されるセッションの最大数を指定します。このパラメータの値は、慎重に考慮する必要があります。このパラメータでは、クライアント・アクセスおよび SNC 接続の両方を保守するのに十分なセッションを許可する必要があります。しかし、値を必要以上に大きく設定すると、システム・リソースを浪費してしまいます。

通常、いくつかのノードの maxsessionsfornode を合計すると、[ENG] maxsessions より大きくなります。各ノードが一定のセッション数に制限されていても、それらのノードがすべて同時に制限値に達することはありません。

[ENG] maxsessionsfornode も参照してください。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

[ENG] maxsessionsfornode で定義された値

特定のユーザーによる同時セッションの最大数

セクション

[ENG]

パラメータ

max_userlogons

説明

各ユーザーが起動できる、名前付きの同時セッションの最大数を指定します。特定のユーザーに関連付けられているセッションは名前付きですが、特定のユーザーに関連付けられていない場合は、名前付きではありません。

使用可能な値

0 （制限なし）
正の整数

デフォルト値

0

特定のインターネット・アドレスからの同時セッションの数

セクション

[ENG]

パラメータ

max_addrlogons

説明

1つのクライアント、つまり1つのインターネット・アドレスから起動される、名前付きでない同時セッションの最大数を指定します。特定のユーザーに関連付けられているセッションは名前付きですが、特定のユーザーに関連付けられていない場合は、名前付きではありません。

使用可能な値

0 （制限なし）
正の整数

デフォルト値

0

シャットダウン時に1秒ごとに停止するエンジンの数

セクション

[ENG]

パラメータ

numsessionsstoppedpersecond

説明

Calendar Server のシャットダウン時に、1秒ごとに停止するエンジンの数を指定します。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

5

クライアント・ログインのキャッシュ・サイズ**セクション**

[ENG]

パラメータ

authcache_cachesize

説明

キャッシュ内のユーザー・エントリの数を指定します。このキャッシュは、カレンダー・クライアントのログインを迅速化するために使用されます。キャッシュ内のエントリが期限切れになるまで、認証はキャッシュ内の情報を使用して行われます。これにより、ディレクトリ・サーバーへの接続時、および Web Client の使用時には、Calendar Server への接続にかかる時間が大幅に削減されます。

このキャッシュは、Web Client に cs-standard 認証を使用した、Calendar Server のスタンドアロン・インストールに役立ちます。

[ENG] authcache_expiredelay も参照してください。

使用可能な値

101 より大きく 1000003 未満の正の整数

デフォルト値

デフォルトでは、カレンダー・アカウント数の 25% に設定されています。

クライアント・ログイン・キャッシュのエントリのタイムアウト**セクション**

[ENG]

パラメータ

authcache_expiredelay

説明

認証キャッシュに保存されたエントリが期限切れになるまでの秒数を指定します。
[ENG] authcache_cachesize も参照してください。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

900

クライアント・ログイン・キャッシュのパスワードのサイズ

セクション

[ENG]

パラメータ

authcache_passwordsize

説明

認証キャッシュに保存されるユーザー・パスワードのサイズを指定します。
[ENG] authcache_cachesize も参照してください。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

16

クライアント・ログイン・キャッシュの統計ロギング

セクション

[ENG]

パラメータ

authcache_stats

説明

認証キャッシュの使用状況の統計ロギングを有効または無効にします。有効にした場合、キャッシュ内のエントリ数、ヒットまたはミスの数、衝突数などの、キャッシュの使用状況に関する統計が、ログ・ファイル（eng.log）に記録されます。
[ENG] authcache_cachesize も参照してください。

使用可能な値

TRUE（ログ・ファイルを有効化）

FALSE（ログ・ファイルを無効化）

デフォルト値

FALSE

終了までの最大読取りロック時間**セクション**

[ENG]

パラメータ

readlocktimeout

説明

クライアントの読取り要求に対し、サーバーがデータベースをロックできる連続した秒数を指定します。この最大値を超過した場合、uniengd サーバーおよび関連するユーザー・セッションが終了し、eng.log にタイムアウトが記録されます。

使用可能な値

0（制限なし）

正の整数

デフォルト値

60

終了までの最大書き込みロック時間

セクション

[ENG]

パラメータ

writelocktimeout

説明

クライアントの書き込み要求に対し、サーバーがデータベースをロックできる連続した秒数を指定します。この最大値を超過した場合、uniengd サーバーおよび関連するユーザー・セッションが終了し、eng.log にタイムアウトが記録されます。

使用可能な値

0 （制限なし）

正の整数

デフォルト値

60

解除までの最大読取りロック時間

セクション

[ENG]

パラメータ

readmaxlocktime

説明

後から行われる操作に対してカレンダー・データベースの読取りロックを保持できる、連続したミリ秒数を指定します。この最大値を超えた場合、ロックは解除されます。処理が完了していない場合は、カレンダー・データベースが再度ロックされます。

使用可能な値

0 （制限なし）

正の整数

デフォルト値

150

解除までの最大書き込みロック時間

セクション

[ENG]

パラメータ

writemaxlocktime

説明

後から行われる操作に対してカレンダー・データベースの書き込みロックを保持できる、連続したミリ秒数を指定します。この最大値を超えた場合、ロックは解除されます。処理が完了していない場合は、カレンダー・データベースが再度ロックされます。

使用可能な値

0 (制限なし)

値 ($2^{32}-1$) 以下の正の整数

デフォルト値

150

サーバーへのリモート・データ要求の再試行間隔

セクション

[LIMITS]

パラメータ

remotewait

説明

リモート・サーバーのデータに対するサーバーへのコールを再試行するまで、カレンダー・クライアントが待機する秒数を指定します。このパラメータは、Oracle Calendar Desktop Client および Oracle Connector for Outlook に適用されます。remotemaxretry パラメータも参照してください。

使用可能な値

値 $(2^{32}-1)$ 以下の正の整数

デフォルト値

2

サーバーへのリモート・データ要求の再試行回数

セクション

[LIMITS]

パラメータ

remotemaxretry

説明

エラーが返されるまでに、クライアントがリモート・ノード情報の取得を試みる回数を指定します。このパラメータは、Oracle Calendar Desktop Client および Oracle Connector for Outlook に適用されます。remotewait パラメータも参照してください。

使用可能な値

値 $(2^{32}-1)$ 以下の正の整数

デフォルト値

5

Oracle Calendar Administrator パラメータ

この付録では、Oracle Calendar Administrator の構成に使用できるすべての調整可能なパラメータをリストし、これらのパラメータについて説明します。リストされているすべてのパラメータは、初期設定ファイル `$ORACLE_HOME/ocad/bin/ocad.ini` に含まれています。

各パラメータの指定デフォルト値は、そのパラメータが構成ファイルから省略された場合に使用されます。これらのデフォルト値は、それぞれのインストールに最適な設定であるとはかぎりません。ソフトウェアに含まれている初期設定ファイルの設定を使用して、詳細な構成を行うことができます。これらのファイルを変更する前に、印刷物または電子形式のファイルのコピーを参照用に保存しておくことをお勧めします。

構成パラメータ

次の表では、すべてのパラメータを、セクションごとにアルファベット順で示しています。

表 D-1 ocad.ini 構成パラメータ

セクション	パラメータ	説明
[ACE_PLUGINS_CLIENT]	web_attribute_name	Web 認証 - ユーザー属性名
	web_attribute_type	Web 認証 - ユーザー属性タイプ
	web_CAL_sharedkey	Web 認証 - Web:CAL 共有キー
[ADMIN]	accepttemppages	長いプロセスの開始前に一時ページを表示
	authentication	認証メカニズム
	showssolink	SSO へのリンクの有効化
	dataretrievingblocksize	カレンダー・データ取得のバッファ・サイズ
	sessionsdir	セッション情報の一時ディレクトリのパス
	templatesdir	テンプレート・ファイルのパス

Web 認証 - ユーザー属性名

セクション

[ACE_PLUGINS_CLIENT]

パラメータ

web_attribute_name

説明

Calendar Administrator ユーザーの識別に使用する、Web サーバー環境変数を指定します。この変数に含まれるユーザー識別子のタイプ（ユーザー ID、電子メールなど）は、[ACE_PLUGINS_CLIENT]web_attribute_type で指定されます。次に例を示します。

web_attribute_name = SSL_CLIENT_S_DN_UID

使用可能な値

任意の環境変数

デフォルト値

なし

Web 認証 - ユーザー属性タイプ

セクション

[ACE_PLUGINS_CLIENT]

パラメータ

web_attribute_type

説明

web_attribute_name で指定された環境変数のユーザー属性タイプを指定します。このタイプは、Calendar Administrator ユーザーの認証に使用されます。その他の一意のユーザー識別子を指定するには、値 custom を使用します。

使用可能な値

userid

email

fullname

mobile (携帯電話番号)

custom

デフォルト値

userid

Web 認証 - Web:CAL 共有キー

セクション

[ACE_PLUGINS_CLIENT]

パラメータ

web_CAL_sharedkey

説明

Web:CAL プラグインを使用した場合の共有キーを指定します。たとえば、次のようになります。

web_CAL_sharedkey = mypassword

使用可能な値

任意の文字列

デフォルト値

なし

長いプロセスの開始前に一時ページを表示

セクション

[ADMIN]

パラメータ

accepttempages

説明

TRUE に設定した場合、長いプロセスの開始前に、Calendar Administrator によって一時ページが表示されます。この一時ページには auto-refresh コマンドが含まれます。このコマンドは、最初の長いプロセスが終了したかどうかをチェックする 2 番目のプロセスを起動します。最初のプロセスが終了していた場合、2 番目のプロセスによって結果のページが表示されます。最初の長いプロセスがまだ実行されていた場合、2 番目のプロセスによって別の一時ページが表示されます。その後、この一時ページによって、最初の長いプロセスの状態がチェックされます。この操作は、最初の長いプロセスが終了するまで繰り返されます。

一時ページが表示されることで、停止ボタンを使用して長いプロセスに割り込むことが可能になります。

FALSE に設定した場合、時間がかかるプロセス（例：LDAP 検索、ノードの起動など）の結果を含むページは、表示されるまでの時間が長くなります。

使用可能な値

TRUE （一時ページを使用する）

FALSE （一時ページを使用しない）

デフォルト値

TRUE

SSO へのリンクの有効化

セクション

[ADMIN]

パラメータ

showssolink

説明

TRUE に設定した場合、Calendar Administrator によって SSO ボタンが表示されます。

使用可能な値

TRUE (SSO ボタンを表示)

FALSE (SSO ボタンを表示しない)

デフォルト値

Collaboration Suite の完全なインストール:

TRUE

Calendar Server のスタンドアロン・インストール:

FALSE

認証メカニズム**セクション**

[ADMIN]

パラメータ

authentication

説明

Calendar Server へのログイン時に Calendar Administrator が使用する認証メカニズム。

使用可能な値

WEB:OTMT

WEB:CAL

デフォルト値

Collaboration Suite の完全なインストール:

WEB:OTMT

Calendar Server のスタンドアロン・インストール:

WEB:CAL

カレンダー・データ取得のバッファ・サイズ

セクション

[ADMIN]

パラメータ

dataretrievingblocksize

説明

Calendar Server からのデータの取出しに使用するバッファのサイズ。値が小さいほど、長いプロセスに早く割り込むことが可能になります。値が大きいほど、Calendar Server とのトランザクションの数は少なくなります。

使用可能な値

正の整数

デフォルト値

50

セッション情報の一時ディレクトリのパス

セクション

[ADMIN]

パラメータ

sessionsdir

説明

セッション情報の一時ファイルが保存されるディレクトリの、相対パスまたは完全修飾パス。

使用可能な値

ディレクトリの有効なパス

デフォルト値

\$ORACLE_HOME/ocad/sessions

テンプレート・ファイルのパス

セクション

[ADMIN]

パラメータ

templatesdir

説明

テンプレート・ファイルを保持するディレクトリのパスを指定します。

使用可能な値

ディレクトリの有効なパス

デフォルト値

\$ORACLE_HOME/ocad/templates

カレンダー・アプリケーション・システム・パラメータ

この付録では、Oracle Calendar アプリケーション・システム (OCAS) およびそのコンポーネントの構成に使用できるすべての調整可能なパラメータをリストし、これらのパラメータについて説明します。リストされているすべてのパラメータは、ocas/conf/ の下にある次の構成ファイルに含まれています。

- **ocas.conf:** OCAS 自体 (すべての製品に影響)
- **ocwc.conf:** Oracle Calendar Web Client
- **ocws.conf:** Oracle Calendar Web Services
- **ocst.conf:** Oracle Sync Server

注意: 同じく ocas/conf/ に含まれる ocal.conf は、OCAS インスタンスおよび fastcgi 接続の制御に使用されます。ocal.conf のパラメータは、『Oracle9i Application Server Oracle HTTP Server 管理ガイド』で詳しく説明しています。

これらの構成ファイルの設定を使用して、詳細な構成を行うことができます。各パラメータの指定デフォルト値は、そのパラメータが構成ファイルから省略された場合に使用されます。これらのデフォルト値は、それぞれのインストールに最適な設定であるとはかぎりません。そのため、ファイルからパラメータを削除しないようにしてください。

これらのファイルを変更する前に、印刷物または電子形式のファイルのコピーを参照用に保存しておくことをお勧めします。

次の表は、各構成ファイルで編集できるパラメータを示しています。

表 E-1 ocas.conf (アプリケーション・システム構成)

セクション	パラメータ	説明
[system]	application	アプリケーション・モード
	charset	イベント・ログのキャラクタ・セット
	connection	接続モード
	datapoolchunk	データプール・チャンク・サイズ
	dispatchhttperror	HTTP エラーのディスパッチ
	dispatchstats	処理統計
	dispatchstatslog	統計ログ
	dispatchtime	ディスパッチ処理時間のログ
	eventlevel	ロギング・レベル
	eventlog	ログのパス
	language	ログ言語
	linkdbencodefilename	リンク・データベース・ファイル名
	linkdbstorebasepath	UID リンクのパス
	standalone	スタンドアロンの設定
[sessiondb]	ocheckleteventlog	クリーン・アップ・ユーティリティ・ログのパス
	sessiontimeout	セッション・オブジェクト・タイムアウト
	sessionpath	セッション・データベースのパス
	cleanupptime	クリーン・アップ・ユーティリティ
[connection]	mnode	マスター・ノード
[ACE]	OCAS ACE 設定 (多種)	OCAS ACE 設定
[ACE_PLUGINS_CLIENT]	web_attribute_type	ACE Web 属性タイプ
	web_attribute_name	ACE Web 属性名
	言語	言語
[plugins]	pluginxx	OCAS でロードするプラグイン

表 E-2 ocwc.conf (Web Client 構成)

セクション	パラメータ	説明
[url_prefix]	cgi_prefix	アプリケーション名の接頭辞
	global_prefix	Fast-cgi ディレクトリ・エイリアス
	img_prefix	イメージの接頭辞になるパス
	img_button_prefix	イメージ・ボタンの接頭辞になるパス
	style_sheet_prefix	スタイルシートの接頭辞
	help_prefix	ヘルプの接頭辞
	banner_prefix	バナーの接頭辞
[href]	logout_docname	ログアウト時の URL
	max_login_attempts_url	URL の最大ログイン試行回数
[limits]	maxfavourite	お気に入りの最大数
[pref_attr]	mobile_phone	「携帯電話番号」フィールド
	smcsc_phone	「Wireless 優先サービス・センター」フィールド
	autolog	「自動ログイン」の状態
[admin]	ssn_timeout	タイムアウト値
	check_user_credential	SSO 検証
	sso_user_env_key	SSO 環境キーの構成
	max_login_attempts	無効なログインの試行回数
	login_fail_timeout	ログイン失敗後のタイムアウト
	secure_login	セキュア・ログインの制御
[ADA]	enable	アクセス可能モードの有効化
	hide_toggle_link	アクセス可能性の表示 / 非表示切替えリンク

表 E-2 ocwc.conf (Web Client 構成) (続き)

セクション	パラメータ	説明
[modules]	hide_eventcal	イベント・カレンダー検索の無効化
	hide_global	グローバル・カレンダーの送信および表示
	hide_taskview	タスク表示の無効化
	hide_managegroups	「グループの管理」の無効化
	hide_suggesttime	「日付および時間の提案」の無効化
	hide_show_unconfirmed	「未確認エントリ表示」の無効化
	hide_updateall	「全インスタンス更新」の無効化
	enable_designate	「代行者として開く」の有効化
	hide_viewpub	「その他のユーザー・カレンダー表示」の無効化
	enable_web_conferencing	Web 会議の作成の有効化
	logout	ログアウト・アイコンの非表示化
	about	「バージョン情報」アイコンの非表示化
	prefs	「作業環境」アイコンの非表示化
	chgpwd	「パスワードの変更」アイコンの非表示化
	accrights	「アクセス権」アイコンの非表示化
	userlist_login	ログイン時に一致するユーザーのリストを表示
	serverlist_login	サーバー・エイリアス・リストの表示
	showicalvcal	iCalendar および vCalendar の添付の有効化
	enable_autologin	自動ログインの有効化
	modify_emailadd	電子メールの変更の有効化
[image_button]	img_enable	イメージ・ボタンの有効化
[minical]	mini_calendar	ミニカレンダーの位置
[file attachment]	download_enable	添付ファイルのダウンロードの有効化
	max_attach_file_size	添付ファイルの最大サイズ
	upload_enable	添付ファイルのアップロードの有効化
	tmp_attach_file_loc	一時アップロードの場所

表 E-2 ocwc.conf (Web Client 構成) (続き)

セクション	パラメータ	説明
[download_extensions]	ファイル拡張子および MIME タイプ (多種)	ファイル拡張子および MIME タイプ
[banners]	ban_top、ban_bot および ban_left	バナー・ファイル
	sec_left_banner	セカンダリ・ビューの左バナー
[attributes]	セカンダリ・ページ属性 (多種)	セカンダリ・ページ属性
[display]	top_ban_height および left_ban_width	バナー・サイズ
[taskview]	quickCreateStartTime	デフォルトのタスクの開始時間
	quickCreateEndTime	デフォルトのタスクの終了予定時間
	showQCCompletion	タスクの完了レベルの表示
[calendar_view]	default_view	カレンダー表示
	default_dayview_mode	日表示
	default_weekview_mode	週表示
	hide_dayview_toggle、hide_weekview_toggle	カレンダー / リストの切替えリンクの非表示
	pdv_notes_top_task_bottom	タスクのリストの表示
	default_color_mgt_by	会議の色別表示
[pff_paper_size]	paper_key	用紙名およびフォーマット
[cookies]	domain	Cookie ドメインの設定
[ACE]	OCWC ACE 設定 (多種)	OCWC ACE 設定

表 E-3 ocws.conf (Web Services 構成)

セクション	パラメータ	説明
[webservices]	maxattendee	出席者の最大数
	maxresults	結果要素の最大数
[basicauth]	Realm	レルム
[calendaring]	wsdl	カレンダーの名前空間 WSDL の有効化
[webclient]	wsdl	Web Client の名前空間 WSDL の有効化
[ACE]	Web Services の ACE 設定 (多種)	Web Services の ACE 設定

表 E-4 ocst.conf (同期サーバー構成)

セクション	パラメータ	説明
[ACE]	同期サーバーの ACE 設定 (多種)	同期サーバーの ACE 設定
[ocst]	wantcontacts	コンタクト同期の有効化
	wantcalendars	イベント同期およびタスク同期の有効化
	syncrangeback	同期範囲の下限
	syncrangeforward	同期範囲の上限
	wantrefusedentries	拒否されたエントリの同期
	wantattendanceintitle	タイトルへの出席者の状態の組込み
	wantownershipintitle	タイトルへのイベントの所有権の組込み
	wantlocationintitle	タイトルへの位置の組込み
	webconferenceindetails	Web Conferencing の詳細の組込み
	wantnoattendees	デバイスでの出席者の同期
[ocst-devices]	maxattendees	同期化する出席者数
	attendeesindetails	出席者の詳細の組込み
	デバイス (多種)	デバイス
[ocst-nokia9210]	Nokia 9210 (多種)	Nokia 9210 (設定)
[ocst-nokia9290]	Nokia 9290 (多種)	Nokia 9290 (設定)
[ocst-nokia7650]	Nokia 7650 (多種)	Nokia 7650 (設定)

表 E-4 ocst.conf (同期サーバー構成) (続き)

セクション	パラメータ	説明
[ocst-nokia3650]	Nokia 3650 (多種)	Nokia 3650 (設定)
[ocst-nokia6800]	Nokia 6800 (多種)	Nokia 6800 (設定)
[ocst-nokia_phones_v1]	Nokia 電話 V1 (多種)	Nokia 電話 V1 (設定)
[ocst-nokia_phones_v11]	Nokia 電話 V1.1 (多種)	Nokia 電話 V1.1 (設定)
[ocst-nokia_corp_phones_v11]	Nokia Corporation 電話 V1.1 (多種)	Nokia Corporation 電話 V1.1 (設定)
[ocst-ericsson_phones]	Ericsson 電話 (多種)	Ericsson 電話 (設定)
[ocst-sonyericsson_phones]	Sony Ericsson 電話 (多種)	Sony Ericsson 電話 (設定)
[ocst-sonyericsson_phones2]	Sony Ericsson 2 電話 (多種)	Sony Ericsson 2 電話 (設定)
[ocst-sonyericsson_p800]	Sony Ericsson P800 (多種)	Sony Ericsson P800 (設定)
[ocst-oracle_syncml_client]	Oracle SyncML V1.1.1 クライアント (多種)	Oracle SyncML V1.1.1 クライアント (設定)

OCAS.CONF

次の項では、Oracle Calendar アプリケーションのシステム・ファイル `ocas.conf` で変更可能な設定について説明します。

アプリケーション・モード

セクション

[system]

パラメータ

application

説明

基本となるアプリケーション・モード

使用可能な値

isp: インターネット・サービス・プロバイダ・モード (9.0.4.x ではサポート対象外)

ent: エンタープライズ・モード

asp: アプリケーション・サービス・プロバイダ・モード (9.0.4.x ではサポート対象外)

デフォルト値

ent

イベント・ログのキャラクタ・セット**セクション**

[system]

パラメータ

charset

説明

イベント・ログのキャラクタ・セット

使用可能な値

Oracle National Language Support (NLS) ライブラリでサポートされているすべてのコード・ページ識別子。Oracle NLS の詳細は、OTN-J (<http://otn.oracle.co.jp/>) の『Oracle9iAS Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください。

デフォルト値

WE8ISO8859P1

接続モード

セクション

[system]

パラメータ

connection

説明

Calendar Server に使用する接続モード。

使用可能な値

masternode: 指定された 1 つのノードからすべての接続情報を取り出せます。
1 つの [connection] mnode パラメータのみを指定する必要があります。

traditional: すべての接続の概略を、明示的に示す必要があります。

partitioned: ドメイン・サーバーからすべての接続情報を取り出せます（リリース 2 (9.0.4) ではサポート対象外）。

デフォルト値

masternode

データプール・チャンク・サイズ

セクション

[system]

パラメータ

datapoolchunk

説明

データプール・チャンク・サイズは、割当て時間ごとに、多数のユーザー・データ・オブジェクトを事前に割り当てておくことを可能にします。（将来はデフォルト値が 256 になります。）

使用可能な値

0 ～ 65535

デフォルト値

0

HTTP エラーのディスパッチ

セクション

[system]

パラメータ

dispatchhttperror

説明

このパラメータを設定すると、OCAS によって生成される HTTP ヘッダー・レスポンスに、「Lex-Status: [OK | Error]」が出力されます。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

FALSE

処理統計

セクション

[system]

パラメータ

dispatchstats

説明

シャットダウン時に統計ログに送信される、製品レベルの処理統計の追跡を有効にします。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

FALSE

統計ログ

セクション

[system]

パラメータ

dispatchstatslog

説明

ディスパッチ統計が保存されるパス。

使用可能な値

有効なディレクトリ・パス

デフォルト値

../logs/

ディスパッチ処理時間のログ

セクション

[system]

パラメータ

dispatchtime

説明

各要求の処理時間を示すイベント・ログ・エントリを有効にします。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

FALSE

ロギング・レベル

セクション

[system]

パラメータ

eventlevel

説明

OCAS 操作の間に記録されるメッセージのレベルを示します。

使用可能な値

emergency: 即時シャットダウンなどのパニック状態

alert: アプリケーション・リソースが見つからないなどの、ただちに改善が必要な状態

critical: 接続障害などの重大な状態

error: 要求の処理中のエラーで、OCAS ではなく要求の失敗を引き起こすもの

warning: アプリケーションのシャットダウンなどの、警告メッセージ

notice: 要求の処理に影響しないアプリケーション通知

info: OCAS の通常の操作に関連するメッセージ

debug: OCAS のデバッグに役立つメッセージ

デフォルト値

error

ログのパス

セクション

[system]

パラメータ

eventlog

説明

OCAS イベントが書き込まれるパスを指定します。パスには適切なファイル・システムの権限が必要です。

使用可能な値

有効なパスおよびファイル名

デフォルト値

../logs/ocas_log

ログ言語**セクション**

[system]

パラメータ

language

説明

イベント・ログの作成に使用される言語文字列。

使用可能な値

任意の Oracle 言語文字列

デフォルト値

american

リンク・データベース・ファイル名**セクション**

[system]

パラメータ

linkdbencodefilename

説明

UID リンク関連のファイルのエンコードに使用される、リンク・データベース・ファイル名。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

TRUE

UID リンクのパス**セクション**

[system]

パラメータ

linkdbstorebasepath

説明

UID リンク情報を格納するためのパス。このパスは、すべてのホストですべての OCAS インスタンスに対して共通であることが必要です。適切なファイル・システムの権限を設定する必要があります。

使用可能な値

任意の有効なパス

デフォルト値

../linkdb

スタンドアロンの設定**セクション**

[system]

パラメータ

standalone

説明

スタンドアロンは、アプリケーション・サーバーが Oracle Collaboration Suite の外部の環境で実行されることを示すために使用します。

使用可能な値

FALSE: Collaboration Suite モード

TRUE: スタンドアロン・モード

デフォルト値

FALSE

クリーン・アップ・ユーティリティ・ログのパス**セッション**

[sessiondb]

パラメータ

ocheckleteventlog

説明

クリーン・アップ・ユーティリティのイベント・ログのパス。ファイルのパスには適切なファイル・システムの権限が必要です。

使用可能な値

有効なパスおよびファイル名

デフォルト値

../logs/ochecklet_log

セッション・オブジェクト・タイムアウト**セッション**

[sessiondb]

パラメータ

sessiontimeout

説明

放置されたままのセッション・オブジェクトがディスクから消去されるまでのタイムアウト（分）。

使用可能な値

0 ～ 65535

デフォルト値

15

セッション・データベースのパス

セクション

[sessiondb]

パラメータ

sessionpath

説明

セッション・データベースのファイル・システム・パス。このパスは、すべてのホストですべての OCAS インスタンスがアクセス可能であることが必要です。ファイルのパスには適切なファイル・システムの権限が必要です。

使用可能な値

有効なパスおよびファイル名

デフォルト値

../sessiondb

クリーン・アップ・ユーティリティ

セクション

[sessiondb]

パラメータ

cleanuptime

説明

2 つの連続したクリーン・アップ・ユーティリティ・セッション間の待機時間(分)。

使用可能な値

0 ～ 65535

デフォルト値

20

マスター・ノード

セクション

[connection]

パラメータ

mnode

説明

mnode は、接続先 Calendar Server ネットワークのマスター・ノードを示します。このマスター・ノードは、ホスト名とポート、または IP アドレスとポートで識別されます。Node は、マスター・ノードのノード識別子を示します。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

mnode=<host>:<port>,<node>

OCAS ACE 設定

セクション

[ACE]

パラメータ

Authentication

Compression

Encryption

説明

OCAS システム・モジュールで使用する ACE 設定。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

default

ACE Web 属性タイプ

セクション	[ACE_PLUGINS_CLIENT]
パラメータ	web_attribute_type
説明	AUTH Web 用 ACE コンポーネントに必要な Web 属性タイプ。
使用可能な値	N/A
デフォルト値	userid

ACE Web 属性名

セクション	[ACE_PLUGINS_CLIENT]
パラメータ	web_attribute_name
説明	AUTH Web 用 ACE コンポーネントに必要な Web 属性名。
使用可能な値	N/A
デフォルト値	REMOTE_USER

言語

セクション

[languages]

パラメータ

```
american=en  
  
#brazilian_portuguese=pt-br  
  
french=fr  
  
german=de  
  
italian=it  
  
korean=ko  
  
spanish=es
```

説明

OCAS によってサポートされる言語。キーは言語を示します。値は、各要求の HTTP ヘッダーにある **Accept-Language** 変数を介してアプリケーションに提供される、実際の ISO 言語コードです。

注意： 言語を追加する際には、大文字を使用しないでください。すべての値で、大文字を使用することはできません。

使用可能な値

前述の「[パラメータ](#)」の項を参照してください。

デフォルト値

前述の「[パラメータ](#)」の項を参照してください。

OCAS でロードするプラグイン

セクション

[plugins]

パラメータ

pluginxx

説明

OCAS の初期化フェーズでロードされるオブジェクトを定義します。これらのオブジェクトは、アプリケーション・システムに対する Oracle Calendar 製品の追加および削除を行う場合のみ、変更してください。

使用可能な値

plugin01=./liblexcaldata.so # Oracle Calendar Server プロバイダ

plugin02=./liblexwebhtml.so # Oracle Calendar Web Client

plugin03=./liblexsyncml.so # Oracle Sync Server

plugin04=./liblexxml.so # Oracle Calendar Web Services

デフォルト値

N/A

OCWC.CONF

次の項では、Oracle Calendar Web Client の構成ファイル `ocwc.conf` で変更可能な設定について説明します。

アプリケーション名の接頭辞

セクション

`[url_prefix]`

パラメータ

`cgi_prefix`

説明

Web Client の URL ナビゲーションでアプリケーション名の接頭辞として使用されます。たとえば、`http://<host>:<port><cgi_prefix>ocas.fcgi` のようになります。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

`/ocas-bin/`

Fast-cgi ディレクトリ・エイリアス

セクション

`[url_prefix]`

パラメータ

`global_prefix`

説明

グローバル・カレンダーのアクセスに使用する Fast-cgi ディレクトリのエイリアス。グローバル・カレンダーで `url_prefix` のように機能します。このディレクトリには認証を適用しないでください。このパラメータに値が指定されていない場合は、`cgi_prefix` の値が使用されます。ocal.conf のスクリプト・エイリアス・ディレクトリに対応しています。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

中間層: /global-bin/

スタンドアロン: /ocas-bin

イメージの接頭辞になるパス**セクション**

[url_prefix]

パラメータ

img_prefix

説明

イメージの接頭辞としてこのパスが使用されます。実行時に、%ocwc_language% は、ocas.conf の [\[languages\]](#) で指定された現行の言語に対応するサブ・スタンドアロン・ディレクトリに置き換えられます。%ocwc_language% が値から省略された場合、設定はブランクになります。フォームの送信に使用するイメージは、パラメータ [img_button_prefix](#) に含まれていることに注意してください。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

/ocas/ocwc/%ocwc_language%/images/

イメージ・ボタンの接頭辞になるパス**セクション**

[url_prefix]

パラメータ

img_button_prefix

説明

img_prefix と類似していますが、HTML フォームに使用されるイメージ・ボタンに関連します。動作の詳細は、[img_prefix](#) を参照してください。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

/ocas/ocwc/%ocwc_language%/buttons/

スタイルシートの接頭辞**セクション**

[url_prefix]

パラメータ

style_sheet_prefix

説明

img_prefix と類似していますが、製品全体で使用するスタイルシートに関連します。動作の詳細は、[img_prefix](#) を参照してください。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

/ocas/ocwc/%ocwc_language%/stylesheet/

ヘルプの接頭辞**セクション**

[url_prefix]

パラメータ

help_prefix

説明

img_prefix と類似していますが、ヘルプ HTML ファイルおよびイメージ・ファイルに関連します。動作の詳細は、[img_prefix](#) を参照してください。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

/ocas/ocwc/%ocwc_language%/help/

バナーの接頭辞

セクション

[url_prefix]

パラメータ

banner_prefix

説明

img_prefix と類似していますが、カレンダー・ページの上、左および下に挿入されるバナーに関連します。動作の詳細は、[img_prefix](#) を参照してください。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

/ocas/ocwc/%ocwc_language%/banners/

ログアウト時の URL

セクション

[href]

パラメータ

logout_docname

説明

ログアウト後に開く URL。ログアウト時に、OSS によって別のページにリダイレクトされます。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

中間層： /osso_logout/
スタンドアロン： home.htm (<help_prefix> の下)

URL の最大ログイン試行回数

セクション

[href]

パラメータ

max_login_attempts_url

説明

ユーザーがログインしようとして失敗した回数が最大値に達すると、URL をリダイレクトします。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

中間層: N/A

スタンドアロン: login_fail.htm

お気に入りの最大数

セクション

[limits]

パラメータ

maxfavourite

説明

各ユーザーのお気に入りの最大数。

使用可能な値

最大値 15

デフォルト値

15

「携帯電話番号」フィールド

セクション

[pref_attr]

パラメータ

mobile_phone

説明

「携帯電話番号」フィールドの状態。

使用可能な値

normal: フィールドは編集可能です。

read_only: フィールドは表示されますが、編集不可です。

hidden: フィールドは表示されません。

デフォルト値

Normal

「Wireless 優先サービス・センター」フィールド

セクション

[pref_attr]

パラメータ

smcsc_phone

説明

「Wireless 優先サービス・センター」フィールドの状態。

使用可能な値

normal: フィールドは編集可能です。

read_only: フィールドは表示されますが、編集不可です。

hidden: フィールドは表示されません。

デフォルト値

read_only

「自動ログイン」の状態

セクション

[pref_attr]

パラメータ

autolog

説明

「自動ログイン」フィールドの状態。

使用可能な値

normal: フィールドは編集可能です。

read_only: フィールドは表示されますが、編集不可です。

hidden: フィールドは表示されません。

デフォルト値

中間層: N/A

スタンドアロン: Normal

タイムアウト値

セクション

[admin]

パラメータ

ssn_timeout

説明

分単位で表したセッションのタイムアウト。値が0の場合、セッションはタイムアウトになりません。Collaboration Suite では、OSSO によって別のタイムアウト値が使用されるため、この値を0に設定する必要があります。

使用可能な値

15 以下

デフォルト値

中間層： 0
スタンドアロン： 15

SSO 検証

セクション

[admin]

パラメータ

check_user_credential

説明

SSO の使用時に、ユーザーの資格証明の SSO 認証を有効にします。SSO を使用する Collaboration Suite では、この値を TRUE に設定する必要があります。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

中間層： TRUE
スタンドアロン： FALSE

SSO 環境キーの構成

セクション

[admin]

パラメータ

sso_user_env_key

説明

SSO 資格証明のチェックに使用する環境変数。check_user_credentials が TRUE に設定されている場合のみ使用されます。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

中間層: REMOTE_USER

スタンドアロン: check_user_credentials が TRUE に設定されている場合のみ使用
(スタンドアロンはこれに該当しない)

無効なログインの試行回数**セクション**

[admin]

パラメータ

max_login_attempts

説明

許容される無効なスタンドアロン・ログインの回数。この回数に到達すると、ユーザーは <max_login_attempts_url> (href セクション) にリダイレクトされます。

使用可能な値

1 ~ 2^{32} の整数

デフォルト値

中間層: N/A

スタンドアロン: 5

ログイン失敗後のタイムアウト**セクション**

[admin]

パラメータ

login_fail_timeout

説明

スタンドアロン・ログインの最大試行回数に到達したユーザーが、その後アクセスを拒否される時間。分単位で表されます。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

中間層： N/A
スタンドアロン： 1

セキュア・ログインの制御

セクション

[admin]

パラメータ

secure_login

説明

スタンドアロン・ログイン・ページに表示されるエラー・メッセージのセキュリティ・レベルを制御します。TRUE に設定した場合、汎用の障害メッセージが使用されます。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

中間層： N/A
スタンドアロン： TRUE

アクセス可能モードの有効化

セクション

[ADA]

パラメータ

enable

説明

アクセス可能モードを有効にします。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

中間層: TRUE

スタンドアロン: TRUE

アクセス可能性の表示 / 非表示切替えリンク**セクション**

[ADA]

パラメータ

hide_toggle_link

説明

アクセス可能モードと通常モードの切替えリンクを非表示にする場合は、TRUE に設定します。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

中間層: FALSE

スタンドアロン: FALSE

イベント・カレンダー検索の無効化**セクション**

[modules]

パラメータ

hide_eventcal

説明

イベント・カレンダーの機能を無効にする場合は、TRUE に設定します。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

中間層: FALSE

スタンドアロン: FALSE

グローバル・カレンダーの送信および表示**セクション**

[modules]

パラメータ

hide_global

説明

グローバル・カレンダーの機能へのアクセスを構成します。

使用可能な値

FALSE: グローバル・カレンダーは完全に有効になります。

NOEMAIL: ユーザーは、グローバル・カレンダーを電子メールで送信できません。

ALL: ユーザーは、グローバル・カレンダーを電子メールで送信したり、表示できません。

デフォルト値

中間層: FALSE

スタンドアロン: FALSE

タスク表示の無効化**セクション**

[modules]

パラメータ

hide_taskview

説明

TRUE に設定した場合、タスク表示が無効になります。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

中間層: FALSE

スタンダアロン: FALSE

「グループの管理」の無効化**セクション**

[modules]

パラメータ

hide_managegroups

説明

「グループの管理」機能を無効にします。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

中間層: FALSE

スタンダアロン: FALSE

「日付および時間の提案」の無効化**セクション**

[modules]

パラメータ

hide_suggesttime

説明

「日付および時間の提案」機能を無効にします。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

中間層: FALSE

スタンドアロン: FALSE

「未確認エントリ表示」の無効化**セクション**

[modules]

パラメータ

hide_show_unconfirmed

説明

「未確認エントリ表示」オプションを無効にします。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

中間層: FALSE

スタンドアロン: FALSE

「全インスタンス更新」の無効化**セクション**

[modules]

パラメータ

hide_updateall

説明

「全インスタンス更新」機能を無効にします。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

中間層: FALSE

スタンドアロン: FALSE

「代行者として開く」の有効化**セクション**

[Modules]

パラメータ

enable_designate

説明

「代行者として開く」機能を有効にします。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

中間層: TRUE

スタンドアロン: TRUE

「その他のユーザー・カレンダー表示」の無効化**セクション**

[Modules]

パラメータ

hide_viewpub

説明

「その他のユーザー・カレンダー表示」機能（「代理」機能を含む）を無効にします。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

中間層: FALSE

スタンドアロン: FALSE

Web 会議の作成の有効化**セクション**

[Modules]

パラメータ

enable_web_conferencing

説明

Oracle Web Conferencing の会議の作成機能を有効にします。中間層でのみ使用できます。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

中間層: TRUE

スタンドアロン: FALSE

ログアウト・アイコンの非表示化**セクション**

[Modules]

パラメータ

logout

説明

ツールバーのログアウト・アイコンを非表示にします。中間層では、ログアウト・アイコンは常に表示されます。

使用可能な値

SHOW または HIDE。

デフォルト値

中間層： N/A

スタンドアロン： SHOW

「バージョン情報」アイコンの非表示化**セクション**

[Modules]

パラメータ

about

説明

ツールバーに含まれている Oracle Calendar の「バージョン情報」アイコンを非表示にします。中間層では、「バージョン情報」アイコンは常に使用可能です。

使用可能な値

SHOW または HIDE。

デフォルト値

中間層： N/A

スタンドアロン： SHOW

「作業環境」アイコンの非表示化**セクション**

[Modules]

パラメータ

prefs

説明

ツールバーの「作業環境」アイコンを非表示にします。中間層では、「作業環境」アイコンは常に使用可能です。

使用可能な値

SHOW または HIDE。

デフォルト値

中間層： N/A
スタンドアロン： SHOW

「パスワードの変更」アイコンの非表示化

セクション

[Modules]

パラメータ

chgpwd

説明

ツールバーの「パスワードの変更」アイコンを非表示にします。中間層では、「パスワードの変更」アイコンを使用できません。「パスワードの変更」モジュールを使用できるかどうかは、サーバーの機能によってさらに制約されます。

使用可能な値

SHOW または HIDE。

デフォルト値

中間層： N/A
スタンドアロン： SHOW

「アクセス権」アイコンの非表示化

セクション

[Modules]

パラメータ

accrights

説明

ツールバーの「アクセス権」アイコンを非表示にします。中間層では、「アクセス権」アイコンを常に使用できます。

使用可能な値

SHOW または HIDE。

デフォルト値

中間層: N/A

スタンドアロン: SHOW

ログイン時に一致するユーザーのリストを表示**セクション**

[Modules]

パラメータ

userlist_login

説明

ログイン・ページで一致するユーザーのリストを表示します。管理者が、外部のメカニズム（Web:OTMT など）を信頼する ACE 認証の使用を選択した場合、ログイン・ページは表示されず、この設定は無関係になります。

使用可能な値

SHOW または HIDE。

デフォルト値

中間層: N/A

スタンドアロン: FALSE

サーバー・エイリアス・リストの表示**セクション**

[Modules]

パラメータ

serverlist_login

説明

ログイン・ページに、構成済サーバー・エイリアスのリストを表示します。管理者が、外部のメカニズム（Web:OTMT など）を信頼する ACE 認証の使用を選択した場合、ログイン・ページは表示されず、この設定は無関係になります。さらに、マスター・ノード以外の接続プールを使用した場合のみ機能します。これは、マスター・ノードのクラスタでは、マスター・ノードを指す 1 つのエイリアスしか要求されないためです。

サーバーのリストは、`ocas.conf` で構成されます。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

中間層: N/A

スタンドアロン: FALSE

iCalendar および vCalendar の添付の有効化**セクション**

[Modules]

パラメータ

showicalvcal

説明

通知への iCalendar および vCalendar の添付機能を有効にします。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

TRUE

自動ログインの有効化**セクション**

[Modules]

パラメータ

enable_autologin

説明

自動ログイン機能を有効にします。これにより、ユーザーがログイン資格証明を HTTP Cookie に保存できるようになるため、セキュリティの高いデータが危険にさらされる可能性があります。セキュリティの高いアカウントでは使用しないでください。

使用可能な値

TRUE/FALSE (Collaboration Suite では不適用)

デフォルト値

FALSE

電子メールの変更の有効化**セクション**

[Modules]

パラメータ

modify_emailadd

説明

電子メール・アドレスの変更機能を有効にします。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

中間層: N/A

スタンドアロン: FALSE

イメージ・ボタンの有効化**セクション**

[image_button]

パラメータ

img_enable

説明

HTML フォームのイメージ・ボタンを有効にします。イメージの位置には、`<img_button_prefix>` が使用されます。使用できるイメージ・ボタン・キーは、この項に含まれています。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

TRUE

ミニカレンダーの位置

セクション

[minical]

パラメータ

mini_calendar

説明

ミニカレンダーの位置

使用可能な値

- 0: 表示しない
- 1: 水平バナーの左上
- 2: 水平バナーの右上
- 3: 垂直バナーの左上
- 4: 垂直バナーの左下
- 5: 水平バナーの左下
- 6: 水平バナーの右下

デフォルト値

N/A

添付ファイルのダウンロードの有効化

セクション

[file attachment]

パラメータ

download_enable

説明

エントリの添付ファイルのダウンロードを有効にします。

使用可能な値

True/False

デフォルト値

True

添付ファイルの最大サイズ**セクション**

[file attachment]

パラメータ

max_attach_file_size

説明

エントリの添付ファイルの最大サイズ（バイト数）。

使用可能な値

システムに適した最大値を選択します。

デフォルト値

409600

添付ファイルのアップロードの有効化**セクション**

[file attachment]

パラメータ

upload_enable

説明

エントリの添付ファイルのアップロードを有効にします。

使用可能な値

True/False

デフォルト値

True

一時アップロードの場所

セクション

[file attachment]

パラメータ

tmp_attach_file_loc

説明

添付ファイルの一時アップロード場所のパス。

使用可能な値

読み取りまたは書き込み権限のあるディレクトリの有効なパス。

デフォルト値

../tmp

ファイル拡張子および MIME タイプ

セクション

[download_extensions]

パラメータ

N/A

説明

この項では、ファイル拡張子とそれぞれに関連付けられた MIME タイプのリストを示します。添付ファイルの拡張子がこのリストにない場合、タイプは octet-stream（バイナリ・ファイル）となります。

使用可能な値

任意の有効なファイル形式および MIME タイプ

デフォルト値

デフォルトで次の値が含まれます。

```
.wav = audio/x-wav  
.gif = image/gif  
.jpg = image/jpeg  
.jpeg = image/jpeg  
.htm = text/html
```

```
.html = text/html  
.txt = text/plain  
.doc = application/msword  
.xls = application/vnd.ms-excel
```

バナー・ファイル

セクション

[banners]

パラメータ

ban_top、ban_bot および ban_left

説明

使用するバナー・ファイル。top_ban_height および left_ban_width とともに設定する必要があります。

使用可能な値

任意の有効なバナー・ファイル

デフォルト値

ban_top=top.temp、ban_bot=bot.temp

セカンダリ・ビューの左バナー

セクション

[banners]

パラメータ

sec_left_banner

説明

セカンダリ・ビューに左バナーを表示します。

使用可能な値

True/False

デフォルト値

False

セカンダリ・ページ属性

セクション

[attributes]

パラメータ

(多種)

説明

スタイルシートで定義されていない視覚属性。これらの属性は、セカンダリ・ページで使用されます（カレンダー・ビューはスタイルシートからの値を使用します）。これらは、スタイルシートと一致している必要があります。

使用可能な値

有効なスタイルシート設定

デフォルト値

デフォルトで次の値が含まれます。

```
app_col = "#ffffff"
left_ban_col = "#ffffff"
top_ban_col = "#ffffff"
bot_ban_col = "#ffffff"
minical_bg_col = "#ffffff"
minical_bord_col = "#ffffff"
minical_border = 0
cal_toolbar_col = "#00c6c6"
cal_weekend_col = "#c600c6"
cal_weekday_col = "#c6c600"
cal_titlebar_inmonth_col = "#f4faac"
cal_titlebar_outmonth_col = "#c9d3f9"
conf_font_col = "#ef4a4a"
pers_font_col = "#487aa8"
norm_font_col = "#000000"
pub_font_col = "#569a63"
conf_font_attr = italic
pers_font_attr = italic
norm_font_attr = normal
pub_font_attr = bold
popupmenu_bgcolor="#e5e5e5"
popupmenu_bdcolor="#64618f"
popupmenu_width=150
popupmenu_fontsize=12
```



```
grpViewSelTimeBGCol = "#ffffcc"  
taskview_header_col = "#999966"
```

バナー・サイズ

セクション

[display]

パラメータ

top_ban_height および left_ban_width

説明

トップ・バナーの高さと左バナーの幅を設定します。[バナー・ファイル](#)とともに使用します。

使用可能な値

バナーのサイズと一致するピクセル値を使用します。

デフォルト値

top_ban_height = 118、left_ban_width = 100

デフォルトのタスクの開始時間

セクション

[taskview]

パラメータ

quickCreateStartTime

説明

タスクのデフォルトの開始時間。24 時間形式で指定します。たとえば 17 は午後 5 時です。

使用可能な値

0 ～ 23

デフォルト値

9

デフォルトのタスクの終了予定時間

セクション

[taskview]

パラメータ

quickCreateEndTime

説明

タスクのデフォルトの終了予定時間。24 時間形式で指定します。たとえば 17 は午後 5 時です。

使用可能な値

0 ～ 23

デフォルト値

17

タスクの完了レベルの表示

セクション

[taskview]

パラメータ

showQCCompletion

説明

タスクの完了レベルを表示します。

使用可能な値

True/False

デフォルト値

True

カレンダー表示

セクション

[calendar_view]

パラメータ

default_view

説明

デフォルトのカレンダー表示を、日単位、週単位または月単位に設定します。

使用可能な値

1 は日単位、2 は週単位、3 は月単位

デフォルト値

1

日表示

セクション

[calendar_view]

パラメータ

default_dayview_mode

説明

デフォルトの日表示をリストまたはカレンダーに設定します。

使用可能な値

0 はリスト、1 はカレンダー

デフォルト値

1

週表示

セクション

[calendar_view]

パラメータ

default_weekview_mode

説明

デフォルトの週表示をリストまたはカレンダーに設定します。

使用可能な値

0 はリスト、1 はカレンダー

デフォルト値

1

カレンダー/リストの切替えリンクの非表示

セクション

[calendar_view]

パラメータ

hide_dayview_toggle、hide_weekview_toggle

説明

カレンダー表示とリスト表示を切り替えるリンクを非表示にします。

使用可能な値

True/False

デフォルト値

False

タスクのリストの表示

セクション

[calendar_view]

パラメータ

pdv_notes_top_task_bottom

説明

下部にタスクのリストを表示します。

使用可能な値

True/False

デフォルト値

True

会議の色別表示

セクション

[calendar_view]

パラメータ

default_color_mgt_by

説明

会議を「重要度」、「出席者の構成」または「所有権」別に異なる色で表示します。

使用可能な値

1 は「重要度」、2 は「出席者の構成」、3 は「所有権」

デフォルト値

2

用紙名およびフォーマット

セクション

[pff_paper_size]

パラメータ

paper_key

説明

用紙名、および幅（mm）と高さ（mm）で定義される印刷用フォーマット。

メッセージ・カタログ内、およびユーザーの優先用紙サイズの保存時には、キー名も使用されます。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

PAPER_LETTER = 216, 279

PAPER_LEGAL = 216, 356

PAPER_EXEC = 188, 254

PAPER_A3 = 297, 420

PAPER_A4 = 210, 297

PAPER_B3 = 353, 500

PAPER_B4 = 250, 353

PAPER_JB3 = 364, 515

PAPER_JB4 = 257, 364

Cookie ドメインの設定

セクション

[cookies]

パラメータ

domain

説明

HTTP Cookie のドメインを設定します。

使用可能な値

少なくとも 2 つのドットを持つ、有効なドメイン名または接尾辞

デフォルト値

.oracle.com

OCWC ACE 設定**セクション**

[ACE]

パラメータ

Authentication

Compression

Encryption

説明

Oracle Calendar Web Client で使用される ACE 設定。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

Collaboration Suite: web:OTMT

スタンドアロン: default

OCWS.CONF

次の項では、Oracle Calendar Web Services の構成ファイル `ocws.conf` で変更可能な設定について説明します。

出席者の最大数

セクション

[webservices]

パラメータ

maxattendee

説明

Calendar Server からフェッチされ、コール元に返される出席者要素の数を制限します。この値は、サーバー側でも制限されます。

使用可能な値

0 ～ 65535

デフォルト値

200

結果要素の最大数

セクション

[webservices]

パラメータ

maxresults

説明

コール元に返される結果要素の数を制限します。この値は、サーバーによる制限も受ける場合があります。

使用可能な値

0 ～ 65535

デフォルト値

200

レルム

セクション

[basicauth]

パラメータ

Realm

説明

BasicAuth の使用状況のヒントを提供するレルム文字列。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

Oracle Calendar Web Services

カレンダーの名前空間 WSDL の有効化

セクション

[calendaring]

パラメータ

wsdl

説明

WSDL を有効または無効にします（現在開発中）。リリース 2（9.0.4）ではサポートされていません。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

FALSE

Web Client の名前空間 WSDL の有効化

セクション

[webclient]

パラメータ

wsdl

説明

WSDL を有効または無効にします（現在開発中）。リリース 2（9.0.4）ではサポートされていません。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

FALSE

Web Services の ACE 設定

セクション

[ACE]

パラメータ

Authentication

Compression

Encryption

説明

ACE 設定は、Calendar Server への低レベル接続の定義に使用されます。これらの値は、すべての製品のプラグイン特有のもので、デフォルト値のままにしておく必要があります。

注意： Authentication 設定は、BasicAuth 認証メカニズムだけに影響します。TrustedAuth または ProxyAuth では、Authentication 設定は無視されます。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

default

OCST.CONF

次の項では、Oracle Calendar Web 同期サーバーの構成ファイル `ocst.conf` で変更可能な設定について説明します。

同期サーバーの ACE 設定

セクション

[ACE]

パラメータ

Authentication

Encryption

Compression

説明

Calendar Server への低レベル接続に使用される ACE 設定。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

default

コンタクト同期の有効化

セクション

[ocst]

パラメータ

wantcontacts

説明

同期サーバーでコンタクト同期を有効にするかどうかを指定します。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

TRUE

イベント同期およびタスク同期の有効化

セクション

[ocst]

パラメータ

wantcalendars

説明

同期サーバーでイベント同期およびタスク同期を有効にするかどうかを指定します。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

TRUE

同期範囲の下限

セクション

[ocst]

パラメータ

syncrangeback

説明

同期範囲の下限。現在の日付から遡った過去の日数で指定します。各デバイス・ベースで上書き可能。

使用可能な値

0 ～ 999

デフォルト値

7

同期範囲の上限**セクション**

[ocst]

パラメータ

syncrangeforward

説明

同期範囲の上限。現在の日付から数えた将来の日数で指定します。各デバイス・ベースで上書き可能。

使用可能な値

0 ～ 999

デフォルト値

7

拒否されたエントリの同期**セクション**

[ocst]

パラメータ

wantrefusedentries

説明

拒否されたイベントをデバイスにあわせて同期化するかどうかを指定します。各デバイス・ベースで上書き可能。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

FALSE

タイトルへの出席者の状態の組み込み

セクション

[ocst]

パラメータ

wantattendanceintitle

説明

ユーザーの出席者の状態をデバイス上でタイトル（イベントのみ）に含めるかどうかを指定します。各デバイス・ベースで上書き可能。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

FALSE

タイトルへのイベントの所有権の組み込み

セクション

[ocst]

パラメータ

wantownershipintitle

説明

ユーザーのエントリの所有権を、デバイス上のイベント・タイトルで示すかどうかを指定します。各デバイス・ベースで上書き可能。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

FALSE

タイトルへの位置の組み込み

セクション

[ocst]

パラメータ

wantlocationintitle

説明

クライアント上のイベント・タイトルに、位置を含めるかどうかを指定します。各デバイス・ベースで上書き可能。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

FALSE

Web Conferencing の詳細の組み込み

セクション

[ocst]

パラメータ

webconferenceindetails

説明

Oracle Web Conferencing イベントの [details] セクションに Oracle Web Conferencing 情報を含めるかどうかを指定します。各デバイス・ベースで上書き可能。

使用可能な値

no/short/full

デフォルト値

no

デバイスでの出席者の同期

セクション

[ocst]

パラメータ

wantnoattendees

説明

出席者をデバイスに返すかどうかを指定します。各デバイス・ベースで上書き可能。

使用可能な値

TRUE/FALSE

デフォルト値

FALSE

同期化する出席者数

セクション

[ocst]

パラメータ

maxattendees

説明

クライアントに返す出席者の数を指定します。この機能を使用するには、wantnoattendees を TRUE に設定する必要があります。各デバイス・ベースで上書き可能。

使用可能な値

0 ～ 65535

デフォルト値

10

出席者の詳細の組み込み

セクション

[ocst]

パラメータ

attendeesindetails

説明

クライアント上で出席者の詳細を含めるかどうかを指定します（出席者が2人以上の場合）。この機能を使用するには、`wantnoattendees`をFALSEに設定し、`maxattendees`を1より大きい値に設定する必要があります。各デバイス・ベースで上書き可能です。

使用可能な値

no/short/full

デフォルト値

no

デバイス

セクション

[ocst-devices]

パラメータ

device01=nokia9210

device02=nokia9290

device03=nokia7650

device04=nokia3650

device05=nokia6800

device06=nokia_phones_v1

device07=nokia_phones_v11

device08=nokia_corp_phones_v11

device09=ericsson_phones

device10=sonyericsson_phones

```
device11=sonyericsson_phones2
device12=sonyericsson_p800
device13=oracle_syncml_client
```

説明

後述のデバイス構成セクションをすべてリストします。

使用可能な値

値には任意の文字列を使用できます。セクション名は、値に接頭辞 ocst- を使用する必要があります。

デフォルト値

N/A

Nokia 9210

セクション

[ocst-nokia9210]

パラメータ

```
syncrangeback=7
syncrangeforward=30
wantrefusedentries=false
wantattendanceintitle=true
wantownershipintitle=true
wantlocationintitle=true
```

説明

変更可能な構成オプション。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

N/A

Nokia 9290**セクション**

[ocst-nokia9290]

パラメータ

syncrangeback=7
syncrangeforward=30
wantrefusedentries=false
wantattendanceintitle=true
wantownershipintitle=true
wantlocationintitle=true

説明

変更可能な構成オプション。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

N/A

Nokia 7650**セクション**

[ocst-nokia7650]

パラメータ

syncrangeback=7
syncrangeforward=30
wantrefusedentries=false
wantattendanceintitle=true
wantownershipintitle=true
wantlocationintitle=false

説明

変更可能な構成オプション。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

N/A

Nokia 3650

セクション

[ocst-nokia3650]

パラメータ

syncrangeback=7
syncrangeforward=30
wantrefusedentries=false
wantattendanceintitle=true
wantownershipintitle=true
wantlocationintitle=false

説明

変更可能な構成オプション。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

N/A

Nokia 6800

セクション

[ocst-nokia6800]

パラメータ

syncrangeback=7
syncrangeforward=30
wantrefusedentries=false
wantattendanceintitle=true
wantownershipintitle=true
wantlocationintitle=false

説明

変更可能な構成オプション。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

N/A

Nokia 電話 V1

セクション

[ocst-nokia_phones_v1]

パラメータ

syncrangeback=7
syncrangeforward=30
wantrefusedentries=false
wantattendanceintitle=true
wantownershipintitle=true
wantlocationintitle=false

説明

SyncML DS v1.0.1 をサポートする、指定外の Nokia 電話で変更可能な構成オプション。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

N/A

Nokia 電話 V1.1

セクション

[ocst-nokia_phones_v11]

パラメータ

syncrangeback=7
syncrangeforward=30
wantrefusedentries=false
wantattendanceintitle=true
wantownershipintitle=true
wantlocationintitle=false

説明

SyncML DS v1.1.1 をサポートする、指定外の Nokia 電話で変更可能な構成オプション。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

N/A

Nokia Corporation 電話 V1.1

セクション

[ocst-nokia_corp_phones_v11]

パラメータ

syncrangeback=7
syncrangeforward=30
wantrefusedentries=false
wantattendanceintitle=true
wantownershipintitle=true
wantlocationintitle=false

説明

SyncML DS v1.1.1 をサポートする、指定外の Nokia Corporation 電話で変更可能な構成オプション。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

N/A

Ericsson 電話

セクション

[ocst-ericsson_phones]

パラメータ

syncrangeback=7
syncrangeforward=30
wantrefusedentries=false
wantattendanceintitle=true
wantownershipintitle=true
wantlocationintitle=false

```
webconferenceindetails=short
attendeesindetails=short
wantnoattendees=false
maxattendees=10
```

説明

指定外のすべての Ericsson 電話で変更可能な構成オプション。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

N/A

Sony Ericsson 電話**セクション**

[ocst-sonyericsson_phones]

パラメータ

```
synchronangeback=7
synchronangeforward=30
wantrefusedentries=false
wantattendanceintitle=true
wantownershipintitle=true
wantlocationintitle=false
webconferenceindetails=short
attendeesindetails=short
wantnoattendees=false
maxattendees=10
```

説明

すべての SonyEricsson 電話で変更可能な構成オプション。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

N/A

Sony Ericsson 2 電話**セクション**`[ocst-sonyericsson_phones2]`**パラメータ**`syncrangeback=7``syncrangeforward=30``wantrefusedentries=false``wantattendanceintitle=true``wantownershipintitle=true``wantlocationintitle=false``webconferenceindetails=short``attendeesindetails=short``wantnoattendees=false``maxattendees=10`**説明**

すべての SonyEricsson 2 電話で変更可能な構成オプション。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

N/A

Sony Ericsson P800

セクション

[ocst-sonyericsson_p800]

パラメータ

syncrangeback=60
syncrangeforward=120
wantrefusedentries=false
wantattendanceintitle=true
wantownershipintitle=true
wantlocationintitle=false
webconferenceindetails=full
attendeesindeetails=full
wantnoattendeess=false
maxattendeess=10

説明

すべての SonyEricsson P800 電話で変更可能な構成オプション。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

N/A

Oracle SyncML V1.1.1 クライアント

セクション

[ocst-oracle_syncml_client]

パラメータ

syncrangeback=7
syncrangeforward=30
wantrefusedentries=false
wantattendanceintitle=true
wantownershipintitle=true
wantlocationintitle=false
webconferenceindetails=full
attendeessindetails=full
wantnoattendeess=false
maxattendeess=10

説明

すべての Oracle SyncML クライアントで変更可能な構成オプション。

使用可能な値

N/A

デフォルト値

N/A

Calendar Server ユーティリティ

この付録には、Calendar Server に同梱されているすべてのユーティリティの使用方法および構文の、完全な説明が含まれています。インストール・スクリプトを使用して、Windows NT プラットフォームで UNIX 専用ユーティリティをインストールすることはできません。すべてのユーティリティは、\$ORACLE_HOME/ocal/bin ディレクトリにインストールされます。

次の表には、すべてのユーティリティがアルファベット順にリストされています。

表 F-1 Calendar Server のユーティリティ

スクリプト	機能
UNIACCESSRIGHTS	ユーザー間のアクセス権を管理する。
UNIADDNODE	新しい Calendar Server ノードを作成するか、既存の Calendar Server ノードを再初期化する。
UNIADMRIGHTS	ユーザーの管理権限を管理する。
UNIARCH (UNIX 専用)	Calendar Server の TAR アーカイブを作成する。
UNIB2LENDIAN	Calendar Server ノード・データベースを、ビッグ・エンディアン・プロセッサ用形式からリトル・エンディアン・プロセッサ用形式に変換する。
UNICHECK (UNIX 専用)	Calendar Server のファイル・システムを確認する。
UNICKSUM	ファイルのチェックサムを生成する。
UNICLEAN (UNIX 専用)	Calendar Server のファイル・システムをクリーン・アップする (一時ファイルを削除し、権限を設定する)。
UNICPINR	unicpoutr によって作成されたファイルから Calendar Server ノードに、リソース・データをコピーする。
UNICPINU	unicpoutu によって作成されたユーザー・データのファイルのコンテンツを、Calendar Server ノードにコピーする。

表 F-1 Calendar Server のユーティリティ（続き）

スクリプト	機能
UNICPOUTR	リソース・データを Calendar Server ノードからファイルにコピーする。
UNICPOUTU	ユーザー・データを Calendar Server ノードからファイルにコピーする。
UNICPR	unicpoutr によって作成され、unicpinr によって読み取られるファイルの書式。
UNICPU	unicpoutu によって作成され、unicpinu によって読み取られるファイルの書式。
UNIDBBACKUP	Calendar Server のアーカイブを作成する。
UNIDBCONV	バージョン 2.50 または 2.60 のノード・データベースを、2.61 のノード・データベースに変換する。
UNIDBFIX	Calendar Server ノード・データベースのチェック、修復、デフラグおよび管理を行う。
UNIDBRESTORE	unidbbackup によって作成されたバックアップから、Calendar Server のコンテンツをリストアする。
UNIDB2LDIF	Calendar Server ノード・データベースを、リトル・エンディアンの Windows NT プロセッサ用形式およびリトル・エンディアンの UNIX プロセッサ用形式で、相互変換する。
UNIDSACISETUP	Calendar Server の ADMIN グループに対し、ディレクトリ・サーバー上でアクセス制御情報を設定する。（外部ディレクトリ専用。Oracle Internet Directory では使用不可。）
UNIDSDIFF	Calendar Server ノードとディレクトリ・サーバー間の差異を検出し、削除する。（外部ディレクトリ専用）
UNIDSSEARCH	ディレクトリ上の、Calendar Server ユーザー以外のすべてのユーザーをリストする（外部ディレクトリ専用）。
UNIDSSYNC	Calendar Server ノードの情報とディレクトリ・サーバーの情報を同期させる（外部ディレクトリ専用）。
UNIDSUP	ディレクトリ・サーバーのステータスをレポートする（外部ディレクトリ専用）。
UNIENCRYPT	Calendar Server 構成ファイルに含めるパスワードを暗号化する。
UNIGROUP	管理グループおよびパブリック・グループを作成、変更および削除する。
UNIICAL	iCAL VEVENT を予定表にインポートする。

表 F-1 Calendar Server のユーティリティ（続き）

スクリプト	機能
UNIL2BENDIAN	Calendar Server ノード・データベースを、リトル・エンディアン・プロセッサ用形式からビッグ・エンディアン・プロセッサ用形式に変換する。
UNIOGONS	Calendar Server のサインオンおよびサインオフの統計を表示する。
UNIMMIMPSRV	MeetingMaker サーバーから Oracle Calendar Server にデータをインポートする。
UNIMVUSER	1 つの Calendar Server ノードから別の Calendar Server ノードに、ユーザーを移動する。
UNINODE	Calendar Server ノード・ネットワークを管理する。
UNIOIDCONF	Calendar Server 用に Oracle Internet Directory を構成するために、インストール処理で使用するユーティリティ。
UNIPASSWD	Calendar Server データベース上で、ユーザー・パスワードを変更する。内部ディレクトリ・サーバー専用。
UNIPING	Calendar Server ノードまたはノードを ping する。
UNIREQDUMP	コーポレート・ワイド・サービス（CWS）デーモンのキューにあるリクエストを表示および削除（オプション）する。
UNIRESTORE	ユーザーのカレンダ・データをバックアップからリストアする。
UNIRMOLD	古いイベントおよびタスクを、Calendar Server データベースの予定表から削除する。
UNIRNDEL	ローカルの Calendar Server ノード・データベースから、リモート・ノードを削除する。
UNIRNSYNCH	1 つのノードのローカル情報の削除を、同じネットワーク上の別のノードに伝搬する。
UNISIZEOF	Calendar Server のインストールのサイズを計算する。
UNISLICE（UNIX 専用）	Calendar Server のログ・ファイルから情報を抽出する。
UNISNAPSHOT	Calendar Server 情報を診断用にコンパイルする。
UNISNCDUMP	Calendar Server の同期ネットワーク接続デーモン / サービスから統計を取り出す。
UNISTART	ノード、Calendar Server または一部のコンポーネントだけを起動する。
UNISTAT	Calendar Server ノードのレポートを作成する。

表 F-1 Calendar Server のユーティリティ（続き）

スクリプト	機能
UNISTATS	Calendar Server 統計（stats.log）ファイルの、データのサマリー統計を表示する。
UNISTATUS	Calendar Server のステータスを判別する。
UNISTOP	ノード、Calendar Server または一部のコンポーネントだけを停止する。
UNISTRCONV	文字列を UTF-8 に変換する。
UNISYNCREFRESH	同期レコードをリフレッシュする。
UNITZINFO	Calendar Server のタイムゾーン情報を出力する。
UNIUSER	カレンダー・ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーのリスト、追加または削除を行い、これらに関連付けられた情報を変更する。
UNIVERSION	Calendar Server およびそのコンポーネントのバージョンを確認する。
UNIWHO	サインオンしているカレンダー・ユーザーの情報を表示する。

UNIACCESSRIGHTS

uniaccessrights: ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーの予定表へのアクセス権を付与します。

構文

```
uniaccessrights -ls -grantee <user> -grantor <filter>
[-n <node-ID>] [-host <hostname>] [[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
[-designate] [-eventview] [-taskview] [-scheduling]

uniaccessrights -mod -grantee <user> -grantor <filter>
[-n <node-ID>] [-host <hostname>] [[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
[-designate <modifier>] [-taskview <modifier>] [-eventview <modifier>] [-scheduling
<modifier>]

uniaccessrights -reset -grantee <user> -grantor <filter>
[-n <node-ID>] [-host <hostname>] [[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
[-designate] | [-taskview] | [-eventview] | [-scheduling]]
```



```
uniaccessrights -info [-n <node-ID>] [-host <hostname>]  
[[[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]  
[[-designate] | [-taskview] | [-eventview] | [-scheduling]]  
  
uniaccessrights -v  
uniaccessrights -h
```

説明

このユーティリティによって、管理者は、別のユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーのカレンダー・データへのアクセス権をユーザーに付与できるほか、これらの権限の変更または取消しを行えます。このユーティリティは、複数のユーザーにアクセス権をまとめて設定する場合にも使用できます。

1 人のユーザー、1 つのリソースまたはイベント・カレンダー（権限付与者）から、別のユーザー、リソースまたはイベント・カレンダー（権限受領者）に付与されるアクセス権は、次のとおりです。

- 権限付与者のカレンダー・データへの代理アクセス権（**-designate**）
- 権限付与者のカレンダー・イベントの表示権（**-eventview**）
- 権限付与者のタスクの表示権（**-taskview**）
- 会議への出席を権限付与者に依頼する権限（**-scheduling**）

-ls オプションは、**-mod** オプションおよび **-reset** オプションと相互に排他的な関係にあることに注意してください。

`uniaccessrights` を実行するには、Calendar Server が起動している必要があります。

オプション

-designate

<modifier>

代理権を変更します。代理は、別のユーザーまたはリソースの予定表を変更する権限が割り当てられたユーザーです。このフラグを使用すると、権限付与者のカレンダー・データへの代理アクセス権を付与または削除できます。<modifier> 引数の詳細は「<modifier> 引数の書式」を参照してください。

-eventview

<modifier>

カレンダー・イベントの表示権を変更します。このフラグを使用すると、権限付与者の予定表エントリの表示権を設定できます。<modifier> 引数の詳細は「<modifier> 引数の書式」を参照してください。

-grantor

フィルタ: <user> / [<resource>] / [<eventcal>]

所有するカレンダーへのアクセス権を付与するエンティティを指定します。この権限付与者は、ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーにすることができます。データベースで複数のエンティティが一致した場合、`uniaccessrights` は失敗します。このオプションを使用するには、アクション (**-mod/-reset/-ls**) を指定する必要があります。構文の詳細は、「<user> 引数の書式」を参照してください。

-grantee

<user>

アクセス権を受領するユーザーを指定します。マルチノード・ネットワークの場合、権限受領者のリモート・ノード ID を指定します。データベースで複数のユーザーが一致した場合、(Q)uit、(P)rompt または (A)pply to all の3つのオプションから選択するよう求められます。一致するユーザーのいずれにもアクセス権を付与しない場合は、Q を入力します。一致するユーザーごとにオプションを選択するには、P を入力します。一致するすべてのユーザーに指定のアクセス権を付与する場合は、A を選択します。このオプションを使用するには、アクション (**-mod/-reset/-ls**) を指定する必要があります。<user> 引数の詳細は「<user> 引数の書式」を参照してください。

-host

<hostname>

ノードを、指定されたホストのノードに制限します。ポート番号を指定するには <hostname> パラメータに対して `hostname:port` の書式を使用します。

-info

<modifier> 文字列を指定する際に有効な引数として使用できるキーおよび値を出力します。<modifier> にリストされた値は、テーブルに従って表示されます。

-krb

自動 Kerberos ログインを使用します。このオプションは、**-p** オプションおよび **-uid** オプションとは併用できません。

-ls

特定のアクセス・タイプに関して、現時点で権限付与者が権限受領者に付与している権限をリストします。**-designate**、**-eventview**、**-taskview** および **-scheduling** の中から1つ以上を使用して、表示させる権限を指定します。指定がない場合は、すべての権限が表示されます。権限受領者は必ず指定してください。権限付与者によって付与されたデフォルトの権限は、ヘッダー `Grantee: Everyone` に表示されます。

-mod

1 人のユーザーから別のユーザーに付与されるアクセス権を変更します。このオプションは、**-grantor** オプションおよび **-grantee** オプションと併用します。**-designate**、**-eventview**、**-taskview** および **-scheduling** の中から 1 つ以上を使用して、変更する権限を指定します。

-n

<node-ID>

ノードを指定します。ホスト上に複数のノードが存在する場合は必須です。この場合、（マルチノード・ネットワーク）ノード ID は権限付与者のノードであることが必要です。また、リモート・ノードを次のように権限受領者のフィルタで指定する必要があります。

```
uniaccessright -mod -grantor "R=Conference Room Saturn" -grantee "NODE-ID=2001" -n  
2000 -p <sysoppassword>
```

-p

<psw>

管理者のパスワードを指定します。管理者が設定されている場合は必須です。パスワードが必須の状況でこのオプションを使用していない場合、ユーザーは `uniaccessrights` によってパスワードを要求されます。

-reset

アクセス権を権限付与者のデフォルト権限にリセットします。このオプションは、**-grantor** オプションおよび **-grantee** オプションと併用します。ユーザーのデフォルト権限を表示するには、**-ls** オプションを使用します。

-scheduling

<modifier>

スケジューリング権を変更します。このフラグを使用すると、ユーザー（権限受領者）に対し、別のユーザー（権限付与者）に出席を依頼する権限を付与できます。<modifier> 引数の詳細は「<modifier> 引数の書式」を参照してください。

-taskview

<modifier>

タスクの表示権を変更します。このフラグを使用すると、権限付与者のタスクの表示権を設定できます。<modifier> 引数の詳細は「<modifier> 引数の書式」を参照してください。

-uid

<user-ID>

管理者のユーザー ID です。指定されていない場合は、SYSOP が使用されます。

-v

uniaccessrights の現在のバージョン番号を出力します。

-h

uniaccessrights の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

書式**<user> 引数の書式**

この引数は、ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーを表します。<user> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は任意の文字列です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。value 文字列はワイルド・カード文字「*」で終了する場合があります。スラッシュ「/」が文字列に含まれる場合は、キーと値のペアのデリミタとして解釈されることを防ぐため、文字「¥」でエスケープする必要があります。たとえば、"S=Hoopla/OU1=R¥/D" のようになります。

UNIX 環境でシェルが文字列を処理する場合（たとえば文字列がコマンドラインで提供される場合や、ユーティリティに引数として渡される場合）、文字列は引用符で囲む必要があります。また、シェルにとって意味をなす文字が文字列に含まれる場合は、シェルが解釈することを防ぐためその文字をエスケープ（つまり、エスケープ文字「¥」を前に付ける）します。

注意： ID のキーと値のペアが <user> 引数で指定されている場合は、ともに指定されている他のキーと値のペアはすべて無視されます。

指定する場合の例は、"S=Kilpi/G=Eeva"、"S=B*/G=Nicole/O=Acme" および "O=Acme/ID=1111/OU1=authors" のようになります。

表 F-2 使用可能なキー： UNIACCESSRIGHTS

キー	X.400 フィールド
S	姓
G	名
I	イニシャル
ID	識別子
UID	ユーザー固有の識別子
R	リソース名
N	リソース番号
X	世代
N	イベント・カレンダー名
OU1	組織単位 1
OU2	組織単位 2
OU3	組織単位 3
OU4	組織単位 4
O	組織
C	国
A	管理ドメイン
P	プライベート・ドメイン

<modifier> 引数の書式

<modifier> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は各キーに対して使用できる次の表内の任意の値です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。

キーによって指定されたタイプのカレンダー・エントリへのアクセス権を付与しない場合は、**-designate** オプションで NONE を使用します。このタイプのカレンダー・エントリに対する出席依頼への応答権限を付与する場合は、REPLY を使用します。権限付与者が所有する（作成した）、指定のカレンダー・エントリの詳細を変更する権限を付与する場合は、MODIFY を使用します。特定タイプのイベントの開始時間および終了時間を参照する権限を代理ユーザーに付与する場合は、VIEWTIMES を使用します。権限受領者にすべてのカレンダー・データに対する代理権を付与する場合は、キーおよび値 "ALL=true" を使用します。すべての代理権を削除する場合は、キーおよび値 "ALL=false" を使用します。代理権をユーザーに付与する場合は、少なくとも 1 つのタイプのイベントの変更権限を含める必要があります。

キーで指定されたタイプのすべてのカレンダー・エントリを、権限受領者が参照できないようにする場合は、**-eventview** オプションおよび **-taskview** オプションで **NONE** を使用します。イベントの時間を参照する権限を付与する場合は、**TIMES** を使用します。権限付与者の予定表に含まれる、指定のカレンダー・エントリの詳細をすべて参照できる権限を付与する場合は、**ALL** を使用します。ユーザーの予定表のパブリック・エントリは、常に他のユーザーが参照できます。

-scheduling オプションで設定できる唯一の権限は、ユーザーに出席を依頼する権限です。権限付与者に出席を依頼する権限を、権限受領者に付与するには、**"CANBOOKME=true"** を使用します。

表 F-3 UNIACCESSRIGHTS -designate オプションに使用可能なキーおよび値

キー	可能な値
ALL	[true, false]
PUBLICEVENT	[NONE, REPLY, VIEWTIMES, MODIFY]
CONFIDENTIALEVENT	[NONE, REPLY, VIEWTIMES, MODIFY]
PERSONALEVENT	[NONE, REPLY, VIEWTIMES, MODIFY]
NORMALEVENT	[NONE, REPLY, VIEWTIMES, MODIFY]
PUBLICTASK	[NONE, MODIFY]
CONFIDENTIALTASK	[NONE, MODIFY]
PERSONALTASK	[NONE, MODIFY]
NORMALTASK	[NONE, MODIFY]

表 F-4 UNIACCESSRIGHTS -eventview オプションに使用可能なキーおよび値

キー	値
ALL	[true, false]
CONFIDENTIAL	[NONE, TIMES, ALL]
PERSONAL	[NONE, TIMES, ALL]
NORMAL	[NONE, TIMES, ALL]

表 F-5 UNIACCESSRIGHTS -taskview オプションに使用可能なキーおよび値

キー	値
ALL	[true, false]
CONFIDENTIAL	[NONE, ALL]

表 F-5 UNIACCESSRIGHTS -taskview オプションに使用可能なキーおよび値（続き）

キー	値
PERSONAL	[NONE, ALL]
NORMAL	[NONE, ALL]

表 F-6 UNIACCESSRIGHTS -scheduling オプションに使用可能なキーおよび値

キー	値
CANBOOKME	[true, false]

例

- Don Martin が付与したアクセス権をリストする場合は、次のようになります。

```
% uniaccessrights -ls -host gravel -grantor "S=Martin/G=Don" -p sysOpPsw
```
- Don Martin の予定表に含まれる個人イベントを参照する権限、および Don Martin のタスクを参照する権限を、O'Brian 氏に付与する場合は、次のようになります。

```
% uniaccessrights -mod -grantee "S=OBrian" -grantor "S=Martin/G=Don" -host gravel -p sysop1 -eventview "PERSONAL=ALL" -taskview "all=true"
```
- Don Martin の予定表に対する代理アクセス権のうち、Don が受信した機密イベントへの出席依頼に返答する権限、および Don が作成したパブリック・イベントを変更する権限を O'Brian 氏に付与する場合は、次のようになります。

```
% uniaccessrights -mod -grantee "S=OBrian" -grantor "S=Martin/G=Don" -host gravel -p sysop1 -designate "CONFIDENTIALEVENT=REPLY/PUBLICEVENT=MODIFY/PERSONALEVENT=VIEWTIMES"
```
- (OU1 の値が IS である) 複数のユーザーに、Don のカレンダー・データへの完全な代理アクセス権を付与する場合は、次のようになります。

```
% uniaccessrights -mod -grantee "OU1=IS" -grantor "S=Martin/G=Don" -host gravel -p sysop1 -designate "ALL=true"
```

複数のユーザーが指定された権限受領者と一致する場合、次のようにアクションの選択を求められます。

```
uniaccessright: Found 4 users that match the grantee filter.
uniaccessright: (Q)uit/(P)rompt/(A)pply to all [q,p,a] : a
```
- スケジューリング権限を設定して、学生が Smith 教授（Professor）に出席を依頼できないようにする場合は、次のようになります。

```
% uniaccessrights -mod -grantor "S=Smith/G=John/JOB-TITLE=Professor" -grantee "OU2=student" -host gravel -p sysop1 -scheduling "canbookme=false"
```

- イベント・カレンダー **Montreal Jazz Festival** のパブリック・イベントを変更する代理権を、ユーザー **John Smith** に付与する場合は、次のようになります。

```
% uniaccessrights -mod -grantee "S=Smith/G=John" -grantor "N=Montreal Jazz Festival" -host gravel -p sysopPsw -n 24 -designate "PUBLICEVENT=MODIFY"
```

- ユーザー **John Smith** が付与したすべての代理アクセス権をリストする場合は、次のようになります。

```
% uniaccessrights -ls -grantor "S=Smith/G=John" -grantee "S=*" -host gravel -p sysopPsw -n 24 -designate
```

- ユーザー **John Smith** が **Kusuma** 氏に付与した、すべてのタスク表示アクセス権をリストする場合は、次のようになります。

```
% uniaccessrights -ls -grantor "S=Smith/G=John" -grantee "S=Kusuma" -host gravel -p sysopPsw -n 24 -taskview "ALL=true"
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー

UNIADDNODE

uniaddnode: 新しい Calendar Server ノードを作成するか、既存の Calendar Server ノードを再初期化します。

構文

内部ディレクトリ（外部ディレクトリ以外）

```
uniaddnode -n <node-ID> [-t <timezone>] [-a <nodealias>] [-p <sysOpPsw>] [-r] [-y]
uniaddnode -sn <startNode-ID> [-num <numberOfNodes>] [-p <sysOpPsw>] [-y]
uniaddnode -v
uniaddnode -h
```

外部ディレクトリ・サーバー（OCS）

```
uniaddnode [-n nodeId] [-t timezone] [-a alias] [-r] [-p sysOpPWD] [-y]
uniaddnode -sn StartNode -num NumberOfNodes [-p sysopPWD] [-y]
uniaddnode -v
uniaddnode -h
```


外部ディレクトリ・サーバー（スタンドアロン）

```
uniaddnode -n <node-ID> -w <DmPsw> [-p <SysOpPsw>] [-t <timezone>] [-a <nodealias>]
[-r] [-y]
uniaddnode -sn <startNode-ID> [-num <numberOfNodes>] -w <DmPsw> [-p <SysOpPsw>] [-y]
uniaddnode -v
uniaddnode -h
```

説明

このユーティリティは、新しい **Calendar Server** ノードの作成および初期化を行います。

また、既存のノードの再初期化にも使用できます。ノードを再初期化する場合は、あらかじめそのノードのカレンダ・データベースから、ユーザー・アカウントを削除しておく必要があります。ユーザー・アカウントを削除しておくことで、接続されているすべてのノードおよび LDAP ディレクトリ（存在する場合のみ）で、ユーザー・アカウント情報のクリーン・アップが正常に行われます。

外部の LDAP ディレクトリを使用していない場合では、使用方法が多少異なります。

uniaddnode は、**Calendar Server** が停止しているときだけ、実行可能です。

オプション

-a

<nodealias>

ノードのエイリアスを指定します。<nodealias> は説明的な言葉で、スペースを含むことはできません。

-n

<node-ID>

ノード ID を指定します。ノード ID は、ネットワークのすべてのノードで一意であることが必要です。-n オプションは、**Oracle Internet Directory** に接続されている場合はオプションです。**Oracle Internet Directory** では、ノード ID が指定されていない場合、ランダム・ノード ID が生成されます。

-p

<SysOpPsw>

ノードの SYSOP パスワードを指定します。

Oracle Internet Directory では、すべてのノードで同じパスワードが共有されます。コマンドラインでパスワードが指定されていない場合は、パスワード要求が行われます。

ディレクトリ・サーバーに接続していない場合、パスワードが指定されていなければ、パスワードは空として設定されます。

-r

ノードを再初期化します。

警告： ノードの既存のカレンダ・データは、すべて失われます。

ディレクトリ・サーバーの場合は、再初期化を行う前に、すべてのユーザーおよびリソースをノードから削除しておく必要があります。

-t

<timezone>

ノードのタイムゾーンを指定します。デフォルトは、Calendar Server のインストール時に設定されるタイムゾーンです。タイムゾーンは、`unitzinfo` ユーティリティ、`$ORACLE_HOME/ocal/misc/timezone.ini` ファイルまたはこのマニュアルの[付録 G「タイムゾーン表」](#)で取得できます。

-w

<DmPsw>

スタンドアロン限定。無制限のアクセスに対するディレクトリ・サーバー・マネージャのパスワード（つまり、`unison.ini` ファイルの [LDAP] `mgrdn` パラメータの値に関連付けられたパスワード）を指定します。コマンドラインでパスワードが指定されていない場合は、パスワード要求が行われます。このパラメータは、Oracle Internet Directory ではなく、外部の LDAP ディレクトリ・サーバーを使用したインストールでのみ、必要になります。

-sn

<startNode-ID>

初期化する最初のノードのノード ID を指定します。ノード ID は、ネットワークのすべてのノードで一意であることが必要です。**-num** を使用して、初期化するノード ID の数を指定します。ノード ID は、指定した開始ノード ID から、自動的に生成されます。

-num

<numberOfNodes>

-sn オプションと併用することで、ノードの初期化のために生成されるノード ID の数を指定できます。

-y

-r オプションと併用することで、再初期化の確認を省略できます。

-v

uniaddnode の現在のバージョン番号を出力します。

-h

uniaddnode の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- ディレクトリ・サーバーを使用して、ノード ID が 44、エイリアスが admin、およびタイムゾーンがニューヨーク市である Calendar Server のノードを作成する場合は、次のようになります。

```
% uniaddnode -n 44 -a admin -t EST5EDT -w DmPsw -p sysOpPsw
uniaddnode: Database initialization done
uniaddnode: node [44] has been successfully initialized
```

\$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini ファイルの [<YOURNODEID>] セクションに、次のエントリが表示されます。

```
[44]
name = <internally-assigned value>
version = A.02.62
aliases = admin
timezone = EST5EDT
```

ファイル

\$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini

これは、Calendar Server の構成ファイルです。uniaddnode ユーティリティによって、このファイルに新しいノードごとに 1 つのノード・エントリが作成されます。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

0 成功

0 以外のすべての値はエラーを示します。

UNIADMRIGHTS

uniadmrightrights: ユーザーの管理権限を管理します。

構文

```
uniadmrightrights -info [-n <node-ID>] [-host <hostname>]  
[[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
```

```
uniadmrightrights -ls -u <user> [-n <node-ID>] [-host <hostname>]  
[[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
```

```
uniadmrightrights -scope <scope> -u <user> [-n <node-ID>] [-host <hostname>]  
[[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
```

```
uniadmrightrights -u <user> [-n <node-ID>] [-host <hostname>]  
[[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]  
[-user <rightsFilter>] [-resource <rightsFilter>] [-eventcal <rightsFilter>]  
[-admgrp <rightsFilter>] [-pubgrp <rightsFilter>] [-node <rightsFilter>]  
[-server <rightsFilter>] [-csm <rightsFilter>]
```

```
uniadmrightrights -v  
uniadmrightrights -h
```

説明

このユーティリティによって、SYSOP は、ユーザーに一部の管理権限を付与したり、付与した権限を取り消すことができます。また、各ユーザーが保有する権限を判別することもできます。

既存の権限はノードごとに付与され、次に示す管理権限の様々なグループに適用されます。

- ユーザー管理
- リソース管理
- イベント・カレンダー管理
- 管理グループ管理
- パブリック・グループ管理
- ノード管理
- サーバー管理
- CSM (Calendar Server Manager デーモン) 管理

デフォルトでは、uniadmrightrights のオプション **-ls** を使用すると、SYSOP からユーザーに付与されたすべての権限がリストされます。**-ls** オプションはその他のオプションと相互排他的な関係にあることに注意してください。

uniadmrights を実行するには、Calendar Server が起動している必要があります。

注意： ユーザーの作成時にこれらの管理権限の 1 つ以上を自動的に付与するには、user.ini ファイルで ManageHolidays、ManageAdmGroups および CreatePublicGroups の各キーワードを使用してください。

オプション

-admgrp

<rightsFilter>

管理グループの管理権限を指定します。このオプションを使用すると、管理グループを管理する権限を付与できます。**-ls** との併用はできません。<rightsFilter> 引数の詳細は「<rightsFilter> 引数の書式」を参照してください。

-csm

<rightsFilter>

CSM（Calendar Server Manager）へのアクセス権を付与または取り消します。このオプションを使用すると、Calendar Server を起動および停止する権限、またはノードを無効にする権限を付与できます。**-ls** との併用はできません。

ただし、管理者ユーザーがこれらの権限を使用する際には、CSM の UID およびパスワードを入力する必要があります。uninode、unistart、unistop を参照してください。<rightsFilter> 引数の詳細は「<rightsFilter> 引数の書式」を参照してください。

-eventcal

<rightsFilter>

イベント・カレンダーの管理権限を指定します。**-ls** との併用はできません。<rightsFilter> 引数の詳細は「<rightsFilter> 引数の書式」を参照してください。

-host

<hostname>

ホストを指定します。ホストがリモートの場合に必須。ポート番号を指定するにはホスト名パラメータに対して hostname:port の書式を使用します。

-krb

自動 Kerberos ログインを使用します。このオプションは、**-p** オプションおよび **-uid** オプションとは併用できません。

-ls

指定したユーザーに付与されたすべての権限をリストします。

-n

<node-ID>

ノードを指定します。ホスト上に複数のノードが存在する場合は必須です。

-node

<rightsFilter>

ノード・レベルの管理権限を指定します。<rightsFilter> 引数の詳細は「<rightsFilter> 引数の書式」を参照してください。

-p

<psw>

管理者のパスワードを指定します。管理者が設定されている場合は必須です。パスワードが必須の状況でこのオプションを使用していない場合、ユーザーは uniadmrights によってパスワードを要求されます。

-pubgrp

<rightsFilter>

パブリック・グループの管理権限を指定します。**-ls** との併用はできません。<rightsFilter> 引数の詳細は「<rightsFilter> 引数の書式」を参照してください。

-resource

<rightsFilter>

リソースの管理権限を指定します。**-ls** との併用はできません。<rightsFilter> 引数の詳細は「<rightsFilter> 引数の書式」を参照してください。

-scope

<scope>

管理権限の有効範囲を指定します。<scope> に使用できる値は、`node` および `network` の 2 つです。指定されたノードだけに権限を設定する場合は、`node` を使用します。ネットワークのすべてのノード（指定されたノードに接続しているすべてのノード）に管理権限を適用する場合は、`network` を使用します。有効範囲は、このユーザーに付与されたすべての権限グループに適用されます。

-server

<rightsFilter>

サーバーの管理権限を指定します。**-ls** との併用はできません。<rightsFilter> 引数の詳細は「<rightsFilter> 引数の書式」を参照してください。

-u

<user>

管理権限が変更またはリストされる (**-ls**) ユーザーを指定します。データベースで複数のユーザーが一致した場合、`uniadmrightrights` は失敗します。指定された権限は、一致したユーザーに付与されます。<user> 引数の詳細は「<user> 引数の書式」を参照してください。

-uid

<user-ID>

管理者のユーザー ID です。指定されていない場合は、`SYSOP` が使用されます。

-user

<rightsFilter>

ユーザーの管理権限を指定します。**-ls** との併用はできません。<rightsFilter> 引数の詳細は「<rightsFilter> 引数の書式」を参照してください。

-v

`uniadmrightrights` の現在のバージョン番号を出力します。

-h

`uniadmrightrights` の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

書式

<user> 引数の書式

<user> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は任意の文字列です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。value 文字列はワイルド・カード文字「*」で終了する場合があります。スラッシュ「/」が文字列に含まれる場合は、キーと値のペアのデリミタとして解釈されることを防ぐため、文字「¥」でエスケープする必要があります。たとえば、"S=Hoopla/OU1=R¥/D" のようになります。

UNIX 環境でシェルが文字列を処理する場合（たとえば文字列がコマンドラインで提供される場合や、ユーティリティに引数として渡される場合）、文字列は引用符で囲む必要があります。また、シェルにとって意味をなす文字が文字列に含まれる場合は、シェルが解釈することを防ぐためその文字をエスケープ（つまり、エスケープ文字「¥」を前に付ける）します。

注意： ID のキーと値のペアが <user> 引数で指定されている場合は、ともに指定されている他のキーと値のペアはすべて無視されます。

指定する場合の例は、"S=Kilpi/G=Eeva"、"S=B*/G=Nicole/O=Acme" および "O=Acme/ID=1111/OU1=authors" のようになります。

表 F-7 使用可能なキー： UNIADMRIGHTS

キー	X.400 フィールド
S	姓
G	名
I	イニシャル
ID	識別子
UID	ユーザー固有の識別子
X	世代
OU1	組織単位 1
OU2	組織単位 2
OU3	組織単位 3
OU4	組織単位 4
O	組織
C	国

表 F-7 使用可能なキー： UNIADMRIGHTS（続き）

キー	X.400 フィールド
A	管理ドメイン
P	プライベート・ドメイン

<rightsFilter> 引数の書式

<rightsFilter> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は各キーに対して使用できる次の表内の任意の値です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。

指定された管理権限グループのすべての管理権限を、指定されたユーザーに付与する場合は、キーおよび値 "ALL=true" を使用します。すべての権限を削除する場合は、キーおよび値 "ALL=false" を使用します。

表 F-8 UNIADMRIGHTS -user オプションに使用可能なキーおよび値

キー	可能な値	説明
All	[true, false]	この表内のすべての権限
Create	[true, false]	ユーザー・アカウントの作成
Modify	[true, false]	ユーザー・アカウント情報の変更
Delete	[true, false]	ユーザー・アカウントの削除
Enable	[true, false]	ユーザー・アカウントの有効化または無効化
Setrights	[true, false]	ユーザーへの管理権限の付与
Setdesignate	[true, false]	ユーザーの代理権の設定
Setviewing	[true, false]	ユーザーのカレンダー・データの表示権の付与
Password	[true, false]	ユーザー・パスワードの変更
Transferevent	[true, false]	イベントの所有権を 1 人のユーザーから別のユーザーに移行

表 F-9 UNIADMRIGHTS -resource オプションに使用可能なキーおよび値

キー	可能な値	説明
All	[true, false]	この表内のすべての権限
Create	[true, false]	リソース・アカウントの作成
Modify	[true, false]	リソース・アカウント情報の変更
Delete	[true, false]	リソース・アカウントの削除

表 F-9 UNIADMRIGHTS -resource オプションに使用可能なキーおよび値（続き）

キー	可能な値	説明
Enable	[true, false]	リソース・アカウントの有効化または無効化
Setdesignate	[true, false]	リソースの代理権の設定
Setviewing	[true, false]	リソースのカレンダ・データの表示権の付与
Password	[true, false]	リソース・パスワードの変更
Transferevent	[true, false]	イベントの所有権を1つのリソースから別のリソースに移行

表 F-10 UNIADMRIGHTS -eventcal オプションに使用可能なキーおよび値

キー	可能な値	説明
All	[true, false]	この表内のすべての権限
Create	[true, false]	イベント・カレンダ・アカウントの作成
Modify	[true, false]	イベント・カレンダ・アカウント情報の変更
Delete	[true, false]	イベント・カレンダ・アカウントの削除
Enable	[true, false]	イベント・カレンダ・アカウントの有効化または無効化
Setdesignate	[true, false]	イベント・カレンダの代理権の設定
Setviewing	[true, false]	イベント・カレンダのカレンダ・データの表示権の付与
Password	[true, false]	イベント・カレンダ・パスワードの変更
Manageevent	[true, false]	イベント・カレンダのエントリの管理

表 F-11 UNIADMRIGHTS -admgrp オプションに使用可能なキーおよび値

キー	可能な値	説明
All	[true, false]	この表内のすべての権限
Create	[true, false]	管理グループの作成
Modify	[true, false]	管理グループの変更
Delete	[true, false]	管理グループの削除
Attach	[true, false]	管理グループへのユーザーの追加

表 F-11 UNIADMRIGHTS -admgrp オプションに使用可能なキーおよび値（続き）

キー	可能な値	説明
Detach	[true, false]	管理グループからのユーザーの削除

表 F-12 UNIADMRIGHTS -pubgrp オプションに使用可能なキーおよび値

キー	可能な値	説明
All	[true, false]	この表内のすべての権限
Create	[true, false]	パブリック・グループの作成
Modify	[true, false]	パブリック・グループの変更
Delete	[true, false]	パブリック・グループの削除
Attach	[true, false]	パブリック・グループへのユーザーの追加
Detach	[true, false]	グループからのユーザーの削除

表 F-13 UNIADMRIGHTS -node オプションに使用可能なキーおよび値

キー	可能な値	説明
All	[true, false]	この表内のすべての権限
Edit-item-ini	[true, false]	Calendar Administrator の Web インタフェースを使用した、user.ini ファイル、resource.ini ファイルまたは eventcal.ini ファイルの編集
Restore	[true, false]	ユーザーのリストア
Holiday	[true, false]	休日の管理
Modify	[true, false]	Calendar Administrator の Web インタフェースを使用した、unison.ini のノード情報（エイリアス、タイムゾーンなど）の変更

表 F-14 UNIADMRIGHTS -server オプションに使用可能なキーおよび値

キー	可能な値	説明
All	[true, false]	この表内のすべての権限
Edit-unison-ini	[true, false]	unison.ini ファイルの更新

表 F-15 UNIADMRIGHTS -csm オプションに使用可能なキーおよび値

キー	可能な値	説明
All	[true, false]	この表内のすべての権限
Access	[true, false]	サーバーおよびノードを起動および停止するための、CSM へのアクセス

例

- ユーザー Alice Smith のすべての管理権限をリストする場合は、次のようになります。
`% uniadmrights -ls -u "S=Smith/G=Alice" -host gravel -p psw -n 203`
- ノード 80 で、R&D に所属する Don Martin に休日の管理権限を付与する場合は、次のようになります。
`% uniadmrights -u "S=Martin/G=Don/OU1=r&d" -node "holiday=true" -n 80 - krb`
- R&D の Don Martin の有効範囲を、ノード 80 と同じネットワークにあるすべてのノードに設定する場合は、次のようになります。
`% uniadmrights -u "S=Martin/G=Don/OU1=r&d" -n 80 - krb -scope "network"`
- ノード 80 で、R&D の Don Martin に、管理グループを作成および削除する権限、およびユーザー・アカウントの作成権限を付与する場合は、次のようになります。
`% uniadmrights -u "S=Martin/G=Don/OU1=r&d" -user "create=true" -admgrp "create=true/delete=true" -n 80 - krb`
- ホスト montreal 上で、Joan Bean の持つすべてのユーザー管理権限を削除する場合は、次のようになります。
`% uniadmrights -u "S=Bean/G=Joan" -user "all=false" -host montreal -p psw`

警告

ディレクトリ・サーバー警告

Calendar Server のユーティリティ用のディレクトリ・サーバー構成の含意を理解することが重要です。

サプライヤ・コンシューマ構成では、コンシューマとサプライヤ間の更新のスケジューリングによって両者間の一時的な違いが発生する場合があります。対応するサプライヤとまだ同期化されていないコンシューマ・ディレクトリ・サーバーから、Calendar Server のユーティリティが読み取っている可能性があります。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー

UNIARCH (UNIX 専用)

uniarch: Calendar Server の TAR アーカイブを作成します。

構文

```
uniarch [-d] [-y] [-t | -f <filename>] [-p <path>] [-u <user>] [-g <group>]
```

```
uniarch -v
```

```
uniarch -h
```

説明

uniarch は、Calendar Server のバックアップを作成します。デフォルトでは、`$ORACLE_HOME/ocal` ディレクトリ全体がアーカイブされます。

uniarch は、バックアップ対象のディレクトリの外から起動する必要があります。たとえば、Calendar Server 全体をバックアップする場合は、`$ORACLE_HOME/ocal` ディレクトリの外から uniarch を起動します。

uniarch は、Calendar Server が停止しているときだけ実行可能です。

警告： uniarch では、Calendar Server の内部データベースがバックアップされます。ディレクトリ・サーバーを使用している場合は、そのデータベースもバックアップする必要があります。

オプション

-d

Calendar Server データベースである `$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes` のコンテンツのみをバックアップします。

-f

<filename>

アーカイブ・ファイルの名前を指定します。このオプションを使用していない場合は、ファイル名の要求が行われます。

-t

TAR デフォルト・デバイスがアーカイブ先ファイルで使用されるようにします。

-y

デフォルトでは、アーカイブの作成を続行する前に、uniarch による確認要求が行われます。このオプションは、uniarch に対し、確認要求を行わずに自動的に続行するよう指示します。コール処理に tty が関連付けられていない場合は、デフォルト設定に戻ります。

-g

<group>

UNIX グループを指定します。

-p

<path>

db ディレクトリ (-p "\$ORACLE_HOME/ocal" など) が含まれているサーバー・ディレクトリのパスを指定します。

-u

<user>

UNIX ユーザーを指定します。

-v

uniarch の現在のバージョン番号を出力します。

-h

uniarch の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- \$ORACLE_HOME/ocal ディレクトリ全体をアーカイブする場合は、次のようになります。

```
% uniarch
uniarch: working, please wait ...
uniarch: input tar archive destination file name: jan07-99.bkup
uniarch: archive "$ORACLE_HOME/ocal" and redirect to "jan07-99.bkup"? (y/n)
uniarch: archive completed
```

- コマンドライン上でアーカイブ先ファイルの名前を指定し、Calendar Server データベースのみをアーカイブする場合は、次のようになります。

```
% uniarch -d -f jan07-99-db.bkup
uniarch: working, please wait ...
uniarch: archive "$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes" and redirect to
"jan07-99-db.bkup"? (y/n)

uniarch: archive completed
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNIB2LENDIAN

unib2lendian: Calendar Server ノード・データベースを、ビッグ・エンディアンの UNIX プロセッサ用形式からリトル・エンディアンの Windows NT プロセッサ用形式に変換します。このユーティリティの詳細は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに問い合わせてください。

構文

```
unib2lendian [-n <node-ID>]
unib2lendian -v
unib2lendian -h
```

説明

unib2lendian は、ビッグ・エンディアンの UNIX マシン（Solaris、HP-UX または AIX など）で実行される Calendar Server から、リトル・エンディアン・マシン（Windows NT など）で実行される Calendar Server に、ノード・データベースを移行する際に使用します。

このユーティリティは、ビッグ・エンディアン形式からリトル・エンディアン形式に、ノード・データベースの *.dat ファイルを変換します。変換は、ファイルのコピーで実行されるため、元のデータベースは変更されません。変換に必要なファイルは *.dat ファイルのみです。それ以外のファイルは変換先のマシンでビルドされます。

unil2bendian は、リトル・エンディアン形式からビッグ・エンディアン形式にファイルを変換するための、補足的なユーティリティです。

unib2lendian は、Calendar Server が停止しているときだけ実行可能です。

オプション

-n

<node-ID>

変換するノードを指定します。ローカル・ホスト上に複数のノードが存在する場合は必須です。

-v

unib2lendian の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unib2lendian の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

ビッグ・エンディアン・マシンからリトル・エンディアン・マシンへのノードの移行

次の例では、ノード 45 を変換し、ビッグ・エンディアン・マシンで実行される Calendar Server から、リトル・エンディアン・システムで実行される Calendar Server に移行します。

1. 両方のマシンで Calendar Server を停止します。この手順の中で指示があるまでは、どちらのサーバーも再起動しないでください。

2. ターゲット・ノードで unib2lendian を実行します。

```
unib2lendian -n 45
```

変換されたノードのコピーは、\$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/<N#>/perm_conv ディレクトリに保存されます。ここで <N#> は、ターゲット・ノードに対応する unison.ini セクションの name パラメータの値です。

3. 古いホストの \$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini ファイルにあるターゲット・ノードに対応するセクションを、新しいホストの unison.ini ファイルにコピーします。次に例を示します。

```
[45]
name = N1
version = A.02.50
```

古いホストの unison.ini ファイルからこのセクションを削除します。

4. perm_conv ディレクトリのすべての *.dat ファイルを、リトル・エンディアン・システムの \$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/<N#>/perm ディレクトリにコピーします。
5. 新しいホストで、\$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/Nempty/perm/unison.dbd ファイルおよび \$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/Nempty/perm/vista.ctb ファイルを \$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/<N#>/perm ディレクトリにコピーします。
6. 新しいノードの tmp ディレクトリを作成し、必要なファイルをコピーします。

```
% cd $ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/<N#>
% mkdir tmp
% cd tmp
% copy $ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/Nempty/tmp/set.dat
% copy $ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/Nempty/tmp/set.key
% copy $ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/Nempty/tmp/unitmp.dbd
```

7. ターゲット・ノードがノード・ネットワークに含まれている場合は、Calendar Server を再起動する前に、ネットワーク情報を必ず更新してください。

警告： この手順を実行しなかった場合、データ障害またはデータベースの破損、あるいはその両方が発生する可能性があります。

まず、ノード・ネットワークのすべての Calendar Server を停止します。

unidbfix を使用して、remotenode.dat ファイルの情報をすべてのノードの remotenode.ini ファイルにエクスポートします。たとえば、ネットワークがノード 30、35、40、45 および 50 で構成されている場合は、次のようになります。

```
% unidbfix -export -n 30
% unidbfix -export -n 35
% unidbfix -export -n 40
% unidbfix -export -n 45
```

```
% unidbfix -export -n 50
```

unidbfix は、各ノードのローカル・ホストで実行する必要があります。

ネットワークの各ノードの \$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/<Nx>/perm/remotenode.ini ファイルを編集し、ノード 45 に関連付けられているホスト名を変更します。

リトル・エンディアン の UNIX ホストに移行する場合は、ファイルの所有権およびコピー済ファイルの権限が正しく設定されるように、ノード 45 で uniclean を実行します。

ノード 45 で unidbfix -k を実行し、キー・ファイルを作成します。

unidbfix -import を使用し、remotenode.ini ファイルの新しい情報を使用して、remotenode.dat ファイルを更新します。

```
% unidbfix -import -n 30
```

```
% unidbfix -import -n 35
```

```
% unidbfix -import -n 40
```

```
% unidbfix -import -n 45
```

```
% unidbfix -import -n 50
```

これにより、各ノードのキー・ファイルの再ビルドも行われます。

\$ORACLE_HOME/ocal/misc/nodes.ini ファイルを更新し、ノード 45 のホスト名の変更を反映させます。

8. すべての Calendar Server を再起動します。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

0 成功

1 データベースの変換に失敗

2 使用時エラー

関連項目

unidbfix、unistart、unistop、uninode

UNICHECK (UNIX 専用)

unicheck: Calendar Server のファイル・システムを確認します。

構文

```
unicheck [-nowarn] [-nodb | -maxdb <n>] [-c]
```

```
unicheck -v
```

```
unicheck -h
```

説明

unicheck: Calendar Server のファイル・システムを確認します。このユーティリティはまず、Calendar Server がローカル・オペレーティング・システムで実行されるバージョンであることをチェックします。これに該当しない場合、unicheck は、ユーザーに処理を続行するかどうかを確認します。そのバージョンがローカル・オペレーティング・システムで実行可能な場合、unicheck は次のことを確認します。

1. すべての必要なファイルおよびディレクトリが存在する。
2. 権限、所有者およびグループの情報が、ファイルおよびディレクトリで正しく設定されている。

矛盾はすべてレポートされます。ファイルまたはディレクトリ全体が見つからない場合を除いて、すべての問題は uniclean を実行することで修正されます。

ファイル・システムを正常な状態に保つには、unicheck を定期的に行う必要があります。

unicheck は、Calendar Server が起動中か停止中にかかわらず、実行できます。

オプション

-maxdb

<n>

unicheck によって考慮される、ノード・データベースの最大数を指定します。たとえば <n>=30 の場合、unicheck は、最初の 30 のノード・データベースに関連するファイルだけをチェックします。

-nowarn

警告メッセージを出力しません（エラー・メッセージは出力されます）。

-nodb

データベース・ファイルをチェックしません。

-c

静的ファイルごとに、システム独立チェックサムを計算します。このオプションを使用する場合は、将来の使用のために、出力をファイルにリダイレクトする必要があります。

-v

unicheck の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unicheck の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- unichck を実行する場合は、次のようになります（出力のセクションは [...] に置き換えて簡略化しています）。

```
% unichck
unichck: checking all directories
unichck: checking directory "$ORACLE_HOME/ocal"
unichck: checking directory "$ORACLE_HOME/ocal/tmp"
[...]
unichck: checking files in directory "$ORACLE_HOME/ocal/bin"
unichck: checking files in directory "$ORACLE_HOME/ocal/misc"
[...]
unichck: checking versions of files in directory "$ORACLE_HOME/ocal/bin"
unichck: check completed
```

- unichck を実行し、警告メッセージを表示せず、各ファイルのチェックサムを計算しない場合は、次のようになります（出力のセクションは、[...] に置き換えて簡略化しています）。

```
% unichck -nowarn -c
unichck: checking all directories
unichck: checking directory "$ORACLE_HOME/ocal"
unichck: checking directory "$ORACLE_HOME/ocal/tmp"
[...]
unichck: checking files in directory "$ORACLE_HOME/ocal/bin"
unichck: checking files in directory "$ORACLE_HOME/ocal/misc"
unichck: checking files in directory "$ORACLE_HOME/ocal/man"
[...]
unichck: checking versions of files in directory "$ORACLE_HOME/ocal/bin"
unichck: computing checksums
unichcksum: checksum of the file "$ORACLE_HOME/ocal/misc/timezone.ini" is 17289
unichcksum: checksum of the file "$ORACLE_HOME/ocal/bin/addme" is 33775
[...]
unichck: check completed
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNICKSUM

unicksum: ファイルのチェックサムを生成します。

構文

unicksum <filename>

unicksum -v
unicksum -h

説明

unicksum は、同じファイルの 2 つのインスタンス間の差異が存在するかどうかを判別するために使用する、ファイルのチェックサムを生成します。

unicksum は、Calendar Server が起動中か停止中かにかかわらず、実行できます。

オプション

-v

unicksum の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unicksum の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- unitzinfo 実行可能ファイルのチェックサムを生成する場合は、次のようになります。

```
% unicksum unitzinfo  
unicksum: checksum of the file "unitzinfo" is 18187
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNICLEAN (UNIX 専用)

`uniclean`: Calendar Server のファイル・システムをクリーン・アップします。

構文

`uniclean`

`uniclean -v`
`uniclean -h`

説明

`uniclean` は、一部の一時ファイルを削除し、ファイルとディレクトリ、および所有者とグループの権限が正しく設定されていることを確認して、Calendar Server のファイル・システムをクリーン・アップします。

`uniclean` は、Calendar Server が起動中か停止中かにかかわらず、実行できます。

オプション

-v

`uniclean` の現在のバージョン番号を出力します。

-h

`uniclean` の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー

3 ユーザー割込み

関連項目

unicheck

UNICPINR

unicpinr: unicpoutr によって作成されたファイルから Calendar Server ノードへ、リソース・データをコピーします。

構文

```
unicpinr [-add] [-f <filename>] [-start <day> <month> <year>] [-end <day> <month> <year>] [-host <hostname>] -n <Node-ID> [-p <SysOpPsw>]
```

```
unicpinr [-add] [-start <day> <month> <year>] [-end <day> <month> <year>] [-host <hostname>] -n <Node-ID> [-p <SysOpPsw>] < [<filename>]
```

```
unicpinr -ls [<filename(s)>]
```

```
unicpinr -v
```

```
unicpinr -h
```

説明

(unicpoutr ユーティリティで作成された) リソース・データが含まれているファイルを、Calendar Server ノードにコピーします。このユーティリティを unicpoutr と併用すると、1 つのノードから別のノードにリソースを移動したり、1 つのリソースの予定表を別のリソースに追加することが可能になります（「例」を参照）。

デフォルトでは、ファイル内で指定されたリソースが移動先の Calendar Server ノードに存在する必要があります。これに該当しない場合は、**-add** オプションを使用してリソースを追加します。

unicpinr は、Calendar Server が起動しているときだけ実行可能です。

移動先ノードへのコピー時に、ファイル内の情報が unicpinr によってどのように処理されるかを理解しておくことが重要です。

■ リソース識別子

キー R、N、CA、S、G、ID、LOC、PHONE、FAX には、値が存在します（これらのキーの詳細は、「リソース識別子キー」を参照してください）。ファイル内のすべてのキーが値を持つように、NULL 以外の値だけが unicpoutr によってファイルに出力されます。

unicpinr は、これらの値を使用して、移動先ノードの既存のリソースを一意に識別します。

- パスワードおよび予定表に固有の作業環境

移動先ノードでリソースがすでに存在する場合、これらの値はすでに設定されており、unicpinr によって入力ファイルの値で上書きされることはありません。

- 予定表情報

移動先ノードでリソースがすでに存在する場合、unicpinr は単純に、入力ファイル内の予定表情報を既存の予定表に追加します。

ファイル内のすべてのイベントは、リソースを所有者として移動先ノードにコピーされます。必要に応じて、各イベントの詳細には、イベントの出席者、出席者の状況および元の作成者と所有者を示す、追加のデータが含まれます。イベントの定期的なインスタンスまたは繰り返されるインスタンスは、それぞれが切り離され、個々のイベントとしてコピーされます。

-start オプションおよび **-end** オプションを使用すると、指定した時間内のイベントだけをインポートできます。

注意： unicpinr ユーティリティは、リソースのインポート時に resource.ini ファイルを参照しません。

オプション

-add

リソースを、ファイルにコピーする前にデータベースに追加します。リソースがすでにノードに存在する場合は、このオプションを指定するとエラーになります。ディレクトリ・サーバーでは、リソースは baseDN の下に作成されます。

-end

<day> <month> <year>

処理されるイベントの終了日を設定します。デフォルトでは、ファイル内のすべてのイベントが作成されます。このオプションおよび **-start** オプションを使用すると、一部のイベントを除外できます。日付は "日 月 年" という形式で表します。年は 4 桁の数字を使用して指定します。有効な日付書式は "12 mar 1995"、"15 october 1994"、"25 12 1995" (1995 年 12 月 25 日の場合) などです。"mar 12 1995" や "12 dec" などの書式は無効となり、エラー・メッセージが生成されます。

-f

<filename>

入力ファイル名を指定します。unicpoutr ユーティリティで作成したファイルを指定する必要があります。デフォルトでは、標準入力を使用されます。

-host

<hostname>

ホストを指定します。ホストがリモートの場合に必須。ポート番号を指定するには <hostname> パラメータに対して hostname:port の書式を使用します。

-ls

指定されたファイル名ごとに、ファイル名およびファイル名に含まれるリソースの名前をリストします。リソース名はファイル名の後ろに表示されます。unicpoutr コマンドで作成されたファイル以外はリストされません。ファイル名が指定されていない場合、現行ディレクトリ (.) のファイルが調査されます。

-n

<node-ID>

ノードを指定します。

-p

<SysOpPsw>

SYSOP パスワードを指定します。このオプションを使用していない場合は、パスワードの入力要求が行われます。

-start

<day> <month> <year>

処理されるイベントの開始日を設定します。デフォルトでは、ファイル内のすべてのイベントが作成されます。このオプションおよび **-end** オプションを使用すると、一部のイベントを除外できます。日付は " 日 月 年 " という形式で表します。年は 4 桁の数字を使用して指定します。有効な日付書式は "12 mar 1995"、"15 october 1994"、"25 12 1995" (1995 年 12 月 25 日の場合) などです。"mar 12 1995" や "12 dec" などの書式は無効となり、エラー・メッセージが生成されます。

-v

unicpinr の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unicpinr の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

リソース識別子キー

表 F-16 使用可能なキー： UNICPINR

キー	説明
R	リソース名
N	リソース番号
CA	容量
S	連絡先の姓
G	連絡先の名
LOC	場所
PHONE	電話番号
FAX	FAX 番号

例

1 つのノードから別のノードへのリソースの移動

1 つのノードから別のノードにリソースを移動するには、unicpinr を unicpoutr および uniuser と併用します。次の例では、リソース betacam がノード 30 からノード 35 に移動します。

1. 移動するリソースがノード 30 に存在することを確認します。

% uniuser -ls "R=Betacam" -n 30
R=Betacam/CA=1/ID=1234
2. リソース・データをファイルにコピーします。

% unicpoutr "R=Betacam" -f betacam.dat -n 30
3. ノードからリソースを削除します。通常は 2 つの異なるノードに同じリソースを存在させる必要がないため、この手順を行います。

% uniuser -del "R=Betacam" -n 30
4. 移動先ノードにリソースを追加します。

% unicpinr -add -f betacam.dat -n 35

1 つのリソースの予定表を別のリソースの予定表に追加

1 つのリソースの予定表を別のリソースの予定表に追加するには、unicpinr を unicpoutr と併用します。この例では、PineNook の予定表が OakCranny の予定表に追加されると同時に、OakCranny の容量が 5 に変更されます。

1. (ノード 30 から) PineNook のリソース・データをファイルにコピーします。

```
% unicpoutr "R=PineNook" -f pinenook.dat -n 30
```

2. ファイルを編集し、リソース識別子を変更して OakCranny のリソース識別子と一致させます。

```
% vi pinenook.dat
```

3. ノード 30 の OakCranny にファイルをコピーします。このリソースはすでに存在するため、パスワードおよび予定表に固有の作業環境は上書きされません。

```
% unicpinr -f pinenook.dat -n 30
```

PineNook の予定表情報が、OakCranny の既存の予定表情報に追加されます。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

警告

予定表のサイズおよび処理時間

ファイル内の予定表のサイズにより、unicpinr が完了するまでに時間がかかる場合があります。

このユーティリティの制限

unicp ファミリのユーティリティには次の制限があるため、これを考慮する必要があります。

■ イベント

移動されたユーザー（またはリソース）から見た場合、新しい予定表内の各移動済イベントは個人イベントで、詳細には十分なデータが含まれており、イベントの作成者および出席者を判別することができます。すべてのリンクは中断されていますが、詳細にはリンクの再ビルドに必要な情報が含まれています。

また、1人のユーザー（または1つのリソース）の予定表が別のユーザー（またはリソース）の予定表に追加されると、重複予約が発生する可能性があります。

- ユーザー（またはリソース）の削除

ユーザー（またはリソース）を新しいノードに移動した場合、そのユーザー（またはリソース）を（`uniuser -del` を使用して）古いノードから削除する必要があります。

リソースが削除されると、そのリソースのすべてのトレースが削除されます。そのため、イベントに対するリソースの予約は解除されます。

ユーザーが削除されると、そのユーザーのすべてのトレースが削除されます。そのため、そのユーザーに対する、他のユーザーが作成したイベントへの出席依頼は取り消されます。また、最も重要なことは、そのユーザーが作成したすべてのイベントが削除されることです。その結果、移動されたユーザーによってイベントへの出席を依頼された、古いノードのすべてのユーザーは、そのイベントを参照できなくなります。

- 複数のユーザー（またはリソース、あるいはその両方）の同時移動

複数のユーザー（またはリソース、あるいはその両方）を移動する場合、移動処理を3つのフェーズに分けて実行することをお勧めします。

1. 各ユーザー（またはリソース、あるいはその両方）をソース・ノードからファイルにコピーします（`unicpoutu` または `unicpoutr`、あるいはその両方を使用）。
2. 各ユーザー（またはリソース、あるいはその両方）をソース・ノードから削除します。
3. 各ユーザー（またはリソース、あるいはその両方）の情報を移動先ノードにコピーします（`unicpinu` または `unicpinr`、あるいはその両方を使用）。

これにより、移動するすべてのユーザー（またはリソース、あるいはその両方）のすべてのリンク上の情報は、失われません（「ユーザー（またはリソース）の削除」を参照）。

ディレクトリ・サーバー警告

Calendar Server のユーティリティ用のディレクトリ・サーバー構成の含意を理解することが重要です。サプライヤ・コンシューマ構成では、コンシューマとサプライヤ間の更新のスケジューリングによって両者間の一時的な違いが発生する場合があります。対応するサプライヤとまだ同期化されていないコンシューマ・ディレクトリ・サーバーから、Calendar Server のユーティリティが読み取っている可能性があります。

関連項目

`unicpoutr`、`unicpr`

UNICPINU

unicpinu: unicipoutuによって作成されたユーザー・データのファイルのコンテンツを、Calendar Server ノードにコピーします。

構文

```
unicpinu [-add ] [-f <filename>] [-start <day> <month> <year>] [-end <day> <month>
<year>] [-host <hostname>] -n <node-ID> [-p <SysOpPsw>]
```

```
unicpinu [-add ] [-start <day> <month> <year>] [-end <day> <month> <year>] [-host
<hostname>] -n <node-ID> [-p <SysOpPsw>] < <filename>
```

```
unicpinu -ls [<filename(s)>]
```

```
unicpinu -v
```

```
unicpinu -h
```

説明

unicpinu は、(unicpoutuによって作成された) ユーザー・データが含まれているファイルを、Calendar Server ノードにコピーします。このユーティリティを unicipoutu と併用することで、1 人のユーザーの予定表を別のユーザーの予定表に追加できます（「例」を参照）。このユーティリティを unicipoutu と併用して 1 つのノードから別のノードにユーザーを移動することもできますが、ユーザー移動用の正しいユーティリティは unimvuser です。unimvuser を使用すれば、unicpoutu と unicipinu を使用してユーザーを移動した場合に発生するデータ障害を回避できます。

デフォルトでは、ファイル内で指定されたユーザーが移動先の Calendar Server ノードに存在する必要があります。これに該当しない場合は、**-add** オプションを使用してユーザーを追加できます。

unicpinu は、Calendar Server が起動しているときだけ実行可能です。

移動先ノードへのコピー時に、入力ファイル内の情報が unicipinu によってどのように処理されるかを理解しておくことが重要です。

■ X.400 名およびアドレス

これらは、キー S、G、I、X、およびキー OU1、OU2、OU3、OU4、O、C、A、P のそれぞれに対する値です（これらのキーの詳細は、「X.400 名およびアドレス・キー」を参照してください）。ファイル内のすべてのキーが値を持つように、NULL 以外の値だけが unicipoutu によってファイルに出力されます。

unicpinu は、これらの値を使用して、移動先ノードの既存のユーザーを一意に識別します。

- 個人情報、パスワードおよび予定表に固有の作業環境

個人情報には、従業員番号、電話番号、内線番号、FAX 番号、役職名および会社のメール・アドレスが含まれます。

移動先ノードでユーザーがすでに存在する場合、これらの値はすでに設定されており、unicpinu によって入力ファイルの値で上書きされることはありません。

- 予定表情報

移動先ノードでユーザーがすでに存在する場合、unicpinu は単純に、入力ファイル内の予定表情報を既存の予定表に追加します。

ファイル内のすべてのイベントは、ユーザーを所有者として移動先ノードにコピーされます。必要に応じて、各イベントの詳細には、イベントへの出席を依頼されたユーザー、これらのユーザーの状況および元の作成者と所有者を示す、追加のデータが含まれます。イベントの定期的なインスタンスまたは繰り返されるインスタンスは、それぞれが切り離され、個々のイベントとしてコピーされます。

-start オプションおよび **-end** オプションを使用すると、指定した範囲内のイベントおよび完了済タスクだけをインポートできます。未完了のタスクは常にインポートされます。

警告： 休日は、unicpoutu によって会議として出力されるため、unicpinu によって会議として入力されます。移動先ノードですでに存在する休日だけが、ユーザーの予定表で休日として表示されます。

注意： unicpinu ユーティリティは、ユーザーのインポート時に user.ini ファイルを参照しません。

オプション

-add

ユーザーをデータベースに追加し、ユーザーの予定表にコピーします。ユーザーがすでに存在する場合は、このオプションを指定するとエラーになります。ディレクトリ・サーバーでは、ディレクトリ・サーバーにユーザーが存在し（入力ファイルで指定された X.400 のキーと値のペアが、すべて一致する必要があります）、そのユーザーがまだカレンダー・ユーザーではないことが必要です。

-end

<day> <month> <year>

処理されるイベントおよびタスクの終了日を設定します。デフォルトでは、ファイル内のすべてのイベントおよびタスクが作成されます。このオプションおよび **-start** オプションを使用すると、一部のイベントおよびタスクを除外できます。日付は "日 月 年" という形式で表します。年は 4 桁の数字を使用して指定します。有効な日付書式は "12 mar 1995"、"15 october 1994"、"25 12 1995"（1995 年 12 月 25 日の場合）などです。"mar 12 1995" や "12 dec" などの書式は無効となり、エラー・メッセージが生成されます。

-f

<filename>

入力ファイル名を指定します。入力ファイルは、unicpouttr ユーティリティを使用して作成する必要があります。このオプションが指定されていない場合、標準入力を使用されます。

-host

<hostname>

ホストを指定します。ホストがリモートの場合に必須。ポート番号を指定するには <hostname> パラメータに対して hostname:port の書式を使用します。

-ls

<filename(s)>

指定された各ファイル名に対し、ファイル名およびファイルに含まれるユーザーの X.400 名およびアドレスが出力されます。X.400 名およびアドレスは、ファイル名の後ろに表示されます。unicpoutu コマンドで作成されたファイル以外はリストされません。ファイル名が指定されていない場合、現行ディレクトリ (.) のファイルが調査されます。

-n

<node-ID>

ノードを指定します。

-p

<SysOpPsw>

SYSOP パスワードを指定します。このオプションを使用していない場合は、パスワードの入力要求が行われます。

-start

<day> <month> <year>

処理されるイベントおよびタスクの開始日を設定します。デフォルトでは、ファイル内のすべてのイベントおよびタスクが作成されます。このオプションおよび **-end** オプションを使用すると、一部のイベントおよびタスクを除外できます。日付は " 日 月 年 " という形式で表します。年は 4 桁の数字を使用して指定します。有効な日付書式は "12 mar 1995"、"15 october 1994"、"25 12 1995"（1995 年 12 月 25 日の場合）などです。"mar 12 1995" や "12 dec" などの書式は無効となり、エラー・メッセージが生成されます。

-v

unicpinu の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unicpinu の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

X.400 名およびアドレス・キー

表 F-17 使用可能なキー： UNICPINU

キー	説明
S	姓
G	名
I	イニシャル
X	世代
OU1	組織単位 1
OU2	組織単位 2
OU3	組織単位 3
OU4	組織単位 4
O	組織
C	国
A	管理ドメイン
P	プライベート・ドメイン

例

1つのノードから別のノードへのユーザーの移動

1つのノードから別のノードにユーザーを移動するには、unicpinu を unicpoutu および uniuser と併用します。この例では、ユーザー Sarah Herman がノード 20 からノード 44 に移動し、このユーザーの組織単位の 1 つが Sales から R&D に変更されます。

警告： この手順は、unimvuser では必要な移動を完了できない場合のみ、使用してください。この手順の実行時に失われるデータの詳細は、「警告」を参照してください。

1. 移動するユーザーがノード 20 に存在することを確認します。

```
% uniuser -ls "S=Herman/G=S*" -n 20
S=Herman/G=Sarah/OU1=Dallas/OU2=Sales/ID=1234
```

2. ユーザーの予定表およびユーザー情報をファイルにコピーします。

```
% unicpoutu "G=Sara*/S=Herman" -f sherman.dat -n 20
```

3. ノード 20 からユーザーを削除します。通常は 2 つの異なるノードに同じユーザーを存在させる必要がないため、この手順を行います。ディレクトリ・サーバーでは、この後に unicpinu -add コマンドが続く場合はこの手順を行う必要があります。

```
% uniuser -del "G=Sara*/S=Herman" -n 20
```

4. 移動先ノードにユーザーを追加します。

```
% unicpinu -add -f sherman.dat -n 44
S=Herman/G=Sarah/OU1=Dallas/OU2=Sales/ID=1234
```

1人のユーザーの予定表を別のユーザーの予定表に追加

1人のユーザーの予定表を別のユーザーの予定表に追加するには、unicpinu を unicpoutu と併用します。この例では、Sarah Herman の予定表を Yannick Olafsen の予定表に追加します。

1. Sarah Herman のユーザー・データを（ノード 20 から）ファイルにコピーします。

```
% unicpoutu "G=Sara*/S=Herman" -f sherman.dat -n 20
```

2. sherman.dat ファイルを編集し、X.400 名およびアドレスを変更して、Yannick Olafsen のデータベースに含まれているものと一致させます。

```
% vi sherman.dat
```

3. ノード 24 にファイルをコピーします。Yannick Olafsen はすでにユーザーとしてノード 24 に存在するため、このユーザーの個人情報、パスワードおよび予定表の作業環境は上書きされません。

```
% unicipinu -f sherman.dat -n 24
```

Sarah Herman の予定表情報が、Yannick Olafsen の既存の予定表情報に追加されます。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

警告

予定表のサイズおよび処理時間

ファイル内の予定表のサイズにより、unicpinu が完了するまでに時間がかかる場合があります。

このユーティリティの制限

unicp ファミリのユーティリティには次の制限があるため、これを考慮する必要があります。

- イベント

移動されたユーザー（またはリソース）から見た場合、新しい予定表内の各移動済イベントは個人イベントで、詳細には十分なデータが含まれており、イベントの作成者および出席者を判別することができます。すべてのリンクは中断されていますが、詳細にはリンクの再ビルドに必要な情報が含まれています。

また、1 人のユーザー（または 1 つのリソース）の予定表が別のユーザー（またはリソース）の予定表に追加されると、重複予約が発生する可能性があります。

- ユーザー（またはリソース）の削除

ユーザー（またはリソース）を新しいノードに移動した場合、そのユーザー（またはリソース）を（`uniuser -del` を使用して）古いノードから削除する必要があります。

リソースが削除されると、そのリソースのすべてのトレースが削除されます。そのため、イベントに対するリソースの予約は解除されます。

ユーザーが削除されると、そのユーザーのすべてのトレースが削除されます。そのため、そのユーザーは、他のユーザーが作成したイベントへの出席を依頼されたユーザーのリストから除外されます。また、最も重要なことは、そのユーザーが作成したすべてのイベントが削除されることです。その結果、移動されたユーザーによってイベントへの出席を依頼された、古いノードのすべてのユーザーは、そのイベントを参照できなくなります。

■ 複数のユーザー（またはリソース、あるいはその両方）の同時移動

複数のユーザー（またはリソース、あるいはその両方）を移動する場合、移動処理を3つのフェーズに分けて実行することをお勧めします。

1. 各ユーザー（またはリソース、あるいはその両方）をソース・ノードからファイルにコピーします（`unicpoutu` または `unicpoutr`、あるいはその両方を使用）。
2. 各ユーザー（またはリソース、あるいはその両方）をソース・ノードから削除します。
3. 各ユーザー（またはリソース、あるいはその両方）の情報を移動先ノードにコピーします（`unicpinu` または `unicpinr`、あるいはその両方を使用）。

これにより、移動するすべてのユーザー（またはリソース、あるいはその両方）の間にあるリンク上の情報は、すべて失われません（「ユーザー（またはリソース）の削除」を参照）。

ディレクトリ・サーバー警告

Calendar Server のユーティリティ用のディレクトリ・サーバー構成の含意を理解することが重要です。サプライヤ・コンシューマ構成では、コンシューマとサプライヤ間の更新のスケジューリングによって両者間の一時的な違いが発生する場合があります。対応するサプライヤとまだ同期化されていないコンシューマ・ディレクトリ・サーバーから、Calendar Server のユーティリティが読み取っている可能性があります。

関連項目

`unicpoutu`、`unicpu`

UNICPOUTR

unicpoutr: リソース・データを Calendar Server ノードからファイルにコピーします。

構文

```
unicpoutr -u resname [-f <filename>] [-host <hostname>] [-start <day> <month>  
<year>] [-end <day> <month> <year>] -n <node-ID> [-p <SysOpPsw>]
```

```
unicpoutr -v
```

```
unicpoutr -h
```

説明

unicpoutr は、リソースのデータを Calendar Server ノードからファイルにコピーします。unicpinr ユーティリティと併用することで、1 つのノードから別のノードにリソースを移動したり、1 つのリソースから別のリソースにリソースの予定表をコピーできます。

unicpoutr は、Calendar Server が起動しているときだけ実行可能です。

unicpoutr は、次の情報をファイルにコピーします（出力ファイルの書式およびコンテンツの詳細は、unicpr を参照してください）。

- リソース名
- リソース・パスワード
- リソース情報（容量、電話番号など）
- 予定表固有の作業環境
- 予定表情報

予定表情報には、リソースが所有する、またはリソースが出席を依頼された、過去および将来のイベントが含まれます。出席者レコードを持つ特定の期間内のイベントをエクスポートする場合は、**-start** オプションおよび **-end** オプションを使用できます。

次の情報は、ファイルにコピーされません。

- リソースに関連付けられたアクセス制御リスト（リソースに付与された、またはリソースが付与した代理権の詳細を含む）

オプション

-end

<day> <month> <year>

処理されるイベントの終了日を設定します。デフォルトでは、すべてのイベントが出力されます。このオプションおよび **-start** オプションを使用すると、一部のイベントを除外できます。日付は " 日 月 年 " という形式で表します。年は 4 桁の数字を使用して指定します。有効な日付書式は "12 mar 1995"、"15 october 1994"、"25 12 1995" (1995 年 12 月 25 日の場合) などです。"mar 12 1995" や "12 dec" などの書式は無効となり、エラー・メッセージが生成されます。

-f

<filename>

出力ファイル名を指定します。このファイルはすでに存在していないことが必要です。デフォルトでは、標準出力が使用されます。

-host

<hostname>

ホストを指定します。ホストがリモートの場合に必須。ポート番号を指定するには <hostname> パラメータに対して hostname:port の書式を使用します。

-n

<node-ID>

ノードを指定します。

-p

<sysOpPsw>

SYSOP パスワードを指定します。このオプションを使用していない場合は、パスワードの入力要求が行われます。

-start

<day> <month> <year>

処理されるイベントの開始日を設定します。デフォルトでは、すべてのイベントが出力されます。このオプションおよび **-end** オプションを使用すると、一部のイベントを除外できます。日付は " 日 月 年 " という形式で表します。年は 4 桁の数字を使用して指定します。有効な日付書式は "12 mar 1995"、"15 october 1994"、"25 12 1995" (1995 年 12 月 25 日の場合) などです。"mar 12 1995" や "12 dec" などの書式は無効となり、エラー・メッセージが生成されます。

-u

<res>

リソースの指定に使用します。<res> 引数は、単一のリソースと一致する必要があります。これに該当しない場合はエラーがレポートされます。この引数の指定方法は、「<res> 引数の書式」を参照してください。

-v

unicpoutr の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unicpoutr の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

書式

<res> 引数の書式

<res> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は任意の文字列です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。value 文字列はワイルド・カード文字「*」で終了する場合があります。スラッシュ「/」が文字列に含まれる場合は、キーと値のペアのデリミタとして解釈されることを防ぐため、文字「¥」でエスケープする必要があります。たとえば、"R=betacam¥/loaner/S=Khupfer" のようになります。

UNIX 環境でシェルが文字列を処理する場合（たとえば文字列がコマンドラインで提供される場合や、ユーティリティに引数として渡される場合）、文字列は引用符で囲む必要があります。また、シェルにとって意味をなす文字が文字列に含まれる場合は、シェルが解釈することを防ぐためその文字をエスケープ（つまり、エスケープ文字「¥」を前に付ける）します。

ID のキーと値のペアが <res> 引数で指定されている場合は、ともに指定されている他のキーと値のペアはすべて無視されます。

表 F-18 使用可能なキー： UNICPOUTR

キー	フィールド
R	リソース名
N	リソース番号
CA	容量
S	連絡先の姓
G	連絡先の名
ID	識別子

表 F-18 使用可能なキー： UNICPOUTR（続き）

キー	フィールド
UID	リソース固有の識別子
LOC	場所
PHONE	電話番号
FAX	FAX 番号

例

- リソース Kitchen のリソース・データを、ノード 20 からファイル kitchen.dat にコピーする場合は、次のようになります。

```
% unicpoutr "R=Kitchen" -f kitchen.dat -n 20
```

- 1998 年 1 月 10 日より前のイベントを無視して、同じタスクを実行する場合は、次のようになります。

```
% unicpoutr "R=Kitchen" -f kitchen.dat -start 10 1 1998 -n 20
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

警告**予定表のサイズおよび処理時間**

予定表のサイズにより、unicpoutr が完了するまでに時間がかかる場合があります。

このユーティリティの制限

unicp ファミリのユーティリティには次の制限があるため、これを考慮する必要があります。

■ イベント

移動されたユーザー（またはリソース）から見た場合、新しい予定表内の各移動済イベントは個人イベントで、詳細には十分なデータが含まれており、イベントの作成者および出席者を判別することができます。すべてのリンクは中断されていますが、詳細にはリンクの再ビルドに必要な情報が含まれています。

また、1人のユーザー（または1つのリソース）の予定表が別のユーザー（またはリソース）の予定表に追加されると、重複予約が発生する可能性があります。

■ ユーザー（またはリソース）の削除

ユーザー（またはリソース）を新しいノードに移動した場合、そのユーザー（またはリソース）を（`uniuser -del` を使用して）古いノードから削除する必要があります。

リソースが削除されると、そのリソースのすべてのトレースが削除されます。そのため、イベントに対するリソースの予約は解除されます。

ユーザーが削除されると、そのユーザーのすべてのトレースが削除されます。そのため、そのユーザーに対する、他のユーザーが作成したイベントへの出席依頼は取り消されます。また、最も重要なことは、そのユーザーが作成したすべてのイベントが削除されることです。その結果、移動されたユーザーによってイベントへの出席を依頼された、古いノードのすべてのユーザーは、そのイベントを参照できなくなります。

■ 複数のユーザー（またはリソース、あるいはその両方）の同時移動

複数のユーザー（またはリソース、あるいはその両方）を移動する場合、移動処理を3つのフェーズに分けて実行することをお勧めします。

1. 各ユーザー（またはリソース、あるいはその両方）をソース・ノードからファイルにコピーします（`unicpoutu` または `unicpoutr`、あるいはその両方を使用）。
2. 各ユーザー（またはリソース、あるいはその両方）をソース・ノードから削除します。
3. 各ユーザー（またはリソース、あるいはその両方）の情報を移動先ノードにコピーします（`unicpinu` または `unicpinr`、あるいはその両方を使用）。

これにより、移動するすべてのユーザー（またはリソース、あるいはその両方）の間にあるリンク上の情報は、すべて失われません（「ユーザー（またはリソース）の削除」を参照）。

ディレクトリ・サーバー警告

Calendar Server のユーティリティ用のディレクトリ・サーバー構成の含意を理解することが重要です。サプライヤ・コンシューマ構成では、コンシューマとサプライヤ間の更新のスケジューリングによって両者間の一時的な違いが発生する場合があります。対応するサプライヤとまだ同期化されていないコンシューマ・ディレクトリ・サーバーから、Calendar Server のユーティリティが読み取っている可能性があります。

関連項目

unicpinr、unicpr

UNICPOUTU

unicpoutu: ユーザー・データを Calendar Server ノードからファイルにコピーします。

構文

```
unicpoutu -u username [-f <filename>] [-host <hostname>] [-start <day> <month>
<year>] [-end <day> <month> <year>] [-holiday] -n <node-ID> [-p <SysOpPsw>]
```

```
unicpoutu -v
unicpoutu -h
```

説明

unicpoutu は、ユーザーのデータを Calendar Server ノードからファイルにコピーします。unicpinu ユーティリティと併用することで、1 人のユーザーから別のユーザーに、予定表をコピーできます。このユーティリティを unicpinu と併用して 1 つのノードから別のノードにユーザーを移動することもできますが、ユーザー移動用の正しいユーティリティは unimvuser です。unimvuser を使用すれば、unicpoutu と unicpinu を使用してユーザーを移動した場合に発生するデータ障害を回避できます。

unicpoutu は、Calendar Server が起動しているときだけ実行可能です。

unicpoutu は、次の情報をファイルにコピーします（出力ファイルの書式およびコンテンツの詳細は、unicpu を参照してください）。

- ユーザーの X.400 名およびアドレス。
- ユーザーのパスワード。
- ユーザーの個人情報。個人情報には、従業員番号、電話番号、内線番号、FAX 番号、役職名および会社のメール・アドレスが含まれます。
- ユーザーの予定表固有の作業環境。

- ユーザーの予定表情報。

予定表情報には、ユーザーが所有する、またはユーザーが出席を依頼された、過去および将来のイベントが含まれます。休日イベントは、**-holiday** オプションを使用している場合以外は含まれません。**-start** オプションおよび **-end** オプションを使用すると、特定の期間内のイベントをエクスポートできます。

また、未完了のすべてのタスク、およびすべての完了済タスク（デフォルトの場合）が含まれます。**-start** オプションおよび **-end** オプションを使用すると、特定の期間内の完了済タスクをエクスポートできます。

次の情報は、ファイルにコピーされません。

- ユーザーに関連付けられたアクセス制御リスト：これには、代理権または表示権などの、ユーザーに付与された権限およびユーザーが付与した権限の詳細が含まれます。
- ユーザーのグループ。

オプション

-end

<day> <month> <year>

処理されるイベントおよびタスクの終了日を設定します。デフォルトでは、すべてのイベントおよびタスクが出力されます。このオプションおよび **-start** オプションを使用すると、一部のイベントおよびタスクを除外できます。日付は "日 月 年" という形式で表します。年は 4 桁の数字を使用して指定します。有効な日付書式は "12 mar 1995"、"15 october 1994"、"25 12 1995"（1995 年 12 月 25 日の場合）などです。"mar 12 1995" や "12 dec" などの書式は無効となり、エラー・メッセージが生成されます。

-f

<filename>

出力ファイル名を指定します。このファイルはすでに存在していないことが必要です。デフォルトでは、標準入力を使用されます。

-holiday

ユーザーの予定表の休日を出力ファイルに含めます。休日は会議として出力され、ノードのすべてのユーザーが会議の出席者として含まれます。ユーザーの予定表は、その後 `unicpinu` を使用して新しいノードに入力されます。新しいノードでは、既存の休日だけがユーザーの予定表で休日として表示され、古いノードの休日は会議として表示されます。

-host

<hostname>

ホストを指定します。ホストがリモートの場合に必須。ポート番号を指定するには <hostname> パラメータに対して hostname:port の書式を使用します。

-n

<node-ID>

ノードを指定します。

-p

<sysOpPsw>

SYSOP パスワードを指定します。このオプションを使用していない場合は、パスワードの入力要求が行われます。

-start

<day> <month> <year>

処理されるイベントおよびタスクの開始日を設定します。デフォルトでは、すべてのイベントおよびタスクが出力されます。このオプションおよび **-end** オプションを使用すると、一部のイベントおよびタスクを除外できます。日付は " 日 月 年 " という形式で表します。年は 4 桁の数字を使用して指定します。有効な日付書式は "12 mar 1995"、"15 october 1994"、"25 12 1995"（1995 年 12 月 25 日の場合）などです。"mar 12 1995" や "12 dec" などの書式は無効となり、エラー・メッセージが生成されます。

-u

<user>

ユーザーの指定に使用します。<user> 引数は、単一のユーザーと一致する必要があります。これに該当しない場合はエラーがレポートされます。この引数の指定方法は、「<user> 引数の書式」を参照してください。

-v

unicpoutu の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unicpoutu の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

書式

<user> 引数の書式

<user> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は任意の文字列です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。value 文字列はワイルド・カード文字「*」で終了する場合があります。スラッシュ「/」が文字列に含まれる場合は、キーと値のペアのデリミタとして解釈されることを防ぐため、文字「¥」でエスケープする必要があります。たとえば、"S=Hoopla/OU1=R¥/D" のようになります。

UNIX 環境でシェルが文字列を処理する場合（たとえば文字列がコマンドラインで提供される場合や、ユーティリティに引数として渡される場合）、文字列は引用符で囲む必要があります。また、シェルにとって意味をなす文字が文字列に含まれる場合は、シェルが解釈することを防ぐためその文字をエスケープ（つまり、エスケープ文字「¥」を前に付ける）します。

注意： ID のキーと値のペアが <user> 引数で指定されている場合は、ともに指定されている他のキーと値のペアはすべて無視されます。

表 F-19 使用可能なキー： UNICPOUTU

キー	X.400 フィールド
S	姓
G	名
I	イニシャル
ID	識別子
UID	ユーザー固有の識別子
X	世代
OU1	組織単位 1
OU2	組織単位 2
OU3	組織単位 3
OU4	組織単位 4
O	組織
C	国
A	管理ドメイン
P	プライベート・ドメイン

例

- Herman, Sarah のユーザー・データをノード 20 からファイル sherman.dat にコピーする場合は、次のようになります。

```
% unicipoutu -u "S=Herman/G=Sa*" -f sherman.dat -n 20
```

- 1998 年 1 月 10 日より前のタスクおよびイベントを無視して、同じタスクを実行する場合は、次のようになります。

```
unicpoutu -u "S=Herman/G=Sa*" -f sherman.dat -start 10 1 1998 -n 20
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

警告

予定表のサイズおよび処理時間

予定表のサイズにより、unicpoutu が完了するまでに時間がかかる場合があります。

このユーティリティの制限

unicp ファミリのユーティリティには次の制限があるため、これを考慮する必要があります。

- イベント

移動されたユーザー（またはリソース）から見た場合、新しい予定表内の各移動済イベントは個人イベントで、詳細には十分なデータが含まれており、イベントの作成者および出席者を判別することができます。すべてのリンクは中断されていますが、詳細にはリンクの再ビルドに必要な情報が含まれています。

また、1 人のユーザー（または 1 つのリソース）の予定表が別のユーザー（またはリソース）の予定表に追加されると、重複予約が発生する可能性があります。

- ユーザー（またはリソース）の削除

ユーザー（またはリソース）を新しいノードに移動した場合、そのユーザー（またはリソース）を（`uniuser -del` を使用して）古いノードから削除する必要があります。

リソースが削除されると、そのリソースのすべてのトレースが削除されます。そのため、イベントに対するリソースの予約は解除されます。

ユーザーが削除されると、そのユーザーのすべてのトレースが削除されます。そのため、そのユーザーは、他のユーザーが作成したイベントへの出席者リストから除外されます。また、最も重要なことは、そのユーザーが作成したすべてのイベントが削除されることです。その結果、移動されたユーザーによってイベントへの出席を依頼された、古いノードのすべてのユーザーは、そのイベントを参照できなくなります。

■ 複数のユーザー（またはリソース、あるいはその両方）の同時移動

複数のユーザー（またはリソース、あるいはその両方）を移動する場合、移動処理を3つのフェーズに分けて実行することをお勧めします。

1. 各ユーザー（またはリソース、あるいはその両方）をソース・ノードからファイルにコピーします（unicpoutu または unicpoutr、あるいはその両方を使用）。
2. 各ユーザー（またはリソース、あるいはその両方）をソース・ノードから削除します。
3. 各ユーザー（またはリソース、あるいはその両方）の情報を移動先ノードにコピーします（unicpinu または unicpinr、あるいはその両方を使用）。

これにより、移動するすべてのユーザー（またはリソース、あるいはその両方）の間にあるリンク上の情報は、すべて失われません（「ユーザー（またはリソース）の削除」を参照）。

ディレクトリ・サーバー警告

Calendar Server のユーティリティ用のディレクトリ・サーバー構成の含意を理解することが重要です。サプライヤ・コンシューマ構成では、コンシューマとサプライヤ間の更新のスケジューリングによって両者間の一時的な違いが発生する場合があります。対応するサプライヤとまだ同期化されていないコンシューマ・ディレクトリ・サーバーから、Calendar Server のユーティリティが読み取っている可能性があります。

関連項目

unicpinu、unicpu

UNICPR

unicpr: unicpoutr ユーティリティによって作成され、unicpinr ユーティリティによって読み取られるファイルの書式です。

説明

unicpoutr ユーティリティが作成し、unicpinr ユーティリティが読み取るのは、次の書式の ASCII ファイルです。

```
{
<resource identification>
}
K Events:
<event descriptions>
```

ファイルの <resource identification> セクションの、開く中カッコおよび閉じる中カッコを除いて、ファイルの各行は、その行に格納されているデータを定義する単一の文字コードで始まります。この単一の文字コードの後ろには、1 つの半角スペースが入ります。unicpinr ユーティリティは、ブランク行および不明なコードで始まる行を無視します。

<resource identification> セクション内のコードは、<event descriptions> セクションでは不正です。その逆も同様です。

<resource identification> セクションに含めることができる行の詳細は、次のとおりです。

表 F-20 使用可能な行： UNICPR <resource identification>

コードと引数	データ型	説明
E <i>encrypt_flag</i>	ブール	ファイル暗号化フラグ。現在使用できるのは False のみです。
F <i>file_type</i>	文字列	ファイル・タイプ。現在使用できるのは、文字列 Unison Export File です。
I <i>password</i>	文字列	リソースの暗号化されていないパスワード。
N <i>number</i>	整数	ファイル内のイベント数。

表 F-20 使用可能な行： UNICPR <resource identification> (続き)

コードと引数	データ型	説明
P <i>preferences</i>	整数	リソースの表示および通知の作業環境。最初から最後までの 12 個の整数は次のとおりです。 ShowEventTitles StartDay (分単位) EndDay (分単位) StartWeek display Display in time increments Display days Display time format Periodic refresh Refresh frequency Mail notification Reminders Lead time before reminders
R a <i>name</i>	文字列	リソース名。
R b <i>number</i>	文字列	リソース数。
R c <i>capacity</i>	文字列	リソース容量。
R d <i>phone_number</i>	文字列	リソースの電話番号。
R e <i>extension</i>	文字列	リソースの内線番号。
R f <i>fax_number</i>	文字列	リソースの FAX 番号。
V <i>version#</i>	文字列	バージョン番号。現在は A.02.53 です。
X <i>contact_data</i>	文字列	連絡先の X.400 データ。

<event descriptions> セクションに含めることができる行の詳細は、次のとおりです。

表 F-21 使用可能な行： UNICPR <event descriptions>

コードと引数	データ型	説明
<i>S date</i>	文字列	UNIAPI_TIME のイベントの開始時間または日付指定としてのイベントの開始時間。
<i>D duration</i>	整数	イベントの所要時間（分）。
<i>T title</i>	文字列	イベントのタイトル。
<i>G location</i>	文字列	イベントの場所。
<i>I class</i>	整数	イベント・クラス（標準、休日など）。
<i>R type&priority</i>	文字列	イベント・タイプ（標準、パブリックなど） および優先度。（1、2 など。イベント・タイプの後ろに付加。）
<i>M creator</i>	文字列	イベントの作成者。
<i>W owner</i>	文字列	イベントの所有者。
<i>A attending reminder leadtime</i>	文字列	リソースの出席状況（TRUE/FALSE）、視覚リマインダ（0、1）、リードタイム（分）を示します。
<i>C description</i>	文字列	イベントの詳細。数行になる場合があり、出席者のリストを含みます。複数行の場合、後続の各行も C で始まる必要があります。
<i>O</i>		イベントのインスタンスの終わり。

例

- 次の例は、kitchen リソースの予定表の 1 つのイベントを含むファイルを示しています。

```
{
F Unison Export File
V A.04.00
E FALSE
X S=Baker/G=James
R a Kitchen
R b 12
R c 10
R d (123)-456-7890
R e 217
R f (123)-456-7891
I Password
P 4 480 1140 1 15 127 2 0 15 0 0 0
```

#These define display and notification preferences as follows:

```
#      4      ShowEventTitles
#      480     StartDay at 8:00am
#      1140    EndDay at 7:00pm
#      1       StartWeek display on Sunday
#      15      Display in time increments of 15 min.
#      127     Display all days Sunday to Saturday
#      2       Display time in am/pm format
#      0       Periodic refresh disabled
#      15      Refresh frequency 15 minutes
#      0       Mail notification disabled
#      0       No reminders
#      0       No lead time before reminders
```

N 1

}

K Events:

S 2262975

D 75

T Lunch

G Kitchen

I 0

R N0

M Kitchen

W Kitchen

A TRUE 1 5

C Lunch time

C David Robinson

C Kathy Bates

O

関連項目

unicpinr、unicpoutr

UNICPU

unicpu: unicipoutu ユーティリティによって作成され、unicpinu ユーティリティによって読み取られるファイルの書式です。

説明

unicpoutu ユーティリティが作成し、unicpinu ユーティリティが読み取るのは、次の書式の ASCII ファイルです。

```
{
<user identification>
}
K Events:
<event descriptions>
K Tasks:
<task descriptions>
```

ファイルの <user identification> セクションの開く中カッコおよび閉じる中カッコを除いて、ファイルの各行は、その行に格納されているデータを定義する単一の文字コードで始まります。この単一の文字コードの後ろには、1 つの半角スペースが入ります。unicpinu ユーティリティは、ブランク行および不明なコードで始まる行を無視します。

<user identification> のコードは、他の 2 つのセクションのいずれでも不正ではありません。その逆も同様です。

<user identification> セクションに含めることができる行の詳細は、次のとおりです。

表 F-22 使用可能な行： UNICPR <user identification>

コードと引数	データ型	説明
E <i>encrypt_flag</i>	ブール	ファイル暗号化フラグ。現在使用できるのは False のみです。
F <i>file_type</i>	文字列	ファイル・タイプ。現在使用できるのは、文字列 Unison Export File です。
I <i>password</i>	文字列	ユーザーの暗号化されていないパスワード。
N <i>events tasks</i>	整数	ファイル内のイベントおよびタスクの数。events はイベント数、tasks はタスク数を示します。

表 F-22 使用可能な行： UNICPR <user identification> (続き)

コードと引数	データ型	説明
P <i>preferences</i>	整数	ユーザーの表示および通知の作業環境。最初から最後までの 12 個の整数は次のとおりです。 ShowEventTitles StartDay (分単位) EndDay (分単位) StartWeek display Display in time increments Display days Display time format Periodic refresh Refresh frequency Mail notification Reminders Lead time before reminders
U a <i>address</i>	文字列	ユーザーのアドレス。複数行に及ぶこともあります。その場合、各追加行も U a で始める必要があります。
U b <i>empl_number</i>	文字列	ユーザーの従業員番号。
U c <i>phone_number</i>	文字列	ユーザーの電話番号。
U d <i>fax_number</i>	文字列	ユーザーの FAX 番号。
U e <i>extension</i>	文字列	ユーザーの内線番号。
U f <i>job_title</i>	文字列	ユーザーの役職名。
V <i>version#</i>	文字列	バージョン番号。現在は A.02.51 です。
X <i>user_data</i>	文字列	ユーザーの X.400 データ。

<event descriptions> セクションに含めることができる行の詳細は、次のとおりです。

表 F-23 使用可能な行： UNICPU <event description>

コードと引数	データ型	説明
<i>S date</i>	文字列	UNIAPI_TIME のイベントの開始時間または日付指定としてのイベントの開始時間。
<i>D duration</i>	整数	イベントの所要時間（分）。
<i>T title</i>	文字列	イベントのタイトル。
<i>G location</i>	文字列	イベントの場所。
<i>I class</i>	整数	イベント・クラス（標準、休日など）。
<i>R type&priority</i>	文字列	イベント・タイプ（標準、パブリックなど） および優先度。（1、2 など。イベント・タイプの後ろに付加。）
<i>M creator</i>	文字列	イベントの作成者。
<i>W owner</i>	文字列	イベントの所有者。
<i>A attending reminder leadtime</i>	文字列	ユーザーの出席状況（TRUE/FALSE）、視覚リマインダ（0、1）、リードタイム（分）を示します。
<i>C description</i>	文字列	イベントの詳細。数行になる場合があり、出席者のリストを含みます。複数行の場合、後続の各行も C で始まる必要があります。
<i>O</i>		イベントのインスタンスの終わり。

<task descriptions> セクションに含めることができる行の詳細は、次のとおりです。

表 F-24 使用可能な行： UNICPR <task description>

コードと引数	データ型	説明
S <i>starttime</i>	文字列	UNIAPI_TIME のタスクの開始時間または日付指定としてのタスクの開始時間。
D <i>endtime</i>	文字列	日付指定としてのタスクの終了時間。
T <i>title</i>	文字列	タスクのタイトル。
R <i>priority</i>	整数	タスクの優先度。
L <i>compl_level</i>	整数	完了レベル。
M <i>creator</i>	文字列	タスクの作成者。
W <i>owner</i>	文字列	タスクの所有者。
C <i>description</i>	文字列	タスクの詳細。数行に及ぶ場合もあります。複数行の場合、後続の各行も C で始まる必要があります。
O		タスクのインスタンスの終わり。

例

- 次の例は、James Baker の予定表の 2 つのイベントおよび 1 つのタスクが含まれているファイルを示しています。

```
{
F Unison Export File
V A.02.51
E FALSE
X S=Baker/G=James/I=T/OU1=Labs/OU2=SysAdmin
U a Calendar Server Corporation,
U a 1234 Software Blvd.,
U a Suite 999,
U a Software Valley, CA 99999.
U b 12
U c (123)-456-7890
U d (123)-456-7891
U e 215
U f System Administrator
I Password
P 4 480 1140 1 15 127 2 0 15 0 0 0
#These define display and notification preferences as follows:
#      4      ShowEventTitles
#      480    StartDay at 8:00am
#      1140   EndDay at 7:00pm
```

```

#      1      StartWeek display on Sunday
#      15     Display in time increments of 15 min.
#      127    Display all days Sunday to Saturday
#      2      Display time in am/pm format
#      0      Periodic refresh disabled
#      15     Refresh frequency 15 minutes
#      0      Mail notification disabled
#      0      No reminders
#      0      No lead time before reminders
N 2 1
}
K Events:
S 2262975
D 75
T Friday R&D meeting
G Conference Room
I 0
R NO
M Baker James
W Baker James
A TRUE 1 5
C Discuss next week's activities.
C James Baker
C David Robinson
C Kathy Bates
O
S D=25/Y=2000/M=April/T=00:00/z=EST5EDT
D 1440
T Company Holiday
I 1
R A2
M Robinson David
W Robinson David
A TRUE 0 0
O
K Tasks:
S D=1/Y=2000/M=April/T=8:00/z=EST5EDT
D D=30/Y=2000/M=April/T=17:00/z=EST5EDT
T System Overhaul.
R 3
L 70
M Baker James
W Baker James
C Upgrade OS version from A.02.50 to A.04.51
O

```

関連項目

unicpinu、unicpoutu

UNIDB2LDIF

unbdb2ldif: Calendar Server ノードを LDIF ファイルにエクスポートします。このユーティリティは、Oracle Internet Directory サーバーのインストールでは使用できません。Calendar Server のスタンドアロン・インストール専用です。

構文

```
unbdb2ldif -n <node-ID> [-host <hostname>] [-p <sysOpPsw>] [-u <user>]  
unbdb2ldif -v  
unbdb2ldif -h
```

説明

unbdb2ldif は、特定の Calendar Server ノードのデータベースを、LDIF ファイル node<node-ID>.ldif にエクスポートします。このファイルには、変更レコード形式の一連の変更が含まれます。ldapmodify ユーティリティは、このファイルを使用して、新しいディレクトリ・サーバーの移入、および新しいエントリの追加または事前に移入されたディレクトリ・サーバーの既存のエントリの変更を行います。

ディレクトリ・サーバーがすでに存在する場合、unbdb2ldif は、Calendar Server ノードで検出された内容と比較してディレクトリ・サーバーの情報をチェックし、LDIF ファイルへの出力対象（つまり、エントリをディレクトリ・サーバーに追加する必要があるか、またはディレクトリ・サーバーにエントリが存在する場合はエントリの変更が必要かどうか）を判断します。

このユーティリティは、Oracle Collaboration Suite の一部である Oracle Internet Directory サーバーでは機能しません。Calendar Server のスタンドアロン・インストール専用です。

オプション

-n

<node-ID>

エクスポートするノードを指定します。

-host

<hostname>

ホストを指定します。ホストがリモートの場合に必須。ポート番号を指定するには <hostname> パラメータに対して hostname:port の書式を使用します。

-p**<sysOpPsw>**

ノードの SYOSP パスワードを指定します。このオプションを使用していない場合は、パスワードの入力要求が行われます。

-u**<user>**

エクスポートするユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーのアカウントを指定します。<user> の指定方法の詳細は、「<user> 引数の書式」を参照してください。

-v

unidb2ldif の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unidb2ldif の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

書式**<user> 引数の書式**

<user> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は任意の文字列です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。value 文字列はワイルド・カード文字「*」で終了する場合があります。スラッシュ「/」が文字列に含まれる場合は、キーと値のペアのデリミタとして解釈されることを防ぐため、文字「¥」でエスケープする必要があります。たとえば、"S=Hoopla/OU1=R¥/D" のようになります。

UNIX 環境でシェルが文字列を処理する場合（たとえば文字列がコマンドラインで提供される場合や、ユーティリティに引数として渡される場合）、文字列は引用符で囲む必要があります。また、シェルにとって意味をなす文字が文字列に含まれる場合は、シェルが解釈することを防ぐためその文字をエスケープ（つまり、エスケープ文字「¥」を前に付ける）します。

注意： <user> 引数でユーザーを指定するための ID のキーと値のペアが指定されている場合、ともに指定されているその他のキーと値のペアは、すべて無視されます。

表 F-25 イベント・カレンダーを指定するために使用可能なキー： UNIDB2LDIF

キー	X.400 フィールド
N	イベント・カレンダー名

表 F-26 リソースを指定するために使用可能なキー： UNIDB2LDIF

キー	X.400 フィールド
R	リソース名
N	リソース番号
UID	リソース固有の識別子

表 F-27 ユーザーを指定するために使用可能なキー： UNIDB2LDIF

キー	X.400 フィールド
S	姓
G	名
I	イニシャル
ID	識別子
UID	一意のユーザー ID
EMAIL	電子メール・アドレス
X	世代
OU1	組織単位 1
OU2	組織単位 2
OU3	組織単位 3
OU4	組織単位 4
O	組織
C	国
A	管理ドメイン
P	プライベート・ドメイン
PHONE	電話番号
FAX	FAX 番号
EMPL-ID	従業員番号

例

- ホスト `jupiter` にあるノード 10 のデータベースを LDIF ファイルにエクスポートする場合は、次のようになります。

```
% unidb2ldif -n 10 -h jupiter
```

ファイル

`unidb2ldif.ini`

このファイルの [UNIDB2LDIF] セクションおよび [LDAP] セクションには、`unidb2ldif` によって使用される多数のパラメータが含まれます。

[UNIDB2LDIF]

`ldifdir = <directory>`

LDIF ファイル用の出力ディレクトリを指定します。デフォルトは `<calendar_install_path>/tmp` です。

`userfilterfmt = "(uid=%UID%)"`

既存のエントリの一致に使用する、LDAP 検索フィルタの書式を指定します。デフォルトではユーザー ID が使用されます。サポートされている書式コードは次のとおりです。

表 F-28 userfilterfmt パラメータに使用可能な値

X.400 フィールド	書式パラメータ
姓	%S%
名	%G%
イニシャル	%I%
ユーザー ID	%UID%
電子メール	%EMAIL%
識別子	%ID%
世代	%X%
組織単位 1	%OU1%
組織単位 2	%OU2%
組織単位 3	%OU3%
組織単位 4	%OU4%
組織	%O%
国	%C%

表 F-28 userfilterfmt パラメータに使用可能な値（続き）

X.400 フィールド	書式パラメータ
管理ドメイン	%A%
プライベート・ドメイン	%P%
電話番号	%PHONE%
FAX 番号	%FAX%
従業員番号	%en%
役職名	%jt%

[LDAP]

host = <hostname>

ディレクトリ・サーバーが実行されるホストを指定します。既存のディレクトリ・サーバーのインストールに移行する場合は、指定する必要があります。

port = <portnumber>

ディレクトリ・サーバーが実行される代替 TCP ポートを指定します。デフォルトのポートは 389 です。

basedn = <dn>

ディレクトリ情報ツリーでの検索操作の開始点を指定します。**-dnsuffix** オプションを使用していない場合に、新しいディレクトリ・エントリの作成に使用する、基底識別名でもあります。

binddn = <dn>

ディレクトリ・サーバーのバインドに使用する識別名を指定します。

bindpwd = <password>

ディレクトリ・サーバーのバインドに使用するパスワードを指定します。

admin = <dncomponent>

baseDN と併用することで、ディレクトリ情報ツリーでの Calendar Server 管理者の位置を指定できます。

admingroup = <dncomponent>

baseDN と併用することで、ディレクトリ情報ツリーでの Calendar Server 管理者のグループの位置を指定できます。

defaultpwd = <password>

新しく作成された **Calendar Server** のユーザーおよびリソースに使用する、デフォルトのユーザー・パスワード。デフォルトのパスワードは **sesame** です。

```
$ORACLE_HOME/ocal/log/unidb2ldif.log
```

関連するすべてのエラーおよび警告のログ・ファイル。

```
$ORACLE_HOME/ocal/tmp/node<node-ID>.ldif
```

変更レコードの形式で一連の変更を示す LDIF ファイル。

警告

Surname 属性

Surname は、inetOrgPerson オブジェクト・クラスに必要な属性です。Surname の値が割り当てられていない項目では、Surname が CalUser: に初期化されます。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNIDBBACKUP

unidbbackup: Calendar Server ノードおよび関連する構成情報のアーカイブを作成します。

構文

```
unidbbackup -d <dst> [-n <nodes>] [-blocking] [-lockall]
```

```
unidbbackup -v
```

```
unidbbackup -h
```

説明

unidbbackup: Calendar Server のノードおよび関連する構成情報のバックアップを作成します。具体的には、\$ORACLE_HOME/ocal/misc ディレクトリおよび \$ORACLE_HOME/ocal/db ディレクトリのバックアップを作成します。これらの 2 つのディレクトリの情報は相互に関連しているため、2 つが同時にバックアップされることが重要です。

unidbrestore は、unidbbackup の補足的なユーティリティです。デフォルトでは、これらのユーティリティによって、ソースが出力先にコピーされます。コピー以外の動作が要求される場合は、代替のバックアップ / リストア・コマンドを指定できます。コマンドの指定には、unison.ini ファイルの [UTL] external_backup パラメータおよび external_restore パラメータを使用します。代替バックアップ・コマンドの指定方法の詳細は、「ファイル」を参照してください。

警告： バックアップ・コマンドとリストア・コマンドは逆の操作です。そのため、代替コマンドを使用する場合は、実際にそれらのコマンドが相互に逆の操作を行うことが重要です。これは、データベースの一貫性にかかわります。

unidbbackup は、Calendar Server が起動中か停止中かにかかわらず、実行できます。

警告： unidbbackup では、Calendar Server の内部データベースがバックアップされます。ディレクトリ・サーバーを使用している場合は、そのデータベースもバックアップする必要があります。

オプション

-blocking

バックアップを読取りロック・モードで実行します。このロックでは、最初の手込みが発生するまで、すべての連続した読取りが受け入れられます。最初の手込みが発生すると、その後のすべての読取りおよび手込みがキューに入れられます。このオプションを使用したバックアップの実行中は、ユーザーはカレンダーを使用できません。このオプションは、非常に高速のバックアップのみで使用してください。

-d

<dst>

アーカイブ先を指定します。<dst> はディレクトリ名です。

-lockall

指定されたすべてのノードを、1 つずつではなく、同時にロックします。これにより、接続しているノードのデータ整合性が向上します。

-n

<nodes>

バックアップするノードを指定します。<nodes> の書式は、-n 102,103,104 のように、ノード番号をカンマで区切った単純なリストです（ノード番号の間にブランクはありません）。指定されていない場合は、すべてのノードがバックアップされます。

-v

unidbbackup の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unidbbackup の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- Calendar Server のノード 102 および 104 を、ディレクトリ /backups/cserver/jan.7.99 にバックアップする場合は、次のようになります。

```
% unidbbackup -d /backups/cserver/jan.7.99 - n 102,104
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

0 成功

0 以外のすべての値はエラーを示します。

ファイル

`$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini`

このファイルの [UTL] セクションに含まれる次のキーは、このユーティリティに関連しています。

- `lock_timeout`

このキーは、データベースでのロック操作のタイムアウトを、秒単位で設定します。

- `backupatonce`

このキーは、`external_backup` パラメータと組み合わせて使用します。TRUE に設定すると、`external_backup` によって定義された代替バックアップが 1 回コールされます。FALSE に設定すると、各ノード・データベース・ディレクトリおよび `misc` ディレクトリに対して、代替バックアップがコールされます。

- `backup_timeout`

このキーは、データベースでのバックアップ操作のタイムアウトを、秒単位で設定します。

- `external_backup`

このキーによって、`unidbbackup` が代替バックアップ・ユーティリティを起動できるようになります。`unidbbackup` は、このキーの値、およびコマンドラインの `unidbbackup` に指定された引数を使用し、次のコマンドラインを構成（および後で起動）します。

```
value_of_external_backup [-f] -s <src> -d <dst>
```

ここでは次のようになります。

- `<dst>` は、バックアップ先を指定します（`unidbbackup` は、ユーザーが `unidbbackup` コマンドラインで指定した `<dst>` 引数から、これを構成します）。
- `<src>` は、バックアップするソースを指定します（`unidbbackup` は、`$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini` ファイルで検出された情報を基に、この引数を構成します）。
- `-f` は、ソースがファイルであることを示します（このフラグが使用されていない場合、ソースはディレクトリです）。

`unidbbackup` は、必要なデータベース・ファイルがすべてバックアップされるまで、生成されたコマンドラインを繰り返し起動し、起動ごとにデータベースのロックおよびロック解除を行います。

管理者は、生成されたコマンドラインが、代替ユーティリティに対して実際に有効なものであることを確認する必要があります。場合によっては、このコマンドラインを使用して有効なコマンドラインを作成し、起動するための中間ユーティリティが必要になります。この場合は、`external_backup` を設定して中間ユーティリティを起動できます。

`external_backup` に使用可能な値は、任意のコマンドラインです。このキーに割り当てられたデフォルト値はありません。

関連項目

`unidbrestore`

UNIDBCONV

`unidbconv`: バージョン 2.62 のノード・データベースをバージョン 6.00 に変換します。

構文

```
unidbconv -n <node-ID> | all [-kp <numpages>] [-x] [-d <directory>]
```

```
unidbconv -v
unidbconv -h
```

説明

`unidbconv`: バージョン 2.62 のノード・データベースをバージョン 6.00 に変換します。通常は、このユーティリティを直接起動することはありません（変換は、Calendar Server の新しいバージョンへのアップグレード時に、自動的に行われます）。`unison.ini` ファイルの [`<YOURNODEID>`] セクションに含まれる `version` パラメータの最後の 2 桁は、ノードのバージョンを示します。

警告: `unidbconv` は既存のデータベースを上書きするため、このユーティリティを起動する前に Calendar Server をバックアップしてください。

`unidbconv` を実行するには、Calendar Server が停止している必要があります。

データベースの `Misc` ディレクトリに、`[SETUP]` というセクションと少なくとも 1 つの空白行を含む `state.ini` という名前のファイルが必要です。変換プロセスのデータは、障害が発生した場合に変換を再開できるようにこのファイルに書き込まれます。

オプション

-d

<directory>

変換に使用する一時ディレクトリを指定します。存在するディレクトリであることが必要です。デフォルトでは、**New** というディレクトリが使用されます。このディレクトリは **Misc** と同じレベルにあります。

-n

<node-ID> | all

指定されたノードのみ (<node-ID> 使用時)、またはすべてのノード (all 使用時) で変換を実行します。

-kp

<numpages>

キー・ファイルのスキャンおよび再ビルドに使用するキャッシュ・ページの数指定します。このオプションが使用されていない場合は、デフォルト値 32000 が使用されます。

-x

進捗インジケータをオフにします。

-v

unidbconv のバージョン番号を出力します。

-h

unidbconv の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- すべての Calendar Server ノード・データベースを、バージョン 6.00 のノード・データベースに変換する場合は、次のようになります。

```
% unidbconv -n all
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNIDBFIX

unidbfix: Calendar Server ノード・データベースのチェック、修復、デフラグおよび管理を行います。

構文

```
unidbfix -c [-pix|-pi] -n <node-ID> | all
[-r] [-kp <numpage>] [-level [basic|full]]

unidbfix -f [-pix|-pi] -n <node-ID> | all
[-r] [-y] [-kp <numpage>] [-level [basic|full]]

unidbfix -d [-pix|-pi] -n <node-ID> | all
[-r] [-y] [-kp <numpage>] [-level [basic|full]]

unidbfix -export [-pix|-pi] -n <node-ID> | all [-r] [-kp <numpage>]

unidbfix -import [-pix|-pi] -n <node-ID> | all [-r] [-y] [-kp <numpage>]

unidbfix -ck -n <node-ID> | all [-r] [-y] [-kp <numpage>]

unidbfix -k -n <node-ID> | all [-r] [-y] [-kp <numpage>]

unidbfix -i [-pix|-pi] -n <node-ID> | all [-r] [-kp <numpage>]

unidbfix -v
unidbfix -h
```

説明

unidbfix は、データベースの破損 / 非一貫性のチェックおよび修復、またはノード・データベースのデフラグおよび圧縮、あるいはその両方を行います。unidbfix は、通常のデータベース・メンテナンス・プログラムの一部として実行する必要があります。

警告： 使用する unidbfix のバージョンが、実行している Calendar Server のバージョンに同梱されていたものでない場合や、Calendar Server のバージョンと互換性がない場合は、データベースが破損する可能性があります。互換性について不明な点がある場合は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに問い合わせてください。

警告： -f、-d または -import のいずれかのオプションを使用してこのユーティリティを起動する前に、データベースをバックアップすることをお薦めします。バックアップする必要があるのはデータ (*.dat) ファイルのみです。これは、unidbfix によってデータ・ファイルからキー (*.key) ファイルが再構成されるためです。

unidbfix は、指定されたノードのデータベースの次の部分で、チェックおよび修復を実行します。

- リモート・ノード
- ホスト・ノード
- 次のスロットおよびファイル・サイズ
- レコード
- カレンダ依存のデータ・フィールド
- ポインタ
- 削除チェーン
- キー・ファイル

unidbfix は、これらの 8 つの異なるモードの 1 つで実行されます。いずれのモードでも、unidbfix が修復を行った場合はその修復がレポートされます。各モードのスキャン・フェーズは、発生順に表示されます。リモート・ノード、ビンおよびファイル断片化の各スキャン・フェーズの詳細は、「**注意**」の項を参照してください。

表 F-29 unidbfix モード

モード	オプション	スキャン・フェーズ	データベースの変更
チェック	-c	ファイル・サイズ ノード リモート・ノード・レコード 設定 ビン (full レベル) 削除チェーン キー・チェック データベース情報 (full レベル)	なし
修正	-f	ファイル・サイズ ノード リモート・ノード・レコード 設定 ビン (full レベル) 削除チェーン ファイル断片化 (full レベル) キー・ビルド データベース情報 (full レベル)	あり
デフラグ	-d	ファイル・サイズ ノード リモート・ノード・レコード 設定 ビン 削除チェーン ファイル断片化 キー・ビルド	あり
インポート	-import	リモート・ノード キー・ビルド	あり
エクスポート	-export	リモート・ノード	なし
チェック・キー	-ck	キー・ビルド (チェック・モード)	なし
修正キー	-k	キー・ビルド (修正モード)	あり
情報	-i	データベース情報	なし

`unidbfix` は、Calendar Server の実行中に、チェック・モードで実行できます。`unidbfix -c` の実行時には、サーバーによって、読取り要求（ユーザーのログインおよびログオフを含む）のみが受け付けられます。

チェック・モードおよび修正モードには、**basic** および **full** の 2 つの操作レベルがあります。レベルは `-level` オプションを使用して指定します。デフォルトは **basic** です。レベルは、実行されるデータベース・チェックを制御します。**basic** レベルでは、最も一般的なエラーのみがチェックされ、**full** レベルでは、より多くのエラーがチェックされます。そのため、**basic** モードの方が **full** レベルよりかなり高速です。

`unidbfix -c` のインスタンスは、複数を実行することが可能です。ただし、各インスタンスを異なるノード上で実行する必要があります。他のノードがアクティブな場合に、停止中のノードで完全な `unidbfix` を実行できます。ノードの停止方法は、`unistop` を参照してください。

ノード・ネットワークの管理には、`unidbfix -import` ではなく、`uninode` を使用してください。`unidbfix` および `-import` オプションは、データベース内のリモート・ノート接続情報の破損を修正する場合のみ、使用してください。

`unidbfix -export` は、Calendar Server の実行中に実行できます。

オプション

-c

チェック・モードで実行します。`unidbfix` は、すべてのデータベースの破損および非一貫性をレポートしますが、修正アクションは実行しません（修正には修正モードを使用します）。`unidbfix` は、エラーを検出すると、エラーが検出されたスキャン・フェーズの終了後にチェックを停止します。たとえば、ファイル・サイズ・スキャン・フェーズでエラーが検出された場合は、このスキャン・フェーズの完了時に停止します。ノード・スキャン・フェーズには進みません。

-ck

チェック・キー・モードで実行します。データベースのキー・ファイルのみをチェックします。

-d

デフラグ・モードで実行します。このモードでは、`unidbfix` は削除されたレコードが使用していた領域を解放します。データベースの一貫性を保つために、`unidbfix` はデータベースにエラーがないかをチェックし、エラーが検出された場合はそれを修正してから、デフラグを続行します。

警告： デフラグ・フェーズの途中で、**kill -9** を使用して **unidbfix** に割り込むことは可能ですが、これは、データベースに回復不可能な損傷を与えます。

-export

エクスポート・モードで実行します。エクスポート・モードでは、**unidbfix** がデータベースから **remotenode.ini** ファイルに、リモート・ノード情報を書き込みます。各リモート・ノードの NULL 以外のフィールドだけが、ファイルに書き込まれます。**-export** モードの使用例は、「リモート・ノード・スキャン・フェーズ」の項を参照してください。

-f

修正モードで実行します。データベースを修正およびクリーン・アップします。チェック・モードで検出されたすべてのエラーが修正されます。状況によっては、**unidbfix** を使用して強制的にデータを削除できます (**unidbfix** による修復が不可能なデータの破損、または安全な再統合が不可能な孤立したデータなど)。

-i

情報モードで実行します。このモードでは、**unidbfix** が **dbfix.log** ファイルに様々なデータベース統計を出力します。

-import

インポート・モードで実行します。インポート・モードでは、**unidbfix** が **remotenode.ini** ファイルからデータベースに、リモート・ノード情報を書き込みます。**-import** モードの使用例および使用上の警告は、「リモート・ノード・スキャン・フェーズ」の項を参照してください。

-k

修正キー・モードで実行します。データベースのキー・ファイルのみを再ビルドします。

-kp

<numpage>

キー・ファイルのスキャンおよび再ビルドに使用するキャッシュ・ページの数を指定します。このオプションが使用されていない場合は、デフォルト値 32000 が使用されます。大きな値を指定すると、キーのスキャンおよび再ビルドのパフォーマンスが大幅に向上します。

-level

`basic` | `full`

チェック・モードおよび修正モードのレベルを指定します。`basic` はデフォルトのレベルです。より高速で、最も一般的なエラーをチェックします。`full` レベルは、より時間がかかりますが、より多くのエラーをチェックします。

-n

`<node-ID>` | `all`

チェック、修正、デフラグの対象となるノード、またはキー・ファイルをビルドおよびスキャンするノードを指定します。コンピュータ上のすべてのノードをスキャンするには、`-n all` を使用します。

-pi

進捗インジケータをオンにします。デフォルトでは、進捗インジケータはオフに設定されています。

-pix

進捗インジケータをオフにします。デフォルトでは、進捗インジケータはオフに設定されています。

-r

出力を `$ORACLE_HOME/ocal/log/dbfix.log` ログ・ファイルに追加するかわりに、このファイルを上書きします。

-y

修正およびデフラグの確認メッセージをオフにします。

-v

`unidbfix` の現在のバージョン番号を出力します。

-h

使用方法メッセージおよび各オプションの簡単な説明を出力します。

例

- ノード 35 の一貫性をチェックする場合は、次のようになります。

```
% unidbfix -c -n 35
```


- ノード 12 を修正する場合は、次のようになります。

```
% unidbfix -f -n 12
```

- チェック・モードおよび full レベルを使用し、ノード 567 で unidbfix を実行する場合は、次のようになります。

```
unidbfix -c -level full -n 567
```

- ノード 10 をデフラグおよび圧縮し、ログ・ファイルを上書きする場合は、次のようになります。

```
% unidbfix -d -n 10 -r
```

ファイル

`$ORACLE_HOME/ocal/log/dbfix-node-x.log`

ファイル名の `x` は、ノード番号に置き換えられます。unidbfix `-n all` を使用した場合、ファイル名は `$ORACLE_HOME/ocal/log/dbfix-node-all.log` になります。unidbfix は、検出したすべてのエラー、および修正したすべてのエラーをこのファイルに書き込みます。各エラーは「DATABASE ERROR」としてリストされ、各修復は「Fix」としてリストされます。unidbfix は、検出したすべてのデータベース・エラーを修復します。検出されたすべてのエラー、行われたすべての修正、および修正中に削除されたすべてのレコードの合計が、ファイルの最後に表示されます。データベース・エラーの合計数は、修正の合計数と同じになるとはかぎりません。通常は、このファイルを参照する必要はありません。

`$ORACLE_HOME/ocal/log/unison.ini`

このファイルには、すべてのローカル・ノードおよび対応するディレクトリ名とノード ID のリストが含まれます。

`remotenode.ini`

unidbfix は、インポート・モードおよびエクスポート・モードでこのファイルを使用します。このファイルは、ノード上で最初に unidbfix が実行されるときに、ノードの `perm` ディレクトリに作成されます。このファイルには、すべてのリモート・ノードのレコード、およびそれらのデータ・フィールドのリストが含まれます。各リモート・ノードの情報は次のとおりです。

[Node-ID]

```
RN_NUMCONNECT:    any number zero and above
RN_ACCESSMETHOD:  must be 2
RN_SERVICENAME:    must be "unieng"
RN_HOSTNAME:       name of the remote host
```

ノード ID は、リモート・ノードの識別番号です。ノード ID は角カッコで囲み、行の先頭に配置する必要があります。フィールドには NULL 値を含めることができます。無効な値を含むフィールドがある場合、unidbfix はエラー・メッセージを返し、エラーが発生したリモート・ノードでの変更を行いません。

次の例では、remotenode.ini に 2 つのリモート・ノードが含まれています。最初のノードはノード ID が 730 で、名前は NewYork、2 番目のノードはノード ID が 631 で、名前は LosAngeles です。

```
[730]
RN_NUMCONNECT = 2
RN_ACCESSMETHOD = 2
RN_SERVICENAME = "unieng"
RN_HOSTNAME = "NewYork"

[631]
RN_NUMCONNECT = 2
RN_ACCESSMETHOD = 2
RN_SERVICENAME = "unieng"
RN_HOSTNAME = "LosAngeles"

unidbfex.lck
```

これはロック・ファイルで、unidbfex の複数のインスタンスが同じノードで同時に実行されるのを防ぎます。unidbfex は、実行されているノードの perm ディレクトリで、このファイルを作成します。kill -9 またはシステム・クラッシュによって unidbfex の実行が完了しなかった場合、このファイルはそのまま残ります。ファイルは手動で削除できます。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

0 成功

エラーなし (チェック・モード)

エラー検出後に修正済 (修正モード)

デフラグ成功 (デフラグ・モード)

インポート成功 (インポート・モード)

エクスポート成功 (エクスポート・モード)

1 エラー検出

エラーあり (チェック・モード)

2 使用時エラー

3 ユーザー割込み

4 中断

unidbfex の別のインスタンスがノード上で実行されていました。

5 停止

unidbfix が、修正モードまたはチェック・モードでリモート・ノード・レコードのエラーを検出したか、remotenode.ini ファイルを検出できませんでした。チェックまたは修正を続行するには、より詳細な情報を指定する必要があります。

注意

キー・ファイル

unidbfix は、修正、デフラグ、インポートおよび修正キーの各モードで、データベースのキー・ファイルを再ビルドします。これらのモードのいずれかで unidbfix に割り込むと、キー・ファイルが削除され、再ビルドが完了しない場合があります。そのため、割込み後もう一度 unidbfix を実行することをお勧めします。

ビン・スキャン・フェーズおよびファイル断片化スキャン・フェーズ

ビン、キー・ビルドおよびファイル断片化の各フェーズでは、既存のエラーのチェックまたはレポートを行わずに、unidbfix によってファイルが再ビルドされます。その他のすべてのスキャン・フェーズでは、チェック・モードでレポートされたすべてのエラーが、修正前に修正モードでレポートされます。

リモート・ノード・スキャン・フェーズ

このスキャン・フェーズを実行するには、ノードの remotenode.ini が存在し、そのコンテンツがデータベース内のリモート・ノードのリストと一致する必要があります。これらの条件のいずれかが満たされていない場合は、**-export** モードおよび **-import** モードを使用して、状況を修正できます。次の説明では、ノード ID に 43 を使用しています。

1. 状況： ノード 43 の remotenode.ini ファイルが存在しません。この場合は、データベースのリモート・ノード・リストからファイルを生成します。

```
% unidbfix -export -n 43
```

2. 状況： データベース内のリモート・ノード・リストが、ノード 43 の remotenode.ini ファイルの情報と一致していません。この場合は、次のように差異を修正します。

まず、リモート・ノード情報をデータベースからノード 43 の remotenode.ini ファイルに書き込みます。

```
% unidbfix -export -n 43
```

結果の remotenode.ini ファイルで、必要な編集を行います。

警告： 編集は慎重に行ってください。このファイルにエラーがある場合、ファイルのインポート時に予定外のレコードの削除が行われる可能性があります。そのため、`-import` モードで `unidbfix` を実行する前に、データベースをバックアップしておくことをお勧めします。

変更したファイルを使用してデータベースを更新します。

```
% unidbfix -import -n 43
```

警告： ノード・ネットワークの管理には、`unidbfix -import` ではなく、`uninode` を使用してください。`unidbfix` および `-import` オプションは、データベース内のリモート・ノード接続情報の破損を修正する場合のみ、使用してください。

関連項目

`unistart`、`unistop`、`uninode`、`unirmdel`

UNIDBRESTORE

`unidbrestore`: `unidbbackup` によって作成されたバックアップから、Calendar Server ノードおよび構成情報をリストアします。

構文

```
unidbrestore -s <src> [-d <dst>] [-n <node-ID>] [-nomisc]
```

```
unidbrestore -v
```

```
unidbrestore -h
```

説明

`unidbrestore`: `unidbbackup` によって作成されたバックアップから、Calendar Server のノードおよび構成情報をリストアします。

警告： デフォルトでは、リストア先のディレクトリは `$ORACLE_HOME/ocal` です。これは、リストアによって Calendar Server データベースの既存のファイルが上書きされることを意味します。そのため、不注意で Calendar Server を破損させることがないように、このユーティリティは、細心の注意を払って使用する必要があります。より安全な方法として、`-d` オプションを使用してリストア用の異なるディレクトリを指定し、リストア先のディレクトリから個々のファイルを `$ORACLE_HOME/ocal` ディレクトリにコピーできます。

`unidbbackup` は、`unidbrestore` の補足的なユーティリティです。デフォルトでは、これらのユーティリティによって、ソースが出力先にコピーされます。コピー以外の動作が要求される場合は、代替のバックアップ / リストア・コマンドを指定できます。コマンドの指定には、`unison.ini` ファイルの `[UTL] external_backup` パラメータおよび `external_restore` パラメータを使用します。代替リストア・コマンドの指定方法の詳細は、「ファイル」を参照してください。

警告： バックアップ・コマンドとリストア・コマンドは逆の操作です。そのため、代替コマンドを使用する場合は、実際にそれらのコマンドが相互に逆の操作を行うことが重要です。これは、データベースの一貫性にかかわります。

`unidbrestore` は、Calendar Server が停止しているときだけ実行可能です。

警告： `unidbrestore` は、Calendar Server の内部データベースをリストアします。ディレクトリ・サーバーを使用している場合、そのデータベースは `unidbrestore` によって処理されません。したがって、ユーザーを削除した後で Calendar Server ノードをリストアした場合、それらのユーザーをディレクトリ・サーバーに追加して戻す必要があります。同様に、ノードのネットワーク情報を変更した後に単一ノードをリストアすると、現行のネットワーク構成とリストアされたノードの古いネットワーク情報の間の競合により、エラーが発生します。このような状況が発生した場合は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡してください。

オプション

-d

<dst>

リストア先を指定します。デフォルトでは、`$ORACLE_HOME/ocal` ディレクトリです。

-n

<node-ID>

リストアするノードを指定します。

-nomisc

/misc ディレクトリをリストアしません。

-s

<src>

バックアップ・ソースを指定します。<src> はディレクトリ名です。

-v

unidbrestore の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unidbrestore の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- Calendar Server のバックアップ /backups/cserver/jan.7.99 のノード 45 を、ディレクトリ \$ORACLE_HOME/ocal にリストアする場合は、次のようになります。

```
% unidbrestore -s /backups/cserver/jan.7.99 -n 45
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

0 成功

0 以外のすべての値はエラーを示します。

ファイル

\$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini

[UTL] セクションに含まれる次のパラメータは、このユーティリティと関連しています。

- lock_timeout

このパラメータは、データベースでのロック操作のタイムアウトを、秒単位で設定します。

- `restore_timeout`

このパラメータは、データベースでのリストア操作のタイムアウトを、秒単位で設定します。

- `external_restore`

このパラメータによって、`unidbrestore` が代替リストア・ユーティリティを起動できるようになります。`unidbrestore` は、このパラメータの値、およびコマンドラインの `unidbrestore` に指定された引数を使用し、次のコマンドラインを構成（および後で起動）します。

```
value_of_external_restore [-f] -s <src> -d <dst>
```

ここでは次のようになります。

- `-d <dst>` は、リストア先を指定します（`unidbrestore` は、`unidbrestore` コマンドで指定された `<dst>` 引数からこれを構成し、引数が指定されていない場合はデフォルト値を使用します）。
- `-s <src>` は、リストアするソースを指定します（`unidbrestore` は、`unidbrestore` コマンドラインで指定された `src` 引数から、これを構成します）。
- `-f` は、ソースがファイルであることを示します（このフラグが使用されていない場合、ソースはディレクトリです）。

`unidbrestore` は、必要なデータベース・ファイルがすべてリストアされるまで、生成されたコマンドラインを繰り返し起動し、起動ごとにデータベースのロックおよびロック解除を行います。

ユーザーは、生成されたコマンドラインが、代替ユーティリティに対して実際に有効なものであることを確認する必要があります。場合によっては、このコマンドラインを使用して有効なコマンドラインを作成し、起動するための中間ユーティリティが必要になります。この場合は、`external_restore` を設定して中間ユーティリティを起動できます。

`external_restore` に使用可能な値は、任意のコマンドラインです。このキーに割り当てられたデフォルト値はありません。

関連項目

`unidbbackup`

UNIDSACISETUP

unidsacisetup: Calendar Server の ADMIN グループに対し、ディレクトリ・サーバー上でアクセス制御情報を設定します。このユーティリティは、Oracle Internet Directory サーバーのインストールでは使用できません。Calendar Server のスタンドアロン・インストール専用です。

構文

```
unidsacisetup [-w <mgrDnPwd>]
unidsacisetup -info
unidsacisetup -v
unidsacisetup -h
```

説明

unidsacisetup: Calendar Server の ADMIN グループに対し、ディレクトリ・サーバーのアクセス制御情報 (ACI) を設定します。ディレクトリ・サーバー・ユーティリティを使用して ACI を設定することもできますが、ADMIN グループの ACI を正しく設定するために、unidsacisetup を使用することをお勧めします。ほとんどの Calendar Server のユーティリティは、ADMIN グループの ACI が設定されていない場合は実行できません。

このユーティリティは、新しい Calendar Server の ADMIN グループが作成されるたび、つまり unison.ini ファイルの [LDAP] admingroup パラメータが変更されるたびに、実行する必要があります。

unidsacisetup は、Calendar Server が起動中か停止中かにかかわらず、実行できます。ただし、ディレクトリ・サーバーは実行中である必要があります。

このユーティリティは、Oracle Collaboration Suite の一部である Oracle Internet Directory サーバーでは機能しません。このユーティリティは、スタンドアロンの Calendar Server のインストールの、サード・パーティのディレクトリ・サーバーで使用することを前提としています。

オプション

-info

このユーティリティがアクセス制御情報を作成できるディレクトリ・サーバーのリストを表示します。

-w

<mgrDnPwd>

ディレクトリ・サーバー・マネージャのパスワード (unison.ini の [LDAP] mgrdn パラメータに関連付けられたパスワード) を指定します。このオプションが使用されていない場合は、unidsacisetup によってユーザーに対するパスワード要求が行われます。

-v

unidsacisetup のバージョン番号を出力します。

-h

unidsacisetup の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- unidsacisetup が ACI を設定できるディレクトリ・サーバーのリストを表示する場合は、次のようになります。

```
% unidsacisetup -info
```

- Calendar Server の ADMIN グループの ACI を設定する場合は、次のようになります。

```
% unidsacisetup
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNIDSDIFF

unidsdiff: Calendar Server ノードとディレクトリ・サーバーの差異を検出し、削除します。

構文

```
unidsdiff [-n <node-ID>] [-host <hostname>] [-p <SysOpPsw>] [-d] [-y]
[-verbose] [-w <password>]
```

```
unidsdiff -v
unidsdiff -h
```

説明

このユーティリティは、Calendar Server ノードのユーザー、リソースおよびイベント・カレンダーのアカウントの中で、ディレクトリ・サーバーと一致しないもの、およびその逆の場合で一致しないものをすべて検索します。デフォルトでは、差異のレポートだけが行われます。差異を削除するには、**-d** オプションを使用します。

Calendar Server は、各アカウント（ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダー）に、xItemId という一意の識別子を割り当てます。unidsdiff は、まずディレクトリ・サーバーで（指定されたノードの）各 xItemId について、次のことをチェックします。

1. 一意である。
2. 単一のユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーが関連付けられている。
3. 有効な書式で表されている。

unidsdiff は、これらのチェックのいずれかに当てはまらない xItemId を検出した場合、中断します。ディレクトリ・サーバー・ユーティリティを使用して、問題を解決する必要があります。チェックに問題がない場合は、unidsdiff は続行し、次について確認します。

4. Calendar Server ノードのすべてのアカウントがディレクトリ・サーバーで表示される（**-d** オプションを使用している場合、Calendar Server ノードのみで表示されているすべてのユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーが削除されます）。
5. ディレクトリ・サーバーのすべてのカレンダー・アカウントが、Calendar Server ノードで表示される（**-d** オプションを使用している場合、ディレクトリ・サーバーのみで表示されているすべてのカレンダー・ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーがディレクトリ・サーバーから削除されます。つまり、ディレクトリ・サーバー内でカレンダー・ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーとして表示されなくなります）。

unidsdiff を実行するには、Calendar Server が起動している必要があります。

オプション

-d

検出された差異を削除します。ユーザーは、削除を行うたびに確認を要求されます。**-d** オプションが使用されていない場合、unidsdiff は差異のリストだけを行います。

-host

<hostname>

接続先のホストを指定します。ホストがリモートの場合は必須です。ポート番号を指定するにはホスト名パラメータに対して **hostname:port** の書式を使用します。

-n

<node-ID>

ノードを指定します。複数のノードが存在する場合は必須です。

-y

-d オプションを使用している場合に、カレンダー・エントリまたはディレクトリ・エントリの削除の確認要求を省略します。

-p

<SysOpPsw>

Calendar Server の SYSOP パスワードを指定します。

-verbose

ノードに関連付けられたディレクトリ内の識別名をすべて表示します。

-w

<password>

ディレクトリ・サーバー・マネージャのパスワード (unison.ini の [LDAP] mgrdn パラメータに関連付けられたパスワード) を指定します。これは、ノード内のユーザー数がディレクトリ・サイズの上限を超えた場合に使用するオプションのパラメータです。

-v

unidsdiff の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unidsdiff の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- ノード 10 で unidsdiff を実行する場合は、次のようになります。

```
% unidsdiff -n 10 -host inkpen
Enter SYSOP password:
unidsdiff: detected 0 duplicate "ctCalXItemId" attributes in directory
unidsdiff: detected 0 multi-valued "ctCalXItemId" attributes in directory
unidsdiff: detected 0 badly-formed "ctCalXItemId" attributes in directory
unidsdiff: detected 0 calendar-stores without a matching directory entry
unidsdiff: detected 0 calendar directory entries without a matching
calendar-store
```

この場合、ディレクトリ・サーバーと **Calendar Server** の差異は検出されませんでした。同じコマンドの冗長バージョンでは、次のように出力されます。

```
% unidsdiff -n 10 -host inkpen -verbose
Enter SYSOP password:
DN="cn=Lorde Audre,o=Acme,c=us"<ctCalXItemId010:00346>
DN="cn=Kilpi Eeva,o=Acme,c=us"<ctCalXItemId010:00347>
:
:
DN="cn=Cohen Leonard,o=Acme,c=us"<ctCalXItemId010:00484>
DN="cn=Atwood Margaret,o=Acme,c=us"<ctCalXItemId010:00485>
DN="cn=Brossard Nicole,o=Acme,c=us"<ctCalXItemId010:00486>
unidsdiff: detected 0 duplicate "ctCalXItemId" attributes in directory
unidsdiff: detected 0 multi-valued "ctCalXItemId" attributes in directory
unidsdiff: detected 0 badly-formed "ctCalXItemId" attributes in directory
unidsdiff: detected 0 calendar-stores without a matching directory entry
unidsdiff: detected 0 calendar directory entries without a matching
calendar-store
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

警告

ディレクトリ・サーバー警告

Calendar Server のユーティリティ用のディレクトリ・サーバー構成の含意を理解することが重要です。サプライヤ・コンシューマ構成では、コンシューマとサプライヤ間の更新のスケジューリングによって両者間の一時的な違いが発生する場合があります。対応するサプライヤとまだ同期化されていないコンシューマ・ディレクトリ・サーバーから、Calendar Server のユーティリティが読み取っている可能性があります。

UNIDSSEARCH

`unidssearch`: ディレクトリ・サーバー内の、カレンダー・ユーザー以外のすべてのユーザーをリストします。

構文

```
unidssearch [-f <LDAPfilter>] [-c <numDN>]
```

```
unidssearch -v
unidssearch -h
```

説明

`unidssearch` は、ディレクトリ・サーバー内の、カレンダー・ユーザー以外のすべてのユーザーをリストします。このコマンドの出力は、ファイルにリダイレクトしたり、必要に応じて変更できるほか、後で (**-ex** オプションを使用して) `uniuser` への入力として使用できます。`unidssearch` によって出力されるファイルの書式の詳細は、「出力の書式」を参照してください。

`unidssearch` を実行するには、Calendar Server が起動している必要があります。

オプション

-f

<LDAPfilter>

未加工の LDAP フィルタを指定し、デフォルトのフィルタに (および) を組み合わせて、LDAP ディレクトリからユーザーを取り出します。LDAP フィルタで指定できる属性は、ディレクトリ・サーバーのドキュメントを参照してください。フィルタで指定する値には、ディレクトリ・サーバーで構成されているキャラクタ・セット (UTF-8、T.61 など) を使用する必要があります。デフォルトのフィルタは次のとおりです。

```
[&(objectClass=organizationalPerson)(|(! (ctCalXItemId=*)) (! (ctCalXItemId=*)))]
```

-c

<numDN>

この番号に返される結果の数を制限します。

-v

unidssearch の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unidssearch の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

書式**出力の書式**

unidssearch によって出力されるファイルのコンテンツの書式は、次のとおりです。

```
A did=cn=jdoe, o=Acme, c=US
```

```
A did=cn=confroom4, o=Acme, c=US
```

各エントリは、文字 **A** で始まり、その後に **did** が続きます。**A** は、カレンダー・ユーザーとしてディレクトリ・サーバーに追加されるユーザーを示すフラグです。**did** は、このユーザーをディレクトリ・サーバー内で一意に識別する、ディレクトリ ID またはユーザーの識別名です。

このファイルの書式は、**uniuser -ex** コマンドの入力ファイルで使用される書式と同じです。ファイルの用途に応じて、追加のユーザー・データを X.400 書式で **did** に追加できます。次に例を示します。

```
A did=cn=jdoe, o=Acme, c=US/G=John/OU=Sales
```

例

- カレンダー・ユーザー以外のすべてのディレクトリ・サーバー・ユーザーのリストを取得し、出力をファイルにリダイレクトする場合は、次のようになります。

```
% unidssearch > dsonly.txt
```

- カレンダー・ユーザー以外の 50 人のディレクトリ・サーバー・ユーザーのリストを取得する場合は、次のようになります。

```
% unidssearch -c 50
```

- 姓が **Smith** で始まるディレクトリ・サーバー・ユーザーのみのリストを取得する場合は、次のようになります（指定されるフィルタは、使用中のディレクトリ・サーバーの要件に準拠します）。

```
% unidssearch -f "(sn=Smith*)" "
```

警告

ディレクトリ・サーバー警告

Calendar Server のユーティリティ用のディレクトリ・サーバー構成の含意を理解することが重要です。サブライヤ・コンシューマ構成では、コンシューマとサブライヤ間の更新のスケジューリングによって両者間の一時的な違いが発生する場合があります。対応するサブライヤとまだ同期化されていないコンシューマ・ディレクトリ・サーバーから、Calendar Server のユーティリティが読み取っている可能性があります。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

関連項目

uniuser

UNIDSSYNC

unidssync: Calendar Server ノードの情報を、ディレクトリ・サーバーの情報と同期させるか、グローバル・アドレス一覧 (GAL) をリフレッシュします。

構文

```
unidssync -u <user> [-remote] [-n <node-ID>] [-host <hostname>] [-p <SysOpPsw>]
```

```
unidssync -galrefresh [-n <node-ID>] [-host <hostname>] [-p <SysOpPsw>]
```

```
unidssync -v
```

```
unidssync -h
```

説明

unidssync は、外部ディレクトリ・サーバーに接続している場合のみ、使用できます。このユーティリティは、Calendar Server ノードの情報を、ディレクトリ・サーバーの情報と同期させます。単一のユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーのアカウントを同期させる場合は、**-u** オプションを使用します。

unidssync は、ディレクトリ・サーバーを使用する他のアプリケーションにより、Calendar Server の認識外でディレクトリ・サーバー・エントリが変更された場合に実行する必要があります。

この状況では、Calendar Server ノードの内部記憶域の情報とディレクトリ・サーバーの内部記憶域の情報で差異が生じる場合があります。unidssync は、ディレクトリ・サーバーに合せて差異を削除します。unidssync は、通常のメンテナンス・プログラムの一部として実行する必要があります。

Oracle Connector for Outlook で使用されるグローバル・アドレス一覧（GAL）をリフレッシュするには、**-galrefresh** を使用します。

unidssync を実行するには、Calendar Server が起動している必要があります。

オプション

-galrefresh

グローバル・アドレス一覧（GAL）をリフレッシュします。

-host

<host>

ホストを指定します。リモート・ホストに接続する場合は必須です。ポート番号を指定するにはホスト名パラメータに対して **hostname:port** の書式を使用します。

-n

<node-ID>

ノードを指定します。複数のノードが存在する場合は必須です。

-p

<sysOpPsw>

SYSOP パスワードを指定します。コマンドラインでパスワードを指定していない場合は、パスワード要求が行われます。

-remote

リモート・レコードも同期させます。デフォルトでは、ローカルのユーザー、リソースおよびイベント・カレンダーのレコードのみが同期されます。この機能は、CWS レプリケーション要求が失われたか保守できず、リモート・レコードが非同期状態になった場合に使用できます。**-remote** を使用して同期化を実行すると、リモート・レコードが強制的に同期化されます。

-u**<user>**

同期させるユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーの指定に使用します。<user> 引数の詳細は「<user> 引数の書式」を参照してください。

-v

unidssync の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unidssync の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

書式**<user> 引数の書式**

<user> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は任意の文字列です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。value 文字列はワイルド・カード文字「*」で終了する場合があります。スラッシュ「/」が文字列に含まれる場合は、キーと値のペアのデリミタとして解釈されることを防ぐため、文字「¥」でエスケープする必要があります。たとえば、"S=Hoopla/OU1=R¥/D" のようになります。

UNIX 環境でシェルが文字列を処理する場合（たとえば文字列がコマンドラインで提供される場合や、ユーティリティに引数として渡される場合）、文字列は引用符で囲む必要があります。また、シェルにとって意味をなす文字が文字列に含まれる場合は、シェルが解釈することを防ぐためその文字をエスケープ（つまり、エスケープ文字「¥」を前に付ける）します。

注意： <user> 引数でユーザーを指定するための ID のキーと値のペアが指定されている場合、ともに指定されているその他のキーと値のペアは、すべて無視されます。

表 F-30 イベント・カレンダーを指定するために使用可能なキー： UNIDSSYNC

キー	X.400 フィールド
N	イベント・カレンダー名

表 F-31 リソースを指定するために使用可能なキー： UNIDSSYNC

キー	X.400 フィールド
R	リソース名
N	リソース番号
UID	リソース固有の識別子

表 F-32 ユーザーを指定するために使用可能なキー： UNIDSSYNC

キー	X.400 フィールド
S	姓
G	名
I	イニシャル
ID	識別子
UID	一意のユーザー ID
EMAIL	電子メール・アドレス
X	世代
OU1	組織単位 1
OU2	組織単位 2
OU3	組織単位 3
OU4	組織単位 4
O	組織
C	国
A	管理ドメイン
P	プライベート・ドメイン
PHONE	電話番号
FAX	FAX 番号
EMPL-ID	従業員番号

例

- ホスト `fergus` にあるノード `10` のコンテンツを、そのノードのディレクトリ・サーバー情報と同期させる場合は、次のようになります。

```
% unidssync -n 10 -host fergus
```

警告

ディレクトリ・サーバー警告

Calendar Server のユーティリティ用のディレクトリ・サーバー構成の含意を理解することが重要です。サプライヤ・コンシューマ構成では、コンシューマとサプライヤ間の更新のスケジューリングによって両者間の一時的な違いが発生する場合があります。対応するサプライヤとまだ同期化されていないコンシューマ・ディレクトリ・サーバーから、Calendar Server のユーティリティが読み取っている可能性があります。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNIDSUP

unidsup: ディレクトリ・サーバーのステータスをレポートします。

構文

```
unidsup [-q] [-host <hostname>]
```

```
unidsup -v  
unidsup -h
```

説明

unidsup は、ディレクトリ・サーバーが実行中かどうかをレポートします。
unidsup を実行するには、Calendar Server が起動している必要があります。

オプション

-host

<hostname>

ホストを指定します。ホストがリモートの場合に必須。ポート番号を指定するにはホスト名パラメータに対して **hostname:port** の書式を使用します。

-q

静止モードで操作します（ディレクトリ・サーバーの起動時には出力を行いません）。

-v

unidsup のバージョン番号を出力します。

-h

unidsup の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNIENCRYPT

uniencrypt: Calendar Server 構成ファイルに含めるパスワードを暗号化します。

構文

```
uniencrypt -m <encryption_method> -s <string>
```

```
uniencrypt -v
```

```
uniencrypt -h
```

説明

uniencrypt は、**-m** オプションで指定された暗号化方式を使用して、**-s** オプションで指定された文字列（通常はパスワード）を暗号化します。Calendar Server 構成ファイルで提供されたすべてのパスワード（[LDAP] bindpwd パラメータおよび writednpasword パラメータで指定されたパスワードなど）は、最初にこのユーティリティを使用して暗号化する必要があります。

uniencrypt は、パスワードの生成に使用した暗号化方式の後ろに暗号化されたパスワードを記述して返します。たとえば、{std}ruyr84jf のようになります。一般的には、暗号化方式および中カッコを含むこの値全体を二重引用符で囲み、Calendar Server 構成ファイルで指定されるパスワードの値として含める必要があります。次に例を示します。

```
[LDAP]  
bindpwd = "{std}ruyr84jf"
```

uniencrypt は、Calendar Server が起動中か停止中にかかわらず、実行できます。

オプション

-m

<encryption_method>

使用する暗号化方式を指定します。現在のところ、使用可能な値は、独自のアフィン暗号化方式である std、および base64 のみです。この引数を使用しない場合は、デフォルトで std が使用されます。

-s

<文字列>

暗号化する文字列を指定します。このオプションを使用していない場合、uniencrypt によって暗号化する文字列が要求されます。

-v

uniencrypt の現在のバージョン番号を出力します。

-h

uniencrypt の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- デフォルトの暗号化方式を使用してパスワード **secure123** を暗号化する場合は、次のようになります。

```
% uniencrypt -s secure123
{std}q1qnlz0ij75
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNIGROUP

unigroup: パブリック・グループおよび管理グループを管理します。

構文

```
unigroup -info [-host <hostname>] [-n <node-ID>]
[[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
```

```
unigroup -ls [<group>] [-members] [-host <hostname>] [-n <node-ID>]
[[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
```

```
unigroup -add <group> [-host <host>] [-n <nodeid>]
[[-uid <uid>] [-p <password>] | [-krb]]
```

```
unigroup -del <group> [-y] [-host <host>] [-n <nodeid>]
[[-uid <uid>] [-p <password>] | [-krb]]
```

```
unigroup -mod <group> -m <modifier> [-host <host>] [-n <nodeid>]
[[-uid <uid>] [-p <password>] | [-krb]]
```

```
unigroup -attach <group> -u <user> [-host <host>] [-n <nodeid>]
[[-uid <uid>] [-p <password>] | [-krb]]
```

```
unigroup -detach <group> -u <user> [-host <host>] [-n <nodeid>]
```

```
[[[-uid <uid>] [-p <password>] | [-krb]]
```

```
unigroup -v  
unigroup -h
```

説明

Unigroup: パブリック・グループおよび管理グループの管理を可能にします。グループの作成、変更および削除を行えます。既存のグループおよびグループのメンバーをリストできます。

作成できるのは、管理グループのみです。

ディレクトリ・サーバーを使用している場合は、ディレクトリ・サーバーで作成したすべてのグループも、**unigroup** の出力に含まれます。メンバーをリストする場合は、ディレクトリ・サーバー・グループのメンバーのうち、カレンダー・ユーザーでもあるメンバーのみが出力されます。

unigroup は、Calendar Server が起動しているときだけ実行可能です。

オプション

-add

<group>

管理グループを作成します。<group> 引数の詳細は「<group> 引数の書式」を参照してください。

-attach

<group>

指定されたグループに、ユーザーまたはリソースを追加します。<group> 引数の詳細は「<group> 引数の書式」を参照してください。追加するユーザーまたはリソースは、**-u** を使用して指定します。

-del

<group>

指定されたグループを削除します。<group> 引数の詳細は「<group> 引数の書式」を参照してください。

-detach

<group>

指定されたグループから、ユーザーまたはリソースを削除します。<group> 引数の詳細は「<group> 引数の書式」を参照してください。削除するユーザーまたはリソースは、**-u** を使用して指定します。

-host

<hostname>

ホストを指定します。ホストがリモートの場合に必須。ポート番号を指定するには <hostname> パラメータに対して **hostname:port** の書式を使用します。

-info

グループの定義に使用できる、有効なパラメータの情報を表示します。

-krb

自動 Kerberos ログインを使用します。このオプションは、**-p** オプションおよび **-uid** オプションとは併用できません。

-ls

<group>

指定されたグループ・フィルタ <group> と一致するグループをリストします。<group> 引数の詳細は「<group> 引数の書式」を参照してください。<group> 引数が渡されない場合は、すべてのグループがリストされます。<group> 引数に "node-id=*" を使用していないかぎり、(**-n** オプションで指定した) ローカル・ノードで作成されたグループのみがリストされます。

-m

<modifier>

<modifier> 引数を使用して、グループに適用する変更を指定します。このオプションは、**-mod** オプションと併用します。**-mod** オプションで使用する <group> 引数と同じ書式を使用します。<modifier> 引数の詳細は、「<group> 引数の書式」を参照してください。

-members

各グループ出力の個々のメンバーを出力します。このオプションは、**-ls** オプションと併用してください。

-mod

<group>

グループの名前を変更するか、パブリックから管理に変更します。管理グループをパブリック・グループに変更することはできません。<group> パラメータを使用して、変更するグ

ループを指定します。<group> 引数の詳細は「<group> 引数の書式」を参照してください。
変更の内容を指定するには、**-m** を使用します。

-n

<node-ID>

グループが配置されているノードを指定します。複数のノードが構成されている場合は必須です。

-p

<password>

管理者のパスワードを指定します。管理者が設定されている場合は必須です。パスワードが必須の状況でこのオプションを使用していない場合、ユーザーはパスワードを要求されます。

-u

<user>

-attach オプションおよび **-detach** オプションと併用することで、ユーザーまたはリソースを指定できます。<user> 引数の詳細は「<user> 引数の書式」を参照してください。

-uid

<user-ID>

管理者のユーザー ID です。指定されていない場合は、SYSOP が使用されます。

-y

-del オプションと併用することで、削除の確認要求を省略できます。

-v

unigroup の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unigroup の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

書式

<user> 引数の書式

<user> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は任意の文字列です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。value 文字列はワイルド・カード文字「*」で終了する場合があります。スラッシュ「/」が文字列に含まれる場合は、キーと値のペアのデリミタとして解釈されることを防ぐため、文字「¥」でエスケープする必要があります。たとえば、"S=Hoopla/OU1=R¥/D" のようになります。

UNIX 環境でシェルが文字列を処理する場合（たとえば文字列がコマンドラインで提供される場合や、ユーティリティに引数として渡される場合）、文字列は引用符で囲む必要があります。また、シェルにとって意味をなす文字が文字列に含まれる場合は、シェルが解釈することを防ぐためその文字をエスケープ（つまり、エスケープ文字「¥」を前に付ける）します。

注意： <user> 引数でユーザーを指定するための ID のキーと値のペアが指定されている場合、ともに指定されているその他のキーと値のペアは、すべて無視されます。

表 F-33 リソースを指定するために使用可能なキー： UNIGROUP

キー	X.400 フィールド
R	リソース名
N	リソース番号
UID	リソース固有の識別子

表 F-34 ユーザーを指定するために使用可能なキー： UNIGROUP

キー	X.400 フィールド
S	姓
G	名
I	イニシャル
ID	識別子
UID	一意のユーザー ID
EMAIL	電子メール・アドレス
X	世代

表 F-34 ユーザーを指定するために使用可能なキー： UNIGROUP（続き）

キー	X.400 フィールド
OU1	組織単位 1
OU2	組織単位 2
OU3	組織単位 3
OU4	組織単位 4
O	組織
C	国
A	管理ドメイン
P	プライベート・ドメイン
PHONE	電話番号
FAX	FAX 番号
EMPL-ID	従業員番号

<group> 引数の書式

<group> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は任意の文字列です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。value 文字列はワイルド・カード文字「*」で終了する場合があります。スラッシュ「/」が文字列に含まれる場合は、キーと値のペアのデリミタとして解釈されることを防ぐため、文字「¥」でエスケープする必要があります。たとえば、
"NAME=Marketing/TYPE=Admin" のようになります。

UNIX 環境でシェルが文字列を処理する場合（たとえば文字列がコマンドラインで提供される場合や、ユーティリティに引数として渡される場合）、文字列は引用符で囲む必要があります。また、シェルにとって意味をなす文字が文字列に含まれる場合は、シェルが解釈することを防ぐためその文字をエスケープ（つまり、エスケープ文字「¥」を前に付ける）します。

表 F-35 グループを指定するために使用可能なキー： UNIGROUP

キー	X.400 フィールド
NAME	グループ名
TYPE	グループのタイプ： Admin または Public
ID	グループの ID 番号
NODE-ID	グループのノード ID

例

- Marketing という管理グループをノード 8 で作成する場合は、次のようになります。

```
% unigroup -add "NAME=Marketing" -n 8 -p sesame
unigroup: NAME=Marketing/ID=4096/NODE-ID=8/TYPE=Admin
```

- グループ Marketing にユーザーを追加する場合は、次のようになります。

```
% unigroup -attach "NAME=Marketing/TYPE=Admin" -u "S=Moore" -n 8
unigroup: Item has been attached to the group
```

- グループ Marketing のユーザーをリストする場合は、次のようになります。

```
% unigroup -ls "NAME=Marketing" -members -n 8
unigroup: NAME=Marketing/ID=4096/NODE-ID=8/TYPE=Admin
Total Member(s): 1
User:      S=Moore/G=Roger/UID=Rogerm/ID=260/Node-ID=8
```

- リモート・ホスト **jupiter** 上のノード 20 に含まれるすべてのグループを表示する場合は、次のようになります。

```
% unigroup -ls "Node-id=*" -host jupiter -n 20
```

- ローカル・ホスト上のノード 10 に含まれるグループ **Managers** のすべてのメンバーを表示する場合は、次のようになります。

```
% unigroup -ls "NAME=Managers" -members -n 10
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNIICAL

uniical: iCal オブジェクトを使用して、ユーザーの予定表にカレンダー・エントリをインポートしたり、ユーザーの予定表のカレンダー・エントリをエクスポートまたは削除します。

構文

```
uniical -import -u <user> [-f <filename>] [-charset <charset>]
[-organizer <email>] [ [-neverresolvemail] | [-alwaysresolvemail] ]
-host <hostname> -n <node-ID> [[-uid <uid>] [-p <password>] | [-krb]]
```

```
uniical -process -u <user> [-f <filename>] [-charset <charset>]
[-organizer <email>] [ [-neverresolvemail] | [-alwaysresolvemail] ]
-host <hostname> -n <node-ID> [[-uid <uid>] [-p <password>] | [-krb]]
```

```
uniical -export -u <user> [-f <filename>]
[ [-end <date>] [-start <date>] | [-eventuid <uid>] ]
-host <hostname> -n <node-ID> [[-uid <uid>] [-p <password>] | [-krb]]
```

```
uniical -del -u <user> [-f <filename>] [-charset <charset>]
-host <hostname> -n <node-ID> [[-uid <uid>] [-p <password>] | [-krb]]
```

```
uniical -v
uniical -h
```

説明

uniical ユーティリティを **-import** オプションと併用することで、1 つ以上の iCAL VEVENT オブジェクトを含む入力ファイルの情報を使用して、カレンダー・ユーザーの予定表を更新できます。ユーザーの予定表からエントリを削除する場合は、**-del** オプションを使用します。入力ファイルに含まれる iCAL メソッドを処理する場合は、**-process** を使用します。このオプションは、同じ入力ファイルを使用して、カレンダー・エントリの作成、編集および削除を行う場合に使用できます。Oracle iCAL メソッドは、特定のイベントに適用される操作を指定する場合に使用します。

それぞれの iCAL VEVENT オブジェクトは、新しい会議または変更する既存の会議を示します。デフォルトでは、入力ファイルの名前は icalin.ics または icalin.txt です。入力ファイルの詳細は、「入力ファイルの書式」を参照してください。

ユーザーの予定表に新しい会議を追加するとき、uniical はその会議の UID を作成し、「入力ファイルの書式」の項で説明しているように、iCAL VEVENT 属性を Calendar Server 属性にマップします。デフォルトでは、uniical は、入力ファイルで指定されたすべての既存の会議を変更対象と見なします。**-del** オプションを指定した場合、uniical はこれらの既存の会議をすべてユーザーの予定表から削除します。イベントの追加、変更または削除に最低限必要な VEVENT 属性の詳細は、「入力ファイルの書式」を参照してください。

デフォルトでは、ユーザーの予定表を更新するために、uniical は指定された Calendar Server ノードに SYSOP としてサインオンします。代理ユーザーとしてサインオンするには、

-uid オプションおよび **-p** オプションを使用して、代理ユーザーおよびそのパスワードを指定します。

uniical を使用してユーザーの予定表をエクスポートする場合、ユーザーが開催した会議およびそのユーザーが出席者である会議の両方が、エクスポートされます。uniical によってユーザーの予定表にインポートされるイベントは、そのユーザーが開催したイベント、または他のユーザーが開催したイベント（つまり、そのユーザーは会議の出席者に過ぎない）です。そのイベントには、他のユーザーも出席者として含まれる可能性があります。

デフォルトでは、Uniical は **-alwaysresolveemail** オプションをサーバーに渡します。したがって、ユーザーが会議を開催する場合も単に出席者として参加する場合も、他の出席者は内部出席者として表示されます。

内部出席者は、同じカレンダー・ネットワークにカレンダー・アカウントを持つユーザーです。内部出席者が含まれる会議が追加された場合、その出席者の予定表に会議が表示されます。iCAL オブジェクト内の出席者の電子メールは、その出席者を既存のカレンダー・ユーザーと一致させるために使用されます。外部出席者は、出席者としてリストされますが、カレンダー・ネットワークに接続されません。この動作を変更するには、**-neverresolveemail** オプションおよび **-alwaysresolveemail** オプションを使用して内部ユーザーと強制的に一致させるか、すべての出席者を外部出席者として設定します。

iCAL オブジェクト内の開催者の電子メールを無視するには、**-organizer** オプションを使用します。

uniical は、作成、変更または削除するそれぞれの会議の UID 属性を出力します。また、すべてのエラーおよびその他のアクティビティを、
\$ORACLE_HOME/ocal/log/uniical.log ファイルに記録します。

uniical は、Calendar Server で実行されるすべてのマシンで実行できます。uniical を実行するには、Calendar Server が起動している必要があります。

注意： このユーティリティは、構成ファイル \$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini の [ENG] standards パラメータが {CAPI,ICAL2.0} に設定されている場合のみ、正常に動作します。

オプション

-alwaysresolveemail

常に、iCAL 出席者の電子メール・アドレスを、既存のカレンダー・ユーザーと一致させます（電子メール・アドレスが指定されている場合）。このオプションを使用すると、開催者が他のユーザーの場合も照合が試みられます。

-charset

<charset>

入力ファイル内のデータのキャラクタ・セットを定義します。<charset>の有効な値には、次が含まれます。

UTF8

英語：

WE8ISO8859P1

US7ASCII

WE8MSWIN1252

AL32UTF8

WE8ISO8859P15

ポルトガル語（ブラジル）、フランス語、ドイツ語、イタリア語：

WE8ISO8859P1

WE8MSWIN1252：

AL32UTF8

WE8ISO8859P15

日本語：

JA16EUC

JA16SJIS

AL32UTF8

韓国語：

KO16KSC5601

AL32UTF8

中国語（簡体字）：

ZHS16GBK

ZHS32GB18030

AL32UTF8

中国語（繁体字）：

ZHT16MSWIN950

ZHT16HKSCS

AL32UTF8

-del

ユーザーの予定表から、入力ファイルで指定された既存のイベントをすべて削除します。

-end

<date>

処理するカレンダー・データの範囲の終了日を指定します。日付書式 **mm/dd/yyyy** を使用します。

-eventuid

<eventuid>

エクスポートするイベントのイベント **UID** を指定します。

-export

-end オプションおよび **-start** オプションで指定した範囲の既存のイベントを、ユーザーの予定表から出力ファイルにすべてエクスポートします。予定表の 1 つのエントリをエクスポートする場合は、**-eventuid** オプションを使用して、単一のエントリを指定します。

-f

<filename>

iCAL VEVENT オブジェクトが含まれている入力ファイルの名前を指定します。デフォルトでは **icalin.ics** です。**icalin.ics** が検出されない場合、入力には **icalin.txt** が使用されます。出力に使用されるデフォルトのファイル名は、**icalin.ics** です。

-host

<hostname>

指定されたユーザーのノード・データベースのホスト名を指定します。

-import

ユーザーの予定表から、入力ファイルで指定された既存のイベントをすべてインポートします。

-krb

自動 Kerberos ログインを使用します。このオプションは、**-p** オプションおよび **-uid** オプションとは併用できません。

-n

<node-ID>

ユーザーのノードを指定します。指定されたホスト上に複数のノードが存在する場合は必須です。

-neverresolveemail

iCAL 出席者の電子メール・アドレスを、既存のカレンダ・ユーザーと一致させません。すべての iCAL 出席者は外部出席者として考慮されます。

-organizer

<e-mail>

イベントの開催者の電子メール・アドレスを指定します。このアドレスは、iCAL オブジェクト内のアドレスより優先されます。

-p

<password>

SYSOP または **-uid** で指定されたユーザーのパスワードを指定します。このオプションを使用していない場合は、パスワードの入力要求が行われます。

-process

入力ファイルで指定された既存の iCAL メソッドを、すべて処理します。入力ファイルの各 iCAL オブジェクトには、METHOD が含まれていることが必要です。サポートされているメソッドは次のとおりです。

X-ORACLE-IMPORT: iCAL イベントは、予定表に存在しない場合は作成されますが、存在する場合は変更されます。

X-ORACLE-CREATE: iCAL イベントは予定表に存在しないことが必要です。

X-ORACLE-MODIFY: iCAL イベントは予定表に存在する必要があります。

X-ORACLE-DELETE

iCAL エントリの例:

METHOD:X-ORACLE-MODIFY

-start

<date>

処理するカレンダ・データの範囲の開始日を指定します。日付書式 mm/dd/yyyy を使用します。

-u

<user>

イベントの作成、変更および削除の対象となる予定表を所有するユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーを指定します。<user> 引数の詳細は「<user> 引数の書式」を参照してください。

-uid

<user-ID>

代理ユーザーのユーザー ID です。指定されていない場合は、SYSOP が使用されます。-u オプションで指定されたユーザーの代理ユーザーの UID を指定します。

-v

uniical の現在のバージョン番号を出力します。

-h

uniical の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

書式**入力ファイルの書式**

入力ファイルには、1 つ以上の iCAL VEVENT オブジェクトが含まれ、各オブジェクトは次の書式で記述されます。

```
BEGIN:VCALENDAR
VERSION:2.0
PRODID:Oracle/Oracle Calendar Server 9.0.4
BEGIN:VEVENT
<VEVENT attributes>
END:VEVENT
END:VCALENDAR
```

<VEVENT attributes> は、リストされる属性の一部またはすべてです。また、uniical がこれらの属性を Calendar Server のデータ・フィールドにマップする方法もリストされます。

■ DTSTART

開始時間にマップします。UTC（協定世界時）で指定されます。たとえば、20020714T173000Z は 2002 年 7 月 14 日午後 5 時 30 分を表します。Calendar Server では時間が分単位で計測されるため、この属性の秒の値は削除されます。

- DTEND

終了時間にマップします。UTC で指定されます。詳細は、DTSTART を参照してください。

- DURATION

所要時間にマップします。書式 P0DT<hours>H<minutes>M<seconds>S で指定されます。たとえば、PT2H30M0S は 2 時間 30 分の所要時間を指定します。この属性の値は、23 時間 59 分より長く設定することはできません。Calendar Server では時間が分単位で計測されるため、この属性の秒の値は削除されます。

- SUMMARY

イベント・タイトルにマップします。最大 64 文字に制限されています。

- PRIORITY

重要度レベルにマップします。iCAL の優先度 1、3、5、7 および 9 は、重要度レベルの最高、高、標準、低および最低にそれぞれマップされます。指定されていない場合、uniical は優先度 5（標準）を割り当てます。

- CLASS

アクセス・レベルにマップします。大 / 小文字が区別されます。iCAL クラスのパブリック、個人および機密が、アクセス・レベルのパブリック、個人および機密にそれぞれマップされます。指定されていない場合、uniical はパブリックを割り当てます。

- LOCATION

場所にマップします。最大 32 文字に制限されています。

- 説明

詳細にマップします。32 KB を超過すると切り捨てられます。

- UID

Calendar Server のフィールドには直接マップしません。Calendar Server は iCAL UID を別々に格納します。

- COMMENT

廃棄されました。

DESCRIPTION、LOCATION、SUMMARY および COMMENT の各属性のカンマの前には、バックスラッシュ (¥) を付ける必要があります。

新しいイベントの作成に最低限必要な情報は、DTSTART および、DTEND または DURATION のどちらかです。

既存の会議の変更に最低限必要な情報は、正しい UID および会議の開始時間です。uniical はまず、iCAL の RECURRENCE-ID 属性に含まれる、指定開始時間を検索します。値が検出されなかった場合は、DTSTART の値を使用します。会議の開始時間を変更するに

は、RECURRENCE-ID 属性で元の開始時間を指定し、DTSTART 属性で新しい開始時間を指定する必要があります。

既存の会議の削除に最低限必要な情報は、正しい UID です。これは、uniical が削除時に考慮する唯一の属性です。そのため、2 つのイベントが同じ UID を持つ場合、uniical を使用してどちらか 1 つだけを削除することはできません。

2 つ以上の新しい iCAL イベントが同じ UID を持ち、DTSTART の値が異なる場合、uniical は繰返し会議を作成します。ただし、これらのイベントの 1 つが後で削除用に入力された場合、uniical は、繰返し会議のすべてのインスタンスを削除します。

新しいイベントが入力ファイル内で 2 回表示され、2 番目のインスタンスが独自の一意的な UID を持たない場合、2 番目のイベントによって最初のイベントが上書きされます。

サンプル入力ファイル 次の入力ファイルには、2 つの iCAL VEVENT オブジェクトが含まれています。最初のオブジェクトは、指定されたユーザーの予定表で、2001 年 1 月 31 日午後 4 時に新しい会議が作成されることを示しています。2 番目のオブジェクトは、既存の会議への変更を示しています。既存の会議の変更では、開始時間が午後 4 時 30 分から午後 4 時 45 分に変更されます。uniical は、UID および RECURRENCE-ID 属性で指定された開始時間を使用して、指定されたユーザーの予定表内の会議を検索します。また、他の属性で指定された変更を使用して、会議の情報を更新します。

```
BEGIN:VCALENDAR
VERSION:2.0
PRODID:Oracle/Oracle Calendar Server 9.0.4
BEGIN:VEVENT
DESCRIPTION: NYPMRN: 99999990DXMRN:999999990DX Comment: <appointment comments>
LOCATION: Type: <type> IDX# <IDX visit identifier>
DTSTART:20010131T160000Z
DURATION:P0DTH20M0S
COMMENT:IDX visit identifier
SUMMARY:Carter Dickson
PRIORITY:3
END:VEVENT
END:VCALENDAR
```

```
BEGIN:VCALENDAR
VERSION:2.0
PRODID:Oracle/Oracle Calendar Server 9.0.4
BEGIN:VEVENT
DESCRIPTION: NYPMRN: 99999990DXMRN:999999990DX Comment: <appointment comments>
LOCATION: Type: <type> IDX# <IDX visit identifier>
DURATION:P0DTH20M0S
SUMMARY:John Dickson Carr
COMMENT:IDX visit identifier
DTSTART:20000215T164500Z
RECURRENCE-ID:20000215T163000Z
PRIORITY:6
```

```
END:VEVENT
END:VCALENDAR
```

<user> 引数の書式

ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーを表す <user> 引数は、
 "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、
 value は任意の文字列です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。ID キー
 以外のすべてのキーにおいて、value 文字列はワイルド・カード文字「*」で終了する場合があります。
 スラッシュ「/」が文字列に含まれる場合は、キーと値のペアのデリミタとして
 解釈されることを防ぐため、文字「¥」でエスケープする必要があります。たとえば、
 "S=Hoopla/OU1=R¥/D" のようになります。

UNIX 環境でシェルが文字列を処理する場合（たとえば文字列がコマンドラインで提供される
 場合や、ユーティリティに引数として渡される場合）、文字列は引用符で囲む必要があります。
 また、シェルにとって意味をなす文字が文字列に含まれる場合は、シェルが解釈する
 ことを防ぐためその文字をエスケープ（つまり、エスケープ文字「¥」を前に付ける）します。

注意： ID のキーと値のペアが <user> 引数で指定されている場合は、ともに指定されている他のキーと値のペアはすべて無視されます。

3 列目にリストされている書式パラメータを **-format** オプションと併用することで、リスト
 の表示を構成できます（「例」を参照）。使用できるキーおよび書式の完全なリストは、**-info**
 オプションを使用して取得してください。

表 F-36 -u オプションに使用可能なイベント・カレンダー・キー： UNIICAL

キー	X.400 フィールド	書式パラメータ
N	イベント・カレンダー名	%N%

表 F-37 -u オプションに使用可能なリソース・キー： UNIICAL

キー	X.400 フィールド	書式パラメータ
R	リソース名	%R%
N	リソース番号	%N%
UID	リソース固有の識別子	%UID%

表 F-38 -u オプションに使用可能なユーザー・キー： UNIICAL

キー	X.400 フィールド	書式パラメータ
S	姓	%S%
G	名	%G%
I	イニシャル	%I%
ID	識別子	%ID%
X	世代	%X%
UID	ユーザー固有の識別子	%UID%
OU1	組織単位 1	%OU1%
OU2	組織単位 2	%OU2%
OU3	組織単位 3	%OU3%
OU4	組織単位 4	%OU4%
O	組織	%O%
C	国	%C%
A	管理ドメイン	%A%
P	プライベート・ドメイン	%P%
PHONE	電話番号	%PHONE%
FAX	FAX 番号	%FAX%
EMPL-ID	従業員番号	%en%
JOB-TITLE	役職名	%jt%
EMAIL	[ENG] usermailmap パラメータの値	%EMAIL%

例

- ホスト horus のノード 12 にある組織単位 Pediatrics に属するユーザー Mark Johnson の予定表を、入力ファイル /pediatric/IDXtoCST.txt のコンテンツを使用して更新します。ここで、代理ユーザー Alfred Kelvin を使用して Mark Johnson の予定表の更新を実行する場合は、次のようになります。

```
% uniical -import -u "S=Johnson/OU1=Pediatrics" -uid "UID=akelvin" -p
PSWforKelvin -host horus -n 12 -f /pediatric/IDXtoCST.txt
```

```
uniical: Event has been imported.
UID = 20030614T160536Z-423-18b6-Oracle@server1
```

```
uniical: Event has been imported.
UID = 20030614T150536Z-234-18b6-Oracle@server1
```

```
uniical: Event has been imported.
UID = 20030614T160566Z-432-18b6-Oracle@server1
```

```
uniical: Event has been imported.
UID = 20030614T160586Z-243-18b6-Oracle@server1
```

- 代理ユーザー sysop を使用し、結果がファイル MJohnson.txt に書き込まれるように同じ手順を実行する場合は、次のようになります。

```
% uniical -import -u "S=Johnson/OU1=Pediatrics" -p SysOpPsw -host horus -n 12 -f
/pediatric/IDXtoCST.txt > MJohnson.txt
```

- 入力ファイル ./axe.txt のすべての会議を、ホスト horus のノード 12 にある組織単位 Pediatrics に属するユーザー Mark Johnson の予定表から削除する場合は、次のようになります。

```
% uniical -del -u "S=Johnson/UID=Pediatrics" -uid "Pediatrics" -p PSWforJohnson
-host horus -n 12 -f ./axe.txt
```

```
uniical: Event has been deleted.
UID = 20030616T160546Z-403-18b6-Oracle@server1
```

```
uniical: Event has been deleted.
UID = 20030616T167776Z-403-18b9-Oracle@server1
```

ファイル

/users/unison/log/uniical.log

uniical は、独自のアクティビティをこのファイルに記録します。

./icalin.txt

uniical のデフォルトの入力ファイルです。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

注意

iCAL の詳細は、IETF RFC 2445 を参照してください。

UNIL2BENDIAN

unil2bendian: Calendar Server ノード・データベースを、リトル・エンディアン
Windows NT プロセッサ用形式からビッグ・エンディアン・プロセッサ用形式に変換しま
す。このユーティリティの詳細は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに問い合せて
ください。

構文

```
unil2bendian [-n <node-ID>]  
unil2bendian -v  
unil2bendian -h
```

説明

unil2bendian は、リトル・エンディアン
Windows NT マシンで実行される Calendar
Server から、ビッグ・エンディアン
UNIX マシン (HP-UX、Solaris または AIX など) で
実行される Calendar Server に、ノード・データベースを移行する際に使用します。

このユーティリティは、リトル・エンディアン形式からビッグ・エンディアン形式に、ノード・データベースの *.dat ファイルを変換します。変換は、ファイルのコピーで実行されるため、元のデータベースは変更されません。変換に必要なファイルは *.dat ファイルのみです。それ以外のファイルは変換先のマシンでビルドされます。

unib2lendian は、ビッグ・エンディアン
UNIX 形式からリトル・エンディアン
Windows NT 形式にファイルを変換するための、補足的なユーティリティです。

unil2bendian は、Calendar Server が停止しているときだけ実行可能です。

オプション

-n

<node-ID>

変換するノードを指定します。ローカル・ホスト上に複数のノードが存在する場合は必須です。

-v

unil2bendian の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unil2bendian の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

リトル・エンディアン・マシンからビッグ・エンディアン・マシンへのノードの移行

次の例では、ノード 45 を変換し、リトル・エンディアン・マシンで実行される Calendar Server から、ビッグ・エンディアン・システムで実行される Calendar Server に移行します。

1. 両方のマシンで Calendar Server を停止します。この手順の中で指示があるまでは、どちらのサーバーも再起動しないでください。
2. ターゲット・ノードで unil2bendian を実行します。

```
unil2bendian -n 45
```

変換されたノードのコピーは、\$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/<N#>/perm_conv ディレクトリに保存されます。ここで <N#> は、ターゲット・ノードに対応する unison.ini セクションの name パラメータの値です。

3. 古いホストの \$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini ファイルにあるターゲット・ノードに対応するセクションを、新しいホストの unison.ini ファイルにコピーします。次に例を示します。

```
[45]
name = N1
version = A.02.50
```

古いホストの unison.ini ファイルからこのセクションを削除します。

4. perm_conv ディレクトリのすべての *.dat ファイルを、ビッグ・エンディアン・システムの \$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/<N#>/perm ディレクトリにコピーします。

5. 新しいホストで、\$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/Nempty/perm/unison.dbd ファイルおよび \$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/Nempty/perm/vista.ctb ファイルを \$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/<N#>/perm ディレクトリにコピーします。
6. 新しいノードの tmp ディレクトリを作成し、必要なファイルをコピーします。

```
% cd $ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/<N#>
% mkdir tmp
% cd tmp
% copy $ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/Nempty/tmp/set.dat
% copy $ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/Nempty/tmp/set.key
% copy $ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/Nempty/tmp/unitmp.dbd
```
7. ターゲット・ノードがノード・ネットワークに含まれている場合は、Calendar Server を再起動する前に、ネットワーク情報を必ず更新してください。

警告： この手順を実行しなかった場合、データ障害またはデータベースの破損、あるいはその両方が発生する可能性があります。

まず、ノード・ネットワークのすべての Calendar Server を停止します。

unidbfix を使用して、remotenode.dat ファイルの情報をすべてのノードの remotenode.ini ファイルにエクスポートします。たとえば、ネットワークがノード 30、35、40、45 および 50 で構成されている場合は、次のようになります。

```
% unidbfix -export -n 30
% unidbfix -export -n 35
% unidbfix -export -n 40
% unidbfix -export -n 45
% unidbfix -export -n 50
```

unidbfix は、各ノードのローカル・ホストで実行する必要があります。

ネットワークの各ノードの \$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/<Nx>/perm/remotenode.ini ファイルを編集し、ノード 45 に関連付けられているホスト名を変更します。

ビッグ・エンディアンの UNIX ホストに移行する場合は、ファイルの所有権およびコピー済ファイルの権限が正しく設定されるように、ノード 45 で uniclean を実行します。

ノード 45 で unidbfix -k を実行し、キー・ファイルを作成します。

Use unidbfix -import to update the remotenode.dat file with the new information in the remotenode.ini files.

```
% unidbfix -import -n 30
% unidbfix -import -n 35
% unidbfix -import -n 40
% unidbfix -import -n 45
```

```
% unidbfix -import -n 50
```

これにより、各ノードのキー・ファイルの再ビルドも行われます。

`$ORACLE_HOME/ocal/misc/nodes.ini` ファイルを更新し、ノード 45 のホスト名の変更を反映させます。

8. すべての Calendar Server を再起動します。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 データベースの変換に失敗
- 2 使用時エラー

関連項目

`unidbfix`、`unistart`、`unistop`、`uninode`

UNILOGONS

`unilogons`: Calendar Server のサインオンおよびサインオフの統計を表示します。

構文

```
unilogons [-s <starttime>] [-e <endtime>] [-i <interval>] [-f <filename>]
```

```
unilogons -t -s <starttime> -e <endtime> -i <interval> [-f <filename>]
```

```
unilogons -t [<time>] [-f <filename>]
```

```
unilogons -v
```

```
unilogons -h
```

説明

`unilogons` は、特定の時間または時間枠における、Calendar Server 上でのユーザーのサインオンおよびサインオフのアクティビティを表示します。デフォルトでは、`$ORACLE_HOME/ocal/log/act.log` ファイルの情報が使用されます。`-f` オプションを使用して別の入力ファイルを指定することもできます。

`-t` オプションを使用すると、特定の日時のアクティビティを表示できます。`-s` オプションおよび `-e` オプションを使用すると、指定した時間枠でのアクティビティを表示できます。`-i` オプションは、指定された時間枠内での、一定の間隔（たとえば 15 分ごと）を指定します。

デフォルトでは、デフォルトの開始時間（現在の日付の最初の 1 分）からデフォルトの終了時間（現在のシステム時間）までの、すべてのアクティビティが表示されます。

unilogons を実行するには、Calendar Server が起動している必要があります。

オプション

-e

<endtime>

統計の終了時間を指定します。このオプションを使用していない場合、デフォルトの終了時間は現在の日時になります。<endtime> の指定方法の詳細は、「time 引数の書式」を参照してください。

-f

<filename>

入力ファイルの名前を指定します。デフォルトでは、入力ファイルは \$ORACLE_HOME/ocal/log/act.log です。-f オプションで指定する入力ファイルは、書式が act.log ファイルと同じである必要があります。

-i

<interval>

時間範囲を指定します。デフォルトの範囲は <endtime> から <starttime> を引いた時間です。範囲の指定方法の詳細は、「<interval> 引数の書式」を参照してください。

-s

<starttime>

統計の開始時間を指定します。このオプションを使用していない場合、デフォルトの開始時間は現在の日付の最初の 1 分になります。<starttime> の指定方法の詳細は、「time 引数の書式」を参照してください。

-t

[<time>]

-s、e および -i の各オプションを使用せずにこのオプションを使用した場合は、現在の時刻 (-t) または指定した時間 (-t <time>) の統計が表示されます。-s、-e および -i の各オプションのすべてと併用した場合、-t (<time> 引数なし) では <interval> (-i) 引数で指定された時間ごとのアクティビティだけが出力されます。-t オプションを使用した場合と使用しない場合の、-s、-e、および -i の各オプションのサンプル出力は、「例」の最後の 2 つの例を参照してください。時間の指定方法の詳細は、「time 引数の書式」を参照してください。

-v

unilogons の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unilogons の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

書式**time 引数の書式**

<starttime>、<endtime> および <time> の各引数は、次のいずれかで表されます。

- day month [year] [time]
- [month day] time [year]

ここでは次のようになります。

- day
1 ～ 31 の数字。
- month
完全な月の名前またはその最初の 3 文字 (jan、feb、mar など) (月は大 / 小文字が区別されません)。
- year
1991 以上の 4 桁の数字で指定する必要があります。
- time
書式は HH:MM または HH:MM:SS (HH は 0 ～ 23 の整数、MM は 0 ～ 59 の整数、SS は 0 ～ 59 の整数) です。

引数に含まれる個々の要素の順番は、さほど重要ではありません。重要なのは、日と月が指定されているか、または時間が指定されているかです。次に示す例はすべて有効です。

```
Feb 22 2003 10:00:00
22 february 10:00:00
10:00:00 february 22 2003
2003 feb 22
feb 22
10:00:00
```

day、month、year および time のデフォルト値は、それぞれ現在の年月日および現在のシステム時刻です。

指定されていない時間のフィールド（HH、MM または SS）は、現在の HH、MM または SS の値に置き換えられます。つまり、現在の日付および時間が、2003 年 3 月 12 日 10 時 12 分 34 秒で、引数では HH:MM しか指定されていない場合、SS は 34 になります。

```
-e 12:41 -> March 12 2003 12:41:34
-s 12:41 -> March 12 2003 12:41:34
```

時間フィールドがまったく指定されていない場合、starttime はその日の最初の 1 分になり、endtime はその日の最後の 1 分になります。

```
-s feb 22 -> feb 22 2003 00:00:00
-e feb 22 -> feb 22 2003 23:59:59
```

<interval> 引数の書式

<interval> 引数は 0 より大きい整数で、次のように分数、時間数または日数で入力する必要があります。

```
minutes: 1m, 2m, etc. up to 999999999m (9 digits)
hours:    1h, 2h, etc. up to 9999999h (7 digits)
days:    1d, 2d, etc. up to 99999d (5 digits)
```

例

- 現在ログインしているユーザー数を表示する場合は、次のようになります。

```
unilogons -t
```

- 2003 年 10 月 6 日午後 3 時にログインしていたユーザー数を表示する場合は、次のようになります。

```
unilogons -t oct 6 2003 15:00
```

これにより、次の出力が作成されます。

```
Time 1: Oct 6 2003 15:00:00
-----
Client                               Logged-On
Name & Version

unisnxd                               2
Windows/32/Oracle Calendar           1
-----
Totals:                               3
```

- 2003 年 10 月 6 日午後 3 時から 2003 年 10 月 6 日午後 5 時までの間にログインしていたユーザー数を 15 分ごとに表示する場合は、次のようになります。

```
unilogons -t -s oct 6 2003 15:00:00 -e oct 6 2003 17:00:00 -i 15m
```

このコマンドからの出力のサンプル・セクションは、15:00:00、15:15:00、15:30:00 のように、17:00:00 までの各時間に出力される内容の書式を示しています（コマンドラインから **-t** が削除されている次の例の出力と比較してください）。

```
Time 1: Oct 6 2003 15:00:00
-----
Client                      Logged-On
Name & Version

unisncd                      2
Windows/32/Oracle Calendar  1
-----
Totals                        3
```

- 定義された時間枠（2003 年 10 月 6 日午後 3 時～午後 5 時）のサインオン / サインオフの統計を出力し、この時間内の 15 分ごとの累積統計を提供します。このコマンドラインからの出力を、**-t** を含む前の例と比較してください。

```
unilogons -s oct 6 2003 15:00:00 -e oct 6 2003 17:00:00 -i 15m
```

この時間枠内の 15 分ごとの時間に対して、次のような出力が表示されます。

```
Time Period 1: From Oct 6 2003 15:00:00 Till Oct 6 2003 15:15:00
-----
Client                      Logons    Logoffs    Average Time    Median Time
Name & Version                      Logged-On (hrs)  Logged-On (hrs)

Not Available                0         2          20.71           23.98
unisncd                      2         0           9.83           9.83
Windows/32/OracleCalendar    4         4           0.02           0.02
-----
Totals                        6         6
```

ファイル

\$ORACLE_HOME/ocal/log/act.log

デフォルトで、unilogons はこのファイルから情報を取得します。このファイルは、unison.ini の [ENG] activity パラメータが TRUE に設定されている場合のみ、作成されます。

警告

入力ファイルおよび処理時間

unilogons は、入力ファイルのサイズによって、終了までに時間がかかる場合があります。

入力ファイルおよびディスク領域

unilogons の実行に必要なディスク領域は、入力ファイルの 1.5 倍です。つまり、入力ファイルのサイズが 8 MB の場合、unilogons を実行するには約 12 MB の空きディスク領域が必要です。unilogons は、\$ORACLE_HOME/ocal/tmp ディレクトリに一時ファイルを作成するため、このディレクトリに十分な空き領域が必要です。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

0 成功

1 失敗

UNIMMIMPSRV

unimmimpsrv: MeetingMaker サーバーから Oracle Calendar Server ノードへデータをインポートするユーティリティです。

構文

```
unimmimpsrv
unimmimpsrv -v
unimmimpsrv -h
```

説明

unimmimpsrv ユーティリティは、MeetingMaker サーバーから Oracle Calendar ノードにデータを移行するときに使用します。unimmimpsrv は、unimmimpsrv.ini ファイルを参照して、インポートする MeetingMaker ファイルとデータを受け取るノードを決定します。unimmimpsrv は、ディレクトリ・サーバーを使用する Oracle Calendar Server では機能しません。

重要： このユーティリティは訓練を受けたオラクル社の担当者のみが使用する必要があります。資格のないユーザーがこのユーティリティを使用した結果、データの損失や破損が発生した場合、オラクル社は責任を負いかねます。また、標準のサポート契約の対象外となります。

unimmimpsrv を実行する前に次の点に注意してください。

- 1 つの MeetingMaker サーバーを複数のノードに分割することはできませんが、任意の数の MeetingMaker サーバーを 1 つのノードにインポートできます。
- 異なるハブに接続された複数の MeetingMaker サーバーは、個別にインポートする必要があります。

- 1つのハブに接続されたすべての MeetingMaker サーバーは、1回の操作でインポートする必要があります。

1つのハブに接続されている MeetingMaker サーバーのサブセットのみをインポートする場合、次のように処理されます。

- ハブに接続されたすべての MeetingMaker サーバーのユーザー全員に Oracle Calendar アカウントが作成されます（ターゲットのサブセットとターゲット以外の両方のユーザーに対して）。
- ターゲット・サブセットのユーザーによって指定された場合のみ、ターゲット・サブセット以外のユーザーに予定表エントリが作成されます。uniuser ユーティリティを使用して、カレンダー・データベースからターゲット・サブセット以外のユーザーを後で削除できます。

MeetingMaker から Oracle Calendar にデータを移行するには、次の手順を実行します。

1. 各 MeetingMaker サーバーをバックアップします。
2. エクスポートする各 MeetingMaker サーバーから不要なデータをすべて消去します。
3. MeetingMaker の管理者ユーティリティを使用して、MeetingMaker サーバーの各データベースを *.dat ファイルにエクスポートします。
4. MeetingMaker データを受け取る Oracle Calendar ノードがない場合は作成します。
5. Oracle Calendar ノード・ネットワークが正しく構成され、すべてのノードが動作していることを確認します。
6. unimmimpsrv ユーティリティを使用して、\$ORACLE_HOME/ocal/misc/unimmimpsrv.ini ファイルを読み取り、MeetingMaker の *.dat ファイルを指定された Oracle Calendar ノードにインポートします。
7. 最後に、必要に応じて uniuser ユーティリティを実行し、user.ini ファイルの設定を新しくインポートしたユーザーに適用し、これらのユーザーに関連付けられた情報を変更します。

オプション

-v

unimmimpsrv の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unimmimpsrv の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

注意

転送可能なデータ

次の表に、MeetingMaker と Oracle Calendar の間で転送可能なデータの対応を示します。

MeetingMaker	Oracle Calendar の対応するデータ
管理データ :	
サーバー名	「X.400 組織単位 4」フィールドまたは unimmimpsrv.ini の mapservername パラメータの値（設定されている場合）。
MeetingMaker の休日	Oracle Calendar の休日。
MeetingMaker のパブリック・グループ および関連サブグループ	Oracle Calendar のパブリック・グループ。
タイムゾーン	Oracle Calendar ノードのタイムゾーン（ノード作成中に手動による設定が必要）。
ユーザー・データ :	
ログイン名	「X.400 ユーザー固有の識別子」フィールドまたは unimmimpsrv.ini の mapsignin パラメータの値（設定されている場合）。
名	「X.400 名」フィールド。
姓	「X.400 姓」フィールド。
パスワード	「X.400 パスワード」フィールド。ただし、unimmimpsrv.ini の importpassword パラメータが FALSE に設定されていない場合。FALSE の場合、パスワードは NULL に設定されます。
会社	「X.400 A」フィールドまたは unimmimpsrv.ini の mapcompany パラメータの値。
部署	「X.400 組織単位 1」フィールドまたは unimmimpsrv.ini の mapcompany パラメータの値。
役職名	「X.400 役職名」フィールド。
電話番号	「X.400 電話番号」フィールド。
内線	「X.400 内線」フィールド。
FAX 番号	「X.400 FAX 番号」フィールド。

MeetingMaker	Oracle Calendar の対応するデータ
住所（「市区町村」、「都道府県」、「郵便番号」を除く）	番地。
電子メール	unison.ini の [ENG] usermailmap パラメータの値または unimmimpsrv.ini の mapcompany パラメータの値（設定されている場合）。
サーバー名	「X.400 組織単位 4」フィールドまたは unimmimpsrv.ini の mapcompany パラメータの値（設定されている場合）。
ユーザー定義グループ	ユーザーが所有するプライベート・グループ。デフォルトでは、すべての MeetingMaker ユーザーのグループ名は「アドレス帳」となります。これは、Oracle Calendar の別のユーザー・グループです。
ユーザー・アクティビティ	出席者のいない Oracle Calendar の会議。
ユーザー会議	同じ出席者を持つ Oracle Calendar の会議（下を参照）。
ユーザー・バナー	Oracle Calendar のメモ。バナーでカバーされる日ごとに 1 つ。
ユーザーの ToDo	Oracle Calendar のタスク（詳細は下を参照）。
ユーザー・プロキシ	Oracle Calendar の代理。読取りまたは書込みアクセスに関係なく、すべてのプロキシには権限付与者の Oracle Calendar 予定表に対する表示権限のみが付与されます。
リソース・データ：	
名、姓	組み合わせて Oracle Calendar のリソース名になります。unimmimpsrvにより自動的にリソース番号が割り当てられます。
パスワード	Oracle Calendar のリソース・パスワード。ただし、unimmimpsrv.ini の importpassword パラメータが FALSE に設定されていない場合。FALSE の場合、リソース・パスワードは NULL に設定されます。

MeetingMaker	Oracle Calendar の対応するデータ
MeetingMaker のアクティビティおよび会議データ :	
プライベート	個人アクセス・レベル。
タイトル	タイトル。
場所	場所。
時刻	時刻。
日付	日付。
所要時間	所要時間。
繰り返し	定期的。
情報	出席者および出席ステータス（ローカル出席者のみ。 リモート出席者の出席ステータスは「後で決定」に 設定されます）。
MeetingMaker のバナー :	
タイトル	メモのタイトル。
場所	メモのタイトルに追加。
日付	メモの日付。
繰り返し	定期的なメモ。
情報	出席者および出席ステータス（ローカル出席者のみ。 リモート出席者の出席ステータスは「後で決定」に 設定されます）。
MeetingMaker の ToDo データ :	
タイトル	タスクのタイトル。
日付	タスクの日付。
出席者	各出席者の予定表にこのタスクのコピーが作成され ます。
優先度レベル	タスクには 1 から 7 までの一般的な優先度レベルが 割り当てられます。すべての出席者に優先度が 1 つ のみインポートされます。

転送不能のデータ

Oracle Calendar への移行中、次のデータは失われます。注意：（読取り）は、データが unimmimpsrv ユーティリティではサポートされ、Oracle Calendar ではサポートされていないことを示します。

失われる管理データ

- MeetingMaker 管理権限。これらの権限は、Oracle Calendar Server の管理ツールを使用して手動で設定する必要があります。

失われるユーザー・データ

- 部屋、情報、都市、郵便番号、国（読取り）。
- 会議およびアクティビティのユーザー定義ラベル。
- ユーザー定義 ToDo 優先度レベル。
- ユーザーの作業日および時間。
- デフォルトの通知およびリマインダの作業環境は MeetingMaker からエクスポートされません。
- ユーザー定義連絡先リスト： 会議、アクティビティ、ToDo の出席者としても、グループ・メンバーとしてもインポートされません。

失われるリソース・データ

- 失われるすべてのユーザー・データ、ならびに電話、内線、FAX 番号およびタイトル（読取り）。
- リソースで定義されたグループ（読取り）。
- リソース・アクティビティ（読取り）： Oracle Calendar のリソースではイベントを作成できません。

失われる MeetingMaker のアクティビティ、バナーおよび会議データ

- 公開可能。
- フレキシブル。
- リマインダ。
- 重要度レベル。
- ラベル。
- 出席者のコメント。
- Oracle Calendar には、月末から x 日ごとに繰り返される会議およびアクティビティに対応する項目はありません。この場合、イベントは月に一度、同じ日付に発生する繰返し会議としてインポートされます。
- 開始日が 1991 年より前の会議。

- 各イベントの最初の 60 インスタンスのみインポートされます。

失われる MeetingMaker の ToDo データ

- 優先度レベル、プライベート / 公開可能。
- 出席者のコメント。
- 完了 / 未完了。
- 所有者制御：各出席者に、個別の Oracle Calendar タスクが作成されます。タスク詳細には、作成者の名前と出席者全員のリストのみが含まれます。

ファイル

`$ORACLE_HOME/ocal/log/unimmimpsrv.log`

このファイルでは、開始時間、終了時間、所要時間、重要なステップおよびエラーが記録されます。

`$ORACLE_HOME/ocal/misc/unimmimpsrv.ini`

このファイルには、インポート・プロセスに使用される設定が含まれます。詳細は `unimmimpsrv.ini` を参照してください。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

関連項目

`unimmimpsrv.ini`、`uniuser`

UNIMVUSER

unimvuser: 1 つの Calendar Server ノードから別の Calendar Server ノードに、ユーザーを移動します。

構文

```
unimvuser -u <user> -host1 <hostname1> -host2 <hostname2>
-n1 <node-ID1> -n2 <node-ID2> [-p1 <sysOpPsw1>] [-p2 <sysOpPsw2>]
[-up <userPsw>] [-UIDpreserve] [-verbose]
```

```
unimvuser -v
unimvuser -h
```

説明

unimvuser は、1 つの Calendar Server ノードから別の Calendar Server ノードに、ユーザーを移動します。代理およびリモート代理権は保持されます。

注意： unimvuser は、ネットワークのすべてのホストで 4.0 以上のサーバーを使用している場合のみ機能します。4.0 より前のバージョンの Calendar Server で作成したノードが含まれているノード・ネットワークのユーザーを移動する場合は、unicpoutu および unicpinu を使用してください。

注意： 5.0 以上のノードから 4.0 以下のノードにユーザーを移動する場合は、実行に移す前に「警告」の項を参照してください。

移動操作により、ユーザー情報は以下のように変更されます。

- そのユーザーが作成したすべての管理グループは、新しいノードに移動しません。
- 移動されたユーザーが作成したすべてのパブリック・グループは、プライベート・グループになります。
- 内部ディレクトリを使用したインストールでは、ユーザーのパスワードは保持されません。**-up** オプションを参照してください。

unimvuser は、これらの変更およびその他のアクティビティを、\$ORACLE_HOME/ocal/log/unimvuser.log ファイルに記録します。

unimvuser が正常に完了しても、移動操作がまだ完了していない可能性があることを理解しておく必要があります。特に、移動先ノード（ユーザーの移動先ノード）およびリモート・ノード（このユーザーに出席を依頼した可能性があるその他のユーザーが属するノード）で、まだ操作が行われている可能性があります。操作が完了するまで、移動されたユーザーの予定表は不完全な状態で表示されます。

移動操作が完了するまでにかかる時間は、コーポレート・ワイド・サービス・デーモン / サービスの要求キューで待機している要求の数によって異なります。このため、unimvuser は、Calendar Server のピーク時間以外に実行することをお勧めします。

また、unimvuser が完了する前に、移動されるユーザーが Calendar Server へのログインを試みたり、移動されるユーザーの代理として他のユーザーが作業することがないようにしてください。このような状況で行われた変更は、すべて失われます。

unimvuser 操作は、同時に 2 回以上実行しないでください。関与するユーザーが別のノード上に存在し、別の Calendar Server のホスト上で unimvuser を実行したとしても、ユーザーは一部の会議またはイベントを共有している可能性があります。そのため、データベースが破損します。

unimvuser は、外部ディレクトリ・サーバーを使用するノードから、Calendar Server の内部ディレクトリを使用するノードにユーザーを移動できます。しかし、Calendar Server の内部ディレクトリを使用するノードから外部ディレクトリ・サーバーを使用するノードにユーザーを移動することはできません。

以前のバージョンの Calendar Server のホスト間でユーザーを移動する場合でも、常に最新バージョンの unimvuser を使用してください。たとえば、ノード・ネットワークにバージョン 5.4 の 2 つの Calendar Server のホスト、およびバージョン 9.0.4 の 1 つのホストが存在する場合は、9.0.4 サーバーの bin ディレクトリにある unimvuser ユーティリティを使用する必要があります。

ソース・ホストと移動先ホストの構成の違いによって、問題が発生したり、移動が完全にブロックされる場合があることに注意してください。たとえば、定期的に行われる会議のインスタンスの最大数 (unison.ini [ENG] maxinstances パラメータ) が、ソース・サーバーで移動先サーバーより多く設定されており、移動するユーザーが移動先ホストでの最大数より多いインスタンスを持つ定期的な会議を所有している場合、その移動は失敗します。

unimvuser を実行するには、Calendar Server が起動しており、接続されているすべてのノードが有効であることが必要です。

オプション

-host1

<hostname1>

ソース・ノードのホスト名を指定します。ポート番号を指定するには <hostname> パラメータに対して hostname:port の書式を使用します。

-host2

<hostname2>

移動先ノードのホスト名を指定します。ポート番号を指定するには <hostname> パラメータに対して hostname:port の書式を使用します。

-n1

<node-ID1>

ソース・ノードを指定します。

-n2

<node-ID2>

移動先ノードを指定します。

-p1

<sysOpPsw1>

ソース・ノードの SYOSP パスワードを提供します。このオプションを使用していない場合は、パスワードの入力要求が行われます。

-p2

<sysOpPsw2>

移動先ノードの SYOSP パスワードを指定します。このオプションを使用していない場合は、パスワードの入力要求が行われます。

-u

<user>

移動するユーザーを指定します。<user> 引数の正しい指定方法は、「<user> 引数の書式」を参照してください。ディレクトリ・サーバーの場合、移動先ノードで使用するディレクトリ・サーバーで、そのユーザーがすでに存在する必要があります。

-UIDpreserve

元の Calendar SDK のイベント UID を保存します。このオプションは、ソース・ノードと移動先ノードの両方で Calendar SDK を使用している場合は必須です。

-up

<userPsw>

内部ディレクトリ専用です。ユーザーの新しいパスワードを指定します。このオプションが使用されていない場合、ユーザーはパスワードを指定せずに **Calendar Server** にログインできます。ディレクトリ・サーバーの場合、このオプションは無効です。これは、パスワードがディレクトリ・サーバーに格納され、変化しないためです。

-verbose

冗長モードを使用します。

-v

unimvuser の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unimvuser の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

書式

<user> 引数の書式

<user> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は任意の文字列です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。ID キー以外のすべてのキーにおいて、value 文字列はワイルド・カード文字「*」で終了する場合があります。スラッシュ「/」が文字列に含まれる場合は、キーと値のペアのデリミタとして解釈されることを防ぐため、文字「¥」でエスケープする必要があります。たとえば、"S=Hoopla/OU1=R¥/D" のようになります。

UNIX 環境でシェルが文字列を処理する場合（たとえば文字列がコマンドラインで提供される場合や、ユーティリティに引数として渡される場合）、文字列は引用符で囲む必要があります。また、シェルにとって意味をなす文字が文字列に含まれる場合は、シェルが解釈することを防ぐためその文字をエスケープ（つまり、エスケープ文字「¥」を前に付ける）します。

注意： ID のキーと値のペアが <user> 引数で指定されている場合は、ともに指定されている他のキーと値のペアはすべて無視されます。また、ID のキーと値のペアが ID キーを使用せずに指定される場合もあります。たとえば -u 256 は有効な値指定で、-u ID=256 と同等です。

表 F-39 使用可能なキー： UNIMVUSER

キー	X.400 フィールド
S	姓
G	名
I	イニシャル
ID	識別子
UID	ユーザー固有の識別子
X	世代
OU1	組織単位 1
OU2	組織単位 2

表 F-39 使用可能なキー： UNIMVUSER（続き）

キー	X.400 フィールド
OU3	組織単位 3
OU4	組織単位 4
O	組織
C	国
A	管理ドメイン
P	プライベート・ドメイン
PHONE	電話番号
FAX	FAX 番号
EMPL-ID	従業員番号
JOB-TITLE	役職名

例

- ホスト horus のノード 12 からホスト nut のノード 25 に、ID 354 のユーザーを移動する場合は、次のようになります。

```
% unimvuser -u "ID=354" -host1 horus -host2 nut -n1 12 -n2 25
```

- ホスト horus のノード 12 からホスト nut のノード 25 に、UID smithjc のユーザーを移動する場合は、次のようになります。

```
% unimvuser -u "UID=smithjc" -host1 horus -host2 nut -n1 12 -n2 25
```

ファイル

`$ORACLE_HOME/ocal/log/unimvuser.log`

unimvuser は、独自のアクティビティをこのファイルに記録します。

警告

ディレクトリ・サーバー警告

Calendar Server のユーティリティ用のディレクトリ・サーバー構成の含意を理解することが重要です。サブライヤ・コンシューマ構成では、コンシューマとサブライヤ間の更新のスケジューリングによって両者間の一時的な違いが発生する場合があります。対応するサブライヤとまだ同期化されていないコンシューマ・ディレクトリ・サーバーから、Calendar Server のユーティリティが読み取っている可能性があります。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

関連項目

uniuser

UNINODE

uninode: Calendar Server ノード・ネットワークを管理します。

構文

```
uninode -add [-nologinfo] -host <hostname>
```

```
uninode -apply [-y | -n] [-nologinfo] [-p <SysOpPsw>]
```

```
uninode -cws [-nologinfo] [-compact]
[-n <node-ID> | -host <hostname> | -group <group>]
```

```
uninode -edit [-e <editor>] [-p <SysOpPsw>]
```

```
uninode -import [-nologinfo] [-p <SysOpPsw>]
```

```
uninode -init [-nologinfo] [-p <SysOpPsw>]
```

```
uninode -reset [-nologinfo] [-p <SysOpPsw>]
[-n <node-ID> | -host <hostname> | -group <group>]
```

```
uninode -retry [-nologinfo] [-p <SysOpPsw>]
[-n <node-ID> | -host <hostname> | -group <group>]
```

```
uninode -snc [-nologinfo] [-compact]
[-n <node-ID> | -host <hostname> | -group <group>]
```

```
uninode -test -n <node-ID> | -host <hostname> | -group <group>
```

```
uninode -v
```

```
uninode -h
```

説明

uninode は、Calendar Server ノード・ネットワークの設定および管理のための集中ツールです。ノード・ネットワークの設定例は、「例」を参照してください。uninode を使用すると、ノード・ネットワークでのノードの追加と削除、およびノード間の接続の追加と削除が行えます。また、uninode を使用して、ノード・ネットワークの構成およびリモート接続のステータスに関する問合せを実行できます。

uninode は、nodes.ini ファイルに含まれるノード・ネットワーク構成情報を使用して、ノード・ネットワークを構成します。リンクされている Calendar Server の数に関係なく、ノード・ネットワークには 1 つの nodes.ini ファイルだけが存在する必要があります。また、Calendar Server ノード・ネットワークの管理、つまり uninode の実行は、このファイルが存在するマシンから行います。ノード・ネットワークに複数のバージョンの Calendar Server が混在している場合は、nodes.ini ファイルのホストが常に最も新しいバージョンであることが必要です。

<sysOpPsw> は、Calendar Server ネットワークの中で、nodes.ini ファイルをホスティングするマシンのノード ID の値が最も小さいノードの SYSOP パスワードです。

-n、**-host** または **-group** を使用すると、nodes.ini ファイルの特定のノードに対する uninode のアクションを制限できます。**-n <node-ID>** は特定のノード、**-host <hostname>** は特定のホストのノード、**-group <group>** は特定のグループ化されたノードに対して、それぞれ uninode を制限します。**<group>** は次のいずれかです。

- all
グループ内のすべて (+) のノードおよびグループ外のすべて (-) のノード
- included
グループ内のすべて (+) のノード
- excluded
グループ外のすべて (-) のノード

<group> には、nodes.ini で定義されるカスタマイズ済グループ名も使用できます。それぞれ値の詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』を参照してください。これらの値がまったく指定されていない場合、uninode は値を all と見なします。

ディレクトリ・サーバーを使用している場合は、uninode を実行する前に各ノードで unidssync を実行することで、各ノードのローカル情報をディレクトリ・サーバーの情報と確実に同期させることができます。Calendar Server ノード・ネットワークのすべてのノードで、同じディレクトリ・サーバーを使用する必要があることに注意してください。

uninode は、Calendar Server が起動しているときだけ実行可能です。

オプション

-add

<hostname>

指定されたホストで検出されたすべてのノードを、`nodes.ini` ファイルに追加します。このオプションはまず、指定されたホストに存在するノードを判別します。その後、そのホストのすべての行を `nodes.ini` ファイルから削除し、最後に、ホストで検出された各ノード用の行を追加します。ノードはネットワーク外のノードとして追加されます。これらのノードをネットワークに含めるには、`nodes.ini` ファイルを編集する必要があります。

-apply

`nodes.ini` ファイルの構成を適用します。

`uninode` は、最初に次のことを確認します。

- `nodes.ini` ファイルの構文が正しい。
- 指定されたホスト名または指定されたノード ID が有効である。
- `uniengd` サーバーおよび `unisncd` サーバーが起動している。
- `uniengd` のバージョンが A.01.15 より新しい。
- SNC デーモンが実行中である。
- `nodes.ini` ファイルが現在 `uninode` を実行しているホスト上のみに存在する。
- ノード・ネットワークのすべてのノードが使用可能である。

これらのうち 1 つでも確認に失敗した場合、`uninode` が終了します。

すべて確認されると、関与する各ノードのリモート・ノード情報がチェックされます。欠落しているエントリが検出された場合は、ユーザーに対して、このエントリの追加の確認要求が行われます。確認要求に対する応答を自動で行うには、**-y** オプションまたは **-n** オプションを使用します。`uninode` では、余分なエントリがノードから削除されることはありません。

-compact

80 文字の行を出力するために、28 文字より長いホスト名を切り捨てます。

-cws

2 つのノード間の各接続に関する、次の情報を出力します。CWS デーモン / サービスからの情報も含まれます。

- EX

`nodes.ini` ファイルで構成された、2 つのノード間の TCP/IP 接続の数。

- CO
2つのノード間の、実際の TCP/IP 接続数。
- Q-SIZE
現在 CWS キューにある CWS 要求の数。
- IN-PROCESS
処理されている CWS 要求の数。
- IMPORT-DIR
リモート・ディレクトリのローカル・コピーに含まれている項目（ユーザーおよびリソース）の数。

-edit

<editor>

指定されたテキスト・エディタを使用して、nodes.ini ファイルのコピーを安全に編集します。uninode は、最初に **-apply** オプションで示された確認を実行し、いずれかの確認が失敗した場合は終了します。すべての確認が正常に行われると、エディタを起動します。uninode は、エディタの終了時に編集したファイルを解析します。そして、エラーが検出されなかった場合は、元の nodes.ini ファイルを更新します。編集したファイルでエラーが検出された場合、uninode はユーザーに対し、ファイルの再編集または操作の中断を要求します。

-group

<group>

ノードを、<group> で指定されたグループのノードに制限します。<group> には、all、included または excluded のいずれか、または nodes.ini で定義されたグループ名を指定できます。

-host

<hostname>

ノードを、指定されたホストのノードに制限します。

-import

-apply を **-y** オプションと併用した場合と同じです。

-init

`nodes.ini` ファイルを、現在実行中のノード・ネットワーク構成から構成します。
`uninode` は、`nodes.ini` ファイルをホスティングするマシンのノード ID が最も小さいノードから、ファイルの構成を開始します。`nodes.ini` ファイルがすでに存在する場合は、`uninode` によってファイルの上書きの確認要求が行われます。

-n

<node-ID>

ノードを指定します。**-apply** オプションを併用した場合、ノード情報の非一貫性が修正されなくなります。

-nologinfo

ログ・ファイルへの書込みを行いません。デフォルトでは、`uninode` はエラー、および画面に送信する出力を、すべて `uninode.log` ファイルに記録します。

-p

<sysOpPsw>

SYSOP パスワードを指定します。このオプションを使用していない場合は、パスワードの要求が行われます。

-reset

同期ネットワーク接続 (SNC) デーモンの統計をリセットします。`uninode -reset all` を実行してすべてのノードを同時にリセットすることをお勧めします。統計をリセットすることで、管理者が後で異なるノードの統計を比較できるようになります。

-retry

SNC デーモンのリトライ・メカニズムを再起動します。構成より少ない接続しか使用できない場合は、SNC デーモンが特定の時間範囲で、新しい接続の取得を試みます。取得は、1 分、2 分、4 分、8 分、16 分、32 分の時間範囲で試行され、最後に 64 分ごとに試行されます。このオプションはこの時間範囲を 1 分にリセットします。このオプションは、たとえばネットワーク関連の問題が解決した後に、`uninode -retry all` を実行するという使い方が可能です。

-snc

指定されたノード、または指定されたグループかホストの各ノードの、TCP/IP 接続情報を出力します。

■ EX

`nodes.ini` ファイルの情報による、ノードへの TCP/IP 接続の数。

- CO
ノードへの実際の TCP/IP 接続の数。
- AV
現在使用可能なノードへの接続数。
- US
現在使用中のノードへの接続数。
- LOST
SNC デーモンがノードへの接続を失った回数。
- RETRY
失われた接続の再接続を試みるまでの時間（書式 <mm>:<ss> で表します）。
- QUEUE
現在キューにある要求の数。
- CANCEL
取り消された要求の数。
- CHECK
キューに入れられた要求のチェック回数。チェックは、接続がキューで待機しているときに実行されます。
- GRANTED
SNC デーモン / サービスが起動してから認可した接続要求の数。

-test

ノードまたはノードのグループへの接続が可能であることを確認します。uninode -test が確認する項目のリストは、**-apply** オプションを参照してください。

-y

-apply オプションの使用時に、確認要求を行わずに、ノード情報の非一貫性が修正されるようにします。

-v

uninode の現在のバージョン番号を出力します。

-h

uninode の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

ノード・ネットワークの作成

3つの異なる国にオフィスを持つ会社を経営しています。各オフィスでは、独自の Calendar Server を実行しています。ノード・ネットワークを設定し、そのネットワークをスウェーデンの gravlax で実行している Calendar Server から管理するために、次の手順を行います。

1. gravlax にログインし、nodes.ini ファイルを作成します。

```
% uninode -init
```

現在はノード・ネットワークが存在しないため、uninode によって空の nodes.ini ファイルが作成されます。このファイルにはコメントとしてサンプル行が含まれます。

2. 3つの各 Calendar Server からノードを追加します。

```
% uninode -add gravlax
% uninode -add gnocchi
% uninode -add biryani
```

3. nodes.ini ファイルのコンテンツを調べます。

```
% cat nodes.ini
- H=biryani/N=32
- H=biryani/N=31
- H=gnocchi/N=25
- H=gnocchi/N=24
- H=gnocchi/N=23
- H=gnocchi/N=22
- H=gnocchi/N=21
- H=gravlax/N=13
- H=gravlax/N=12
- H=gravlax/N=11
```

4. ファイルを編集し、ノード・ネットワークを構成します。

```
% vi $ORACLE_HOME/ocal/misc/nodes.ini
```

この時点で、nodes.ini ファイルには、次の行が含まれます。

```
% cat $ORACLE_HOME/ocal/misc/nodes.ini
+ H=biryani/N=32/ALIAS=salesIndia/GR=india
+ H=biryani/N=31/ALIAS=adminIndia/GR=india
- H=gnocchi/N=26/ALIAS=tempItaly/GR=italy
+ H=gnocchi/N=25/ALIAS=supportItaly/GR=italy
+ H=gnocchi/N=24/ALIAS=financeItaly/GR=italy
+ H=gnocchi/N=23/ALIAS=r&dItaly/GR=italy
+ H=gnocchi/N=22/ALIAS=salesItaly/GR=italy
+ H=gnocchi/N=21/ALIAS=adminItaly/GR=italy
- H=gravlax/N=16/ALIAS=tempSweden/GR=sweden
```

```

+ H=gravlax/N=13/ALIAS=r&dSweden/GR=sweden
+ H=gravlax/N=12/ALIAS=salesSweden/GR=sweden
+ H=gravlax/N=11/ALIAS=adminSweden/GR=sweden
included:2
india:+2
italy:+3
sweden:+2

```

このノード・ネットワークの特性は次のとおりです。

- 10 のノードが存在する。
- ネットワーク外のノードが 2 つ存在する（ノード 16 および 26）。
- ノード・ネットワークの各ノードからノード・ネットワークのその他の各ノードへの接続が 2 つずつ存在する。たとえば、ノード 32 からノード 13 への接続が 2 つあり、ノード 13 からノード 32 への接続が 2 つ存在します。単一の接続は単方向です。
- india グループのノードは、グループ内の各ノードからグループ内のその他のノードへの、2 つの追加接続を持ちます。同様に italy グループのノードは、グループ内の各ノード間で 3 つの追加接続を持ち、sweden グループはグループ内の各ノード間で 2 つの追加接続を持ちます。

この構成では、ノード 13 からの接続数は合計 22 になります（ネットワーク内のその他の 9 つのノードへの接続（ $2 \times 9 = 18$ ）、および sweden グループに含まれる 2 つのノードへの接続（ $2 \times 2 = 4$ ）の合計）。

ノード間の接続を構成する際の規則は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』を参照してください。

次に、構成を適用します。これまではノード間の参照が行われていなかったため、リモート・ノード・ディレクトリでは非一貫性が生じていると予測されます。そこで **-y** オプションを使用します。

```
% uninode -apply -y
```

このコマンドの実行中に、uninode によって実行中の作業に関する情報が出力されます。次に例を示します。

```

Processing node 11
connected to gravlax, node 11
connected to gravlax, node 12
added 11->12, TCP/IP connection
placed a request in the CWS queue to get node 12 user directory

```

ファイル

`$ORACLE_HOME/ocal/misc/nodes.ini`

ノード、および Calendar Server のノード・ネットワーク構成を説明する規則のリストが含まれます。

`$ORACLE_HOME/ocal/log/uninode.log`

デフォルトでは、uninode はエラー、および画面に送信する出力を、すべてこのファイルに記録します。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNIOIDCONF

unioidconf: Oracle Internet Directory をカレンダー用に構成します。このユーティリティは、Calendar Server のインストール処理で使用されます。

構文

```
unioidconf -setup <SysOpPsw> -D <binddn> [-w <bindPsw>] [-f <filename>]
```

```
unioidconf -grantproxyprivilege <dn> [-f <filename>]  
          [[-D <bindDN>] [-w <bindPsw>] | [-p <SysOpPsw>]]
```

```
unioidconf -listproxyprivilege [-f <filename>]  
          [[-D <bindDN>] [-w <bindPsw>] | [-p <SysOpPsw>]]
```

```
unioidconf -revokeproxyprivilege <dn> [-f <filename>]  
          [[-D <bindDN>] [-w <bindPsw>] | [-p <SysOpPsw>]]
```

```
unioidconf -v  
unioidconf -h
```

説明

unioidconf は、カレンダー・アプリケーション用に Oracle Internet Directory を構成するために、インストール処理で使用されます。

-grantproxyprivilege キーワードおよび **-revokeproxyprivilege** キーワードは、ユーザーへのプロキシ権限の付与またはユーザーのプロキシ権限の取消しに使用されます。プロキシ権限は、**-listproxyprivilege** を使用してリストできます。

-setup フラグは、カレンダー用に OID を構成するために使用します。

オプション

-D

<bindDN>

バインド DN を指定します。

-f

<filename>

カレンダー構成ファイルを指定します。デフォルトでは、ファイル \$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini が使用されます。

-grantproxyprivilege

<dn>

<dn> で指定されたユーザーにプロキシ権限を付与します。

-listproxyprivilege

プロキシ権限をリストします。

-p

<SysopPsw>

現在の管理者パスワードを指定します。

-revokeproxyprivilege

<dn>

<dn> で指定されたユーザーのプロキシ権限を取り消します。

-w

<bindPsw>

バインド DN のパスワードを指定します。

-v

unioidconf の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unioidconf の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

例

John Doe にプロキシ権限を付与する場合は、次のようになります。

```
% unioidconf -grantproxyprivilege "cn=John Doe,cn=users,  
dc=oracle,dc=com" -D cn=orcladmin -w welcome
```

または次のようになります。

```
% unioidconf -grantproxyprivilege "cn=John Doe,cn=users,  
dc=oracle,dc=com" -p adminpassword1
```

UNIPASSWD

unipasswd: ユーザーのパスワードまたは Calendar Server の SYSOP パスワードを変更します。

構文

```
unipasswd [-u <user> | -sysop] [-n <node-ID>] [-host <hostname>] [-p <password>]
```

```
unipasswd -v
```

```
unipasswd -h
```

説明

unipasswd は、指定されたノードの SYSOP のパスワードを変更します。また、ユーザーのパスワードの変更にも使用できます。

Oracle Internet Directory のインストールでは、1 つのノードを介して SYSOP パスワードを変更すると、同じサーバーのその他のすべてのノードでも、SYSOP パスワードが変更されます。

-sysop オプションおよび **-u** オプションは、相互に排他的であることに注意してください。unipasswd は、リソースまたはイベント・カレンダのパスワード変更には使用できません。これらのパスワードの変更は、uniuser を使用して行えます。

unipasswd は、Calendar Server が起動しているときだけ実行可能です。

オプション

-u

<user>

ユーザーのパスワードを変更します。<user> 引数を使用して、ユーザーを指定します。ユーザーの指定方法の詳細は、「<user> 引数の書式」を参照してください。

-host

<hostname>

操作を実行するホストを指定します。デフォルトはローカル・ホストです。ポート番号を指定するには <hostname> パラメータに対して hostname:port の書式を使用します。

-n

<node-ID>

パスワードを変更するノードを指定します。複数のノードが存在する場合は必須です。

-p

<password>

現在の管理者パスワードを指定します。**-u** オプションを使用しており、SYSOP パスワードが設定されている場合は必須です。パスワードが必須の状況でパスワードがコマンドラインで指定されていない場合は、パスワード要求が行われます。

-sysop

SYSOP のパスワードを変更します。

-v

unipasswd の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unipasswd の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

書式**<user> 引数の書式**

<user> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は任意の文字列です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。value 文字列はワイルド・カード文字「*」で終了する場合があります。スラッシュ「/」が文字列に含まれる場合は、キーと値のペアのデリミタとして解釈されることを防ぐため、文字「¥」でエスケープする必要があります。たとえば、"S=Hoopla/OU1=R¥/D" のようになります。

UNIX 環境でシェルが文字列を処理する場合（たとえば文字列がコマンドラインで提供される場合や、ユーティリティに引数として渡される場合）、文字列は引用符で囲む必要があります。また、シェルにとって意味をなす文字が文字列に含まれる場合は、シェルが解釈することを防ぐためその文字をエスケープ（つまり、エスケープ文字「¥」を前に付ける）します。

注意： ID のキーと値のペアが <user> 引数で指定されている場合は、ともに指定されている他のキーと値のペアはすべて無視されます。

表 F-40 使用可能なキー： UNIPASSWD

キー	X.400 フィールド
S	姓
G	名
I	イニシャル
ID	識別子
UID	ユーザー固有の識別子
X	世代
OU1	組織単位 1
OU2	組織単位 2
OU3	組織単位 3
OU4	組織単位 4
O	組織
C	国
A	管理ドメイン
P	プライベート・ドメイン
PHONE	電話番号
FAX	FAX 番号
EMPL-ID	従業員番号
JOB-TITLE	役職名

例

- リモート・ホスト **jupiter** にあるノード 20 の SYSOP パスワードを変更する場合は、次のようになります。

```
% unipasswd -host jupiter -n 20
```
- ノード 10 のローカル・ユーザー **Jean Leblanc** のパスワードを変更する場合は、次のようになります。

```
% unipasswd -u "S=Leblanc/G=Jean" -n 10
```

警告

パスワードの変更

このユーティリティは、unison.ini の [ENG] allowpasswordchange_user パラメータを使用して、ユーザー・パスワードの変更が可能かどうかを判断します。この値が FALSE に設定されている場合、このユーティリティでユーザー・パスワードを変更できません。SYSOP パスワードの変更が可能かどうかを判断するには、パラメータ [ENG] allowpasswordchange_reserved [sysop] を使用します。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNIPING

uniping: 別の Calendar Server を ping します。

構文

```
uniping [-host <hostname>] [-n <node-ID>] [-u <user>] [-p <password>]  
[-i <numsec>] [-allnodes] [-s <size>] [-stats] [-log] [-time]
```

```
uniping -v  
uniping -h
```

説明

uniping は、ノードまたはノード・ネットワークにエコー・メッセージを送信します。メッセージに対するノードの応答を受信すると、uniping は、元のメッセージの送信から応答の受信までの経過時間を出力します。このユーティリティは、ノードが起動していることの確認や、様々な負荷状況でのサーバーの応答時間の計測に使用できます。

メッセージを送信する前に、uniping はまず指定されたノードの指定されたユーザーを認証します。uniping は、この認証が正常に行われた場合のみ、メッセージを送信します。

uniping は、Calendar Server が起動中か停止中かにかかわらず、実行できます。

オプション

-allnodes

指定のノードが含まれているノード・ネットワークに接続するすべてのノードに、エコー・メッセージを送信します。

-host

<hostname>

Calendar Server のホストの名前を指定します。ポート番号を指定するにはホスト名パラメータに対して **hostname:port** の書式を使用します。

-i

<numsec>

<numsec> で指定された間隔（秒単位）で、エコー・メッセージを繰り返します。このオプションが使用されていない場合、uniping は、指定された各ノードに、エコー・メッセージを 1 つだけ送信します。

-log

ログ・ファイル（\$ORACLE_HOME/ocal/log/uniping.log）にエラーを出力します。

-n

<node-ID>

接続先のノードを指定します。**-host** オプションで指定された Calendar Server に複数のノードが存在する場合は、必須です。

-p

<password>

SYSOP パスワード、または **-u** オプションで指定されたユーザーのパスワードを指定します。**-p** オプションを使用していない場合は、uniping によるパスワード要求が行われます。

-s

<size>

エコー・メッセージのサイズをバイト数で指定します。デフォルトは 64 バイトです。

-stats

スタートアップ時の統計を表示します。

-time

各メッセージが送信された時間を表示します。

-u

<user>

認証対象のユーザーのユーザー名を指定します。このオプションを使用していない場合は、デフォルトで **SYSOP** が使用されます。ユーザーの指定方法の詳細は、「<user> 引数の書式」を参照してください。

-v

uniping のバージョン番号を出力します。

-h

uniping の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

書式**<user> 引数の書式**

<user> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は任意の文字列です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。ID キー以外のすべてのキーにおいて、value 文字列はワイルド・カード文字「*」で終了する場合があります。スラッシュ「/」が文字列に含まれる場合は、キーと値のペアのデリミタとして解釈されることを防ぐため、文字「¥」でエスケープする必要があります。たとえば、"S=Hoopla/OU1=R¥/D" のようになります。

UNIX 環境でシェルが文字列を処理する場合（たとえば文字列がコマンドラインで提供される場合や、ユーティリティに引数として渡される場合）、文字列は引用符で囲む必要があります。また、シェルにとって意味をなす文字が文字列に含まれる場合は、シェルが解釈することを防ぐためその文字をエスケープ（つまり、エスケープ文字「¥」を前に付ける）します。

注意： ID のキーと値のペアが <user> 引数で指定されている場合は、ともに指定されている他のキーと値のペアはすべて無視されます。また、ID のキーと値のペアが ID キーを使用せずに指定される場合もあります。たとえば -u 256 は有効な値指定で、-u ID=256 と同等です。

表 F-41 使用可能なキー： UNIPING

キー	X.400 フィールド
S	姓
G	名
I	イニシャル
ID	識別子
UID	ユーザー固有の識別子
X	世代
OU1	組織単位 1
OU2	組織単位 2
OU3	組織単位 3
OU4	組織単位 4
O	組織
C	国
A	管理ドメイン
P	プライベート・ドメイン
PHONE	電話番号
FAX	FAX 番号
EMPL-ID	従業員番号
JOB-TITLE	役職名

例

- SYSOP ユーザー・アカウントを使用し、ホスト Scribe にある Calendar Server のノード 14 を ping する場合は、次のようになります。

```
% uniping -host scribe -n 14
Enter password:
```

```
scribe,14: 40 ms.
```

- ユーザー Dashiell Hammett を使用し、ノード 60 が含まれているノード・ネットワークのすべてのノードを ping して、送信された各メッセージの時間を表示する場合は、次のようになります。

```
% uniping -n 60 -u "S=Hammett/G=Dashiell" -allnodes -time
Enter password:

Fri Jul 07 10:23:41 2000: scribe,14: 40 ms.
Fri Jul 07 10:23:41 2000: scribe,60: 0 ms.
Fri Jul 07 10:23:41 2000: scribe,66: 114 ms.
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー

UNIREQDUMP

unireqdump: コーポレート・ワイド・サービス (CWS) デーモンのキューにある要求を表示し、削除 (オプション) します。

構文

```
unireqdump [-delete] [-excl <filter>] [-incl <filter>] [-u <itemnum>]
[-rn <node-ID>] [-y] [-reqid <ID>] [-reqtype <code>] [-reqgroup ID]
[-n <node-ID>] [-p <sysOpPsw>] [nolist] [-nototal]
```

```
unireqdump -v
unireqdump -h
```

説明

unireqdump は、現在コーポレート・ワイド・サービス・デーモン / サービス unicwsd のキューにある一連の要求を出力します。また、(-delete オプションを使用して) キューから要求を削除する場合にも使用できます。

デフォルトでは、キューにあるすべての要求が出力されます。**-excl**、**-incl**、**-u**、**-rn**、**-reqid** および **-reqtype** の各オプションを使用して、特定の条件と一致する要求を選択できます。これらのオプションは逐次適用されるため、指定したすべてのオプションの条件の組合せと一致する要求だけが出力されます。キューから特定の要求を選択する場合は、**-reqid** を使用します。

数値の引数は、10 進値または 16 進値のいずれかになります（16 進値には接頭辞 0x が付きます）。唯一の例外は、**-reqid** オプションの ID 引数で、0x 接頭辞がない場合でも、常に 16 進値と見なされます。

unireqdump は、Calendar Server が起動しているときだけ実行可能です。

オプション

-delete

フィルタと一致する要求をキューから削除します。各要求が出力されると、ユーザーはその要求を削除するかどうかの確認を求められます。このオプションと **-y** オプションを併用すると、unireqdump が確認要求を行わずに、出力に含まれるすべての要求を自動的に削除するように設定できます。

-excl

<filter>

除外フィルタを設定します。このフィルタと一致する要求が、出力から除外されます。使用できるフィルタは次のとおりです。

- notserviced: 保守されていない要求
- cantservice: 保守できない要求
- suspended: 項目の SMS 通知の再アクティブ化が保留されているためキューに入っている要求

-incl

<filter>

包含フィルタを設定します。このフィルタと一致する要求が、出力の対象になります。使用できるフィルタは、**-excl** オプションの項にリストされています。

-n

<node-ID>

接続先のノードを指定します。このノードで作成された要求の選択にも使用できます。unireqdump を実行するサーバーに複数のノードが存在する場合は必須です。

-nolist

キューにある要求をリストしません。

-nototal

サマリー（出力の最後に表示される合計）を表示しません。

-p

<sysOpPsw>

-n オプションで指定されたノードの SYSOP パスワードを指定します。コマンドラインでパスワードが指定されていない場合は、パスワード要求が行われます。

-u

<itemnum>

指定されたカレンダー・アカウント（ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダー）の番号と一致する要求だけを選択します。itemnum は、ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーの数値の ID です。

-y

-delete オプションと併用することで、unireqdump が確認要求を行わずに、出力に含まれるすべての要求を自動的に削除するように指定できます。このオプションは慎重に使用してください。

-rn

<node-ID>

指定されたリモート・ノードに対する要求だけを選択します。

-reqgroup

<group>

<group> で指定されたグループの要求を選択します。<group> の有効な値は、replication、SMS および mail です。

-reqid

<ID>

指定された ID の要求を選択します。ID は 16 進値です（値に接頭辞 0x を付けても問題はありませんが、接頭辞は不要です）。

-reqtype**<code>**

タイプ **<code>** の要求を選択します。タイプは、独自のトランザクション・コードの数値（これらの数値は、カレンダー・プログラミング・インタフェースのドキュメントを参照してください）、または次の文字列のいずれかで表されます。

```

agendaget
attendadd
echo
eventattend
eventcreated
eventdeleted
eventmodified
foreignerdeleted
instanceadded
instancemodified
itemdeleted
itemmodified
mailmessagepost
nodeitemsget
notifynewevent
notifynewinstance
securityadd
securitydeleted
securitymodified

```

These strings also appear in the output in the "TrCode" field for each request listed.

-v

unireqdump の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unireqdump の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- ノード 10 で作成された、キュー内のすべての要求を選択する場合は、次のようになります。

```
unireqdump -n 10 -p sysOpPsw
```

- ノード 10 で作成されたキュー内のすべての要求を削除する際、各要求を削除する前に、対話形式で確認要求が行われるようにする場合は、次のようになります。

```
unireqdump -delete -n 10 -p sysOpPsw
```

- すでに保守が行われた、キュー内のすべての要求を出力する場合は、次のようになります（このサーバーには1つのノードしか存在しないため、**-n** オプションは不要です）。

```
unireqdump -excl serviced -p sysOpPsw
```

- トランザクション・コードが **eventattend** で、リモート・ノード 20 用にノード 10 で作成された未保守の要求をすべて出力し、要求ごとに削除の確認要求が対話形式で行われるようにする場合は、次のようになります。

```
unireqdump -delete -excl serviced -remotenode 20 -reqtype eventattend -n 10 -p  
sysOpPsw
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNIRESTORE

unirestore: ユーザーの予定表をバックアップからリストアします。

構文

```
unirestore -u <uid> -path <bkpPath>  
[-futureReplies] [-noAddAttendee] [-logAll]  
-n <node-ID> [-host <hostname>] [-p <sysOpPsw>]
```

```
unirestore -ls <user> -path <bkpPath>  
-n <node-ID> [-host <hostname>] [-p <sysOpPsw>]
```

```
unirestore -v  
unirestore -h
```

説明

unirestore は、ユーザーのカレンダ・データをバックアップ・ファイルからリストアします。ユーザーのカレンダ・アカウントは、完全に削除された場合でもリストア可能です。この場合は、ユーザーのカレンダ・アカウントが作成されます。ディレクトリ・サーバーが存在する場合は、そのユーザーがそのディレクトリに存在する必要があります。

リストアするユーザーの **UID** は、**-u** オプションを使用して指定します。**-path** は、バックアップ・ファイルのパスを示します。これは、db ディレクトリが含まれるディレクトリのパスです。たとえば、**-path /backups/cserver/jan0799** のようになります。

-ls オプションは、バックアップに含まれるユーザーをリストします。<user> 引数は、unirestore を制限して、<user> フィルタと一致するユーザーのみをリストします。<user> の指定方法の詳細は、「<user> 引数の書式」を参照してください。

デフォルトでは、他のユーザーによって作成され、将来の日付にスケジューリングされた予定表のエントリの場合、ユーザーが自分の出席者の状態に対して行ったすべての変更は、リストアされません。ユーザーが所有する会議の場合は、会議を新たに作成した場合のように、出席者全員の出席者の状態が「後で決定」にリセットされます。

出席依頼に対するユーザーの応答をバックアップから強制的にリストアするには、**-futureReplies** オプションを使用します。このオプションを使用した場合、他のユーザーによって作成された将来（リストア以降の日付）の予定表エントリでユーザー自身の出席者の状態（承認済、拒否など）に対して行ったすべての変更が、リストアされます。また、ユーザーが作成した会議の場合、出席者の出席者の状態がバックアップからリストアされます。

デフォルトでは、バックアップに含まれる会議でユーザーが出席を依頼されているにもかかわらず、現在のデータベースに含まれる会議では出席を依頼されていない場合（たとえば、ユーザーがデータベースから誤って削除された場合など）、このユーザーは元のように出席者として追加されます。ただし、会議の開催者がバックアップ後に出席者リストからユーザーを削除したなどの場合は、**-noAddAttendee** オプションを使用して、他のユーザーが作成および所有し、意図的にユーザーを削除した会議の出席者リストに、ユーザーを再度追加できないようにすることができます。

unirestore は、Calendar Server が起動しているときだけ実行可能です。unirestore の実行後にサーバーを再起動する必要はありません。

オプション

-futureReplies

将来の日付の予定表エントリに関するユーザーの出席者の状態をリストアします。

-host

<hostname>

ホストを指定します。ポート番号を指定するには <hostname> パラメータに対して hostname:port の書式を使用します。

-logAll

過去の日付の予定表エントリのエラーに関するエラー・メッセージを出力します。デフォルトでは、将来の日付のエントリで検出されたエラーのみがレポートされます。

-ls

<user>

バックアップ・ファイルで検出されたユーザーをリストします。特定のユーザーだけをリストするように制限するには、<user> オプションを使用します。ユーザーは、<user> 引数を提供して指定します。詳細は、「<user> 引数の書式」を参照してください。

-n

<node-ID>

ノードを指定します。常に必須です。

-noAddAttendee

ユーザーが所有しない、出席を依頼されただけの会議への変更を使用して、他のユーザーの予定表を更新しません。

-p

<sysOpPsw>

ノードの SYOSP パスワードを指定します。このオプションを使用していない場合は、unirestore によるパスワード要求が行われます。

-path

<path>

バックアップ・データベース・ファイルのディレクトリのパスを指定します。

-u

<uid>

ユーザーの UID を指定します。

-v

unirestore の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unirestore の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

関連項目

unidbbackup

例

- John Smith の予定表がバックアップに含まれているかをチェックする場合は、次のようになります。

```
% unirestore -ls "UID=smithj" -path "/backups/cserver/jan0799" -p abcdef12 -n 10
-host hubert3
```

- John Smith の予定表をリストアする場合は、次のようになります。

```
% unirestore -u "smithj" -path "/backups/cserver/jan0799" -noAddAttendee -host
hubert3 -p abcdef12 -n 10
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNIRMOLD

unirmold: 古いイベントおよびタスクを、Calendar Server データベースの予定表から削除します。

構文

```
unirmold [-u <user>] [-d <numOfDays>] [-y]
[-event] [-task] [-attachment] [-include <types>] [-sync]
-n <node-ID> [-p <sysOpPsw>]
```

```
unirmold -resource [<resource>] [-d <numOfDays>] [-y] [-attachment]
-n <node-ID> [-p <sysOpPsw>]
```

```
unirmold -v
unirmold -h
```

説明

unirmold は、指定された日数が経過したイベントまたはタスク、あるいはその両方を、Calendar Server データベースのユーザーまたはリソースの予定表から削除します。

ユーザーの予定表からイベントを削除するために、unirmold は、ユーザーに対するイベントへの出席依頼を取り消します。これによる影響は 2 つあります。そのイベントが予定表に表示されなくなること、およびそのイベントへの出席を依頼されているユーザーのリストに、そのユーザーが表示されなくなることです。出席者のリストを更新すると、必要に応じて、ノード・ネットワークのその他のノードに伝搬します。

デフォルトでは、unirmold は、ノード内のすべてのユーザーの予定表から 90 日以上経過したすべてのイベントおよびタスクを削除し、指定されたノードのすべてのリソースの予定表から 90 日以上経過したすべてのイベントを削除します。**-resource** オプションは、unirmold をリソースの予定表に含まれるイベントに制限します。**<user>** 引数は、unirmold を指定されたユーザーの予定表に制限します。**<user>** の指定方法の詳細は、「**<user>** 引数の書式」を参照してください。

unirmold を **-resource** モードで使用する場合は、**<resource>** 引数を使用してリソース・フィルタを指定し、削除を一部のリソースのみに制限することができます。**<resource>** の指定方法の詳細は、「**<resource>** 引数の書式」を参照してください。

注意： unirmold は、開始日、終了予定日および完了日のすべてが指定された日数を経過している場合のみ、タスクを削除します。

unirmold は、Calendar Server が起動しているときだけ実行可能です。

オプション

-attachment

イベントの添付だけを削除します。このオプションを使用すると、イベントの添付だけを削除し、その他のイベントを完全な状態で残せます。

-event

イベントだけを削除します。デフォルトでは、unirmold はユーザーの予定表からイベントとタスクの両方を削除します。イベントの添付だけを削除する場合は、**-attachment** を使用します。

-include

<types>

特定のタイプの予定表エントリであるイベントを削除します。現在、このオプションは、Outlook の履歴項目または付箋であるイベントのみに適用されます。**<types>** 引数は、次のうちの 1 つ以上です。journal、sticky。たとえば、履歴項目と付箋の両方のタイプのイベントを削除する場合は、**-include journal sticky** を使用します。付箋のイベントだけを削除する場合は、**-include sticky** を使用します。

-d

<numOfDays>

<numOfDays> 日以上経過したイベントおよびタスクを、予定表から削除します。このオプションを使用していない場合のデフォルト値は 90 日です。最小値は 30 日です。

-n

<node-ID>

ノードを指定します。ホスト上に複数のノードが存在する場合は必須です。

-p

<sysOpPsw>

ノードの SYOSP パスワードを指定します。このオプションを使用していない場合は、unirmold によるパスワード要求が行われます。

-resource

<resource>

リソースの予定表のすべてのイベントだけを削除します。<resource> 引数を指定することで、フィルタを指定して特定のリソースを選択できます。詳細は、「<resource> 引数の書式」を参照してください。

-sync

ユーザーの予定表から、すべての同期レコードを削除します。

-task

ユーザーの予定表からタスクだけを削除します。デフォルトでは、unirmold はユーザーの予定表からイベントとタスクの両方を削除します。

-u

<user>

指定されたユーザーの予定表のエントリだけを削除します。ユーザーは、<user> 引数を提供して指定します。詳細は、「<user> 引数の書式」を参照してください。

-y

確認要求を行わずに自動的に削除を行う場合に使用します。

-v

unirmold の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unirmold の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

書式

<user> 引数の書式

<user> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は任意の文字列です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。value 文字列はワイルド・カード文字「*」で終了する場合があります。スラッシュ「/」が文字列に含まれる場合は、キーと値のペアのデリミタとして解釈されることを防ぐため、文字「¥」でエスケープする必要があります。たとえば、"S=Hoopla/OU1=R¥/D" のようになります。

UNIX 環境でシェルが文字列を処理する場合（たとえば文字列がコマンドラインで提供される場合や、ユーティリティに引数として渡される場合）、文字列は引用符で囲む必要があります。また、シェルにとって意味をなす文字が文字列に含まれる場合は、シェルが解釈することを防ぐためその文字をエスケープ（つまり、エスケープ文字「¥」を前に付ける）します。

注意： ID のキーと値のペアが <user> 引数で指定されている場合は、ともに指定されている他のキーと値のペアはすべて無視されます。

表 F-42 使用可能なキー： UNIRMOLD

キー	X.400 フィールド
S	姓
G	名
I	イニシャル
ID	識別子
UID	固有の識別子
X	世代
OU1	組織単位 1
OU2	組織単位 2
OU3	組織単位 3
OU4	組織単位 4
O	組織

表 F-42 使用可能なキー： UNIRMOLD（続き）

キー	X.400 フィールド
C	国
A	管理ドメイン
P	プライベート・ドメイン

<resource> 引数の書式

<resource> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は任意の文字列です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。ID キー以外のすべてのキーにおいて、value 文字列はワイルド・カード文字「*」で終了する場合があります。スラッシュ「/」が文字列に含まれる場合は、キーと値のペアのデリミタとして解釈されることを防ぐため、文字「¥」でエスケープする必要があります。たとえば、"S=Hoopla/G=James¥/Jim" のようになります。

UNIX 環境でシェルが文字列を処理する場合（たとえば文字列がコマンドラインで提供される場合や、ユーティリティに引数として渡される場合）、文字列は引用符で囲む必要があります。また、シェルにとって意味をなす文字が文字列に含まれる場合は、シェルが解釈することを防ぐためその文字をエスケープ（つまり、エスケープ文字「¥」を前に付ける）します。

ID のキーと値のペアが <resource> 引数で指定されている場合は、ともに指定されている他のキーと値のペアはすべて無視されます。

表 F-43 使用可能なキー： UNIRMOLD

キー	フィールド
R	リソース名
N	リソース番号
ID	識別子

例

- ノード 10 のユーザーが所有するすべてのイベントとタスク、およびノード 10 のリソースが所有するすべてのイベントをノード・ネットワークから削除する場合は、次のようになります。

```
% unirmold -n 10
```
- ノード 10 の **Wembley** という姓のユーザーが所有するイベントのうち、30 日以上経過したものをノード・ネットワークからすべて削除する場合は、次のようになります。

```
% unirmold -u "s=wembley" -event -d 30 -n 10
```
- **John Smith** のカレンダー・アカウントから、360 日以上経過したすべてのイベントおよびタスクの添付を削除する場合は、次のようになります。

```
% unirmold -u "s=Smith/g=John" -attachment -d 360 -n 10
```
- ノード 10 のすべてのリソースが所有するイベントのうち、30 日以上経過したものをノード・ネットワークからすべて削除する場合は、次のようになります。

```
% unirmold -resource -d 30 -n 10
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNIRNDEL

unirndel: ローカルの Calendar Server ノード・データベースから、リモート・ノードを削除します。

構文

```
unirndel -rn <node-ID> [-p <sysOpPsw>] [-n <node-ID>]
```

```
unirndel -v  
unirndel -h
```

説明

unirndel は、ローカル・ノードのデータベースから、リモート・ノードへのすべての参照を削除します。デフォルトでは、ローカル・ノードには名前 N1 が付けられています。unirndel は、テスト用に作成されたリモート・ノードを削除する場合のみ、使用してください。unirndel を使用する場合は、あらかじめオラクル社カスタマ・サポート・センターに問い合わせてください。

unirndel を実行する前に、ローカルの \$ORACLE_HOME/ocal/db ディレクトリをバックアップしておくことをお勧めします。

unirndel は、Calendar Server が起動しているときだけ実行可能です。

オプション

-n

<node-ID>

リモート・ノードを削除するローカル・ノード・データベースのノード ID を指定します。

-rn

<node-ID>

リモート・ノードのノード ID を指定します。

-v

unirndel の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unirndel の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNIRNSYNCH

`unirnsynch`: 1つのノードのローカル情報の削除を、同じネットワーク上の別のノードに伝搬します。

構文

```
unirnsynch -rn <node-ID> [-rhost <hostname>] [-rp <rSysOpPsw>] -n <node-ID> [-host  
<hostname>] [-p <sysOpPsw>]
```

```
unirnsynch -v  
unirnsynch -h
```

説明

`unirnsynch` は、1つのノードのローカル情報の削除を、同じネットワーク上の別のノードに伝搬します。ノード・ネットワークの各ノードには、ローカル情報とリモート・ノード情報の両方が含まれます。詳細は次のとおりです。

- **ローカル情報**は、ノードに属するユーザー、リソースおよびイベント・カレンダーのリストです。
- **リモート・ノード情報**は、ノード・ネットワークのその他の各ノードに属するユーザー、リソースおよびイベント・カレンダーのリストです。

ノードのリモート・ノード情報は、ノード・ネットワーク内のその他の各ノードのローカル情報から構成されます。

通常、ノードのローカル情報の変更は、ネットワーク内のすべてのリモート・ノードに自動的に伝搬します。ただし、何らかの理由で差異が発生した場合は、`unirnsynch` または `uninode`、あるいはその両方を使用してリモート・ノード情報を更新できます。`uninode` (**-apply** オプションを使用) は、ローカル情報で欠落しているエントリを追加する場合に使用できます。`unirnsynch` は、ローカル情報に存在しないエントリを削除する場合に使用できます。

`uninode -cws -group all` は、差異が存在するかどうかの判別に使えます（出力の `IMPORT-DIR` フィールドを参照）。

unirnsynch を実行するには、Calendar Server が起動している必要があります。

オプション

-host

<hostname>

ローカル情報の削除が行われたノードのホストを指定します。ポート番号を指定するには <hostname> パラメータに対して hostname:port の書式を使用します。

-n

<node-ID>

ローカル情報の削除が行われたノードのノード ID を指定します。

-p

<sysOpPsw>

ローカル情報の削除が行われたノードの SYSOP パスワードを指定します。

-rhost

<hostname>

リモート・ノード情報の更新が行われるノードのホストを指定します。デフォルトはローカル・ホストです。ポート番号を指定するには <hostname> パラメータに対して hostname:port の書式を使用します。

-rn

<node-ID>

リモート・ノード情報の更新が行われるノードのノード ID を指定します。

-rp

<remote-sysOpPsw>

リモート・ノード情報の更新が行われるノードの SYSOP パスワードを指定します。

-v

unirnsynch の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unirnsynch の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- ホスト `pepper` にあるノード 30 のエントリの削除を、ホスト `salt` にあるノード 20 のリモート・ノード情報に伝搬する場合は、次のようになります。

```
% uninrsynch -rn 20 -rhost salt -rp remote-sysOpPsw -n 30 -host pepper -p  
sysOpPsw
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 使用時エラー
- 2 システム・エラー

関連項目

`uninode`

UNISIZEOF

`unisizeof`: Calendar Server のインストールのサイズを計算します。

構文

```
unisizeof [-db | -n <node-ID>]
```

```
unisizeof -v
```

```
unisizeof -h
```

説明

`unisizeof`: Calendar Server のインストールのサイズを計算します。デフォルトでは、すべてのデータベース・ノードおよび Calendar Server（実行可能ファイル、*.ini ファイルなど）を含む、`$ORACLE_HOME/ocal` ディレクトリのサイズを測定します。データベース全体のサイズの測定には **-db** オプションを使用し、単一のデータベース・ノードのサイズの測定には **-n** オプションを使用します。

`unisizeof` は、Calendar Server が起動中か停止中にかかわらず、実行できます。

オプション

-db

データベース全体のサイズを計算します。データベース全体は、サーバー上のすべてのノードで構成されます。

-n

<node-ID>

特定のノードのデータベース・サイズを計算します。

-v

unisozeof のバージョン番号を出力します。

-h

unisozeof の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- Calendar Server のインストールのサイズを測定する場合は、次のようになります。

```
% unisozeof
unisozeof: total size of the calendar server 44216K
```

- データベース全体のサイズを測定する場合は、次のようになります。

```
% unisozeof -db
unisozeof: total size of the calendar server database is 10010K
```

- ノード 10 のデータベースのサイズを測定する場合は、次のようになります。

```
% unisozeof -n 10
unisozeof: database size for nodeid [10] is 760K
```

ファイル

\$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini

unisozeof が **-db** オプションと併用されている場合に、デフォルトのノード（このファイルで名前が N1 のノード）の判別に使用します。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNISLICE (UNIX 専用)

unislice: Calendar Server のログ・ファイルから情報を抽出します。

構文

```
unislice <logFile(s)> [-s <starttime>] [-e <endtime>]
```

```
unislice -v  
unislice -h
```

説明

unislice は、指定されたログ・ファイルから情報を抽出し、標準出力に送信します。unisnapshot ユーティリティは、unislice を使用してログ・ファイル内の情報を収集します。<logFile(s)> 引数は、1 つ以上のログ・ファイルのリストで、各ファイルの完全なパス名を、スペースで区切る必要があります。unislice は、unislice のほとんどのログ・ファイルで実行できます。

unislice は、Calendar Server が起動中か停止中かにかかわらず、実行できます。

オプション

-e

<endtime>

終了時間を設定します。この時間より前のタイムスタンプを持つログ・ファイル情報だけが、出力の対象になります。つまり、終了時間を 1 月 1 日に設定した場合、1 月 1 日の情報は出力されません。これらの引数の指定方法は、「time 引数の書式」を参照してください。

-s

<starttime>

開始時間を設定します。この時間より後のタイムスタンプを持つログ・ファイル情報だけが、出力の対象になります。これらの引数の指定方法は、「time 引数の書式」を参照してください。

-v

unislice の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unislice の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

書式

time 引数の書式

これらの各引数には、次のいずれかの書式を使用できます。

- day month [year] [time]
- day month [time] [year]
- month day [year] [time]
- month day [time] [year]

ここでは次のようになります。

- day
1 ～ 31 の数字。
- month
完全な月の名前、または次の略語のいずれか。jan、feb、mar、apr、aug、sep、sept、oct、nov、dec（月は大 / 小文字が区別されません）。
- year
4 桁の数字で指定。
- time
書式は HH:MM または HH:MM:SS（HH は 0 ～ 23 の整数）。

例

- uniengd ログ・ファイルの完全なコンテンツを出力する場合は、次のようになります。
% unislice \$ORACLE_HOME/ocal/log/eng.log
- 1995 年 2 月 7 日に記録されたすべての uniengd メッセージを出力する場合は、次のようになります。
% unislice \$ORACLE_HOME/ocal/log/eng.log -s 7 feb 1995 -e feb 8 1995
- 7 月 7 日午後 1 時以降の eng.log メッセージをすべて出力する場合は、次のようになります。
% unislice \$ORACLE_HOME/ocal/log/eng.log -s july 7 13:00
- 1995 年 10 月 15 日午前 9 時までの eng.log メッセージをすべて出力する場合は、次のようになります。
% unislice \$ORACLE_HOME/ocal/log/eng.log -e oct 15 9:00 1995

- 1月30日午前10時からの45秒間に記録されたすべてのeng.logメッセージを出力する場合は、次のようになります。

```
% unislice $ORACLE_HOME/ocal/log/eng.log -s jan 30 10:00:00 -e jan 30 10:00:46
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

関連項目

unisnapshot

UNISNAPSHOT

unisnapshot: Calendar Server 情報を診断用にコンパイルします。

構文

```
unisnapshot [<date>] [-nolog] [-p <sysOpPsw>]
```

```
unisnapshot [-s <starttime>] [-e <endtime>] [-nolog] [-p <sysOpPsw>]
```

```
unisnapshot -v
```

```
unisnapshot -h
```

説明

unisnapshot は、サポート・スタッフが Calendar Server のほとんどの問題の診断に使用する情報をアセンブルします。問題が発生した場合、サポート・スタッフに提供する必要がありますのはこのファイルのみです。

出力は、\$ORACLE_HOME/ocal/log ディレクトリの unisnapshot.log ファイルに書き込まれます。unisnapshot は、1 日または指定された時間内に記録されたログ・ファイル情報だけが対象になるように、制限することができます。これにより、関係のない情報の出力を減らすことができます。

Windows オペレーティング・システムでは、unisnapshot によって各ノードの SYSOP パスワードが要求されます。詳細は、**-p** オプションを参照してください。

<date> の指定方法の詳細は、「<date> 引数の書式」を参照してください。

unisnapshot は、Calendar Server が起動中か停止中かにかかわらず、実行できます。

オプション

-e

<endtime>

終了時間を設定します。この時間より前のタイムスタンプを持つログ・ファイル情報だけが、unisnapshot の出力の対象になります。つまり、終了時間を 1 月 1 日に設定した場合、1 月 1 日の情報は出力されません。<endtime> は <date> と同じ書式の文字列です。

-nolog

unisnapshot によってログ・ファイル情報が出力されないようにします。

-p

<sysOpPsw>

このオプションは、Windows オペレーティング・システム専用です。各ノードへの接続に使用する SYSOP パスワードを指定します。このオプションを使用する場合は、SYSOP パスワードがすべてのノードで同じである必要があります。Windows でこのオプションを使用していない場合、最初のノードへの接続時に、unisnapshot によってそのノードの SYSOP パスワードが要求されます。後続の各ノードでは、そのノードの SYSOP パスワードが直前に入力された SYSOP パスワードと異なる場合のみ、SYSOP パスワードが要求されます。

-s

<starttime>

開始時間を設定します。この時間と同じまたはそれ以降のタイムスタンプを持つログ・ファイル情報だけが、unisnapshot によって出力されます。<starttime> は、date と同じ書式の文字列です。

-v

unisnapshot の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unisnapshot の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

書式

<date> 引数の書式

<date> 引数には、次の書式のいずれかを使用できます。

- day month [year] [time]
- day month [time] [year]
- month day [year] [time]
- month day [time] [year]

ここでは次のようになります。

- day
1 ～ 31 の数字。
- month
完全な月の名前、または次の略語のいずれか。jan、feb、mar、apr、aug、sep、sept、oct、nov、dec（月は大 / 小文字が区別されません）。
- year
4 桁の数字で指定。
- time
書式は HH:MM または HH:MM:SS（HH は 0 ～ 23 の整数）。

year を指定していない場合のデフォルトは、現在の年です。

例

- すべての情報をアセンブルする場合は、次のようになります。
% unisnapshot
- ログ・ファイル内の情報を除くすべての情報をアセンブルする場合は、次のようになります。
% unisnapshot -nolog
- 1998 年 2 月 7 日のすべての情報をアセンブルする場合は、次のようになります。
% unisnapshot 7 feb 1998
- 7 月 7 日午後 1 時以降のすべての情報をアセンブルする場合は、次のようになります。
% unisnapshot -s july 7 13:00

- 1998 年 10 月 15 日午前 9 時までのすべての情報をアセンブルする場合は、次のようになります。

```
% unisnapshot -e oct 15 9:00 1998
```

- 1 月 30 日午前 10 時からの 45 秒間のすべての情報をアセンブルする場合は、次のようになります。

```
% unisnapshot -s jan 30 10:00:00 -e jan 30 10:00:46
```

ファイル

```
$ORACLE_HOME/ocal/log/unisnapshot.log
```

unisnapshot が出力を書き込むファイルです。unisnapshot の起動時に前のファイルが存在する場合は、ファイルが上書きされます。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

警告

unisnapshot は、完了するまでに時間がかかります。

UNISNCDUMP

unisncdump: Calendar Server の同期ネットワーク接続デーモン / サービスから統計を取り出します。

構文

```
unisncdump [-host <hostname>] [-n <node-ID>] [-p <sysOpPsw>] [-screen]
```

```
unisncdump -v  
unisncdump -h
```

説明

unisncdump は、unisncd デーモンから統計を取り出し、\$ORACLE_HOME/ocal/log/unisncdump.log ファイルに書き込みます。統計に含まれるのは、各サービスの構成済および使用可能な接続の数です。

オプション

-host

<hostname>

unisncd が配置されているホストを指定します。ポート番号を指定するには <hostname> パラメータに対して hostname:port の書式を使用します。

-n

<node-ID>

Calendar Server ノードを指定します。複数のノードが存在する場合は必須です。

-p

<sysOpPsw>

SYSOP パスワードを指定します。このオプションを使用していない場合は、パスワードの入力要求が行われます。

-screen

出力をログ・ファイルに書き込むかわりに、画面に表示します。

-v

unisncdump のバージョン番号を出力します。

-h

unisncdump の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- ホスト oregano にあるノード 11 の unisncd の統計を画面にダンプする場合は、次のようになります（ノード・ネットワークには 2 つのノード（ノード 11 およびノード 12）があります）。

```
% unisncdump -screen -n 11 -host oregano
Enter SysOp password:
-----
DATE = Mon Sep 28 14:50:08 1998
PID = 1314
Host = oregano
Service = unieng,12
```

```
Transactions: Request = 0
               Check Request = 0
               Cancel Request = 0
               Free = 0

Connections:  Configured = 2
               Available = 2
               Granted = 0
               Request queue = 0
               Failed = 0
               Last failure = 0
               Next attempt = 0
               Attempt timeout = 0
               Max wait before retry = 3840
```

ファイル

`$ORACLE_HOME/ocal/log/unisncdump.log`

unisncdump は、デフォルトでこのファイルに書き込みます。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNISTART

unistart: Calendar Server またはノードを起動します。

構文

```
unistart [-bypass] [-nocws] [-nosnc] [-nocsm] [-nodas] [-r]
```

```
unistart -standby [-bypass] [-r]
```

```
unistart -csmhost <host:port> [-p password]  
[-bypass] [-nocws] [-nosnc] [-nodas] [-r]
```

```
unistart -n <node-Id> -csmhost <host:port> [-p password]
```

```
unistart -n <node-Id>
```

```
unistart -v
```

```
unistart -h
```

説明

unistart は、単一のノードまたは Calendar Server の起動に使用します。デフォルトでは、まだ起動していないすべての Calendar Server のデーモンまたはサービスを起動します。これらのデーモンまたはサービスには、次が含まれます。unilckd、uniengd、unidasd (ディレクトリ・サーバー使用時のみ)、unisncd、unicwsd および unicsmd。新しく起動したデーモンによる書込みが行われる前に、古いログ・ファイルのコンテンツを消去するには、**-r** オプションを使用します。

単一のノードを起動する場合は、**-n** オプションを使用します。ノードを起動できるのは、Calendar Server がすでに実行されている場合のみです。

サーバー（またはノード）をリモートで起動できるのは、Calendar Server Manager デーモン (unicsmd) がそのサーバーで実行されている場合です。unicsmd デーモンだけを起動するには、**-standby** オプションを使用します。Calendar Server またはノードをリモートで起動するには、**-csmhost** オプションおよび **-p** オプションを使用します。Oracle Internet Directory のインストールを使用している場合は、SYSOP パスワードを指定するか、unison.ini の [CSM] password パラメータで定義されている CSM パスワードを使用します。

サーバーは、オプション **-nocws**、**-nosnc**、**-nocsm** および **-nodas** を使用して無効化されたコンポーネントの一部でも起動できます。

デフォルトでは、unistart が unichk をコールして、ファイル・システムをチェックします。この手順をスキップするには、**-bypass** オプションを使用します。

注意： **-bypass** は、UNIX 専用のオプションです。

オプション

-bypass

デフォルトでは、unicheck はデーモンおよびサービスが起動する前に実行されます。このオプションを使用すると、unicheck を実行せずに unistart が起動します。

-csmhost

リモート unicsmcmd が配置されているホストを指定します。デフォルトのポート番号が使用されていない場合に、unicsmcmd デーモンによって使用されるポート番号を指定するには、<hostname> パラメータに書式 hostname:csmport を使用します。

-n

<node-ID>

起動する Calendar Server ノードを指定します。

-nocsm

デフォルトでは、unicsmcmd が起動します (unison.ini に [CSM] enable パラメータが存在し、FALSE に設定されている場合を除く)。このオプションを使用すると、このデフォルトが無視され、unicsmcmd の起動が回避されます。unicsmcmd は、後で unistart を再実行するだけで、このオプションを使用せずに起動できます。

-nocws

デフォルトでは、unicwscmd が起動します (unison.ini に [CWS] enable パラメータが存在し、FALSE に設定されている場合を除く)。このオプションを使用すると、このデフォルトが無視され、unicwscmd の起動が回避されます。unicwscmd は、後で unistart を再実行するだけで、このオプションを使用せずに起動できます。

-nodas

unison.ini の [DAS] enable パラメータが TRUE に設定されている場合、デフォルトでは、unidasd が起動します。このオプションを使用すると、このデフォルトが無視され、unidasd の起動が回避されます。unidasd は、後で unistart を再実行するだけで、このオプションを使用せずに起動できます。

-nosnc

デフォルトでは、unisncd が起動します (unison.ini に [SNC] enable パラメータが存在し、FALSE に設定されている場合を除く)。このオプションを使用すると、このデフォルトが無視され、unisncd の起動が回避されます。unisncd は、後で unistart を再実行するだけで、このオプションを使用せずに起動できます。

-p
<password>

Oracle Internet Directory を使用している場合は、リモート・サーバーの SYSOP パスワードを指定する必要があります。もしくは、unison.ini の [CSM] password パラメータで定義された CSM パスワードを指定する必要があります。このオプションを使用していない場合は、パスワードの入力要求が行われます。

-r
新しく起動するコンポーネントが使用する既存のログ・ファイルをすべて削除します。次の表は、コンポーネントの起動時に削除されるログ・ファイルを示しています。ログ・ファイルは、\$ORACLE_HOME/ocal/log ディレクトリにあります。

表 F-44 削除されるログ・ファイル

コンポーネント	ログ・ファイル
CWS	cws.log
SNC	snc.log
DAS	das.log
CSM	csm.log
LCK	lck.log
ENG	eng.log、lck.log、dbv.log、act.log、utl.log、script.log、notify.log、utility.log

-standby
unicssmd デーモン / サービスを起動します。

-v
unistart の現在のバージョン番号を出力します。

-h
unistart の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- unicheck を実行せずに Calendar Server を起動すると同時に、古いログ・ファイルを削除する場合は、次のようになります。

```
% unistart -bypass -r
```

- **Calendar Server** を起動し、コーポレート・ワイド・サービス・デーモン / サービスを実行しない場合は、次のようになります。

```
% unistart -nocws
```

- リモートの **Calendar Server** のノード 120 を起動する場合は、次のようになります。

```
% unistart -n 120 -csmhost hercules:7688 -p pass1
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNISTAT

unistat: **Calendar Server** ノードのコンテンツ・レポートを作成します。

構文

```
unistat [-l] [-s | -g] [-m] -n <node-ID> [-p <password>]
```

```
unistat -v
```

```
unistat -h
```

説明

unistat は、指定されたノードのレポートを作成し、標準出力に送信します。unistat は、ユーザーに対し、ノードの **SYSOP** パスワードの入力要求を行います。レポートの対象となる情報は、次のとおりです。

- 各ユーザーの次の情報。X.400 名、X.400 組織単位、所有するイベント、インスタンスおよび出席者の数、すべての添付ファイルのサイズ (バイト数)、すべてのイベント詳細のサイズ (バイト数)、イベントに添付されたすべての追加情報のサイズ (バイト数)、およびユーザーの予定表のサイズ (バイト数)。
- 各リソースまたはイベント・カレンダーの次の情報。名前、所有するイベント、インスタンスおよび出席者の数、すべての添付ファイルのサイズ (バイト数)、すべてのイベント詳細のサイズ (バイト数)、イベントに添付されたすべての追加情報のサイズ (バイト数)、および予定表のサイズ (バイト数)。
- パブリック・グループおよびその所有者のリスト。

unistat を実行するには、**Calendar Server** が起動している必要があります。

注意： **-g** オプションと **-s** オプションは、相互に排他的です。

オプション

-g

パブリック・グループおよび管理グループのリストのみを出力します。

-l

1 行が 128 文字のモードでレポートを出力します。このオプションを使用していない場合のデフォルトは、1 行が 80 文字です。

-m

グループのメンバーを出力します。

-n

<node-ID>

ノードを指定します。

-p

<sysOpPsw>

SYSOP パスワードを指定します。このオプションを使用していない場合は、パスワードの入力要求が行われます。

-s

ユーザー、リソースおよびイベント・カレンダーのデータベース統計だけを出力します。

-v

unistat の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unistat の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNISTATS

unistats: Calendar Server 統計ファイルのデータのサマリー統計を表示します。

構文

```
unistats [-s <starttime>] [-e <endtime>] [-f <filename>] [-server <version>]  
[-client <entry>] [-n <node-ID>] [-user <user> | -res <resource> | -reserved] [-all]
```

```
unistats -v  
unistats -h
```

説明

Calendar Server 統計ファイルで検出されたデータのサマリー統計を表示します。デフォルトでは、入力ファイルは \$ORACLE_HOME/ocal/log/stats.log です。**-server**、**-client**、**-n**、**-user**、**-res**、**-reserved** の各フィルタ・オプションを使用して、統計ファイルで検出された情報のサブセットから、統計をコンパイルできます。

デフォルト出力は、一意のカレンダ・クライアントごとのサマリーです。同じクライアントの異なるバージョンは、別個のクライアントとして扱われ、それぞれにサマリーが出力されます。

-all オプションを使用すると、すべてのクライアントが組み込まれたサマリーが表示されます。すべての出力は、122 文字幅書式で表示されます。すべての出力フィールドの完全なリストは、「出力」の項を参照してください。

オプション

-all

すべてのインタフェース・クライアントを組み込んだサマリーを表示します。

-client

<entry>

特定のカレンダー・クライアントのサマリー統計を表示します。<entry> は、クライアントの名前およびバージョンです。<entry> の指定方法の詳細は、「<entry>、<name> および <resource> 引数の書式」を参照してください。

-e

<endtime>

統計の終了時間を指定します。このオプションを使用していない場合のデフォルトは、現在の年月日および時刻です。<endtime> の指定方法の詳細は、「time 引数の書式」を参照してください。

-f

<filename>

入力として使用するファイルを指定します。このファイルの書式は、デフォルト入力ファイル \$ORACLE_HOME/ocal/log/stats.log と同じであることが必要です。このオプションは通常、ファイルが既存の stats.log ファイルから作成され、unistats への入力として指定される場合に使用します。

-n

<node-ID>

特定のノードのサマリー統計を表示します。<node-ID> は、Calendar Server のノード ID です。

-res

<resource>

特定のリソースのサマリー統計を表示します。<resource> は、リソースの名前または識別番号、あるいはその両方です。<resource> の指定方法の詳細は、「<entry>、<name> および <resource> 引数の書式」を参照してください。

-reserved

すべての予約済ユーザー（SYSOP など）のサマリー統計を表示します。

-s

<starttime>

統計の開始時間を指定します。このオプションを使用していない場合のデフォルト開始時間は、Jan 1 1991 00:00:00 です。<starttime> の指定方法の詳細は、「time 引数の書式」を参照してください。

-server**<version>**

特定の Calendar Server のサマリー統計を表示します。<version> は、サーバーのバージョン番号です（例：A.02.90）。

-user**<name>**

特定のユーザーのサマリー統計を表示します。<name> は、ユーザーの姓、名および組織単位の組合せです。<name> の指定方法の詳細は、「<entry>、<name> および <resource> 引数の書式」を参照してください。

-v

unistats の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unistats の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

書式**<entry>、<name> および <resource> 引数の書式**

<entry>、<name> および <resource> の各引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は任意の文字列です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。value 文字列はワイルド・カード文字「*」で終了する場合があります。スラッシュ「/」が文字列に含まれる場合は、キーと値のペアのデリミタとして解釈されることを防ぐため、文字「¥」でエスケープする必要があります。たとえば、"S=Hoopla/OU1=R¥/D" のようになります。

UNIX 環境でシェルが文字列を処理する場合（たとえば文字列がコマンドラインで提供される場合や、ユーティリティに引数として渡される場合）、文字列は引用符で囲む必要があります。また、シェルにとって意味をなす文字が文字列に含まれる場合は、シェルが解釈することを防ぐためその文字をエスケープ（つまり、エスケープ文字「¥」を前に付ける）します。

ID のキーと値のペアが **-res** 引数で指定されている場合は、ともに指定されている他のキーと値のペアはすべて無視されます。

表 F-45 使用可能なキー： UNISTATS

オプション	キー	キーの意味
-client	N	クライアント名
-client	V	クライアントのバージョン
-user	S	姓
-user	G	名
-user	OU1	組織単位 1
-user	OU2	組織単位 2
-user	OU3	組織単位 3
-user	OU4	組織単位 4
-res	R	リソース名
-res	ID	リソース ID

次に、指定する場合の例を示します。

```
-client "N=Windows Oracle Calendar - 32 Bit/V=version 4.1"
-user "S=Carter/G=Angela"
-res "R=laptop"
-res "ID=328"
```

time 引数の書式

<starttime> 引数および <endtime> 引数は、次のいずれかで表されます。

- <day> <month> [<year>] [<time>]
- [<month> <day>] <time> [<year>]

ここでは次のようになります。

- <day> は 1 ～ 31 の数字です。
- <month> は完全な月の名前またはその最初の 3 文字（jan、feb、mar など）です（月は 大 / 小文字が区別されません）。
- <year> には、1991 以上の 4 桁の数字を指定する必要があります。
- <time> は、書式 HH:MM または HH:MM:SS（HH は 0 ～ 23 の整数、MM は 0 ～ 59 の整数、SS は 0 ～ 59 の整数）で表します。

引数に含まれる個々の要素の順番は、さほど重要ではありません。重要なのは、日と月が指定されているか、または時間が指定されているかです。次に示す例はすべて有効です。

```
Feb 22 1996 10:00:00
22 february 10:00:00
10:00:00 february 22 1996
1996 feb 22
feb 22
10:00:00
```

<day>、<month>、<year> および <time> のデフォルト値は、それぞれ現在の年月日および現在のシステム時刻です。

<time> のいずれかのフィールド（HH、MM または SS）が欠落している場合、そのフィールドは現在の HH、MM または SS の値に置き換えられます。たとえば、現在の日時が 1998 年 3 月 12 日 10 時 41 分 34 秒で引数では HH:MM しか指定されていない場合、SS は 34 になります。

```
-e 12:41 -> March 12 1998 12:41:34
-s 12:41 -> March 12 1998 12:41:34
```

時間フィールドがまったく指定されていない場合、<starttime> はその日の最初の 1 分になり、<endtime> はその日の最後の 1 分になります。

```
-s feb 22 -> feb 22 1998 00:00:00
-e feb 22 -> feb 22 1998 23:59:59
```

出力

unistats によって表示されるすべての出力フィールドの説明は次のとおりです。フィールドは、表示される順番にリストしています。

表 F-46 unistats の CLIENT 出力フィールド

CLIENT フィールド	説明
CLIENT	カレンダー・クライアントの名前およびバージョン
SYSTEM	Calendar Server のホスト・オペレーティング・システムの名前
SERVER	Calendar Server のバージョン
SIGNONS	このクライアントのサマリー統計に使用するレコードの数
SESSION AVERAGE	平均セッション時間
CPU TOTAL	すべての SIGNONS の合計 CPU 時間
CPU MEDIAN	CPU 時間の中央値
CPU AVERAGE	平均 CPU 時間（usr はユーザー、sys はシステムを表す）

表 F-46 unistats の CLIENT 出力フィールド（続き）

CLIENT フィールド	説明
NETWORK TOTAL	クライアントと Calendar Server のホスト間で交換された合計バイト数
NETWORK MEDIAN	NETWORK TOTAL の中央値
NETWORK AVERAGE	NETWORK TOTAL の平均値（snd は送信、rcv は受信を表す）
CALLS	関数コールの合計数

表 F-47 unistats の FUNCTION NAME 出力フィールド

FUNCTION NAME フィールド	説明
CALL（％）	この関数のすべてのコールのパーセンテージ
TIME（W）	関数が 1 つのコールの処理に費やした最大ユーザー応答時間
TIME（A）	この関数の処理にかかった平均ユーザー応答時間
CPU（％）	この関数が費やした合計 CPU 時間のパーセンテージ
CPU（％U）	ユーザーが費やした（前述の CPU（％）の）パーセンテージ
CPU（％S）	システムが費やした（前述の CPU（％）の）パーセンテージ
CPU（W）	1 つのコールの処理にこの関数が費やした最大 CPU 時間
CPU（A）	この関数が 1 つのコールの処理に費やした平均 CPU 時間
NET（％）	この関数が使用したすべてのネットワーク I/O のパーセンテージ
NET（％S）	送信したデータの（前述の NET（％）の）パーセンテージ
NET（％R）	受信したデータの（前述の NET（％）の）パーセンテージ

例

- デフォルト・ファイル（`$ORACLE_HOME/ocal/log/stats.log`）からデータのサマリー統計を取得する場合は、次のようになります。

```
% unistats
```
- ファイル `myfile.log` からすべての windows クライアントのサマリー統計を取得する場合は、次のようになります。

```
% unistats -client "N=window*" -f myfile.log
```
- サーバー A.02.90 からユーザー Don Martin のサマリー統計だけを取得する場合は、次のようになります。

```
% unistats -user "s=martin/g=don" -server "A.02.90"
```
- motif クライアントからリソース projector のサマリー統計だけを取得する場合は、次のようになります。

```
% unistats -res "R=projector/ID=901" -client "N=Motif"
```
- 7 月 19 日のサマリー統計を取得する場合は、次のようになります。

```
% unistats -s jul 19 -e jul 19
```
- すべてのクライアントのすべてのユーザーのサマリー統計を取得する場合は、次のようになります。

```
% unistats -all -user "S=*"
```
- ノード 70 のすべての予約済ユーザーのサマリー統計を取得する場合は、次のようになります。

```
% unistats -reserved -n 70
```

ファイル

`$ORACLE_HOME/ocal/log/stats.log`

デフォルトで、`unistats` はこのファイルから情報を取得します。`uniengd` がこのファイルに情報を記録するためには、`unison.ini` の `[ENG] stats` パラメータが `TRUE` に設定されている必要があります。

`$ORACLE_HOME/ocal/log/unistats.log`

`unistats` は、すべてのエラーをこのファイルに記録します。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 使用時エラー
- 2 システム・エラー

UNISTATUS

unistatus: Calendar Server およびノードのステータスを判別します。

構文

```
unistatus [-f] [-d] [-s] [-cws] [-lck] [-reset] [-q] [-w] [-e]
```

```
unistatus -csmhost <host:port> [-p <password>]  
[-f] [-d] [-s] [-cws] [-lck] [-reset] [-q] [-w] [-e]
```

```
unistatus -n [<node-Id>]
```

```
unistatus -csmhost <host:port> [-p <password>] -n [<node-ID>]
```

```
unistatus -v  
unistatus -h
```

説明

デフォルトでは、**unistatus** は実行中の **Calendar Server** のデーモン / サービスを判別し、それらの現在のステータスを標準出力に出力します。**unistatus** は、ノードのステータスの表示にも使用できます。

デフォルトでは、**unistatus** は、**Calendar Server** の状態を起動中、一部起動中、停止中、スタンバイ・モード (**Calendar Server Manager** が実行中)、または非一貫性としてレポートし、通常は有効化されるデーモンまたはサービスのうち、無効なものをすべてリストします。

表示される様々なタイプの情報を選択するために、多数のオプションを使用できます。**-d** オプション、**-f** オプションおよび **-s** オプションを使用すると、コントローラ、リスナー、タスクまたはセッション (あるいはその両方) の情報を表示できます。値とその意味は、「出力」を参照してください。

静止出力 (**-q** を使用) は、**Calendar Server** の状態を表す値を返す **-e** オプションと組み合わせて使用すると便利です。**Calendar Server** が起動しているかどうかをテストするスクリプトで使用できます。

-cws オプションおよび **-lck** オプションを使用すると、unicwsd または unilckd のデーモン / サービスの幅広い統計情報をそれぞれ表示できます。unistatus は、オープンまたはクローズされたデータベース・セッションの数、データベース・ロックの数、およびデータベース・コミットの数を表示します。デフォルトでは、これらのカウンタは 1 日 1 回 0 にリセットされます（構成可能）。カウンタは、**-reset** オプションと **-lck** オプションまたは **-cws** オプションを併用することで、手動でリセットできます。

unistatus をリモートで実行するには、**-csmhost** オプションおよび **-p** オプションを使用します。Oracle Internet Directory に接続している場合は、SYSOP パスワードを指定するか、リモート・サーバーの unison.ini の [CSM] password パラメータで定義されている CSM パスワードを使用します。

unistatus は、Calendar Server が起動中か停止中かにかかわらず、実行できます。unistatus をリモートで実行するには、リモートの Calendar Server Manager (unicmsmd) が実行中であることが必要です。

オプション

-csmhost

リモートの Calendar Server が配置されているホストを指定します。デフォルトのポート番号が使用されていない場合に、unicmsmd デーモンによって使用されるポート番号を指定するには、<hostname> パラメータに書式 hostname:csmport を使用します。

-cws

コーポレート・ワイド・サービス・デーモン / サービス (unicwsd) の統計を表示します。

-d

タスク、リスナーおよびコントローラの処理のレポートのみを作成します。

-e

デフォルトの終了ステータスの値を変更し、Calendar Server のデーモン / サービスに関する情報を指定します。値とその意味は、「終了ステータス」を参照してください。

-f

リスナー、セッションおよびコントローラを考慮した、ps のような、広範囲に及ぶレポートを作成します。Calendar Server で実行されている可能性があるデーモンおよびサービスは、次のとおりです。

- uniengd コントローラ： 常に実行
- unilckd リスナー： 常に実行
- uniengd リスナー： 常に実行

- uniengd セッション: ユーザー・プロセスの実行中のみ
- unicwsd コントローラおよびタスク: コーポレート・ワイド・サービスが有効な場合のみ
- unisncd リスナー: リモート・ノード・サービスが有効な場合、またはディレクトリ・サーバーを使用している場合、あるいはその両方
- unidasd リスナーおよびセッション: ディレクトリ・サーバーを使用している場合のみ
- unicsmd リスナー: 常に実行

-lck

ロック・マネージャの統計を表示します。

-n

<node-ID>

特定のノードの統計を表示します。

-p

<password>

Oracle Internet Directory を使用している場合は、リモート・サーバーの SYSOP パスワードを指定する必要があります。もしくは、unison.ini の [CSM] password パラメータで定義された CSM パスワードを指定する必要があります。このオプションを使用していない場合は、パスワードの入力要求が行われます。

-q

適切なエラーを返すのみで出力の作成を行わない、静止バージョンのコマンドを使用します。

-s

セッションのレポートのみを作成します。

-w

停止中または無効なプロセスに関するメッセージを表示しません。unilckd および uniengd のデーモン / サービスが実行中で unicwsd または unisncd が実行されていない場合に表示される、「CORPORATE-WIDE SERVICES are down」または「REMOTE-NODE SERVICES are down」などのメッセージが、これに該当します。

-v

unistatus の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unistatus の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

出力

一部のプラットフォームでは、一部の値が表示されません。たとえば、NT では、セッションおよびコントローラが表示されません。リスナーのみが表示されます。Solaris では、コントローラおよびリスナーだけが表示されます。AIX では、3 つのクラスが表示されます。unistatus によって表示される出力フィールドは、次のとおりです。

表 F-48 unistatus 出力フィールド

列	説明
UID	サーバーの実行に使用されているユーザー ID。
PID	このプロセスのプロセス ID。
PPID	親プロセス ID。
ETIME	経過時間。Unix の場合、書式は dd-HH:MM:SS です。NT の場合、書式は HH:MM:SS で、HH を 24 より大きい値に設定できます。
TIME	CPU 時間。書式は ETIME と同じ。
COMMAND	デーモン / サービスの名前。
CLASS	デーモンの機能。NT の場合、リスナーおよびタスクです。UNIX の場合、コントローラ、リスナー、セッションおよびタスクです。
INFO	デーモン / サービスの操作の追加情報。

例

- カレンダ・サービスのステータスを出力する場合は、次のようになります。

```
% unistatus
unistatus: The calendar server is partially up
unistatus: the Calendar Corporate-Wide Services is down
```

- UNIX システム上のすべての **Calendar Server** のデーモンおよびサービスの完全なレポートを作成する場合は、次のようになります。

```
% unistatus -f
UID    PID  PPID STIME   TIME      COMMAND CLASS INFORMATION
tin    6772 228   1:41:21 0:0:0.156 unisncd Listener
tin    4368 228   2:32:23 0:0:0.187 unicwsd Controller  3 task(s)
tin    6756 4368  2:32:27 0:0:0.125 unicwsd Task    SSR
tin    7680 4368  2:32:27 0:0:0.203 unicwsd Task    Messaging
tin    9444 4368  2:32:27 0:0:0.156 unicwsd Task
Messaging,SSR,Snooze,EventSync,DirSync
tin    7196 228   1:41:28 0:0:0.46  unicsmd Listener
tin    6712 228   1:41:17 0:0:0.78  unilckd Listener  0 DB sess
tin    6692 228   1:41:18 0:0:1.875 uniengd Listener  3/100 sess
unistatus: the calendar server is up
```

終了ステータス

デフォルトの終了値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割り込み

-e オプションを使用してデフォルトの終了値を変更し、様々な **Calendar Server** のデーモン / サービスのステータスをエンコードできます。これらの値は次のとおりです。

- 0 ～ 127 成功。この値は、1 つ以上の値 1、2、4、8、16、32 および 64 の合計です。値の詳細は次のとおりです。
 - 1 は、uniengd サーバーが実行中であることを意味します。
 - 2 は、unicwsd デーモンが実行中であることを意味します。
 - 4 は、uniengd デーモンが実行中であることを意味します。
 - 8 は、unilckd デーモンが実行中であることを意味します。
 - 16 は、unisncd デーモンが実行中であることを意味します。
 - 32 は、unidasd サーバーが実行中であることを意味します。
 - 64 は、unidasd デーモンが実行中であることを意味します。
- 253 中断
- 254 使用時エラー
- 255 失敗

UNISTOP

unistop: Calendar Server またはノードを停止します。

構文

```
unistop [-bypass] [-standby] [-cws] [-snc] [-das] [-csm] [-y]
```

```
unistop -csmhost <host:port> [-p <password>] [-bypass]  
[-cws] [-snc] [-das] [-nostandby] [-y]
```

```
unistop -n <node-Id> [-y]
```

```
unistop -n <node-Id> -csmhost <host:port> [-p <password>] [-y]
```

```
unistop -clean [-force]
```

```
unistop -v
```

```
unistop -h
```

説明

unistop は、実行中の Calendar Server のすべてまたは一部を停止します。デフォルトでは、次のすべてのデーモンおよびサービスが停止します。unicwsd、unisncd、unidasd (ディレクトリ・サーバー使用時)、uniengd、unilckd および unicsmd。unistop は、ノードの停止、またはサーバーによって割り当てられたシステム・リソースのクリーン・アップにも使用できます。

現在サインオンしているユーザーが存在する場合、unistop は、停止を続行する前に確認要求を行います。この確認要求を省略するには、**-y** オプションを使用します。

単一のノードを停止する場合は、**-n** オプションを使用します。サーバー（またはノード）は、Calendar Server Manager デーモン (unicsmd) がそのサーバーで実行されている場合のみ、リモートで停止できます。ローカル・サーバーでは、デフォルトですべてのコンポーネントが停止します。unicsmd デーモンを実行させておくには、**-standby** オプションを使用します。これにより、サーバーをリモートで再起動できます。

Calendar Server またはノードをリモートで停止するには、**-csmhost** オプションおよび **-p** オプションを使用します。Oracle Internet Directory のインストールを使用している場合は、SYSOP パスワードを指定するか、unison.ini の [CSM] password パラメータで定義されている CSM パスワードを使用します。サーバーをリモートで停止する場合、デフォルトでは unicsmd デーモンは停止しません。unicsmd デーモンを強制的に停止させるには、**-nostandby** オプションを使用します。

サーバーの特定のコンポーネントを停止させるには、オプション **-cws**、**-snc**、**-csm** および **-das** を使用します。

サーバーが停止すると、リソース、起こりうるリークおよび一時ファイルが削除されます。このクリーン・アップを実行するためにサーバーが完全に停止した場合、**-clean** オプションを使用して **unistop** を起動できます。ただし、何らかの理由で **unistop** がサーバーがまだ起動中であると判断した場合（IPC またはその他のリソースが残存する場合など）、**-force** オプションを使用して強制的に正しい操作を実行させることができます。

unistop は、**Calendar Server** が少なくとも部分的に起動している（1 つ以上のデーモンが実行されている）場合のみ、実行できます。

unistop は、**-bypass** オプションを使用しないかぎり、**unistart** または別の **unistop** と同時には実行できません。このオプションは、**unistart** が突然停止した後も実行中として検出される場合に有益です。

オプション

-bypass

別の **unistart** プロセスまたは **unistop** プロセスの実行中でも、**unistop** の実行を可能にします。このオプションは慎重に使用してください。指定する前に **unistart** が実行されていないことを必ず確認する必要があります。

-clean

サーバーによって割り当てられたシステム・リソースをクリーン・アップします。このオプションを使用するには、サーバーを完全に停止させる必要があります。何らかの理由でサーバーを停止できない場合は、**unistop -y -bypass** を試みるか、**-force** オプションを使用してください。

-csm

Calendar Server Manager デーモン / サービス（**unicssmd**）だけを停止します。

-csmhost

リモート **unicssmd** が配置されているホストを指定します。デフォルトのポート番号が使用されていない場合に、**unicssmd** デーモンによって使用されるポート番号を指定するには、**<hostname> パラメータ**に書式 **hostname:csmport** を使用します。

-cws

コーポレート・ワイド・サービス（**unicwsd**）のみを停止します。このオプションが正常に機能するには、**unilckd** および **uniengd** のデーモン / サービスが実行されている必要があります。問題を回避するために、**unisncd** および **unidasd**（ディレクトリ・サーバー実行時）の両方が実行されていることを確認してください。

-das

unidasd のデーモンおよびサービスのみを停止します。これらは、ディレクトリ・サーバーでのみ使用されます。このオプションが正常に機能するには、unilckd および uniengd のデーモン / サービスが実行されている必要があります。問題を回避するために、unicwsd および unisnkd の両方が実行されていることを確認してください。

-force

-clean と併用すると、サーバーの起動中でもサーバーによって割り当てられたシステム・リソースを強制的にクリーン・アップできます。この操作は通常不要です。最後の手段としてのみ使用してください。

-n

<node-ID>

停止する Calendar Server ノードを指定します。

-nostandby

リモート unicsmd デーモンを停止します。このオプションは、リモート・サーバーを停止する際に、リモート unicsmd も強制的に停止する場合に使用します。リモート・サーバーにリモートからアクセスできなくなります。

-p

<password>

Oracle Internet Directory を使用している場合は、リモート・サーバーの SYSOP パスワードを指定する必要があります。もしくは、unison.ini の [CSM] password パラメータで定義された CSM パスワードを指定する必要があります。このオプションを使用していない場合は、パスワードの入力要求が行われます。

-snc

unisnkd デーモンのみを停止します。このオプションが正常に機能するには、unilckd および uniengd のデーモンが実行されている必要があります。問題を回避するために、unidasd (ディレクトリ・サーバー実行時) が実行されており、unicwsd が実行されていないことを確認してください。このオプションを使用すると、unicwsd も停止します。

-standby

unicsmd デーモンをそのまま実行させます。このオプションは、ローカル・サーバーの停止後にリモートから再起動できるようにするときに使用します。

-y

デフォルトでは、Calendar Server にサインオンしているユーザーが存在する場合、停止の続行を確認するプロンプトが発行されます。このオプションは、サインオンしているユーザーが存在する場合でも、**unistop** は自動的に停止を続行します。それぞれのアクティブな uniengd サーバーの停止は、データベースの一貫性が保たれるような方法で続行されます。

-v

unistop の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unistop の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- Calendar Server を停止する場合は、次のようになります。

```
% unistop
```

- コーポレート・ワイド・サービス (unicwsd) デーモンを停止する場合は、次のようになります。

```
% unistop -cws
```

- unicsmd が (デフォルト・ポートではなく) ポート 8804 にある、リモート・サーバーのノード 44 を停止する場合は、次のようになります。

```
% unistop -n 44 -csmhost hubert:8804 -p pass1
```

- ディレクトリ・サーバーのデーモンおよびサービスのみを停止する場合は、次のようになります。

```
% unistop -das
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

0 成功

1 失敗

2 使用時エラー

3 ユーザー割込み

UNISTRCONV

unistrconv: テキストを UTF-8 または別のキャラクタ・セットに変換します。

構文

```
unistrconv [-from <charset>] [-to <charset>] -s <string>
```

```
unistrconv [-from <charset>] [-to <charset>] -s <string>  
[-y] -if <inputFile> -of <outputFile>
```

```
unistrconv -v  
unistrconv -h
```

説明

1 つのキャラクタ・セットから別のキャラクタ・セットに、テキストを変換します。デフォルトでは、文字列は UTF-8 に変換されます。テキストはファイルから読み取り、別のファイルに出力できます。

電子メール・メッセージのパナーは、UTF-8 形式で提供する必要があります。このユーティリティは、このパナーとして使用するテキストの変換に使用します。

オプション

-from

<charset>

変換前のキャラクタ・セットを指定します。デフォルトでは、現在のキャラクタ・セットが使用されます。<charset> の有効な値には、次が含まれます。

UTF8

英語:

WE8ISO8859P1

US7ASCII

WE8MSWIN1252

AL32UTF8

WE8ISO8859P15

ポルトガル語 (ブラジル)、フランス語、ドイツ語、イタリア語:

WE8ISO8859P1

WE8MSWIN1252:

AL32UTF8

WE8ISO8859P15

日本語 :

JA16EUC

JA16SJIS

AL32UTF8

韓国語 :

KO16KSC5601

AL32UTF8

中国語（簡体字） :

ZHS16GBK

ZHS32GB18030

AL32UTF8

中国語（繁体字） :

ZHT16MSWIN950

ZHT16HKSCS

AL32UTF8

-if

変換するテキストが含まれているファイルのパス名を指定します。

-of

変換されたテキストが保存されるファイルのパス名を指定します。

-s

< 文字列 >

変換する文字列を指定します。

-to

< charset >

変換後のキャラクタ・セットを指定します。デフォルトでは、UTF-8 キャラクタ・セットが使用されます。< charset > の有効な値は、**-from** オプションを参照してください。

-y

-of と併用することで、確認要求を省略して出力ファイルの上書きを自動的に続行できます。

-v

`unistrconv` の現在のバージョン番号を出力します。

-h

`unistrconv` の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- ファイル `bannerMsg.txt` 内のテキストを UTF-8 に変換し、ファイル `bannerMsgUtf8.txt` に保存する場合は、次のようになります。

```
% unistrconv -if bannerMsg.txt -of bannerMsgUtf8.txt
unistrconv: File has been converted successfully.
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNISYNCREFRESH

`unisyncrefresh`: Calendar Server の同期レコードをリフレッシュします。

構文

```
unisyncrefresh [-n <node-ID>] [-host <hostname>] [-fr <date>] [-p <SYSOPpassword>]
```

```
unisyncrefresh -v
```

```
unisyncrefresh -h
```

説明

`unisyncrefresh` は、Calendar Server の同期レコードをリフレッシュします。

新しいバージョンの Calendar Server では、`unisyncrefresh` を定期的に行う必要がなくなりました。これは、CWS によって同期情報が常に最新の状態に保たれるようになったためです。

unisyncrefresh は、Calendar Server が起動しているときだけ実行可能です。

オプション

-fr

<date>

指定された日付より新しい同期情報を、すべて強制的に再ビルドします。通常のメンテナンスでは使用せず、同期レコードの破損時のみ使用してください。同期コンテキストを再作成しなければ、エンド・ユーザーが効果を確認できない場合があります。date の書式は mm/dd/yyyy です。

-host

<hostname>

-n オプションで指定されたノードが含まれているホストを指定します。リモート・ホストに接続する場合は必須です。-host が使用されていない場合、unisyncrefresh はローカル・ホストと見なします。-host が指定されており、-n が指定されていない場合、unisyncrefresh は指定されたホストのマスター・ノードを検索します。

-n

<node-ID>

ノードを指定します。-n が使用されていない場合、unisyncrefresh は -host オプションで指定されたホストにあるマスター・ノードを検索します。マスター・ノードが存在しない場合、-n は必須です。

-p

<SYSOPpassword>

指定されたノードの SYOSP パスワードを指定します。このオプションを使用していない場合、unisyncrefresh によるパスワードの入力要求が行われます。

-v

unisyncrefresh の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unisyncrefresh の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- ローカル・ホストのノード 45 の同期レコードをリフレッシュする場合は、次のようになります。

```
% unisyncrefresh -n 45
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNITZINFO

unitzinfo: タイムゾーン情報を出力します。

構文

```
unitzinfo [-c] [-l] [-t <timezone>] [-node <node-ID>] [-y <year>]
```

```
unitzinfo -v  
unitzinfo -h
```

説明

\$ORACLE_HOME/ocal/misc/timezone.ini ファイルで検出された Calendar Server のタイムゾーン・テーブルから、情報を抽出します。デフォルトでは、Calendar Server によって使用される構成済タイムゾーンの現在の年の情報が、80 文字幅書式で出力されます。

Calendar Server 表には、1991 年から 2074 年まで（これらの年を含む）のタイムゾーン情報が含まれます。

unitzinfo は、Calendar Server が起動中か停止中かにかかわらず、実行できます。

オプション

-c

国ごとのタイムゾーン情報をリストします。国内の複数のタイムゾーンは、順番にリストされます。出力されるフィールドは次のとおりです。

表 F-49 タイムゾーン・フィールド

フィールド	説明
COUNTRY	国名
TIMEZONE	タイムゾーン名
ST	GMT との時差（時間単位）
DST	夏時間（DST）での GMT との時差（時間単位）
EFFECTIVE PERIOD	夏時間の有効期間

-l

132 文字幅（large）の出力書式で情報を出力します。

-node

<node-ID>

ノードを指定します。このオプションを使用すると、ノード用に構成されたタイムゾーンの情報が出力されます。

-t

<timezone>

出力するタイムゾーンの名前を指定します。<timezone> に値 all が設定されている場合は、タイムゾーンの完全なリストが出力されます。

-y

<year>

タイムゾーン情報の出力対象となる年（たとえば、どの年の夏時間の期間を表示するか）を指定します。<year> は、4 桁の数字で指定する必要があります。デフォルトは現在の年です。

-v

unitzinfo の現在のバージョン番号を出力します。

-h

unitzinfo の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- ノード 20 に関連付けられたタイムゾーン情報を表示する場合は、次のようになります。

```
% unitzinfo -node 20
EST5EDT Eastern Standard Time, Eastern Daylight Time
U.S.A. (Eastern), Canada (Eastern), Bahamas,
Haiti, Turks & Caicos
Hours from GMT: -5h
Daylight Saving Time : -4h (Apr 4,1999 - Oct 30,1999)
```

ファイル

```
$ORACLE_HOME/ocal/misc/timezone.ini
```

このファイルには、Calendar Server によって使用されるタイムゾーンの詳細が含まれます。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

UNIUSER

uniuser: カレンダ・ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダのリスト作成、追加または削除、これらに関連付けられた情報の変更、または 1 人のユーザーから別のユーザーへのデータの移行を行います。

構文

リスト作成

```
uniuser -ls [<user>] [-format <format>] [-host <hostname>] [-n <node-ID>]
[-user | -resource | -eventcal] [[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
[-ext] [-showdefault]
```

```
uniuser -defaultls [-s <section>] [-host <hostname>] [-n <node-ID>]
[-user | -resource | -eventcal] [[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
```

```
uniuser -inactivels <date> [-host <hostname>] [-n <node-ID>]
[-user | -resource | -eventcal] [[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
[-ext] [-showdefault]
```

```
uniuser -newls <date> [-host <hostname>] [-n <node-ID>]  
[-user | -resource | -eventcal] [[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]  
[-ext] [-showdefault]
```

追加

```
uniuser -add <filter> [-s <section>] [-host <hostname>] -n <node-ID>  
[-user | -resource | -eventcal] [[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
```

削除

```
uniuser -del <filter> [-y] [-host <hostname>] [-n <node-ID>]  
[-user | -resource | -eventcal] [[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
```

```
uniuser -desdel -u <filter> [-host <hostname>] [-n <node-ID>]  
[-user | -resource | -eventcal] [[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
```

```
uniuser -grpdel -u <filter> [-host <hostname>] [-n <node-ID>]  
[-user | -resource | -eventcal] [[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
```

変更

```
uniuser -mod <filter> -s <section> | -m <modifier> [-host <hostname>] [-n <node-ID>]  
[-user | -resource | -eventcal] [[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
```

複数の追加、削除、変更

```
uniuser -ex <filename> [-s <section>] [-y] [-k]  
[-user | -resource | -eventcal] [-host <hostname>] [-n <node-ID>]  
[[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
```

```
uniuser -edit <filter> [-host <hostname>] [-n <node-ID>]  
[-user | -resource | -eventcal] [[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
```

その他

```
uniuser -transfer <filter> -u <targetfilter> [-host <hostname>] [-n <node-ID>]  
[[-event <filter>] | [-group <filter>] | [-task <filter>] | [-folder <filter>]] [-user  
| -resource] [[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
```

```
uniuser -info [<attribute>] [-host <hostname>] [-n <node-ID>]  
[-user | -resource | -eventcal] [[-p <psw>] [-uid <uid>] | [-krb]]
```

```
uniuser -v  
uniuser -h [command]
```

説明

uniuser は、カレンダー・ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーのアカウントのリスト作成、追加、削除、またはこれらに関連付けられた情報の変更を行います。**-user**、**-resource**、**-eventcal** の 3 つのオプションのうち 1 つを選択して、アカウントのタイプ（ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダー）を指定する必要があります。これらのオプションによって、必要なときに使用する構成ファイル（`user.ini`、`resource.ini` または `eventcal.ini`）が決まります。**-mod** オプションでアカウントを変更する前に、**-info** `<attribute>` を使用して変更できる属性および 1 つの属性の有効値を確認できます。

uniuser は、**-transfer** オプションを使用して 1 人のユーザーまたは 1 つのリソースから別のユーザーまたはリソースにデータを移行する場合にも使用できます。

カレンダー・ユーザーに関連付けられた情報は、「`<user>` 引数の書式」の項で説明しているキーと値のペア、および `user.ini` ファイルに含まれる情報の組合せです。これには、ユーザー設定項目、セキュリティ、管理権限、X.400 情報、個人グループ、管理グループ・メンバーシップ、およびそのユーザーの代理として作業できるユーザーのリストが含まれます。

リソースは名前で識別されるため、それぞれの名前は一意であることが必要です。リソースに関連付けられた情報は、「`<resource>` 引数の書式」の項で説明しているキーと値のペア、および `resource.ini` ファイルに含まれる情報の組合せです。これには、リソース設定項目、セキュリティ、個人グループ、管理グループ・メンバーシップ、およびそのリソースの代理として作業できるユーザーのリストが含まれます。

イベント・カレンダーも、名前で識別されます。テーブルでのイベント・カレンダーの指定方法は、「`<eventcal>` 引数の書式」を参照してください。

-ls、**-add**、**-del**、**-grpdel**、**-desdel** および **-mod** の各オプションは、すべて相互排他的であることに注意してください。

uniuser を使用して、Calendar Server 固有のユーザー属性だけを変更することをお勧めします。Oracle Internet Directory の管理ツールを使用して直接変更できるすべての属性は、uniuser で変更しないでください。

uniuser を実行するには、Calendar Server が起動している必要があります。

オプション

-add

フィルタ: `<user> / [<resource>] / [<eventcal>]`

このコマンドは、新規カレンダー・ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーを作成するときに使用します。新しいアカウントに関連付けられる情報は、`<user>` 引数で指定された内容、および構成ファイル（`user.ini`、`resource.ini` または `eventcal.ini`）のデフォルト値の組合せです。デフォルトでは、uniuser が構成ファイルを読み取るときに、`[GEN]` セクションの値だけが考慮されます。構成 `ini` ファイルの他のセクションの値を適用するには、**-s** オプションを使用します。複数のユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーを追加するには、**-ex** オプションを使用します。

必須の属性は指定する必要があります。指定していない場合、新しいアカウントを追加しようとしても失敗します。たとえば、イベント・カレンダまたはリソースを追加する場合、N キーおよび PSW キーを使用して、名前とパスワードを指定する必要があります。**Calendar Server** の（外部ディレクトリではなく）内部ディレクトリを使用している場合は、ユーザーを追加する際に **-add** オプションの S キーが必須です。

外部ディレクトリの場合は、ユーザーがすでにディレクトリ・サーバーに存在する必要があります。また、ユーザーの **DID**（ディレクトリ ID）を指定することが必要で、**DN**（識別名）書式で指定する必要があります。後ろに X.400 書式のデータが続く場合もあります。「例」を参照してください。

-defaultls

このコマンドは、指定されたユーザー、リソースまたはイベント・カレンダのデフォルトの属性値をリストするときに使用します。値は、**-s** オプションで定義された構成ファイルのセクションから取得されます。

-del

フィルタ： <user> / [<resource>] / [<eventcal>]

このコマンドは、<user> で指定されたカレンダー・ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダを削除するときに使用します。**-y** オプションが使用されていないかぎり、**uniuser** は、削除を実行する前に確認要求を行います。複数のアカウントを削除する場合は、**-ex** オプションを使用する必要があります。

大規模な予定表では、この操作にかかる時間が長くなり、他のユーザーに対する **Calendar Server** のパフォーマンスに影響する場合があります。ユーザーの削除は、ピーク時間以外のみに行うことをお勧めします。

-desdel

このコマンドは、**-u** オプションで指定されたユーザーが持つすべての代理権を削除するときに使用します。データベースで複数のユーザーが一致した場合、**uniuser** は失敗します。**-n** オプションを使用してノードを指定する必要があります。指定されたノードにある予定表の代理権だけが取り消されます。ユーザーのすべての代理権を削除するには、接続されたすべてのノードでこのコマンドを実行する必要があります。次に例を示します。**Bob Smith** はノード 1、**Mary** はノード 2、**Jack** はノード 3 にそれぞれ属します。**Mary** は自分の予定表への代理アクセス権を **Bob** に付与しており、**Jack** は自分の予定表への代理アクセス権を **Bob** に付与しています。コマンド **uniuser -desdel -u "S=Smith/G=Bob" -n 2** を使用した場合、**Bob** が持つ **Mary** の予定表への代理アクセス権は取り消されますが、**Jack** の予定表への代理アクセス権は取り消されません。

-edit

フィルタ： <user> / [<resource>] / [<eventcal>]

このコマンドは、UNIX の場合にのみ存在します。このオプションを使用すると、既存のカレンダ・ユーザーのリストをファイルに出力してから、そのファイルを編集して必要な変更を行い、最後にその変更をノードに入力して戻すことが可能になります。

uniuser -edit コマンドは、ファイル・エディタ（NT のメモ帳、UNIX の vi）を開きます。エディタが開くと、<user> で定義されたユーザー・フィルタと一致するすべてのアカウントがファイルに移入されていることがわかります。**-ex** オプションの説明に従ってファイルを変更し、記号の追加、削除または変更を行えます。ファイルを保存し、閉じる際には、**-ex** オプションが指定されているときと同様に、ファイルが **uniuser** によって処理されます。

次の一連のコマンドが自動的に実行されます。

```
% uniuser -ls -n node-ID > file
% vi file
% uniuser -ex file -n node-ID
% rm file
```

-event

<filter>

-transfer オプションと併用することで、会議、メモ、終日イベントおよび履歴などの予定表エントリを、1つのカレンダ・アカウントから別のカレンダ・アカウントに移行できます。

<filter> 引数を使用して、移行する予定表エントリのタイプを指定します。移行するエントリの数は、キー **TIMEINTERVAL** を使用して制限します。指定した時間範囲内のエントリだけが移行されます。時間範囲を指定していない場合は、すべてのエントリが移行されます。

<filter> 引数は、"key=value/key=value/..." という形式の文字列です。**key** は次の表内の値の1つであり、**value** は、**TIMEINTERVAL** を除くすべてのキーで **true** または **false** です。**TIMEINTERVAL** の値は、YYYY-MM-DD [HH:MM],YYYY-MM-DD [HH:MM] という書式で表す必要があります。**key** と **value** は両方とも大 / 小文字が区別されません。

キー	値	定義
TIMEINTERVAL	YYYY-MM-DD [HH:MM] , YYYY-MM-DD [HH:MM]	時間範囲
PUBLIC	true, false	パブリック・エントリ
PERSONAL	true, false	個人エントリ
CONFIDENTIAL	true, false	機密エントリ
NORMAL	true, false	標準エントリ
STICKYNOTE	true, false	付箋
JOURNAL	true, false	履歴
DAYEVENT	true, false	終日イベント
NOTE	true, false	メモ
NORMALEVENT	true, false	会議および予定
ALL	true, false	すべてのタイプ

-ex

<filename>

このコマンドは、ファイル <filename> で指定された追加、削除および変更を実行するとき
に使用します。ファイルの各行は、「.」、「#」、「A」、「a」、「D」、「d」、「M」、「m」、「S」、
「s」、「+」、「-」のいずれかの文字で始まる必要があります。この開始文字は、実行するアク
ションを指定します。詳細は次のとおりです。

文字	アクション
「.」または「#」	行を無視する。
「A」または「a」	ユーザーを追加する。
「D」または「d」	ユーザーを削除する。
「M」または「m」	ユーザーを変更する。この行は、ユーザーを識別します。実際の変 更は、その次の行で定義する必要があり、開始文字に-（マイナ ス記号）を使用する必要があります。
「S」または「s」	user.ini ファイルの設定を使用してユーザーを更新する。
「+」	この行を前の行の続きとして処理する。キーと値のペアは同じ行 に含める必要があります。
「-」	変更を指定する。前の行の開始文字が M または m で、ユーザーが 指定されていることが必要です。

開始文字の後ろには、半角スペース 1 個およびユーザー指定が続きます。変更の場合は、ユーザーを最初の行で指定する必要があり、この行の開始文字には **M** または **m** を使用します。この行はユーザーの識別に使用されます。その次の行は - (マイナス記号) で始まり、変更として適用されるキーと値のペアが含まれます。「例」を参照してください。

ファイルで指定された削除ごとに、**uniuser** によって削除実行前の確認要求が行われます。**-y** オプションは、確認応答を自動的に行う場合に使用します。

このファイルの作成方法の 1 つは、**uniuser -ls** の出力をファイルに保存することです。その後、出力を編集し、**uniuser -ex** に入力できます。

-s セクション・オプションは、**-ex** と併用すると、ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーの変更または追加時に、ユーザー情報のデフォルト値の定義に使用される構成ファイルのセクションを定義できます。

ディレクトリ・サーバーの場合、多数のカレンダー・ユーザーを追加する最も一般的な方法は、最初に **unidssearch** を使用してカレンダー・ユーザー以外のすべてのユーザーのリストをファイルに出力することです。その後、このファイルを必要に応じて変更し、**-ex** オプションを使用して **uniuser** に入力できます。**unidssearch** は、**uniuser** への入力に使用される "key=value/key=value/..." という形式で出力します。「例」を参照してください。

-ext

-ls、**-newls** または **-inactives** の各オプションと **-ext** を併用することで、属性の詳細なリストを表示できます。デフォルトでは、ユーザー属性のサブセットのみがリストされます。

-folder

<filter>

-transfer オプションと併用することで、1 人のユーザーまたは 1 つのリソースから別のユーザーまたはリソースへ、アドレス帳（連絡先）を移行できます。アドレス帳は、イベント・カレンダー・アカウントからは移行できません。

<filter> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。**key** は次の表内の値の 1 つであり、**value** は **true** または **false** です。**key** と **value** は両方とも大 / 小文字が区別されません。現在のところ、使用できるオプションは **ALL** のみで、これはすべてのアドレス帳データが移行されることを意味します。

キー	値	定義
ALL	true, false	すべてのタイプ

-format

<書式>

このオプションは、ユーザー情報フィールドの選択および出力書式のカスタマイズに使用します。**-info** オプションは、カスタマイズ後の書式の指定に使用できるパラメータをリストします。これらのパラメータの一部は、「<user> 引数の書式」の項でもリストしています。このオプションを使用していない場合、すべてのユーザー情報フィールドが出力され、デフォルトの表示書式が使用されます。「例」を参照してください。

-group

<filter>

-transfer オプションと併用することで、1 人のユーザーが所有するグループを別のユーザーに移行できます。

<filter> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。**key** は次の表内の値の 1 つであり、**value** は true または false です。**key** と **value** は両方とも大 / 小文字が区別されません。現在のところ、使用できるオプションは ALL のみで、これはすべてのグループが移行されることを意味します。

キー	値	定義
ALL	true, false	すべてのタイプ

-grpdel

このコマンドは、指定されたノードのすべての管理グループから、指定されたユーザー、リソースまたはイベント・カレンダを削除するときに使用します。ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダを、**-u** オプションで指定する必要があります。単一のユーザー、リソースまたはイベント・カレンダが <user> と一致する必要がある、複数が一致した場合はコマンドが失敗します。このコマンドは、**-n** オプションで指定されたノード上の管理グループのみに適用されます。

-host

<hostname>

この接続オプションを使用して、**-n** オプションで指定されたノードが含まれているホストを指定します。リモート・ホストの場合は必須です。**-host** が存在しない場合、uniuser はローカル・ホストと見なします。**-host** が指定されており、**-n** が指定されていない場合、uniuser は指定されたホストのマスター・ノードを検索します。マスター・ノードが検出された場合、uniuser はこのノードを使用して選択されたユーザーを配置します。

-inactives

<date>

このコマンドは、指定された日付以降の、非アクティブのアカウント（ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダー）をリストするときに使用します。日付書式は YYYY-MM-DD です。

-info

<attribute>

このコマンドは、**-format** オプションで使用する属性と書式パラメータをリストするときに使用します。このリストはサーバーによって動的に生成されるもので、サーバーの設定によってサーバーごとに異なります。<attribute> パラメータの値が指定されている場合は、その属性の情報のみが表示されます。<attribute> の値には、**-info** オプションを単独で使用した場合にリストされる属性のいずれかを使用できます（「例」を参照）。

-k

-ex オプションと併用することで、エラーが発生した場合でも強制的に **uniuser** にすべての行の処理を続行させることができます。エラーは標準エラーに送信されます。ファイル・リダイレクションを使用して、これらのエラーをファイルにキャプチャできます。

-krb

この認証オプションを使用して、自動 Kerberos ログインを指定します。このオプションは、**-p** オプションおよび **-uid** オプションとは併用できません。

-ls

[<filter>]

ユーザーが指定されている場合、**-ls** コマンドは（指定されたノードの）そのユーザーをリストします。ユーザーが指定されていない場合は、ノード内のすべてのユーザーがリストされます。**-format** オプションを **-ls** と併用した場合、出力の表示を構成できます（「例」を参照）。

-m

<modifier>

特定のユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーのアカウント情報への変更を指定します。**modifier** は <user> 引数と同じ書式の文字列ですが、ユーザーの場合は次の例外があります。ID キーは指定されない場合があります、PSW キー、PUBLISHEDTYPE キーおよび GLOBALREADONLY キーが指定される場合があります。読取り専用の属性を変更しようとすると、失敗します。使用できるキーおよび書式の完全なリストは、**-info** オプションを使用して取得してください。

-mod

<user>

このコマンドは、指定したユーザーに関連付けられている情報を変更するときに使用します。このオプションは、**-s** オプションまたは **-m** オプションと併用します。**-m** オプションは、ユーザーの情報に対して行う変更を直接指定する場合に使用します。**-s** と併用した場合、変更は構成ファイル（`user.ini`、`resource.ini` または `eventcal.ini`）のセクションで指定されます。

注意： `uniuser` を使用して、Calendar Server 固有のユーザー属性だけを変更することをお勧めします。Oracle Internet Directory の管理ツールを使用して直接変更できるすべての属性は、`uniuser` で変更しないでください。

-n

<node-ID>

この接続オプションを使用して、ノードを指定します。**-n** が指定されていない場合、`uniuser` は **-host** オプションで指定されたホストにあるマスター・ノードを検索します。マスター・ノードが検出された場合、`uniuser` はそのノードを使用して、指定されたユーザーの配置または配布を行います（**-n** オプションを使用してノードを指定する必要がある場合を除く）。マスター・ノードが存在しない場合、**-n** は必須です。

-news

<date>

このコマンドは、指定された日付以降に作成されたアカウント（ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダー）をリストするときに使用します。日付書式は `YYY-MM-DD` です。

-p

<psw>

この認証オプションを使用して、管理者のパスワードを指定します。管理者が設定されている場合は必須です。パスワードが必須の状況でこのオプションを使用していない場合、ユーザーは `uniuser` によってパスワードを要求されます。

-s

<sections>

カレンダー・アカウントの編集または追加に使用されるデフォルト値の指定に使用する、構成ファイルのセクションを指定します。使用する構成ファイル（`user.ini`、`resource.ini` または `eventcal.ini`）は、指定されたアカウント・タイプ（**-user**、**-resource** または **-eventcal**）によって異なります。

-s <sections> を使用した構成ファイルからの値の適用は、**-add** オプションおよび **-mod** オプションを参照してください。

<sections> 引数は、1 つ以上のセクション名のリストで、各セクション名がフォワード・スラッシュで区切られます（たとえば GEN/GR1/GR2 はセクション GEN、GR1 および GR2 を指定します）。評価は、左から右に行われます。そのため、前述の例の場合、最初に GEN、2 番目に GR1、最後に GR2 が評価されます。1 つのセクションに同じキーが複数表示される場合は、最後に評価されたインスタンスの値が優先されます。

-showdefault

-ls オプション、**-newls** オプションまたは **-inactives** オプションと **-showdefault** を併用すると、現在 0、FALSE または空の文字列に設定されているすべての属性が表示されます。

-task

<filter>

-transfer オプションと併用することで、1 人のユーザーのタスクを別のユーザーに移行できます。

<filter> 引数は "key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は true または false です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。現在のところ、使用できるオプションは ALL のみで、これはすべてのタスクが移行されることを意味します。

キー	値	定義
ALL	true, false	すべてのタイプ

-transfer

<user>

このコマンドは、カレンダー・データの所有権を、1 人のユーザーまたは 1 つのリソースから別のユーザーまたはリソースに移行するときに使用します。ユーザー（またはリソース）が所有するカレンダー・エントリだけが、ターゲット・ユーザー（またはリソース）に移行可能です。<user> 引数を使用して、移行するデータを所有するユーザーまたはリソースを指定します。**-u** オプションを使用して、ターゲット・カレンダー・アカウントを定義します。このアカウントは、<user> アカウント（つまりユーザーまたはリソース）と同じタイプで、かつ同じノード上にあることが必要です。<user> 引数の詳細は「<user> 引数の書式」を参照してください。**-event**、**-task**、**-group** および **-folder** の各オプションを使用して、移行するカレンダー・データのタイプを定義します。確認要求を省略して移行を自動的に続行させるには、**-y** オプションを使用します。

-u

<user>

-target、**-desdel** および **-grpdel** の各オプションと併用することで、ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーを指定できます。<user> 引数の詳細は「<user> 引数の書式」を参照してください。

-uid

<user-ID>

この認証オプションを使用して、管理者のユーザー ID を指定します。ユーザー ID を指定しない場合は、SysOp の ID が使用されます。

-y

-del オプションおよび **-ex** オプションと併用すると、確認要求を省略して削除を自動的に続行できます。**-transfer** オプションと併用すると、確認要求を省略して移行を自動的に続行できます。

-v

uniuser の現在のバージョン番号を出力します。

-h

<command>

uniuser の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。<command> 引数を使用して、次のコマンドの 1 つに関するヘルプを取得できます。**-ls**、**-info**、**-defaultls**、**-inactivels**、**-newls**、**-add**、**-del**、**-grpdel**、**-desdel**、**-mod**、**-transfer**、**-ex** および **-edit**。

書式**<user> 引数の書式**

ユーザー、リソースまたはイベント・カレンダーを表す <user> 引数は、
"key=value/key=value/..." という形式の文字列です。key は次の表内の値の 1 つであり、value は任意の文字列です。key と value は両方とも大 / 小文字が区別されません。ID キー以外のすべてのキーにおいて、value 文字列はワイルド・カード文字「*」で終了する場合があります。スラッシュ「/」が文字列に含まれる場合は、キーと値のペアのデリミタとして解釈されることを防ぐため、文字「¥」でエスケープする必要があります。たとえば、
"S=Hoopla/OU1=R¥/D" のようになります。

UNIX 環境でシェルが文字列を処理する場合（たとえば文字列がコマンドラインで提供される場合や、ユーティリティに引数として渡される場合）、文字列は引用符で囲む必要があります。また、シェルにとって意味をなす文字が文字列に含まれる場合は、シェルが解釈する

ことを防ぐためその文字をエスケープ（つまり、エスケープ文字「¥」を前に付ける）します。

注意： ID のキーと値のペアが <user> 引数で指定されている場合は、ともに指定されている他のキーと値のペアはすべて無視されます。

3 列目にリストされている書式パラメータを **-format** オプションと併用することで、リストの表示を構成できます（「例」を参照）。使用できるキーおよび書式の完全なリストは、**-info** オプションを使用して取得してください。

表 F-50 UNIUSER -eventcal オプションに使用可能なキー

キー	X.400 フィールド	書式パラメータ
N	イベント・カレンダー名	%N%
PSW	イベント・カレンダー・アカウ ントのパスワード	%PSW%

表 F-51 UNIUSER -resource オプションに使用可能なキー

キー	X.400 フィールド	書式パラメータ
R	リソース名	%R%
N	リソース番号	%N%
UID	リソース固有の識別子	%UID%

表 F-52 UNIUSER -user オプションに使用可能なキー

キー	X.400 フィールド	書式パラメータ
S	姓	%S%
G	名	%G%
I	イニシャル	%I%
ID	識別子	%ID%
UID	ユーザー固有の識別子	%UID%
X	世代	%X%
OU1	組織単位 1	%OU1%
OU2	組織単位 2	%OU2%
OU3	組織単位 3	%OU3%

表 F-52 UNIUSER -user オプションに使用可能なキー（続き）

キー	X.400 フィールド	書式パラメータ
OU4	組織単位 4	%OU4%
O	組織	%O%
C	国	%C%
A	管理ドメイン	%A%
P	プライベート・ドメイン	%P%
PHONE	電話番号	%PHONE%
FAX	FAX 番号	%FAX%
EMPL-ID	従業員番号	%EMPL-ID%
JOB-TITLE	役職名	%JOB-TITLE%
EMAIL	[ENG] usermailmap パラメータの値	%EMAIL%

例

リスト作成

- 姓が W で始まるノード 23 のすべてのユーザーをリストする場合は、次のようになります。

```
% uniuser -user -ls "s=W*" -n 23
Enter SysOp password:
S=Whitman/G=Walt/ID=154/C=US
S=Winterson/G=Jeannette/ID=114/C=England
```

- 姓が W で始まるノード 23 のすべてのユーザーをリストする際、これらのユーザーの姓と名だけをコロンで区切って出力する場合は、次のようになります。

```
% uniuser -user -ls "s=W*" -format "%s%: %g%" -n 23
Enter SysOp password:
Whitman:Walt
Winterson:Jeannette
```


- ノード 23 のすべてのユーザーをリストする際に、姓と名をコロンで区切って出力する場合は、次のようになります。

```
% uniuser -user -format "%s%: %g%" -n 23
Enter SysOp password:
Brossard:Nicole
Dillard:Annie
Jansson:Tove
Kilpi:Eeva
Kundera:Milan
Lorde:Audre
Morrison:Toni
Sanchez:Sonia
Whitman:Walt
Winterson:Jeannette
```

- ノード 12 に含まれる、名前が HPLaser で始まるすべてのリソースをリストする場合は、次のようになります。

```
% uniuser -resource -ls "R=HPLaser*" -n 12
Enter SysOp password:
```

```
. R=HPLASER dorian/S=Wilde/G=Oscar/ID=438
. R=HPLASER sula/S=Morrison/G=Toni/ID=512
```

- ノード 12 に含まれる、名前が HPLaser で始まるすべてのリソースをリストする際に、リソース名および連絡先の担当者の姓名をそれぞれコロンで区切って出力する場合は、次のようになります。

```
% uniuser -resource -ls "R=HPLaser*" -format "%r% Contact: %g% %s%" -n 12
Enter SysOp password:
```

```
HPLASER dorian    Contact: Oscar Wilde
HPLASER sula     Contact: Toni Morrison
```

追加

- ユーザー Maya Angelou をノード 24 に追加する場合は、次のようになります。

```
% uniuser -user -add "S=Angelou/G=Maya" -n 24
```

- 同じ追加をディレクトリ・サーバーで実行する場合は、次のようになります。

```
% uniuser -user -add "DID=cn=Maya Angelou, o=Acme, c=US" -n 24
```

- オークの鏡板が特徴の会議室 (oakroom) をノード 12 に追加する場合は、次のようになります。

```
% uniuser -resource -add "R=oakroom/PSW=abcdef123" -n 12
```

削除

- ユーザー Eeva Kilpi をノード 24 から削除する場合は、次のようになります。

```
% uniuser -user -del "S=Kilpi/G=Eeva" -n 24
```

変更

1. Milan Kundera のエントリを変更し、user.ini ファイルの [GEN] セクションへの新しい変更を反映する場合は、次のようになります (Milan Kundera はノード 23 に存在します)。まず、user.ini ファイルの GEN セクションの値がすべて有効であることを確認します。

```
% uniuser -user -defaulttls -s "GEN" -n 23
StartDay = 08h00
EndDay = 18h00
TimeInc = 30
ShowSunday = FALSE
ShowSaturday = FALSE
TimeFormat = 2
RefreshFrequency = 60
DefaultReminder = 0
TimeBeforeReminder = 10
MailNotification = TRUE
OU1 =
OU2 =
OU3 =
OU4 =
O =
C =
A =
P =
TimeZone =
ViewNormalEvent = TIME
ViewPersonalEvent = TIME
ViewConfidentialEvent = TIME
ViewNormalTask = NO
ViewPersonalTask = NO
ViewConfidentialTask = NO
CanBookMe = TRUE
```

2. 変更を続行します。

```
% uniuser -user -mod "S=Kundera/G=Milan" -s "GEN" -n 23
```

3. Milan Kundera の OU1 の値を authors に変更します。

```
% uniuser -user -mod "S=Kundera/G=Milan" -m "ou1=authors" -n 23
```

複数の追加、削除、変更

複数の追加、削除、および変更を行うには、**-ex** オプションを使用します。この例では、3 人の新しいカレンダー・ユーザーが追加され、1 人が変更され、1 人が削除されます。ディレクトリ・サーバーが使用されています。

1. 現時点でカレンダー・ユーザーではない、ディレクトリ・サーバー内のすべてのユーザーを出力します。

```
% unidssearch > multiple.dat
% cat multiple.dat
A DID=cn=Italo Calvino,o=Acme, c=US
A DID=cn=Herman Hesse,o=Acme, c=US
A DID=cn=Doris Lessing,o=Acme, c=US
A DID=cn=Anja Kauranen,o=Acme, c=US
```

2. ファイル内のデータを次のように変更します。Calvino の OU2 の値を R&D に変更し、Walt Whitman の名を変更し、Nicole Brossard を削除します。

```
% vi multiple.dat
% cat multiple.dat
A DID=cn=Italo Calvino,o=Acme, c=US/OU2=R&D
A DID=cn=Herman Hesse,o=Acme, c=US
A DID=cn=Doris Lessing,o=Acme, c=US
A DID=Anja Kauranen,o=Acme, c=US
M ID=154
- G=Walter
D G=Nicole/S=Brossard
```

名前の変更では、ユーザーは ID を使用して検索され、名が Walter に変更されています。

3. ファイルを uniuser に入力します。

```
% uniuser -user -ex multiple.dat -n 23
Enter SYSOP password:
uniuser: added "cn=Italo Calvino,o=Acme, c=US"
uniuser: added "cn=Herman Hesse,o=Acme, c=US"
uniuser: added "cn=Doris Lessing,o=Acme, c=US"
uniuser: added "cn=Anja Kauranen,o=Acme, c=US"
uniuser: modified "Whitman,Walt"
uniuser: deleted "Brossard,Nicole"
```

この例でディレクトリ・サーバーを使用しなかった場合は、入力ファイルに次が含まれます。

```
% cat multiple.dat
A S=Calvino/G=Italo/OU2=Sales
A S=Hesse/G=Herman
A S=Lessing/G=Doris
A S=Kauranen/G=Anja
M ID=154
- G=Walter
D G=Nicole/S=Brossard
```

移行

- ユーザー Maya Angelou の 2003 年のすべてのパブリック・イベントを、ユーザー Oscar Wilde に移行する場合は、次のようになります。

```
% uniuser -transfer "S=Angelou/G=Maya" -u "S=Wilde/G=Oscar" -n 24 -event
"public=true/TIMEINTERVAL=2003-01-01,2003-12-31" -krb
```

- 2003 年 3 月 3 日の週にスケジュールされたユーザー Maya Angelou の機密会議および予定を、ユーザー Oscar Wilde に移行する場合は、次のようになります。

```
% uniuser -transfer "S=Angelou/G=Maya" -u "S=Wilde/G=Oscar" -n 24 -event
"normalevent=true/confidential=true/TIMEINTERVAL=2003-03-03,2003-03-07" -krb
```

- ユーザー Maya Angelou のすべてのグループおよびタスクを、ユーザー Oscar Wilde に移行する場合は、次のようになります。

```
% uniuser -transfer "S=Angelou/G=Maya" -u S=Wilde/G=Oscar -n 24 -task "all=true"
-group "all=true" -krb
```

属性の情報

- ユーザーの属性を表示する場合は、次のようになります。

```
% uniuser -info -user -n 24 -p mypasswd
DID                      EXTENDED  string[1024]
CATEGORY                 EXTENDED  enum
NODE-ID*                 BASIC     number
ID*                      BASIC     number
LOADBALANCING            EXTENDED  boolean
ENABLE                   EXTENDED  boolean
REMINDER-SERVERSMS       EXTENDED  boolean
REMINDER-LEADTIME        EXTENDED  duration [minute]
...
```

- PUBLISHEDTYPE 属性の有効値およびその他の情報を表示する場合は、次のようになります。

```
% uniuser -info -user PUBLISHEDTYPE -n 24 -p mypasswd
Name: PUBLISHEDTYPE
Rights: Create Update Read Remove
View Level: BASIC
Type: enum
Acceptable value(s):
NOTPUBLISHED PUBLISHED
```

ファイル

\$ORACLE_HOME/ocal/misc/user.ini

このファイルは、使用可能なカレンダー・ユーザー構成を指定します。このマニュアルの[付録 A「カレンダー・ユーザーおよびリソースのパラメータ」](#)も参照してください。

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

警告

ディレクトリ・サーバー警告

Calendar Server のユーティリティ用のディレクトリ・サーバー構成の含意を理解することが重要です。サプライヤ・コンシューマ構成では、コンシューマとサプライヤ間の更新のスケジューリングによって両者間の一時的な違いが発生する場合があります。対応するサプライヤとまだ同期化されていないコンシューマ・ディレクトリ・サーバーから、Calendar Server のユーティリティが読み取っている可能性があります。

大規模な予定表を持つユーザーの削除

多数の会議およびイベントを持つユーザーの削除は時間がかかる上、他のカレンダー・ユーザーに対するパフォーマンスを低下させます。このようなユーザーの削除は、できるかぎり通常の業務時間外、少なくともカレンダーの使用ピーク時間外に行うことをお勧めします。

UNIVERSION

universion: Calendar Server のバージョンを表示し、確認します。

構文

```
universion [-all] [-nowarn]
```

```
universion -v  
universion -h
```

説明

universion は、Calendar Server のバージョン番号を表示し、すべてのスクリプトおよびバイナリをチェックして、それらのバージョンが最新であるかどうか確認します。

universion は、Calendar Server が起動中か停止中かにかかわらず、実行できます。

オプション

-all

Calendar Server の各コンポーネントのバージョン番号を表示します。

-nowarn

警告メッセージを抑止します。

-v

universion の現在のバージョン番号を出力します。

-h

universion の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- Calendar Server のバージョン番号を表示し、そのすべてのコンポーネントが最新かどうかをチェックする場合は、次のようになります。

```
% universion
```
- Calendar Server および各コンポーネントのバージョン番号を表示し、すべてのコンポーネントが最新かどうかをチェックする場合は、次のようになります。

```
% universion -all
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 警告エラー
- 4 サーバー・エラー
- 5 致命的なエラー
- 6 ユーザー割込み

UNIWHO

uniwho: サインオンしているカレンダー・ユーザーの情報を表示します。

構文

```
uniwho [-a] [-t] [-j] [-x] [-f] [-n node-Id]
        [-pattern <pattern>] [-nolist] [-nototal]
```

```
uniwho -v
uniwho -h
```

説明

このユーティリティを使用すると、システム・マネージャは、Calendar Server を使用しているユーザー、これらのユーザーがサインオンしている場所、およびユーザーのセッションに関連付けられたプロセス ID を判別できます。オプションを使用すると、プロセス ID、ネットワーク・アドレス、ノード ID およびユーザー情報の様々な組合せを表示できます。接続サマリーも表示されます。このサマリーでは、標準接続（ユーザー、リソースおよびイベント・カレンダー）、共有接続（Web クライアント・アプリケーション）および予約済接続（SYSOP、CWSOP）の合計数が示されます。接続サマリーが表示されないようにするには、**-nototal** オプションを使用します。

この情報は、特定の状況ではきわめて重要です。たとえば、ユーザーがクライアントの異常停止を行った場合（クライアントがアクティブ状態のときの電源遮断など）、クライアントに関連付けられたサーバー・プロセスは、一定時間アクティブな状態を保ちます。Calendar Server が、(unison.ini の [ENG] max_userlogons パラメータを介して) ユーザーごとのセッション数を 1 に制限するように構成されている場合、このユーザーはサーバー処理が終了するまでログインし直すことができなくなります。uniwho を使用すると、システム・マネージャはセッションのプロセス ID を検索し、終了させることができます。

uniwho は、Calendar Server が起動しているときだけ実行可能です。

オプション

-a

デフォルトのネットワーク・アドレスに関連付けられたエイリアスを表示します。

-f

電話番号、役職名および X.400 アドレスが指定されている場合は、これらを表示します。

-j

役職名が指定されている場合は、これを表示します。

-n

<node-ID>

指定されたノードのユーザーおよびリソースに制限します。

-nolist

ユーザーのリストを表示しません。

-nototal

接続サマリーを表示しません。

-pattern

<pattern>

情報に <pattern> が含まれているセッションの情報を表示します。たとえば、**pattern** が 128.192.64.96 の場合、この IP アドレスからログインされたセッション情報が表示されます。マッチングは、コマンドラインで指定されているかどうかにかかわらず、すべてのフィールド（ネットワーク・アドレス / エイリアス、電話番号、役職名、X.400 アドレス）で実行されます。

-t

電話番号が指定されている場合は、これを表示します。

-X

X.400 アドレスが指定されている場合は、これを表示します。

-V

uniwho の現在のバージョン番号を出力します。

-h

uniwho の実行方法を説明する使用方法メッセージを出力します。

例

- サインオンしているすべての **Calendar Server** ユーザーを表示し、ネットワーク・アドレスのかわりにマシン・エイリアスを出力で表示する場合は、次のようになります。

```
% uniwho -a
      PID      ALIAS NODEID XITEMID  USER
      2120 ark.boat.com  12    12,2    CWSOP,na
      24091 sail.boat.com  12    12,316  Barnes,Pat,B
      24298 row.boat.com  12    12,311  Beck,Tom,V
TOTAL STANDARD SHARED CONNECTIVITY
      3          2      0          1
```

- サインオンしている、品質保証（Quality Assurance）グループのすべての **Calendar Server** ユーザーのリストを表示する場合は、次のようになります。

```
% uniwho -pattern Quality
      PID      ADDRESS NODEID XITEMID  USER
      24298 199.88.48.81  12    12,311  Beck,Tom,V
TOTAL STANDARD SHARED CONNECTIVITY
      1          1      0          0
```

- サインオンしているすべての **Calendar Server** ユーザーの完全な情報を表示する場合は、次のようになります。

```
% uniwho -f
      PID      ADDRESS NODEID XITEMID  USER
      2120 199.88.48.6  12    12,2    CWSOP,na
      24091 199.88.48.81  12    12,316  Barnes,Pat,B
                                           Engineer/R&D
                                           /barnesp@acme.com
                                           /738-1000/123
      24298 199.88.48.85  12    12,311  Beck,Tom,V
                                           Technician
                                           QualityAssurance/QA
                                           /tomb@acme.com
                                           /738-2000/015
```

終了ステータス

終了時の値は次のとおりです。

- 0 成功
- 1 失敗
- 2 使用時エラー
- 3 ユーザー割込み

注意

ロギング

uniwho は、Calendar Server プロセスを起動します。(unison.ini の [ENG] activity パラメータを介して) アクティビティ・ロギングが有効化されている場合、このプロセスの起動および停止が記録されます。

タイムゾーン表

タイムゾーンを正しく設定することは、Calendar Server のインストールを正常に行うために重要です。ノードを作成する前に、適用されるタイムゾーンを決めておきます。

注意： ノードのタイムゾーンは、ノードの作成後に変更できません。

表 G-1 タイムゾーン

国	現在のタイムゾーンの表記法
アフガニスタン	UCT-4:30
アルバニア	MET-1METDST
アルジェリア	UCT-1
アメリカ領サモア	UCT11
アンドラ	MET-1METDST
アンゴラ	UCT-1
アンギラ	UCT4
アンチグアバーブーダ	UCT4
アルゼンチン	SAT3
アルメニア	UCT-4
アルバ	UCT4
オーストラリア（ロードハウ島）	LHT-10:30LHDT
オーストラリア（ニューサウスウェールズ州、首都特別地域、ビクトリア州）	EST-10EDT
オーストラリア（北部特別地域）	UCT-9:30

表 G-1 タイムゾーン（続き）

国	現在のタイムゾーンの表記法
オーストラリア（クイーンズランド州）	UCT-10
オーストラリア（南オーストラリア州およびブローケンヒル）	CST-9:30CDT
オーストラリア（タスマニア州）	TST-10TDT
オーストラリア（西オーストラリア州）	UCT-8
オーストリア	MEZ-1MESZ
アゼルバイジャン	UCT-3
バハマ	EST5EDT
バーレーン	UCT-3
バングラデシュ	UCT-6
バルバドス	UCT4
ベラルーシ	EET-2EETDST
ベルギー	MET-1METDST
ベリーズ	UCT6
ベニン	UCT-1
バーミューダ	AST4ADT
ブータン	UCT-6
ボリビア	UCT4
ボネール島	UCT4
ボスニア・ヘルツェゴビナ	MET-1METDST
ボツワナ	UCT-2
ブラジル（東部：海岸地方全域およびブラジリアを含む）	EBST3EBDT
ブラジル（フェルナンド・デ・ノローニャ島）	NORO2
ブラジル（アクレ州トリニティ）	ACRE5
ブラジル（西部）	WBST4WBDT
英領ヴァージン諸島	UCT4
ブルネイ	UCT-8
ブルガリア	EET-2EETDST
ブルキナファソ	UCT

表 G-1 タイムゾーン（続き）

国	現在のタイムゾーンの表記法
ビルマ	UCT-6:30
ブルンジ	UCT-2
カンボジア	UCT-7
カメルーン	UCT-1
カナダ（大西洋沿岸）	AST4ADT
カナダ（中部）	CST6CDT
カナダ（東部）	EST5EDT
カナダ（山岳部）	MST7MDT
カナダ（ニューファンドランド州）	NST3:30NDT
カナダ（太平洋およびユーコン）	PST8PDT
カナダ（サスカチュワン州）	EST5
カーボベルデ	UCT1
ケイマン諸島	UCT5
中央アフリカ共和国	UCT-1
チャド	UCT-1
チリ	CST4CDT
チリ（イースター島）	EIST6EIDT
中国	CST-8
クリスマス島	UCT-7
ココス（キーリング）諸島	UCT-6:30
コロンビア	UCT5
コンゴ	UCT-1
クック諸島	UCT10
コスタリカ	UCT6
コートジボアール	UCT
クロアチア	MET-1METDST
キューバ	UCT5
キュラソー島	UCT4

表 G-1 タイムゾーン（続き）

国	現在のタイムゾーンの表記法
キプロス	EET-2EETDST
チェコ共和国	MET-1METDST
デンマーク	MET-1METDST
ジブチ	UCT-3
ドミニカ	UCT4
ドミニカ共和国	UCT4
エクアドル	UCT5
エクアドル（ガラパゴス諸島）	UCT6
エジプト	EST-2EDT
エルサルバドル	UCT6
赤道ギニア	UCT-1
エリトリア	UCT-3
エストニア	EET-2EETDST
エチオピア	UCT-3
フェロー諸島	WET0WETDST
フィジー	UCT-12
フィンランド	EET-2EETDST
フランス	MET-1METDST
仏領ギアナ	SAT3
仏領ポリネシア	UCT10
ガボン	UCT-1
ガンビア	UCT
グルジア	EUT-4EUTDST
ドイツ	MEZ-1MESZ
ガーナ	UCT
ジブラルタル	MET-1METDST
ギリシア	EET-2EETDST
グリーンランド（スコレスビ海門）	EUT1EUTDST

表 G-1 タイムゾーン（続き）

国	現在のタイムゾーンの表記法
グリーンランド（チューレ）	AST4ADT
グレナダ	UCT4
グアドループ	UCT4
グアム	UCT-10
グアテマラ	UCT6
ギニアビサウ	UCT
ガイアナ	UCT3
ハイチ	EST5EDT
ハワイ	UCT10
ホンジュラス	UCT6
香港	UCT-8
ハンガリー	MET-1METDST
アイスランド	UCT
インド	UCT-5:30
インドネシア（中部）	UCT-8
インドネシア（東部）	UCT-9
インドネシア（西部）	UCT-7
イラン	UCT-3:30
イラク	IST-3IDT
アイルランド	GMT0BST
イスラエル	IST-2IDT
イタリア	MET-1METDST
ジャマイカ	UCT5
日本	JST
ジョンストン島	UCT10
ヨルダン	JST-2JDT
フアン・フェルナンデス諸島	UCT5
カザフスタン	EUT-6EUTDST

表 G-1 タイムゾーン（続き）

国	現在のタイムゾーンの表記法
ケニア	UCT-3
キリバス	UCT-12
クウェート	UCT-3
キルギスタン	UCT-5
ラオス	UCT-7
ラトビア	EET-2EETDST
レバノン	EUT-2EUTDST
リーワード諸島	UCT4
レソト	UCT-2
リベリア	UCT
リビア	UCT-2
リヒテンシュタイン	MET-1METDST
リトアニア	EET-2EETDST
ルクセンブルク	MET-1METDST
マカオ	UCT-8
マケドニア	MET-1METDST
マダガスカル	UCT-3
マラウイ	UCT-2
マレーシア	MST-8
モルジブ	UCT-5
マリ	UCT
マルタ	MET-1METDST
マリアナ諸島	UCT-10
マルティニーク島	UCT4
モーリタニア	UCT
モーリシャス	UCT-4
マヨット島	UCT-3
メキシコ	CST6CDT

表 G-1 タイムゾーン（続き）

国	現在のタイムゾーンの表記法
メキシコ（バハ・カリフォルニア・ノルテ）	PST8PDT
メキシコ（バハ・カリフォルニア・スル）	MST7MDT
ミッドウェー諸島	UCT11
モルドバ	EET-2EETDST
モナコ	MET-1METDST
モンゴル	EUT-8EUTDST
モンテネグロ	MET-1METDST
モンセラト島	UCT4
モロッコ	UCT
モザンビーク	UCT-2
ナミビア	UCT-2
ナウル	UCT-12
ネパール	UCT-5:45
オランダ領アンティル諸島	UCT4
オランダ	MET-1METDST
ニューカレドニア	UCT-11
ニューヘブリデス諸島	UCT-11
ニュージーランド	NZST-12NZDT
ニュージーランド（チャタム島）	CIST-12:45CIDT
ニカラグア	UCT6
ニジェール	UCT-1
ナイジェリア	UCT-1
ニウエ島	UCT11
ノーフォーク島	UCT-11:30
北朝鮮	KST
ノルウェー	MET-1METDST
オマーン	UCT-4
パキスタン	UCT-5

表 G-1 タイムゾーン（続き）

国	現在のタイムゾーンの表記法
パラウ	UCT-9
パナマ	UCT5
パプアニューギニア	UCT-10
パラグアイ	UCT4
ペルー	UCT5
フィリピン	UCT-8
ピトケアン島	UCT-9
ポーランド	MET-1METDST
ポルトガル（アゼレス諸島）	EUT1EUTDST
ポルトガル（マデイラ諸島）	PWT0PST
プエルトリコ	UCT4
カタール	UCT-3
レユニオン島	UCT-4
ルーマニア	EET-2EETDST
ロシア（モスクワ）	MST-3MDT
ロシア連邦、ゾーン 1（カリーニングラード）	RFT-2RFTDST
ロシア連邦、ゾーン 10（マガダン）	RFT-11RFTDST
ロシア連邦、ゾーン 11（ペトロパブロフスク - カムチャツキー）	RFT-12RFTDST
ロシア連邦、ゾーン 2（サンクトペテルブルク）	RFT-3RFTDST
ロシア連邦、ゾーン 3（イジェフスク）	RFT-4RFTDST
ロシア連邦、ゾーン 4（エカテリンブルク）	RFT-5RFTDST
ロシア連邦、ゾーン 5（ノボシビルスク）	RFT-6RFTDST
ロシア連邦、ゾーン 6（クラスノヤルスク）	RFT-7RFTDST
ロシア連邦、ゾーン 7（イルクーツク）	RFT-8RFTDST
ロシア連邦、ゾーン 8（ヤクーツク）	RFT-9RFTDST
ロシア連邦、ゾーン 9（ウラジオストク）	RFT-10RFTDST
ルワンダ	UCT-2

表 G-1 タイムゾーン（続き）

国	現在のタイムゾーンの表記法
サンピエール・エ・ミクロン島	NAST3NADT
サンマリノ	MET-1METDST
サントメ・プリンシペ	UCT
サウジアラビア	UCT-3
セネガル	UCT
セルビア	MET-1METDST
セイシェル	UCT-4
シエラレオネ	UCT
シンガポール	UCT-8
スロバキア	MET-1METDST
スロベニア	MET-1METDST
ソロモン諸島	UCT-11
ソマリア	UCT-3
南アフリカ	SAST-2
サウスジョージア島	UCT3
韓国	KST
スペイン	MET-1METDST
スペイン（カナリア諸島）	WET0WETDST
スリランカ	UCT-5:30
セントヘレナ	UCT
セントキッツ = ネイビス	UCT4
セントルシア	UCT4
セントビンセントおよびグレナディーン諸島	UCT4
スーダン	UCT-2
スリナム	UCT3
スワジランド	UCT-2
スウェーデン	MET-1METDST
スイス	MEZ-1MESZ

表 G-1 タイムゾーン（続き）

国	現在のタイムゾーンの表記法
シリア	SST-2SDT
タヒチ島	UCT10
台湾	UCT-8
タジキスタン	UCT-5
タンザニア	UCT-3
タイ	UCT-7
トーゴ	UCT
トンガ	UCT-13
トリニダード・トバゴ	TTST4
チュニジア	UCT-1
トルコ	EET-2EETDST
トルクメニスタン	UCT-5
タークス・カイコス諸島	EST5EDT
ツバル	UCT-12
ウガンダ	UCT-3
ウクライナ	EET-2EETDST
ウクライナ（シンフェロポリ）	EUT-3EUTDST
アラブ首長国連邦	UAEST-4
イギリス連合王国	GMT0BST
ウルグアイ	SAT3
米領ヴァージン諸島	UCT4
アメリカ合衆国（アラスカ）	NAST9NADT
アメリカ合衆国（アリューシャン列島）	AST10ADT
アメリカ合衆国（アリゾナ）	MST7
アメリカ合衆国（中部）	CST6CDT
アメリカ合衆国（東部）	EST5EDT
アメリカ合衆国（インディアナ）	EST5
アメリカ合衆国（山岳部）	MST7MDT

表 G-1 タイムゾーン（続き）

国	現在のタイムゾーンの表記法
アメリカ合衆国（太平洋）	PST8PDT
ウズベキスタン	UCT-5
バヌアツ	UCT-11
バチカン市国	MET-1METDST
ベネズエラ	UCT4
ベトナム	UCT-7
ウエーク島	UCT-12
ワリー・エ・フトゥーナ諸島	UCT-12
西サモア	UCT11
ウィンドワード諸島	UCT4
イエメン	UCT-3
ザイール（カサイ）	UCT-2
ザイール（キンシャサ）	UCT-1
ザンビア	UCT-2
ジンバブエ	UCT-2

Calendar のディレクトリ・サーバー・スキーマ の拡張機能

この付録では、Calendar Server の LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマの拡張機能について説明します。これは、サード・パーティのディレクトリ・サーバーを使用した、Oracle Calendar Server のスタンドアロン・インストールのみに適用されます。その他のディレクトリ・サーバー・スキーマの詳細は、使用しているディレクトリ・サーバーのドキュメントを参照してください。

- [オブジェクト・クラス拡張機能](#)
- [属性名のデフォルト・マッピング](#)

オブジェクト・クラス拡張機能

ディレクトリ・サーバー・スキーマのオブジェクト・クラス拡張機能は3つあります。各ディレクトリ・サーバー・エントリには、これらのうち1つのオブジェクト・クラスのインスタンスしか含めることができません。各クラスは、その他のクラスと相互に排他的な関係にあります。

表 H-1 Calendar Server のオブジェクト・クラス

オブジェクト・クラス	説明
ctCalUser	Calendar Server ユーザーのオブジェクト・クラス。Calendar Server ユーザー・エントリは、通常ディレクトリ・サーバーの既存のユーザー・エントリに追加されることに注意してください。
ctCalAdmin	Calendar Server の予約済ユーザーのオブジェクト・クラス。
ctCalResource	Calendar Server リソースのオブジェクト・クラス。

Calendar Server のオブジェクト・クラス

次の表は、それぞれ ctCalUser、ctCalAdmin および ctCalResource のオブジェクト・クラスを示しています。

Calendar Server の各オブジェクト・クラスは、そのクラスに固有の属性で構成されており、属性は上位クラスから継承されます。Calendar Server のオブジェクト・クラスに固有のすべての属性には、接頭辞 ctCal が使用され、大 / 小文字は区別されません。各属性の説明は、H-6 ページの「属性の定義」を参照してください。

ctCalUser オブジェクト・クラス

必須：

- objectClass

使用可：

- c
- ctCalAccess
- ctCalAccessDomain
- ctCalAdmd
- ctCalCountry
- ctCalDefaultNoteReminder
- ctCalDefaultReminder

- ctCalDefaultTaskReminder
- ctCalDisplayPrefs
- ctCalFlags
- ctCalHost
- ctCalLanguageId
- ctCalMobileTelephoneType
- ctCalNodeAlias
- ctCalNotifMechanism
- ctCalOperatingPrefs
- ctCalOrganization
- ctCalOrgUnit1
- ctCalOrgUnit2
- ctCalOrgUnit3
- ctCalOrgUnit4
- ctCalPasswordRequired
- ctCalPreferredSMSCTelephoneNumber
- ctCalPrmd
- ctCalPublishedType
- ctCalRefreshPrefs
- ctCalServerVersion
- ctCalSMSTimeRange
- ctCalSysopCanWritePassword
- ctCalTimezone
- ctCalXItemId
- employeeNumber
- generationQualifier
- givenName
- initials
- mail

- title
- uid

ctCalAdmin オブジェクト・クラス

必須：

- objectClass
- ctCalXItemId

使用可：

- c
- cn
- ctCalAccess
- ctCalAccessDomain
- ctCalAdmd
- ctCalCountry
- ctCalFlags
- ctCalHost
- ctCalLanguageId
- ctCalNodeAlias
- ctCalOrganization
- ctCalOrgUnit1
- ctCalOrgUnit2
- ctCalOrgUnit3
- ctCalOrgUnit4
- ctCalPasswordRequired
- ctCalPrmd
- ctCalServerVersion
- ctCalSysopCanWritePassword
- ctCalXItemId
- facsimileTelephoneNumber

- generationQualifier
- givenName
- initials
- mail
- o
- ou
- postalAddress
- sn
- telephoneNumber
- userPassword

ctCalResource オブジェクト・クラス

必須：

- objectClass
- cn

使用可：

- ctCalAccess
- ctCalAccessDomain
- ctCalDefaultNoteReminder
- ctCalDefaultReminder
- ctCalDefaultTaskReminder
- ctCalDisplayPrefs
- ctCalFlags
- ctCalHost
- ctCalLanguageId
- ctCalNodeAlias
- ctCalNotifMechanism
- ctCalOperatingPrefs
- ctCalPasswordRequired

- ctCalRefreshPrefs
- ctCalResourceCapacity
- ctCalResourceNumber
- ctCalServerVersion
- ctCalSysopCanWritePassword
- ctCalTimezone
- ctCalXItemId
- facsimileTelephoneNumber
- givenName
- mail
- postalAddress
- sn
- telephoneNumber
- userPassword

属性の定義

次の 2 つの表では、Calendar Server のオブジェクト・クラスに関連付けられているすべての属性について説明します。最初の表では、Calendar Server のオブジェクト・クラスに固有の属性、2 つ目の表では上位クラスから継承された属性について説明しています。継承された属性は、ディレクトリ・サーバーによって属性名が異なる場合があることに注意してください。

表 H-2 ctCal* 属性の定義

属性	説明
ctCalAccess	Calendar Server ユーザーのアクセスを許可または拒否する。
ctCalAccessDomain	Calendar Server ユーザーが独自の Calendar Server のデータにアクセスできる、インターネット・ドメインまたは IP。将来的に使用可。
ctCalAdmd	X.400 管理ドメイン名 (A)。
ctCalCountry	国。現在は使用されていません。
ctCalDefaultNoteReminder	Type: 視覚、音声、メール、すべてまたはなし。 Len: リマインダ・イベントまでの分数。

表 H-2 ctCal* 属性の定義（続き）

属性	説明
ctCalDefaultReminder	Type: 視覚、音声、メール、すべてまたはなし。 Len: リマインダ・イベントまでの分数。
ctCalDefaultTaskReminder	Type: 視覚、音声、メール、すべてまたはなし。 Len: リマインダ・イベントまでの分数。
ctCalDisplayPrefs	表示設定。 StartDay: 日表示の開始時間（分）。EndDay: 日表示の終了時間（分）。WeekStart: 週の最初の曜日（通常日曜日または月曜日）。TimeIncrement: 表示の時間増分（分）。ActiveDays: 表示する曜日（例：平日のみ）。TimeFormat: 表示の時間書式（AM/PM または 24h）。
ctCalFlags	将来的に使用可。
ctCalHost	Calendar Server ユーザーのデータをホスティングするコンピュータの、ホスト名または IP アドレスを、ドット表記法で表したもの。
ctCalLanguageId	受信メール通知の優先言語。将来的に使用可。
ctCalNodeAlias	Calendar Server ユーザーのデータが格納されるノードの簡略名。
ctCalNotifMechanism	出席者への通知に使用するメカニズム（通常はメール）。
ctCalOperatingPrefs	操作作業環境。
ctCalOrganization	ユーザーの組織名。現在は使用されていません。この情報には o 属性が使用されます。
ctCalOrgUnit1	X.400 組織単位 1（OU1）。 ユーザーの組織名。現在は使用されていません。この情報には ou 属性が使用されます。
ctCalOrgUnit2	X.400 組織単位 2（OU2）。
ctCalOrgUnit3	X.400 組織単位 3（OU3）。
ctCalOrgUnit4	X.400 組織単位 4（OU4）。
ctCalPasswordRequired	ユーザーが独自の calend* データにアクセスする際にパスワードを入力する必要があるかどうか。
ctCalPrmd	X.400 プライベート管理ドメイン名（P）。
ctCalPublishedType	カレンダー・タイプ： 非公開、公開、イベント・カレンダー。

表 H-2 ctCal* 属性の定義（続き）

属性	説明
ctCalRefreshPrefs	リフレッシュ設定。State: オン / オフ。Frequency: リフレッシュの間隔（分）。
ctCalResourceCapacity	リソース容量。
ctCalResourceNumber	リソースの識別番号。
ctCalServerVersion	ユーザーのデータをホスティングする Calendar Server のバージョン番号。
ctCalSMSTimeRange	ユーザーが SMS メッセージの受信を希望しない時間の範囲。値は 1 日の時間（分単位）をコロンで区切って表されます。たとえば 9 PM ～ 9 AM は 1260:540 として表されます。
ctCalSysopCanWritePassword	Calendar Server の SYSOP がユーザーのパスワードを上書きできるかどうか。
ctCalTimezone	ユーザーの現在のタイムゾーン。
ctCalXItemId	Calendar Server ユーザーのデータが格納されるノードの識別番号、および Calendar Server ユーザーの項目の識別番号。
ctCalMobileTelephoneType	携帯電話のタイプ。
ctCalPreferredSMSCTelephone Number	優先 SMSC 電話番号。

表 H-3 継承される属性の定義

属性名	クラス	説明
c	N/A	国。
cn	person	管理者またはリソースの共通名。
employeeNumber	inetOrgPerson	ユーザーの従業員番号。
facsimileTelephoneNumber または fax	organizationalPerson	管理者またはリソースの FAX 番号。
generationQualifier または gq	N/A	世代修飾子。
givenName または gn	inetOrgPerson	ユーザーの名。リソースの場合は、連絡先の名です。
initials	inetOrgPerson	ユーザーのイニシャル。
mail または rfc822MailBox	inetOrgPerson	電子メールアドレス。
mobile	inetOrgPerson	携帯電話番号。
o	N/A	ユーザーの組織名。
ou	organizationalPerson	ユーザーの組織単位。
postalAddress	organizationalPerson	管理者またはリソースのメール・アドレス。
sn または surname	person	管理者またはリソースの姓。
telephoneNumber	person	管理者またはリソースの電話番号。
title	organizationalPerson	ユーザーの役職名。
uid	inetOrgPerson	ユーザー識別番号。
userPassword	person	管理者またはリソースがディレクトリ・サーバーにバインドする際のパスワード。

属性名のデフォルト・マッピング

独自のディレクトリ・サーバー・スキーマに適切にマッピングされるように、Calendar Server で使用される、特定の属性のデフォルト名を変更することができます。

これらの属性名は、\$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini ファイルに含まれている構成パラメータを使用して変更します。次の表では、これらのパラメータおよびそのデフォルト値を示します。

警告： attr_uid パラメータの値は、Oracle Internet Directory サーバーで SSO ログインに使用される属性を変更しないかぎり、変更しないでください。詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』の第 4 章「Oracle Calendar のディレクトリ・サーバー」を参照してください。

表 H-4 LDAP 属性名の構成パラメータ

構成パラメータ	デフォルト値
attr_accessdomain	"ctCalAccessDomain"
attr_access	"ctCalAccess"
attr_address	"postalAddress"
attr_admindomain	"ctCalAdmd"
attr_capacity	"ctCalResourceCapacity"
attr_commonname	"cn"
attr_country	" "
attr_defaultnotereminder	"ctCalDefaultNoteReminder"
attr_defaultreminder	"ctCalDefaultReminder"
attr_defaulttaskreminder	"ctCalDefaultTaskReminder"
attr_displayprefs	"ctCalDisplayPrefs"
attr_employeeid	"employeeNumber"
attr_fax	"facsimileTelephoneNumber"
attr_flags	"ctCalFlags"
attr_generation	"generationQualifier"
attr_givenname	"givenName"
attr_groupname	"cn"

表 H-4 LDAP 属性名の構成パラメータ（続き）

構成パラメータ	デフォルト値
attr_host	"ctCalHost"
attr_initials	"initials"
attr_jobtitle	"title"
attr_langid	"ctCalLanguageId"
attr_mail	"mail"
attr_member	"member"
attr_mobile	"mobile"
attr_mobiletype	"ctCalMobileTelephoneType"
attr_nodealias	"ctCalNodeAlias"
attr_notifmechanism	"ctCalNotifMechanism"
attr_objclass	"objectClass"
attr_operatingprefs	"ctCalOperatingPrefs"
attr_organization	""
attr_orgunit1	"ou"
attr_orgunit2	"ctCalOrgUnit2"
attr_orgunit3	"ctCalOrgUnit3"
attr_orgunit4	"ctCalOrgUnit4"
attr_passwordrequired	"ctCalPasswordRequired"
attr_password	"userPassword"
attr_phone	"telephoneNumber"
attr_privmdomain	"ctCalPrmd"
attr_publishedtype	"ctCalPublishedType"
attr_refreshprefs	"ctCalRefreshPrefs"
attr_resourcename	"cn"
attr_resourcenumber	"ctCalResourceNumber"
attr_serverversion	"ctCalServerVersion"
attr_smscpref	"ctCalPreferredSMSCTelephoneNumber"
attr_surname	"sn"

表 H-4 LDAP 属性名の構成パラメータ（続き）

構成パラメータ	デフォルト値
attr_sysopcanwritepassword	"ctCalSysopCanWritePassword"
attr_timezone	"ctCalTimezone"
attr_uid	"uid"
attr_uniquemember	"uniquemember"
attr_version	" "
attr_xitemid	"ctCalXItemId"

カレンダー・エラー・コード・カテゴリ

この付録では、Calendar Server のエラー・コードを調査する上で最初に参照すべき情報を提供します。ここでは、Oracle Calendar のクライアントまたはユーティリティの実行中に Oracle Calendar Server によって生成される、エラー・コードの各カテゴリに関連付けられた機能分野の概要を提供します。このリストにエラー・コードの特定のカテゴリが含まれていない場合や、提供されている情報では問題が解決されない場合は、オラクル社の Web サポート・サービスである MetaLink を使用してください。Oracle MetaLink では、技術知識のグローバル・リポジトリの検索、および既知の問題に関するバグ・データベースの問合せが行えます。また、必要な情報が得られない場合は、Technical Assistance Request (TAR) オンラインで登録、表示、アクセスおよび監視を行えます。

[0x101...] ERRLOG_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ロギング・システムでエラーが発生したことを示します。考えられる原因は、ログ・ディレクトリの権限が正しく設定されていないことです。

[0x110...] DAEMON_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、カレンダー・サービスまたはデーモンの開始処理時に、エラーが発生したことを示します。詳細は、サービスのログ・ファイルを確認してください。考えられる原因には次のようなものがあります。

- カーネル・パラメータが正しく構成されていない。
- 同時に開いているファイルが多すぎる。

[0x111...] STRUCT_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、カレンダー・バイナリ間の非互換性が存在することを示します。これらのエラー・コードは内部的に使用されるもので、通常は発行されません。このカテゴリ内のエラー・コードが検出された場合は、Oracle MetaLink を使用して、エラー・コードの定義を検索するか、Technical Assistance Request (TAR) オンラインに登録してください。

[0x112...] TRNSIG_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、操作が正常に完了し、例外が発生しなかったことを示します。これらのエラー・コードは、ユーザーによる正常なシャットダウンを示します。

[0x113...] NETWRK_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ネットワーク・エラーが発生したことを示します。考えられる原因には次のようなものがあります。

- ネットワークが停止しているか、ビジーである。
- ホスト名を解決できない。

[0x114...] SOCKET_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ソケット通信エラーが発生したことを示します。通常、これらのエラー・コードは、タイムアウト・エラーが返されるまで発行されません。このカテゴリ内のエラー・コードが検出された場合は、Oracle MetaLink を使用して、エラー・コードの定義を検索するか、Technical Assistance Request (TAR) オンラインに登録してください。

[0x115...] NETPAK_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ネットワーク上でのデータ送信の前後に、データのアセンブルおよび逆アセンブルを行っているときにエラーが発生したことを示します。このカテゴリ内のエラー・コードが検出された場合は、Oracle MetaLink を使用して、エラー・コードの定義を検索するか、Technical Assistance Request (TAR) オンラインに登録してください。

[0x116...] TRNUTL_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ネットワーク・トランザクションでエラーが発生したことを示します。考えられる原因は、シャットダウンまたはシステム障害により、接続がピアによってクローズされたことです。

[0x119...] TRNDESC_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ネットワーク・トランザクションでエラーが発生したことを示します。考えられる原因は、シャットダウンまたはシステム障害により、接続がピアによってクローズされたことです。

[0x11A...] TRNFORK_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ネットワーク・トランザクションでエラーが発生したことを示します。考えられる原因は、シャットダウンまたはシステム障害により、接続がピアによってクローズされたことです。

[0x11B...] TRNENTRY_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ネットワーク・トランザクションでエラーが発生したことを示します。考えられる原因は、シャットダウンまたはシステム障害により、接続がピアによってクローズされたことです。

[0x12F...] SNCAPI_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、同期ネットワーク接続 (SNC) サービスとのトランザクションでエラーが発生したことを示します。このカテゴリのエラー・コードが表示された場合は、SNC が有効で起動していることを確認してください。詳細は、snc.log ファイルを確認してください。

[0x130...] STREAM_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、データベース・ストリームでエラーが発生したことを示します。unidbfix -c を実行して、データベースが破損していないか確認してください。このカテゴリ内のエラー・コードが検出された場合は、Oracle MetaLink を使用して、エラー・コードの定義を検索するか、Technical Assistance Request (TAR) オンラインに登録してください。

[0x132...] UNIAPI_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、Calendar Server とカレンダー・クライアントまたはカレンダー・ユーティリティのアプリケーションの間でエラーが発生したことを示します。これらのエラー・コードは、最も発生頻度が高く、原因も様々です。

[0x134...] ENGRN_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、Calendar エンジン・サービスでトランザクション・エラーが発生したことを示します。考えられる原因は、ログオン中のユーザー数が、ログオン・ユーザーの許容数を越えたことです。

[0x135...] UDBFNC_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、データベースへのアクセス時に、Calendar エンジン・サービスでトランザクション・エラーが発生したことを示します。このカテゴリ内のエラー・コードが検出された場合は、Oracle MetaLink を使用して、エラー・コードの定義を検索するか、Technical Assistance Request (TAR) オンラインに登録してください。

[0x137...] CWSYS_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、コーポレート・ワイド・サービス (CWS) サービスでエラーが発生したことを示します。このカテゴリのエラー・コードが表示された場合は、CWS が有効で起動していることを確認してください。詳細は、cws.log ファイルを確認してください。

[0x138...] FILESERVICES_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ファイル操作でエラーが発生したことを示します。考えられる原因には次のようなものがあります。

- ファイルが存在しない。
- ファイルの権限が正しく設定されていない。

[0x13A...] UDBUTL_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、データベースへのアクセス時に、Calendar エンジン・サービスでトランザクション・エラーが発生したことを示します。このカテゴリ内のエラー・コードが検出された場合は、Oracle MetaLink を使用して、エラー・コードの定義を検索するか、Technical Assistance Request (TAR) オンラインに登録してください。

[0x13D...] LCKUTL_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、Calendar Lock Manager (CLM) サービスでエラーが発生したことを示します。詳細は、`lck.log` ファイルを確認してください。このカテゴリ内のエラー・コードが検出された場合は、Oracle MetaLink を使用して、エラー・コードの定義を検索するか、Technical Assistance Request (TAR) オンラインに登録してください。

[0x13E...] ENGMIS_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、Calendar エンジン・サービスでその他のエラーが発生したことを示します。このカテゴリ内のエラー・コードが検出された場合は、Oracle MetaLink を使用して、エラー・コードの定義を検索するか、Technical Assistance Request (TAR) オンラインに登録してください。

[0x142...] UNIUTL_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、Calendar Server のユーティリティでエラーが発生したことを示します。様々なユーティリティで、それぞれの実行時にログ・ファイルが作成され、更新されます。これらのログ・ファイルには自動的に名前が付けられます。詳細は、`<utility>.log` ファイルを確認してください。

[0x146...] UNISNC_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、同期ネットワーク接続 (SNC) サービスとのトランザクションでエラーが発生したことを示します。このカテゴリのエラー・コードが表示された場合は、SNC が有効で起動していることを確認してください。詳細は、`snc.log` ファイルを確認してください。

[0x149...] UNIRNC_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、サーバー間でのトランザクションでエラーが発生したことを示します。このカテゴリ内のエラー・コードが検出された場合は、Oracle MetaLink を使用して、エラー・コードの定義を検索するか、Technical Assistance Request (TAR) オンラインに登録してください。

[0x14C...] UNIMIS_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、Calendar Server のユーティリティでエラーが発生したことを示します。様々なユーティリティで、それぞれの実行時にログ・ファイルが作成され、更新されます。これらのログ・ファイルには自動的に名前が付けられます。詳細は、`<utility>.log` ファイルを確認してください。

[0x150...] LIST_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、カレンダー・リスト・データ構造でエラーが発生したことを示します。このカテゴリ内のエラー・コードが検出された場合は、Oracle MetaLink を使用して、エラー・コードの定義を検索するか、Technical Assistance Request (TAR) オンラインに登録してください。

[0x151...] LDSTR_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、メッセージ文字列のロード中にエラーが発生したことを示します。

[0x152...] PROFIL_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、カレンダー構成ファイルへのアクセス時にエラーが発生したことを示します。

[0x153...] CODE_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、記数法（2 進法、16 進法など）の変換中にエラーが発生したことを示します。

[0x154...] VERSION_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、カレンダーのバイナリ・バージョン間で競合が存在することを示します。このカテゴリ内のエラー・コードが検出された場合は、Oracle MetaLink を使用して、エラー・コードの定義を検索するか、Technical Assistance Request (TAR) オンラインに登録してください。

[0x156...] DATE_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、日付の処理および計算中にエラーが発生したことを示します。これらのエラー・コードは内部的に使用されるもので、通常は発行されません。このカテゴリ内のエラー・コードが検出された場合は、Oracle MetaLink を使用して、エラー・コードの定義を検索するか、Technical Assistance Request (TAR) オンラインに登録してください。

[0x157...] TIMEZONE_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ユーザーのタイムゾーンの処理中にエラーが発生したことを示します。考えられる原因は、`timezone.ini` ファイルが破損したことです。

[0x159...] CKSUM_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは内部的に使用されるもので、通常は発行されません。

[0x15A...] PAGE_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、印刷出力のフォーマット中にエラーが発生したことを示します。

[0x15B...] NLS_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、文字列を1つのキャラクタ・セット・タイプから別のキャラクタ・セット・タイプに変換するときに、National Language Support (NLS) でエラーが発生したことを示します。

[0x15C...] TIME_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、時間の処理および計算中にエラーが発生したことを示します。これらのエラー・コードは内部的に使用されるもので、通常は発行されません。このカテゴリ内のエラー・コードが検出された場合は、Oracle MetaLink を使用して、エラー・コードの定義を検索するか、Technical Assistance Request (TAR) オンラインに登録してください。

[0x15D...] TIMEF_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、時間書式の処理中にエラーが発生したことを示します。

[0x15E...] FORMAT_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、データのフォーマット中にエラーが発生したことを示します。

[0x15F...] LTIMEF_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ローカル・タイム値のフォーマット中にエラーが発生したことを示します。

[0x160...] DATEF_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、日付値のフォーマット中にエラーが発生したことを示します。

[0x161...] LTIME_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ローカル・タイム値の処理中にエラーが発生したことを示します。

[0x163...] LOCSTO_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ローカル・デスクトップのカレンダー・データベースでの作業中に、エラーが発生したことを示します。

[0x165...] UNICOM_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、Calendar Server の共通ライブラリでエラーが発生したことを示します。考えられる原因は、インストール処理時に何かが正しく構成されなかったことです。

[0x166...] UNISTATS_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、Calendar Server のユーザー・セッションでの CPU 使用量、ユーザー待機時間およびネットワーク通信量の追跡処理で、エラーが発生したことを示します。詳細は、unistats.log ファイルを確認してください。

[0x167...] NDX_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、索引システムの使用中にエラーが発生したことを示します。

[0x168...] UNIMISC_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、Calendar Server のユーティリティでエラーが発生したことを示します。様々なユーティリティで、それぞれの実行時にログ・ファイルが作成され、更新されます。これらのログ・ファイルには自動的に名前が付けられます。詳細は、<utility>.log ファイルを確認してください。

[0x170...] SMTP_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、SMTP サーバーでエラーが発生したことを示します。通常、これらのエラー・コードは電子メール通知の実行時に発行されます。

[0x173...] CSTMAPI_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、MAPI サーバーでエラーが発生したことを示します。

[0x174...] CTDAAPI_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ディレクトリ・アクセス・サーバー (DAS) サービスとのトランザクションでエラーが発生したことを示します。詳細は、das.log ファイルを確認してください。

[0x175...] CTDAS_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは内部的に使用されるもので、通常は発行されません。

[0x176...] VCAL_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、vCalendar データのインポートまたはエクスポート中に、エラーが発生したことを示します。

[0x177...] CTDAC_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ディレクトリ・アクセス・サービス (DAS) サーバーでエラーが発生したことを示します。通常、これらのエラー・コードは、同期ネットワーク接続 (SNC) サービスによって発行されます。

[0x180...] CTLDAP_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ディレクトリ・サーバーとのトランザクションでエラーが発生したことを示します。

[0x181...] UNIAPI_2_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、Calendar Server とカレンダー・クライアントまたはカレンダー・ユーティリティのアプリケーションの間でエラーが発生したことを示します。これらのエラー・コードは、最も発生頻度が高く、原因も様々です。

[0x182...] DSSTATS_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ディレクトリ・サーバー (LDAP) トランザクションの統計収集処理で、エラーが発生したことを示します。詳細は、dsstats.log ファイルを確認してください。

[0x183...] CTL_UNICODE_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ワイド・キャラクタ UNICODE のサポートでエラーが発生したことを示します。

[0x185...] CTL_VLIB_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、iCalendar、vCalendar または vCard のデータのインポートまたはエクスポート中に、エラーが発生したことを示します。

[0x187...] TZLIST_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、タイムゾーン値の計算中にエラーが発生したことを示します。考えられる原因は、timezone.ini ファイルが破損したことです。

[0x18A...] CTL_CHARMAP_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、文字マッピング処理でエラーが発生したことを示します。

[0x18B...] CTUTF8_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、UTF8 キャラクタ・セットへのデータのエンコード時にエラーが発生したことを示します。

[0x18C...] CTL_ENCODE_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、Quoted-Printable などのデータ・エンコード処理中にエラーが発生したことを示します。

[0x18D...] CTL_VCARD_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、vCard データのインポートまたはエクスポート中に、エラーが発生したことを示します。

[0x18F...] UNIMMIMP_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、MeetingMaker からのデータの移行時にエラーが発生したことを示します。

[0x190...] UNILOGONS_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、unilogons ユーティリティでエラーが発生したことを示します。

[0x192...] EXTSTR_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ExtString モジュールの使用中にエラーが発生したことを示します。

[0x193...] CTL_ICAL_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、iCalendar データのインポートまたはエクスポート中に、エラーが発生したことを示します。

[0x194...] CTL_ITIP_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、iTip プロトコルでエラーが発生したことを示します。

[0x195...] CTL_CAPI_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、Calendar SDK ライブラリでエラーが発生したことを示します。

[0x197...] CTL_MIME_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、MIME でカプセル化されたデータの処理または生成中に、エラーが発生したことを示します。

[0x198...] CTL_CAPIC_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、Calendar SDK ライブラリでエラーが発生したことを示します。

[0x19B...] CTL_UNICAL_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、iCalendar データのインポートまたはエクスポート中に、エラーが発生したことを示します。

[0x19C...] SV_LIBINIT_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、共有ライブラリの初期化中にエラーが発生したことを示します。

[0x19D...] SV_MTX_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、mutex での作業中にエラーが発生したことを示します。

[0x19E...] SV_SHM_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、共有メモリでの作業中にエラーが発生したことを示します。

[0x19F...] SV_SPL_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、共有メモリ・プールでの作業中にエラーが発生したことを示します。

[0x1A0...] SV_EPT_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、プロセス間通信の試行中にエラーが発生したことを示します。

[0x1A1...] ABTEST_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、オンライン・アドレス帳機能でエラーが発生したことを示します。

[0x1A2...] SV_EVT_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、スレッドの同期化中にエラーが発生したことを示します。

[0x1A3...] SV_SHL_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、共有ライブラリのロード中にエラーが発生したことを示します。

[0x1A4...] CTL_UNICLX_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、iCalendar データのインポートまたはエクスポート中に、エラーが発生したことを示します。

[0x1A5...] CSTSYS_SLIB_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、共有ライブラリまたは DLL のロードおよび処理中に、エラーが発生したことを示します。

[0x1A6...] ACE_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、認証、圧縮および暗号化（ACE）フレームワークでエラーが発生したことを示します。

[0x1A7...] AOS_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、文字配列データ構造でエラーが発生したことを示します。これらのエラー・コードは内部的に使用されるもので、通常は発行されません。このカテゴリ内のエラー・コードが検出された場合は、Oracle MetaLink を使用して、エラー・コードの定義を検索するか、Technical Assistance Request（TAR）オンラインに登録してください。

[0x1A9...] CORETOOLS_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、電子メール・アドレスまたは電話番号の解析中に、エラーが発生したことを示します。

[0x1AA...] BLL_CONNECTION_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、Calendar Server への接続中にエラーが発生したことを示します。

[0x1AC...] NDX2_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、索引システムの使用中にエラーが発生したことを示します。

[0x1AD...] CADM_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、Calendar Administrator でエラーが発生したことを示します。

[0x1AE...] UNIPASSWDRM_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、unipasswdrm ユーティリティでエラーが発生したことを示します。

[0x1B0...] CRYPTO_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、crypto 機能でエラーが発生したことを示します。

[0x1B1...] UNICONVITEM_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、uniconvitem ユーティリティでエラーが発生したことを示します。

[0x1B2...] GT_ADTHASH_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ハッシュ・テーブル・コードでエラーが発生したことを示します。このカテゴリ内のエラー・コードが検出された場合は、Oracle MetaLink を使用して、エラー・コードの定義を検索するか、Technical Assistance Request (TAR) オンラインに登録してください。

[0x1B3...] VATTR_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、iCalendar データまたは vCard データの処理中に、エラーが発生したことを示します。

[0x1B4...] AUTL_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、属性リスト・ユーティリティ機能の使用中にエラーが発生したことを示します。

[0x1B5...] IUTL_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、iCalendar ユーティリティ機能の使用中にエラーが発生したことを示します。

[0x1B6...] TRN_WAIT_POSTED_ID

このカテゴリのエラー・コードは、トランザクション・ライブラリでエラーが発生したことを示します。このカテゴリ内のエラー・コードが検出された場合は、Oracle MetaLink を使用して、エラー・コードの定義を検索するか、Technical Assistance Request (TAR) オンラインに登録してください。

[0x1B7...] GT_PROFILE_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、カレンダー構成ファイルへのアクセス時にエラーが発生したことを示します。考えられる原因には次のようなものがあります。

- ファイルが存在しない。
- ファイルの権限が正しく設定されていない。
- ファイルが破損している。
- 必須セクションが見つからない。
- パラメータが正しく設定されていない。

[0x1B8...] SAPPI_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、カレンダー・データの処理中にエラーが発生したことを示します。

[0x1B9...] GT_LOG_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ロギング・システムでエラーが発生したことを示します。考えられる原因は、ログ・ディレクトリの権限が正しく設定されていないことです。

[0x1BA...] ACEGSSAPI_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、GSSAPI によるカレンダー認証でエラーが発生したことを示します。

[0x1BB...] UTILITY_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、Calendar Server のユーティリティでエラーが発生したことを示します。様々なユーティリティで、それぞれの実行時にログ・ファイルが作成され、更新されます。これらのログ・ファイルには自動的に名前が付けられます。詳細は、<utility>.log ファイルを確認してください。

[0x1BC...] APP_CMDLINE_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、コマンドライン引数の解析時に、Calendar Server のユーティリティでエラーが発生したことを示します。考えられる原因は、構文が不正であることです。

[0x1BD...] GT_FILESTORE_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、ファイル操作の実行中にエラーが発生したことを示します。

[0x1BE...] CADM_2_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、Calendar Administrator でエラーが発生したことを示します。

[0x1BF...] GT_TIME_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、時間の処理および計算中にエラーが発生したことを示します。

[0x200...] LST_ABFIELDID_ERR

このカテゴリのエラー・コードは、オフラインのアドレス帳にアクセスしようとして、エラーが発生したことを示します。

[0x400...] UNIADM_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、カレンダー管理ライブラリでエラーが発生したことを示します。

[0x402...] ADM_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、カレンダー管理ライブラリでエラーが発生したことを示します。

[0x403...] ENGPUB_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、Calendar エンジンでエラーが発生したことを示します。

[0x404...] AUTHCHALLENGE_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、要求されたタイプの認証の処理時に、Calendar Server でエラーが発生したことを示します。

[0x420...] CSMAPI_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、Calendar Server Manager デーモンでエラーが発生したことを示します。このカテゴリ内のエラー・コードが検出された場合は、Oracle MetaLink を使用して、エラー・コードの定義を検索するか、Technical Assistance Request (TAR) オンラインに登録してください。

[0x500...] SIS_SYNCERR_ID

このカテゴリ内のエラー・コードは、オペレーティング・システム実装による違いを抽出するカレンダー独立ライブラリによってエラーが発生したことを示します。例としてファイル・アクセス、IPC リソース、ソケット実装、プロセッシングおよびスレッディングなどがあります。

[0x501...] SIS_SHAREDMEMERR_ID

このカテゴリ内のエラー・コードは、オペレーティング・システム実装による違いを抽出するカレンダー独立ライブラリによってエラーが発生したことを示します。例としてファイル・アクセス、IPC リソース、ソケット実装、プロセッシングおよびスレッディングなどがあります。

[0x502...] SIS_INITERR_ID

このカテゴリ内のエラー・コードは、オペレーティング・システム実装による違いを抽出するカレンダー独立ライブラリによってエラーが発生したことを示します。例としてファイル・アクセス、IPC リソース、ソケット実装、プロセッシングおよびスレッディングなどがあります。

[0x503...] SIS_THREADERR_ID

このカテゴリ内のエラー・コードは、オペレーティング・システム実装による違いを抽出するカレンダー独立ライブラリによってエラーが発生したことを示します。例としてファイル・アクセス、IPC リソース、ソケット実装、プロセッシングおよびスレディングなどがあります。

[0x504...] SIS_SIGERR_ID

このカテゴリ内のエラー・コードは、オペレーティング・システム実装による違いを抽出するカレンダー独立ライブラリによってエラーが発生したことを示します。例としてファイル・アクセス、IPC リソース、ソケット実装、プロセッシングおよびスレディングなどがあります。

[0x505...] SIS_ERRERR_ID

このカテゴリ内のエラー・コードは、オペレーティング・システム実装による違いを抽出するカレンダー独立ライブラリによってエラーが発生したことを示します。例としてファイル・アクセス、IPC リソース、ソケット実装、プロセッシングおよびスレディングなどがあります。

[0x506...] SIS_USERINFOERR_ID

このカテゴリ内のエラー・コードは、オペレーティング・システム実装による違いを抽出するカレンダー独立ライブラリによってエラーが発生したことを示します。例としてファイル・アクセス、IPC リソース、ソケット実装、プロセッシングおよびスレディングなどがあります。

[0x507...] SIS_TASKERR_ID

このカテゴリ内のエラー・コードは、オペレーティング・システム実装による違いを抽出するカレンダー独立ライブラリによってエラーが発生したことを示します。例としてファイル・アクセス、IPC リソース、ソケット実装、プロセッシングおよびスレディングなどがあります。

[0x508...] SIS_NETERR_ID

このカテゴリ内のエラー・コードは、オペレーティング・システム実装による違いを抽出するカレンダー独立ライブラリによってエラーが発生したことを示します。例としてファイル・アクセス、IPC リソース、ソケット実装、プロセッシングおよびスレディングなどがあります。

[0x509...] SIS_SOCKETERR_ID

このカテゴリ内のエラー・コードは、オペレーティング・システム実装による違いを抽出するカレンダー独立ライブラリによってエラーが発生したことを示します。例としてファイル・アクセス、IPC リソース、ソケット実装、プロセッシングおよびスレディングなどがあります。

[0x50A...] SIS_WAITERR_ID

このカテゴリ内のエラー・コードは、オペレーティング・システム実装による違いを抽出するカレンダー独立ライブラリによってエラーが発生したことを示します。例としてファイル・アクセス、IPC リソース、ソケット実装、プロセッシングおよびスレッディングなどがあります。

[0x50B...] SIS_SERVERERR_ID

このカテゴリ内のエラー・コードは、オペレーティング・システム実装による違いを抽出するカレンダー独立ライブラリによってエラーが発生したことを示します。例としてファイル・アクセス、IPC リソース、ソケット実装、プロセッシングおよびスレッディングなどがあります。

[0x50C...] SIS_MEMERR_ID

このカテゴリ内のエラー・コードは、オペレーティング・システム実装による違いを抽出するカレンダー独立ライブラリによってエラーが発生したことを示します。例としてファイル・アクセス、IPC リソース、ソケット実装、プロセッシングおよびスレッディングなどがあります。

[0x50D...] SIS_FILEERR_ID

このカテゴリ内のエラー・コードは、オペレーティング・システム実装による違いを抽出するカレンダー独立ライブラリによってエラーが発生したことを示します。例としてファイル・アクセス、IPC リソース、ソケット実装、プロセッシングおよびスレッディングなどがあります。

[0x50E...] SIS_TERMERR_ID

このカテゴリ内のエラー・コードは、オペレーティング・システム実装による違いを抽出するカレンダー独立ライブラリによってエラーが発生したことを示します。例としてファイル・アクセス、IPC リソース、ソケット実装、プロセッシングおよびスレッディングなどがあります。

[0x50F...] SIS_PROCESSERR_ID

このカテゴリ内のエラー・コードは、オペレーティング・システム実装による違いを抽出するカレンダー独立ライブラリによってエラーが発生したことを示します。例としてファイル・アクセス、IPC リソース、ソケット実装、プロセッシングおよびスレッディングなどがあります。

[0x510...] SIS_CRTErr_ID

このカテゴリ内のエラー・コードは、オペレーティング・システム実装による違いを抽出するカレンダー独立ライブラリによってエラーが発生したことを示します。例としてファイル・アクセス、IPC リソース、ソケット実装、プロセッシングおよびスレッディングなどがあります。

[0x000...] CWSYS2_ERR_ID

このカテゴリのエラー・コードは、コーポレート・ワイド・サービス (CWS) デーモンでエラーが発生したことを示します。このカテゴリのエラー・コードが表示された場合は、CWS が有効で起動していることを確認してください。詳細は、`cws.log` ファイルを確認してください。

Calendar Server エラー・コード

この付録では、Oracle Calendar のいずれかのクライアントまたはユーティリティの実行時に、Oracle Calendar Server によって生成されるサーバー・エラーのうち、最も頻繁に発生するエラーについて説明します。リストには、各エラー・コードのエラー・コード ID、エラー名、考えられる原因の説明、および推奨される処置が含まれています。このリストに特定のエラー・コードが含まれていない場合や、提供されている情報では問題が解決されない場合は、オラクル社の Web サポート・サービスである **MetaLink** を使用してください。Oracle **MetaLink** では、技術知識のグローバル・リポジトリの検索、および既知の問題に関するバグ・データベースの問合せが行えます。また、必要な情報が得られない場合は、**Technical Assistance Request (TAR)** オンラインで登録、表示、アクセスおよび監視を行います。

0x10043: DBMISC_SYS_ERR

原因: unison.dbd ファイルを開けないため、unib2lendian が失敗しました。

処置: unison.dbd ファイルが存在し、権限が正しく設定されていることを確認してください。

0x10049: DBMISC_BAD_PROFILE_SECTION_ERR

原因: 指定されたノード ID が unison.ini ファイルの [YOURNODEID] セクションにないため、unib2lendian が失敗しました。

処置: [YOURNODEID] セクションが存在し、unison.ini ファイルで正しく設定されていることを確認してください。

0x10102: ERRLOG_ALREADYENABLED_ERR

原因: ロギング・システムはすでに有効になっていたため、ロギング・システムの有効化に失敗しました。

処置: クライアント側の unison.ini ファイルで [DXSCHED] errlog = FALSE を指定することでロギング・システムを無効にし、クライアントを再起動してください。

0x11201: TRNSIG_TERM_ERR

原因: Calendar Server は正常にシャットダウンされ、例外は発生しませんでした。

処置: 処置は必要ありません。

0x11302: NETWRK_BADHOST_ERR

原因: 指定されたホスト名が見つからないか無効であるため、ユーティリティが失敗しました。

処置: 構文を修正し、コマンドを再試行します。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x1130B: NETWRK_CONNECT_ERR

原因: クライアントまたはユーティリティが、指定された Calendar Server に接続できません。

処置: Calendar Server が実行されていることを確認してください。実行されていない場合は、Calendar Server を再起動してください。

0x11402: SOCKET_READ_ERR

原因： クライアントまたはリモート・ノード・サーバーがネットワークから切断されたか、その他のネットワーク・エラーが発生しました。

処置： クライアントを再起動します、もしくはリモート・ノードが自動的に再接続するまで待ちます。

0x11403: SOCKET_WRITE_ERR

原因： クライアントまたはリモート・ノード・サーバーがネットワークから切断されたか、その他のネットワーク・エラーが発生しました。

処置： クライアントを再起動します、もしくはリモート・ノードが自動的に再接続するまで待ちます。

0x11404: SOCKET_SELECT_ERR

原因： クライアントまたはリモート・ノード・サーバーがネットワークから切断されたか、その他のネットワーク・エラーが発生しました。

処置： クライアントを再起動します、もしくはリモート・ノードが自動的に再接続するまで待ちます。

0x11603: TRNUTL_ABORT_ERR

原因： ネットワーク・トランザクションの実行中に予期しない状況が発生したため、クライアントが処理を続行できません。

処置： クライアントを再起動してください。

0x1160F: TRNUTL_UNDFRSP_ERR

原因： クライアントまたはリモート・ノード・サーバーで、未定義の応答コードが検出されたか、その他のネットワーク・エラーが発生しました。

処置： クライアントを再起動します、もしくはリモート・ノードが自動的に再接続するまで待ちます。

0x11634: TRNUTL_AUTHINI_ERR

原因: 指定された [AUTHENTICATION | COMPRESSION | ENCRYPTION] default パラメータの値が、[AUTHENTICATION | COMPRESSION | ENCRYPTION] supported パラメータに含まれていません。

処置: 指定された [AUTHENTICATION | COMPRESSION | ENCRYPTION] default パラメータの値が、unison.ini ファイルの [AUTHENTICATION | COMPRESSION | ENCRYPTION] supported パラメータに含まれていることを確認してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x11905: TRNDESC_READ_ERR

原因: クライアントまたはリモート・ノード・サーバーがネットワークから切断されたか、その他のネットワーク・エラーが発生しました。

処置: クライアントを再起動します、もしくはリモート・ノードが自動的に再接続するまで待ちます。

0x11906: TRNDESC_WRITE_ERR

原因: クライアントまたはリモート・ノード・サーバーがネットワークから切断されたか、その他のネットワーク・エラーが発生しました。

処置: クライアントを再起動します、もしくはリモート・ノードが自動的に再接続するまで待ちます。

0x11909: TRNDESC_SELECT_ERR

原因: クライアントまたはリモート・ノード・サーバーがネットワークから切断されたか、その他のネットワーク・エラーが発生しました。

処置: クライアントを再起動します、もしくはリモート・ノードが自動的に再接続するまで待ちます。

0x1190C: TRNDESC_BIND_ERR

原因: Calendar Server が次に再起動されるときに、/users/unison/tmp ディレクトリに残存するトークン・ソケット・ファイルによって競合が発生します。

処置: /users/unison/tmp ディレクトリの .sck ファイルを削除し、サーバーを再起動してください。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x11910: TRNDESC_EOF_ERR

原因: クライアントまたはリモート・ノード・サーバーがネットワークから切断されたか、その他のネットワーク・エラーが発生しました。

処置: クライアントを再起動します、もしくはリモート・ノードが自動的に再接続するまで待ちます。

0x11913: TRNDSC_RECVTIMEOUT_ERR

原因: 応答を受信する前に、エンジンまたはディレクトリ・アクセス・サーバーがタイムアウトになりました。ネットワークまたはリモート・マシンがビジー状態か、ネットワークで別の問題が発生しています。

処置: クライアントを再起動します、もしくはリモート・ノードが自動的に再接続するまで待ちます。

0x13201: UNIAPI_CRITICAL_ERR

原因: [UTL] host パラメータの値が見つからないか、無効です。

処置: unison.ini ファイルで [UTL] host パラメータを正しく設定し、サーバーを再起動してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

原因: 認可者がイベント・カレンダーであるため、uniaccessright が失敗しました。

処置: 構文を修正し、コマンドを再試行します。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

原因: イベント・カレンダーをグループに添付しようとして失敗しました。

処置: 処置は必要ありません。現在は、イベント・カレンダーをグループに添付することはできないという内容の、適切なエラー・メッセージが返されます。

原因: 予期しない状況が発生したため、サーバーが処理を続行できません。考えられる原因には次のようなものがあります。

- データベースの破損、メモリの破損、ディスクのクラッシュ、およびその他のハードウェアの問題
- ディスク領域の不足

処置: 原因に応じて次の処置を行います。

- unidbbackup および unidbfix を実行する。
- UNIX カーネル・パラメータを修正し、サーバーに十分なリソースを割り当てる。

カーネル・パラメータの計算方法は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

警告：

- 使用する unidbfix のバージョンが、実行している Calendar Server のバージョンに同梱されていたものでない場合や、Calendar Server のバージョンと互換性がない場合は、データベースが破損する可能性があります。
- レベル 3 のシャットダウンは正常に行われることが保証されていますが、Calendar Server データベースが破損する可能性があります。

0x13203: UNIAPI_ISCLOSE_ERR

原因： クライアントのオンライン作業またはオフライン作業機能に不具合があります。

処置： この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x13204: UNIAPI_MODE_ERR

原因： クライアントまたはユーティリティが、互換性がない Calendar Server またはサポートされていない Calendar Server に接続しようとしています。

処置： Oracle Calendar Server のバージョンをアップグレードしてください。

0x13205: UNIAPI_ITEMKEY_ERR

原因： 指定された項目が見つかりませんでした。考えられる理由には次のようなものがあります。

- データベースの破損
- Calendar Server とディレクトリ・サーバー、またはディレクトリ・サーバーに複製されていないデータとの間の非一貫性
- 現在では使用されていないデータ

処置： 原因に応じて次の処置を行います。

- unidbfix を実行する。
- unidsdiff および unidssync を実行し、Calendar Server とディレクトリ・サーバーを強制的に同期させる。
- 関連するすべてのデータが複製されるまで待機し、操作を繰り返す。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x13209: UNIAPI_SECURITY_ERR

原因: Calendar Server の ADMIN グループ OID に含まれるアクセス制御情報 (ACI) が正しく設定されていないため、ユーティリティが失敗しました。

処置: `unidsacissetup` を実行し、ADMIN グループの ACI が正しく設定されていることを確認してください。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x1320A: UNIAPI_PASSWD_ERR

原因: クライアントのオフライン予定表ファイル位置修正機能に、不具合があります。

処置: この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x1320F: UNIAPI_OPCODE_ERR

原因: クライアントのアドレス帳機能に不具合があります。

処置: この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x13214: UNIAPI_RESERVEDITEM_ERR

原因: クライアントのオフライン機能に不具合があります。

処置: この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x1321A: UNIAPI_EVENTKEY_ERR

原因: クライアントのオフライン予定表ファイルが破損している可能性があります。

処置: クライアント側の `unison.ini` ファイル、およびシステムのオフライン予定表ファイルを削除してください。

Windows: オフライン予定表ファイル [`xtmlocal.dat`、`xtmlocal.ndx`、`xtmparam.ini`、`xtmtzone.ini`]

Macintosh: オフライン予定表ファイル [CorporateTime Index、CorporateTime Data、CorporateTime Params、CorporateTime Timezones]

Motif: オフライン予定表ファイル [OfflineData、OfflineIndex、OfflineParameters、OfflineTimezones]

警告:

- クライアント側の `unison.ini` ファイルには、構成パラメータが含まれています。`unison.ini` ファイルを削除すると、独自の接続名を含む、一部のユーザー設定およびユーザー設定項目が失われます。
- オフライン予定表ファイルを削除すると、公開されていないアドレス帳がすべて削除されます。オフライン予定表ファイルを削除する前にアドレス帳をすべて公開します。

0x13220: UNIAPI_NOATTENDEE_ERR

原因: クライアントの、グループ予定表表示のコピー / 貼付け機能に不具合があります。

処置: この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x13226: UNIAPI_STREAMKEY_ERR

原因: クライアントのオフライン予定表ファイルが破損している可能性があります。

処置: オフライン予定表ファイルをシステムから削除します。

Windows: オフライン予定表ファイル [`xtmlocal.dat`、`xtmlocal.ndx`、`xtmparam.ini`、`xtmtzone.ini`]

Macintosh: オフライン予定表ファイル [`CorporateTime Index`、`CorporateTime Data`、`CorporateTime Params`、`CorporateTime Timezones`]

Motif: オフライン予定表ファイル [`OfflineData`、`OfflineIndex`、`OfflineParameters`、`OfflineTimezones`]

警告: オフライン予定表ファイルを削除すると、公開されていないアドレス帳がすべて削除されます。オフライン予定表ファイルを削除する前にアドレス帳をすべて公開します。

0x13228: UNIAPI_NODEID_ERR

原因: `unirmold -n` 引数が見つからないか、無効です。

処置: 構文を修正し、コマンドを再試行します。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x1322E: UNIAPI_STARTENDTIME_ERR

原因: クライアントのインポート、エクスポートまたは印刷の機能では、日付の範囲を指定する際に不具合が生じます。

処置: この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x13233: UNIAPI_INSTANCEDATA_ERR

原因: クライアントの繰返し会議の作成および編集機能に不具合があります。

処置: この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x13236: UNIAPI_NOSTREAM_ERR

原因: クライアントのオフライン予定表ファイルが破損している可能性があります。

処置: オフライン予定表ファイルをシステムから削除します。

Windows: オフライン予定表ファイル [xtmlocal.dat、xtmlocal.ndx、xtmparam.ini、xtmtzone.ini]

Macintosh: オフライン予定表ファイル [CorporateTime Index、CorporateTime Data、CorporateTime Params、CorporateTime Timezones]

Motif: オフライン予定表ファイル [OfflineData、OfflineIndex、OfflineParameters、OfflineTimezones]

警告: オフライン予定表ファイルを削除すると、公開されていないアドレス帳がすべて削除されます。オフライン予定表ファイルを削除する前にアドレス帳をすべて公開します。

0x13244: UNIAPI_RESOURCECANT_ERR

原因: クライアントに、リソースのログイン機能の不具合があります。

処置: この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x1324A: UNIAPI_MULTIPLENODEID_ERR

原因: ノードが停止しているため、SNC デーモン / サービスを起動できません。

処置: すべてのノードが起動していることを確認し、サーバーを再起動してください。

0x1325E: UNIAPI_TASKDATA_ERR

原因： クライアントでタスクを作成または編集する際、指定する日付の範囲に不具合が生じます。

処置： この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x13260: UNIAPI_INVALIDLICENSE_ERR

原因： Oracle Calendar Server のライセンスが期限切れです。

処置： 有効な Oracle Calendar Server のライセンスを取得してください。

0x13267: UNIAPI_SECURITYDATA_ERR

原因： クライアントで、他のユーザーに対する代理アクセス権を設定する際に不具合が生じます。

処置： この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x13271: UNIAPI_NOTSUPPORTED_ERR

原因： このクライアントは、使用している Oracle Calendar Server のバージョンと互換性がありません。

処置： Oracle Calendar Server のバージョンをアップグレードしてください。

0x132A9: UNIAPI_RNCFAILED_ERR

原因： リモート・ノードに接続しようとして、エンジンまたは同期ネットワーク接続で予期しない状況が発生しました。

処置： Oracle MetaLink を使用してエラー・コードの定義を検索するか、Technical Assistance Request (TAR) オンラインに登録してください。

0x132AE: UNIAPI_RNCTIMEOUT_ERR

原因： タイムアウトになる前に、エンジンまたは同期ネットワーク接続からの応答がありませんでした。マシンまたはネットワークがビジー状態か、ネットワークで別の問題が発生しています。

処置： Calendar Server が自動的に再接続します。このエラーが日常的に発生する場合は、unison.ini ファイルで指定したタイムアウト値を大きくする必要があります。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x132BE: UNIAPI_SIGNONCONFIGURED_ERR

原因: unidasd デーモン / サービスが停止しているか、正しく構成されていないため、ディレクトリ・アクセス・サーバーに接続できません。

処置: unison.ini ファイルで [DAS] enable = TRUE のように、unidasd デーモン / サービスが有効化されていることを確認してください。すでに有効化されている場合は、snc.log ファイルおよび das.log ファイルで詳細を確認してください。

0x132C0: UNIAPI_RNCDEADSOCKET_ERR

原因: クライアントまたはリモート・ノード・サーバーがネットワークから切断されたか、その他のネットワーク・エラーが発生しました。

処置: クライアントを再起動します、もしくはリモート・ノードが自動的に再接続するまで待ちます。

0x132D2: UNIAPI_ABENTRYKEY_ERR

原因: クライアントのオフライン・アドレス帳が破損している可能性があります。

処置: オフライン予定表ファイルをシステムから削除します。

Windows: オフライン予定表ファイル [xtmlocal.dat、xtmlocal.ndx、xtmparam.ini、xtmtzone.ini]

Macintosh: オフライン予定表ファイル [CorporateTime Index、CorporateTime Data、CorporateTime Params、CorporateTime Timezones]

Motif: オフライン予定表ファイル [OfflineData、OfflineIndex、OfflineParameters、OfflineTimezones]

警告: オフライン予定表ファイルを削除すると、公開されていないアドレス帳がすべて削除されます。オフライン予定表ファイルを削除する前にアドレス帳をすべて公開します。

0x132D5: UNIAPI_DACFAILED_ERR

原因: ディレクトリ・アクセス・サーバー・デーモンで、予期しない状況が発生しました。

処置: Oracle MetaLink を使用してエラー・コードの定義を検索し、それでも問題が解決しない場合は、Technical Assistance Request (TAR) オンラインに登録してください。

0x132D6: UNIAPI_DIRECTORYID_ERR

原因: 指定されたディレクトリ ID が見つかりませんでした。考えられる理由には次のようなものがあります。

- データベースの破損
- Calendar Server とディレクトリ・サーバー、またはディレクトリ・サーバーに複製されていないデータとの間の非一貫性
- 現在では使用されていないデータ

処置: 原因に応じて次の処置を行います。

- unidbfix を実行する。
- unidsdiff および unidssync を実行し、Calendar Server とディレクトリ・サーバーを強制的に同期させる。
- 関連するすべてのデータが複製されるまで待機し、操作を繰り返す。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x132D7: UNIAPI_DASDISABLED_ERR

原因: ディレクトリ・アクセス・サーバー (DAS) が停止しているか、Calendar Server が内部ディレクトリを使用するように構成されているため、unidssearch が失敗しました。

処置: Calendar Server が LDAP ディレクトリ・サーバーに接続するように構成されており、unidasd デーモン / サービスが実行されていることを確認してください。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x132FD: UNIAPI_CHARSET_ERR

原因: [ENG] utf8_autoconvert パラメータが FALSE に設定されています。

処置: unison.ini ファイルで [ENG] utf8_autoconvert パラメータを TRUE に設定してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x132FF: UNIAPI_STREAMOFFSET_ERR

原因: クライアント上で、特定の値の保存時にストリームのオフセットとして渡された値が、正しく初期化されていません。

処置: このエラーは内部で使用されます。処置は必要ありません。

0x13586: UDBFNC_DBOPEN_ERR

原因: [ENG] utf8_autoconvert パラメータが FALSE に設定されています。

処置: unison.ini ファイルで [ENG] utf8_autoconvert パラメータを TRUE に設定してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x1360C: UNIAPI_HOSTNAMETOOLONG_ERR

原因: クライアントの不具合により、「接続設定の編集」ダイアログで指定されたサーバー名が、定義された最大長を超過しています。

処置: 処置は必要ありません。ほとんどの状況下で、クライアントまたはユーティリティはこのエラーに対してメッセージを返します。

0x1360D: UNIAPI_BAPTRNOTNULL_ERR

原因: ItemAllocate() が NULL (デフォルト項目) を受け取ったため、EventCalendar で問題が発生しました。

処置: このエラーは内部で使用されます。処置は必要ありません。

0x1361F: UNIAPI_BAPTRBAD_ERR

原因: クライアントのログイン機能の不具合により、認証用の Kerberos チケットを受け取る前に、クライアントがログインを試みています。考えられる原因の 1 つは、サーバーと PC 間の時間を同期させるためにネットワーク上で使用しているソフトウェアです。

処置: この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x13631: UNIAPI_BADHOSTNAME_ERR

原因: クライアントの不具合により、「接続設定の編集」ダイアログで、サーバー名のかわりに IP アドレスを指定できません。

処置: この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x13646: UNIAPI_BUFFERSIZE_ERR

原因: クライアントの不具合により、固定長文字列バッファが短すぎるため、リソース名を保持できません。

処置: この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x13678: UNIAPI_NOTCURRENTENOUGH_ERR

原因: クライアントの不具合により、クライアントの最新バージョンをインストールした後で、古いバージョンを再インストールできません。オフライン予定表ファイルには、下位互換性がありません。

処置: この問題を解決するには、クライアント側の `unison.ini` ファイル、およびシステムのオフライン予定表ファイルを削除する必要があります。

警告:

- クライアント側の `unison.ini` ファイルには、構成パラメータが含まれています。`unison.ini` ファイルを削除すると、独自の接続名を含む、一部のユーザー設定およびユーザー設定項目が失われます。
- オフライン予定表ファイルを削除すると、公開されていないアドレス帳がすべて削除されます。オフライン予定表ファイルを削除する前にアドレス帳をすべて公開します。

0x13688: UNIAPI_NULLPTR_ERR

原因: クライアントで無効なユーザー名を指定すると、ログイン機能に不具合が生じます。

処置: 処置は必要ありません。ほとんどの状況下で、クライアントまたはユーティリティはこのエラーに対してメッセージを返します。

0x136B8: CAL_CLIENTCRITICAL_ERR

原因: クライアントの予定表検索機能に不具合があります。

処置: この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x13AB1: UDBUTL_DBVISTA_ERR

原因: Calendar Server が次に再起動されるときに、`/users/unison/tmp` ディレクトリに残存するトークン・ソケット・ファイルによって競合が発生します。

処置: `/users/unison/tmp` ディレクトリの `.sck` ファイルを削除し、サーバーを再起動してください。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x13ADE: UDBUTL_INTERNAL_RAIMA_ERR

原因: `[ENG] utf8_autoconvert` パラメータが `FALSE` に設定されています。

処置: `unison.ini` ファイルで `[ENG] utf8_autoconvert` パラメータを `TRUE` に設定してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x15020: LL_EOL

原因： クライアントのエントリ検索機能の不具合により、一部のイベントの参照が正しく管理されません。つまり、共有データでイベントが参照される表示を持つことで、そのイベントを参照させている場合に、受信トレイにあるイベントが共有データで参照されます。受信トレイにあるだけでは、一部のイベントが正しく参照されない可能性があります。

処置： この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x15021: CANTLOCK_ListFind

原因： クライアントの作業環境変更機能の不具合により、Netscape Navigator を使用して作業環境ページを開くと JavaScript エラーが発生し、Microsoft Internet Explorer を使用するとページがロードされません。

処置： この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x15022: CANT_LOCK_ListGetValue

原因： クライアントの予定表検索機能に不具合があります。

処置： この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x15025: CANT_LOCK_ListGetFirst

原因： 変数が正しく初期化されていません。

処置： このエラーは内部で使用されます。処置は必要ありません。

0x15090: LL_NOTFOUND

原因： クライアント側の unison.ini ファイルが破損している可能性があります。

処置： クライアント側の unison.ini ファイルを、システムから削除してください。

警告： クライアント側の unison.ini ファイルには、構成パラメータが含まれています。unison.ini ファイルを削除すると、独自の接続名を含む、一部のユーザー設定およびユーザー設定項目が失われます。

0x15201: PROFIL_CANTOPEN_ERR

原因: unison.ini ファイルを開けないため、unistart が失敗しました。

処置: unison.ini ファイルが存在し、権限が正しく設定されていることを確認してください。

0x15202: PROFIL_SECNOTFOUND_ERR

原因: unison.ini ファイルの1つのセクションが見つかりません。

処置: 処置は必要ありません。パラメータのセクションが構成ファイルから省略された場合、各パラメータの指定デフォルト値が使用されます。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x15203: PROFIL_KEYNOTFOUND_ERR

原因: unison.ini ファイルの一部のパラメータが見つからないため、unistart が失敗しました。

処置: unison.ini ファイルに必要なパラメータが含まれていることを確認してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x15204: PROFIL_SIGNEDFOUND_ERR

原因: 使用可能な値が正の整数であるパラメータ値に、マイナス記号が含まれているため、unistart が失敗しました。

処置: 示されたパラメータ値を unison.ini ファイルで正しく設定し、サーバーを再起動してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x15205: PROFIL_NONDIGITFOUND_ERR

原因: 使用可能な値が正の整数であるパラメータ値に、英数字が含まれているため、unistart が失敗しました。

処置: 示されたパラメータ値を unison.ini ファイルで正しく設定し、サーバーを再起動してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x15206: PROFIL_NUMTOOBIG_ERR

原因: パラメータの値が許容される最大値を超過したため、unistart が失敗しました。

処置: unison.ini ファイルでパラメータを正しく設定し、サーバーを再起動してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x15207: PROFIL_BADBOOL_ERR

原因: [ENG] AutoAcceptResource パラメータの値が見つからないか、無効です。

処置: unison.ini ファイルで [ENG] AutoAcceptResource パラメータを正しく設定し、サーバーを再起動してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x15209: PROFIL_QUOTE_ERR

原因: パラメータの値に引用符が含まれていないため、unistart が失敗しました。

処置: 示されたパラメータ値を unison.ini ファイルで正しく設定し、サーバーを再起動してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x1520F: PROFIL_DUPLICATESECTION_ERR

原因: unison.ini ファイルでセクションが重複して指定されているため、unistart が失敗しました。

処置: unison.ini ファイルで各セクションが 1 度だけ指定されていることを確認してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x15210: PROFIL_DUPLICATEKEY_ERR

原因: unison.ini ファイルのあるセクションで、パラメータが重複して指定されているため、unistart が失敗しました。

処置: unison.ini ファイルのセクションで、各パラメータが 1 度だけ指定されていることを確認してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x15709: TZ_CANNOT_CONVERT_ERR

原因: timezone.ini ファイルで指定される begin1 パラメータまたは end1 パラメータ、あるいはその両方が見つからないか、無効であるため、unitzinfo が失敗しました。

処置: timezone.ini ファイルが変更されていないことを確認してください。このファイルが破損している場合、サーバーへのクライアント接続が拒否され、エラーが返されます。この措置が取られるのは、データベースの破損を防ぐためです。

0x15710: TZ_INVALID_TIMEZONE_ERR

原因: [YOURNODEID] timezone パラメータの値が無効であるか、見つかりません。

処置: unison.ini ファイルで [YOURNODEID] timezone パラメータを正しく設定してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x16327: UNIAPI_LSINVALIDHEADER_ERR

原因: クライアントのオフライン予定表ファイルが破損している可能性があります。

処置: オフライン予定表ファイルをシステムから削除します。

Windows: オフライン予定表ファイル [xtmlocal.dat、xtmlocal.ndx、xtmparam.ini、xtmtzone.ini]

Macintosh: オフライン予定表ファイル [CorporateTime Index、CorporateTime Data、CorporateTime Params、CorporateTime Timezones]

Motif: オフライン予定表ファイル [OfflineData、OfflineIndex、OfflineParameters、OfflineTimezones]

警告: オフライン予定表ファイルを削除すると、公開されていないアドレス帳がすべて削除されます。オフライン予定表ファイルを削除する前にアドレス帳をすべて公開します。

0x16344: LST_CONTACTCATEGORYKEY_ERR

原因: クライアントのオフライン・アドレス帳が破損している可能性があります。

処置: オフライン予定表ファイルをシステムから削除します。

Windows: オフライン予定表ファイル [xtmlocal.dat、xtmlocal.ndx、xtmparam.ini、xtmtzone.ini]

Macintosh: オフライン予定表ファイル [CorporateTime Index、CorporateTime Data、CorporateTime Params、CorporateTime Timezones]

Motif: オフライン予定表ファイル [OfflineData、OfflineIndex、OfflineParameters、OfflineTimezones]

警告: オフライン予定表ファイルを削除すると、公開されていないアドレス帳がすべて削除されます。オフライン予定表ファイルを削除する前にアドレス帳をすべて公開します。

0x16502: UNICOM_NULLPTR_ERR

原因: [SYS] sys_owner パラメータまたは [SYS] sys_group パラメータ、もしくはその両方の値が無効です。

処置: [SYS] sys_owner パラメータまたは [SYS] sys_group パラメータ、もしくはその両方を、unison.ini ファイルで正しく設定してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x1650F: UNICOM_INVALIDPORTS_ERR

原因: [ENG] port パラメータが無効であるか、見つかりません。

処置: unison.ini ファイルで [ENG] port パラメータを正しく設定してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x16510: UNICOM_KEYWORD_VALIDATION_ERR

原因: 示された [LCK] lck_users パラメータは現在使用されていないため、unistart が失敗しました。

処置: unison.ini ファイルで [LCK] lck_users パラメータのかわりに [ENG] maxsessions パラメータを設定し、サーバーを再起動してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x16601: STAT_CANTOPENFILE_ERR

原因: stats.log ファイルを開けないため、unistart が失敗しました。

処置: stats.log ファイルが存在し、権限が正しく設定されていることを確認してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x16602: STAT_CHARAFTER_WILDCARD_ERR

原因: ワイルド・カード記号「*」の後に文字が指定されているため、unistats が失敗しました。ワイルド・カード記号の後には文字を指定できません。

処置: ワイルド・カード記号「*」の後に文字が指定されていないことを確認してください。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x16603: STAT_CLIENTNOTVALID_ERR

原因: unistats -client 引数が見つからないか、無効です。

処置: 構文を修正し、コマンドを再試行します。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x16604: STAT_DUPLICATEENTRY_ERR

原因: unistats ユーティリティで、オプションが重複して指定されています。

処置: 構文を修正し、コマンドを再試行します。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x16605: STAT_EMPTYFILE_ERR

原因: stats.log ファイルが空であるため、unistart が失敗しました。

処置: stats.log ファイルが存在し、空でないことを確認してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x16606: STAT_ENDISEARLIER_ERR

原因: 指定された開始時間より終了時間の方が早い場合、unistats が失敗しました。

処置: 構文を修正し、コマンドを再試行します。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x16608: STAT_ENDNOTVALID_ERR

原因: `unistats -e` 引数が見つからないか、無効です。

処置: 構文を修正し、コマンドを再試行します。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x16610: STAT_RESNOTVALID_ERR

原因: `unistats -res` 引数が見つからないか、無効です。

処置: 構文を修正し、コマンドを再試行します。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x16611: STAT_SERVERNOTVALID_ERR

原因: `unistats -server` 引数が見つからないか、無効です。

処置: 構文を修正し、コマンドを再試行します。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x16612: STAT_STARTISLATTER_ERR

原因: 指定された開始時間がシステムの現在の時間より遅いため、`unistats` が失敗しました。

処置: 構文を修正し、コマンドを再試行します。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x16613: STAT_STARTNOTVALID_ERR

原因: `unistats -s` 引数が見つからないか、無効です。

処置: 構文を修正し、コマンドを再試行します。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x16615: STAT_UNKOWNARG_ERR

原因: unistats ユーティリティで、無効なオプションが指定されています。

処置: 構文を修正し、コマンドを再試行します。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x16616: STAT_USERNOTVALID_ERR

原因: unistats -user 引数が見つからないか、無効です。

処置: 構文を修正し、コマンドを再試行します。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x16617: STAT_USER_RES_ERR

原因: 相互に排他的である -user オプションと -res オプションが同時に指定されているため、unistats が失敗しました。

処置: 構文を修正し、コマンドを再試行します。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x1660C: STAT_NODEIDNOTVALID_ERR

原因: unistats -n 引数が見つからないか、無効です。

処置: 構文を修正し、コマンドを再試行します。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x16801: UNIMISC_USAGE_ERR

原因: unimvuser ユーティリティで、無効なオプションが指定されているか、欠落しているオプションがあります。

処置: 構文を修正し、コマンドを再試行します。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x1680F: UNIMISC_BUFFERLEN_ERR

原因: 文字列の長さが定義された最大値を超過しているか、割り当てられた最小値に達していません。

処置: 処置は必要ありません。ほとんどの状況下で、クライアントまたはユーティリティはこのエラーに対してメッセージを返します。

0x17401: CTDAAPI_CRITICAL_ERR

原因: ディレクトリ・アクセス・サーバーが CTLDAP_CRITICAL_ERR を受信しました。考えられる理由には次のようなものがあります。

- ディレクトリ・サーバーへの接続を確立できないか、ディレクトリ・サーバーが停止している。
- LDAP v2 しかサポートしていないディレクトリ・サーバーに対する LDAP v3 のコール。
- Calendar Server のスキーマの拡張機能が、ディレクトリ・サーバーに適用されていない。
- オブジェクト・クラス違反または類似する問題が、ディレクトリ・サーバーで発生した。

処置: 原因に応じて次の処置を行います。

- ディレクトリ・サーバーが起動しており、正常に機能していることを確認する。
- Calendar Server のスキーマの拡張機能をディレクトリ・サーバーに再度適用する。

0x18001: CTLDAP_CRITICAL_ERR

原因: unidsacisetaup ユーティリティで、無効なオプションが指定されています。

処置: 構文を修正し、コマンドを再試行します。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x1800E: CTLDAP_NOXITEMID_ERR

原因: ディレクトリ・サーバー内のユーザーまたはリソースがカレンダー・ユーザーとして登録されていますが、ctcalxitemid 属性を持ちません。

処置: unidsdiff ユーティリティおよびunidssync ユーティリティを実行し、ディレクトリ・サーバーと Calendar Server を強制的に同期させてください。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x18111: UNIAPI_DB_READONLY_ERR

原因: カレンダ・データベースが、読取り専用指定されています。考えられる理由には次のようなものがあります。

- オンライン・バックアップが進行中である。
- unisnapshot が実行中で、統計収集が行われている。

処置: 待機し、後で操作をやり直してください。

0x18118: UNIAPI_KEYNOTFOUND_ERR

原因: ユーザーが USERID を持たない場合や USERID が一意でない場合、クライアントの自動ログイン機能に不具合が生じます。

処置: この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x1812B: UNIAPI_TOOMANYINSTANCES_ERR

原因: [LIMITS] maxrecur パラメータおよび [ENG] maxinstances パラメータが見つからないか、設定に一貫性がありません。パラメータの設定が低すぎるのが原因とも考えられます。

処置: unison.ini ファイルで、[LIMITS] maxrecur パラメータ（クライアント側）および [ENG] maxinstances パラメータ（サーバー側）を設定してください。これらのパラメータは常に同じ値に設定し、すべてのクライアントで一貫性を保つようにしてください。この措置を行っても問題が解決されない場合、パラメータの設定が低すぎる可能性があります。この問題を解決するには、これらのパラメータに指定されている値を大きくする必要があります。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x1812D: UNIAPI_DUPINSTANCETIME_ERR

原因: 繰返し会議、繰返しメモまたは繰返し終日イベントのインスタンスを重複して作成しようとする、クライアントのイベント・エディタに不具合が生じます。イベントの作成を続行する前に、時間が重複していないことを確認するための検証を実行する必要があります。

処置: 処置は必要ありません。ほとんどの状況下で、クライアントまたはユーティリティはこのエラーに対してメッセージを返します。

0x1814B: CAL_CANTBOOKATTENDEE_ERR

原因: [LIMITS] resourceconflict パラメータおよび [ENG] allowresourceconflict パラメータが見つからないか、設定に一貫性がありません。

処置: unison.ini ファイルで、[LIMITS] resourceconflict パラメータ（クライアント側）および [ENG] allowresourceconflict パラメータ（サーバー側）を設定してください。これらのパラメータには、常に同じ値を設定する必要があります。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x18163: CAL_ITIP_ATTRINVALID_ERR _CAL_TaskGetById

原因: icalendar データ属性が無効であるため、uniical インポートが失敗しました。

処置: icalendar データ属性の構文を修正し、コマンドを再試行してください。

0x18179: CAL_DIR_DUPLICATEKEY_ERR _CAL_AttrListListCopy

原因:すでにディレクトリ・サーバーに存在するリソースを作成しようとしたため、リソースの作成に失敗しました。

処置: 作成するリソースに対して別の名前を指定してください。

0x1819B: _CAL_AttrTypeRefCountInc

原因: 繰返し会議のインスタンスへの出席を依頼できないはずのユーザーを追加しようとした場合に、クライアントの不具合により例外処理が行われません。

処置: この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x1802B: CTLDAP_NOTOWNER_ERR

原因: ノードを追加しようとしたのですが、同じホスト上の別の Calendar Server によって、このノードがすでに所有されているため、失敗しました。

処置: 作成するノードに対して別の名前を指定してください。

0x18A03: CHARMAP_DEFAULT_ERR

原因: 選択または構成されたキャラクタ・セットが、Calendar Server でサポートされていません。

処置: [LOCALE] charset パラメータで指定されている、サポートされるキャラクタ・セットのリストから、キャラクタ・セットを選択してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x18F02: IMP_CANTOPENFILE_ERR

原因: MeetingMaker からのデータの移行に必要なファイルを開けないため、unimmimpsrv が失敗しました。

処置: 必要なファイルが存在し、権限が正しく設定されていることを確認してください。

0x19103: RNS_ERR_COMMAND_LINE

原因: リモート・ノード情報を更新するノードのノード ID が見つからないか、無効であるため、unirnsynch が失敗しました。

処置: 構文を修正し、コマンドを再試行します。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用方法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x19C01: SV_LIBINIT_NOT_INITIALISED

原因: クライアントのオフライン予定表変換機能の不具合により、shiva ライブラリが正しく初期化されず、複数のプロセスが同じ LST ファイル・セットにアクセスすることを防止できません。

処置: この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x1A503: SL_NOTFOUND_ERR

原因: Calendar Server が LDAP クライアント・ライブラリを正しくロードできません。

処置: この問題を解決するには、次の手順に従います。

1. unison.ini ファイルを編集します。
2. 次のパラメータを指定された値に変更します。

[LDAP]

ldaplibname = /users/unison/bin/libldap.so

lberlibname = /users/unison/bin/liblber.so

3. uniaddnode ユーティリティを実行します。Calendar Server によって、LDAP ライブラリが正しくロードされます。

0x1A608: ACE_ERR_BAD_PASSWORD_FORMAT

原因: [ACE_PLUGINS_CLIENT] web_CAL_sharedkey パラメータまたは [ACE_PLUGINS_SERVER] web_CAL_sharedkey パラメータ、もしくはその両方の値が無効です。

処置: [ACE_PLUGINS_CLIENT] web_CAL_sharedkey パラメータまたは [ACE_PLUGINS_SERVER] web_CAL_sharedkey パラメータ、もしくはその両方を、unison.ini ファイルで正しく設定してください。

Calendar Server の構成に使用できるパラメータの設定の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x1B005: GT_CRYPTO_UNKNOWN_METHOD_ERR

原因: 指定された暗号化方式が見つからないか、無効であるため、uniencrypt が失敗しました。

処置: 構文を修正し、コマンドを再試行します。

Oracle Calendar Server に同梱されている全ユーティリティの使用法および構文の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

0x1B702: GT_PROFILE_CRYPT_ERR

原因: 暗号化された空のパスワードを設定しようとして失敗しました。

処置: 暗号化の対象として、空でないパスワードを指定してください。

0x50603: SIS_USERINFOERR_GETUSERNAME

原因: クライアントのログイン機能の不具合により、ctsis.dll がオペレーティング・システムに対して現在のユーザーの名前を要求します。しかし、オペレーティング・システムでは現在のユーザーの名前が識別されません。

処置: この制限の解決を提供する、より新しいリリースのクライアントにアップグレードします。

0x50802: SIS_NETERR_HOSTNOTFOUND

原因: クライアントでは、「接続設定の編集」ダイアログで無効なサーバー名を指定すると、検索機能に不具合が生じます。

処置: 処置は必要ありません。ほとんどの状況下で、クライアントまたはユーティリティはこのエラーに対してメッセージを返します。

0x50805: SIS_NETERR_NODATA

原因：「接続設定の編集」ダイアログでサーバー名が指定されていない場合、クライアントの検索機能に不具合が生じます。

処置：処置は必要ありません。ほとんどの状況下で、クライアントまたはユーティリティはこのエラーに対してメッセージを返します。

0x50909: SIS_SOCKETERR_SEND

原因：クライアントまたはリモート・ノード・サーバーがネットワークから切断されたか、その他のネットワーク・エラーが発生しました。

処置：クライアントを再起動します、もしくはリモート・ノードが自動的に再接続するまで待ちます。

0x50B09: SIS_SERVERERR_SERVERNOTSTARTED

原因：Calendar Lock Manager の起動中に予期しないエラーが発生したため、unistart が失敗しました。

処置：Oracle MetaLink を使用してエラー・コードの定義を検索し、それでも問題が解決しない場合は、Technical Assistance Request (TAR) オンラインに登録してください。

索引

A

ACE フレームワーク

パラメータ, C-147, C-150, C-153, C-155

C

Calendar Administrator

構成パラメータ, 「パラメータ」を参照

Calendar Administrator パラメータ

accepttemppages [ADMIN], D-4

dataretrievingblocksize [ADMIN], D-6

sessionsdir [ADMIN], D-6

showssolink [ADMIN], D-4, D-5

templatedirs [ADMIN], D-7

web_attribute_name [ACE_PLUGINS_CLIENT],

D-2

web_attribute_type [ACE_PLUGINS_CLIENT],

D-3

web_CAL_sharedkey [ACE_PLUGINS_CLIENT],

D-3

Calendar Server

インストールのサイズ, F-178

起動, F-188

構成パラメータ, 「パラメータ」を参照

サーバー管理権限の付与, F-16

サーバー動作の制御, C-17

スキーマ拡張機能, H-1

ステータス, F-200

停止, F-205

ディレクトリ・サーバーとの相互作用の制御, C-79

同期ネットワーク接続の統計, F-185

バージョン, F-234

Calendar Server のアーカイブ, F-25, F-74

Calendar Server のインストールのサイズ, F-178

Calendar Server の起動, F-188

Calendar Server の停止, F-205

ctCalAdmin オブジェクト・クラス, H-2, H-4

ctCalResource オブジェクト・クラス, H-2, H-5

ctCalUser オブジェクト・クラス, H-2

I

iCalendar

インポート, F-113

L

LDAP

Oracle Calendar Server でのサポート, vii

O

ocad.ini, 「パラメータ」を参照

ocal.conf, E-1

S

Sun クラスタ, C-17

U

unicmsd

自動起動, C-21

unicwsd

キューにある要求の表示, F-162

自動起動, C-21

unidasd

自動起動, C-23

unisncd, C-22
 自動起動, C-22
 統計, F-185
unison.ini, 「パラメータ」を参照
UTF-8, F-209

X

X.400 アドレス, A-11

あ

アクセス権, F-4
アクセス制御情報, ディレクトリ・サーバー, F-92
圧縮
 パラメータ, C-152, C-153, C-154
暗号化
 パラメータ, C-154, C-155, C-156

い

移動
 ユーザー, F-139
 ユーザー (複数を1回で), F-40, F-47, F-58
 ユーザーのコピー, F-40, F-53
 リソース (複数を1回で), F-40, F-47, F-58
 リソースのコピー, F-35, F-48
イベント・カレンダー
 イベント・カレンダー管理権限の付与, F-16
 削除, F-215
 追加, F-215
 リスト作成, F-215
インターネット標準, C-18

え

エンディアンのユーティリティ, F-27, F-124

お

オブジェクト・クラス
 ctCalAdmin, H-4
 ctCalResource, H-5
 ctCalUser, H-2
 属性の定義, H-6
 属性名のデフォルト・マッピング, H-10
 ディレクトリ・サーバーの拡張機能, H-2

か

会議, 古いものを削除, F-169
ガイドライン
 ディレクトリ・サーバーへの接続, C-32
確認
 Calendar Server のバージョン, F-234
 ファイル・システム, F-31
管理
 グループ, F-106
 ノード・ネットワーク, F-144
管理グループ, A-2
 管理, F-106
 作成権限の付与, E-21, F-16
 作成するデフォルトの権限, A-11
 デフォルト, A-11
管理権限, 管理, E-21, F-16

き

キャラクタ・セット
 ディレクトリ・サーバー, C-81
休日
 管理権限の付与, E-21, F-16

く

クライアント, vii
 オフライン記憶域, C-118
 サーバーへの接続の制御, C-147
 動作の制御, C-99
クラスタ, C-17
グループ
 管理, C-93, F-106
 作成権限の付与, E-21, F-16
 作成するデフォルトの権限, A-11
 デフォルト, パブリックおよび管理, A-11
グローバル・アドレス一覧, C-128

こ

コーボレート・ワイド・サービス
 要求キュー情報, F-162
コピー
 ユーザー・データ, F-40, F-53
 リソース・データ, F-35, F-48

さ

サインオン / サインオフ, 表示, F-127

作業環境

セキュリティ, A-10, B-7

通知, A-7

表示, A-6, B-5

ユーザー, A-2 ~ A-12, B-2 ~ B-8

リフレッシュ, A-7, B-6

リマインダ, A-7, B-6

削除

イベント・カレンダー, F-215

会議, 古い, F-169

コーポレート・ワイド・サービスの要求キューにある要求, F-162

タスク, 古い, F-169

ディレクトリ・サーバーと Calendar Server ノードの差異, F-94

ユーザー, F-215

ユーザー (移動後), F-40, F-46, F-57

リソース, F-215

リソース (移動後), F-40, F-46, F-57

し

書式

unicpr ファイル, F-59

unicpu ファイル, F-63

診断, 情報のコンパイル, F-182

す

ステータス

Calendar Server, F-200

ディレクトリ・サーバー, F-104

せ

セキュリティ

作業環境, A-10, B-7

そ

属性の定義, Calendar Server のオブジェクト・クラス, H-6

た

タイムゾーン

情報の表示, F-213

表, G-1 ~ G-11

ユーザー・プロファイル, A-2, B-2

ルール, C-72

代理

ユーザー・プロファイル内のリスト, A-2, B-2

タスク, 古いものを削除, F-169

ち

チェックサム, 生成, F-33

抽出

ログ・ファイルの情報, F-180

つ

追加

イベント・カレンダー, F-215

ユーザー, F-215

予定表を既存の予定表に, F-39, F-45

リソース, F-215

通知

作業環境, A-7

て

ディスク領域

unilogons の要件, F-132

ディレクトリ・サーバー

Calendar Server ノードとの差異, F-94

アクセス制御情報, F-92

キャラクタ・セット, C-81

構成, F-152

スキーマ拡張機能, H-1

ステータス, F-104

ノードとの差異, F-68

パラメータ, C-79

非カレンダー・ユーザーのリスト, F-97

データベース

管理, F-79

修復, F-79

チェック, F-79

デフラグ, F-79

変換, F-27, F-124

データベースの変換, F-27, F-124

デーモン

unicwsd, 要求の表示, F-162

unisnacd, C-22

unisnacd の統計, F-185

起動, F-188

停止, F-205

と

同期化

ディレクトリ・サーバー情報を持つノード, F-99

ノード・ネットワーク内のノード, F-176

同期クライアントの同期化, F-211

統計

Calendar Server 統計ファイルのサマリー, F-193

unisnacd, F-185

サインオン / サインオフの表示, F-127

ノード, F-191

に

authentication

パラメータ, C-149, C-150

の

ノード

再初期化, E-21, F-12

作成, E-21

追加, E-21, F-12

データベース, 変換, F-27, F-124

統計, F-191

ノード管理権限の付与, F-16

ノード・ネットワークでの同期化, F-176

レポートの作成, F-191

ノード・ネットワーク

管理, F-144, F-175

構成, F-144

ノード情報の同期化, F-176

ローカル情報の伝搬, F-176

ノード・ネットワークの構成, F-144

は

バージョン, Calendar Server の確認, F-234

はじめに

表記規則サンプル表, ix

パスワード

暗号化, F-105

エイジング, C-113

大 / 小文字の区別, C-110

変更, C-110, C-111, C-112, F-155

バックアップ, F-25, F-74

Calendar Server の TAR アーカイブ, F-25

コンテンツのリストア, F-88

パブリック・グループ, A-2

管理, F-106

作成権限の付与, E-21, F-16

作成するデフォルトの権限, A-11

デフォルト, A-11

パラメータ, A-2 ~ A-14, B-2 ~ B-9, C-2 ~ C-174,

D-2 ~ D-7, E-1 ~ E-73

about (ocwc.conf), E-37

accrights (ocwc.conf), E-38

ACE 設定 (ocas.conf), E-17

ACE 設定 (ocst.conf), E-57

ACE 設定 (ocwc.conf), E-53

ACE 設定 (ocws.conf), E-56

activity [ENG], C-39

ADA 切替えを非表示 (ocwc.conf), E-31

ADA の有効化 (ocwc.conf), E-30

admin [LDAP], C-87

admindefault [AUTHENTICATION], C-150

admindefault [COMPRESSION], C-153

admindefault [ENCRYPTION], C-156

admingroup [LDAP], C-87

agendaview [LIMITS], C-108

alert_instantmessaging [NOTIFY], C-121

alert_sms [NOTIFY], C-121

aliases [YOURNODEID], C-54

allowattachments [LIMITS], C-99

allowpasswordchange_eventcal [ENG], C-110

allowpasswordchange_reserved [ENG], C-111

allowpasswordchange_resource [ENG], C-111

allowpasswordchange_user [ENG], C-112

allowresourceconflict [ENG], C-106

allowsysoplogon_capi [ENG], C-75

allowsysoplogon_unicp [ENG], C-75

allowsysoplogon_uniical [ENG], C-74

application (ocas.conf), E-7

attendeesindetails (ocst.conf), E-63

attr_country [LDAP], C-83, H-10

- attr_generation [LDAP], C-84, H-10
- attr_givenname [LDAP], C-85, H-10
- attr_mail [LDAP], C-85, H-11
- attr_organization [LDAP], C-84, H-11
- attr_uid [LDAP], C-82, H-12
- attrpreservelist [LDAP], C-82
- authcache_cachesize [ENG], C-169
- authcache_expiredelay [ENG], C-169
- authcache_passwordsize [ENG], C-170
- authcache_stats [ENG], C-170
- autoacceptresource [ENG], C-106
- autocontrol [LIMITS], C-100
- autolog (ocwc.conf), E-27
- backup_timeout [UTL], C-50
- backupatonce [UTL], C-52
- ban_bot (ocwc.conf), E-45
- ban_left (ocwc.conf), E-45
- ban_top (ocwc.conf), E-45
- banner [CWS], C-69
- banner_prefix (ocwc.conf), E-24
- basedn [LDAP], C-88
- binddn [LDAP], C-90
- bindpwd [LDAP], C-91
- browser-path-win [WEBLINK], C-136
- ca_maxsearchresult [UTL], C-124
- caladmin [URL], C-135
- calendarhostname [ENG], C-17
- capi_storage [ENG], C-18
- cgi_prefix (ocwc.conf), E-21
- charset [LDAP], C-81
- charset (ocas.conf), E-8
- charset [UTL], C-53
- check_user_credentials (ocwc.conf), E-28
- checkreminderinterval [NOTIFY], C-30
- checksum [TIMEZONE], C-72
- chgpwd (ocwc.conf), E-38
- cleanuptime (ocas.conf), E-16
- coexist_cwsbasicauth [ENG], C-77
- coexist_unidentifiedsessions [ENG], C-78
- command-description-offline [WEBLINK], C-138
- command-description-online [WEBLINK], C-137
- command-name [WEBLINK], C-137
- connect_timeout [YOURHOSTNAME, unidas], C-33
- connection (ocas.conf), E-9
- cs-standard_coexistence [ACE_PLUGINS_SERVER], C-163

- dac_configerrlog [ENG], C-43
- dac_failederrlog [ENG], C-43
- dac_ignorederrlog [ENG], C-44
- dac_maxretry [ENG], C-33
- dac_miscerrlog [ENG], C-44
- datapoolchunk (ocas.conf), E-9
- db_files [DB], C-46
- db_pages [DB], C-46
- dbi_name [DBI], C-47
- dbversion [DBI], C-48
- default [AUTHENTICATION], C-150
- default [COMPRESSION], C-153
- default [ENCRYPTION], C-155
- default [TIMEZONE], C-71
- default_color_mgt_by (ocwc.conf), E-51
- default_dayview_mode (ocwc.conf), E-49
- default_view (ocwc.conf), E-49
- default_weekview_mode (ocwc.conf), E-50
- devices (ocst.conf), E-63
- dir_connectrecycletime [DAS], C-79
- dir_internal_nodes [ENG], C-55
- dir_updcallyonly [DAS], C-118
- dir_usewritednforadmin [DAS], C-119
- dirsynchronmigrate [CWS], C-30
- dirsynctime [CWS], C-29
- dispatchhttperror (ocas.conf), E-10
- dispatchstats (ocas.conf), E-10
- dispatchstatslog (ocas.conf), E-11
- dispatchtime (ocas.conf), E-11
- domain (ocwc.conf), E-52
- download_enable (ocwc.conf), E-42
- download-fail [WEBLINK], C-141
- download-mode [WEBLINK], C-138
- dsa [LDAP], C-79
- enable [CONFERENCING], C-142
- enable [CSM], C-21
- enable [CWS], C-21
- enable [DAS], C-23
- enable [RESOURCE_APPROVAL], C-107
- enable [SNC], C-22
- enable_autologin (ocwc.conf), E-40
- enable_designate (ocwc.conf), E-35
- enable_web_conferencing (ocwc.conf), E-36
- Ericsson (ocst.conf), E-69
- eventcalrelatedn [LDAP], C-89
- eventlevel (ocas.conf), E-12
- eventlog (ocas.conf), E-12

- eventrefreshintervals [ENG], C-133
- eventsearch_commentssearchlength [ENG], C-61
- eventsearch_maxlookthroughlimit [ENG], C-60
- eventselectbegin [OUTLOOK_CONNECTOR], C-127
- eventselectend [OUTLOOK_CONNECTOR], C-127
- eventsyncinterval [ENG], C-76
- evsearch_maxcount [ENG], C-60
- external_backup [UTL], C-49
- external_restore [UTL], C-50
- frameworkenable [ACE], C-147
- gal_enable [ENG], C-128
- gal_enableldapsearch [ENG], C-130
- gal_refreshinterval [ENG], C-129
- gal_view [ENG], C-129
- galsyncinterval [CWS], C-76
- global_prefix (ocwc.conf), E-21
- group_dlenable [LDAP], C-97
- group_dlfilter [LDAP], C-97
- group_dlsearchbase [LDAP], C-98
- group_enable [LDAP], C-93
- group_membersizelimit [LDAP], C-94
- group_searchbase [LDAP], C-98
- group_sizelimit [LDAP], C-95
- groupfilter [LDAP], C-92
- groupmemberlistattribute [LDAP], C-86
- groupviewmax [LIMITS], C-109
- help_prefix (ocwc.conf), E-23
- hide_dayview_toggle (ocwc.conf), E-50
- hide_eventcal (ocwc.conf), E-31
- hide_global (ocwc.conf), E-32
- hide_managegroups (ocwc.conf), E-33
- hide_show_unconfirmed (ocwc.conf), E-34
- hide_suggesttime (ocwc.conf), E-33
- hide_taskview (ocwc.conf), E-32
- hide_updateall (ocwc.conf), E-34
- hide_viewpub (ocwc.conf), E-35
- hide_weekview_toggle (ocwc.conf), E-50
- host [LDAP], C-80
- ignoreoldreminders [NOTIFY], C-31
- img_button_prefix (ocwc.conf), E-22
- img_enable (ocwc.conf), E-41
- img_prefix (ocwc.conf), E-22
- installtype [PRODUCT], C-16
- invalidlogin_countinterval [ENG], C-117
- invalidlogin_deactivationtime [ENG], C-117
- invalidlogin_enable [ENG], C-115

- invalidlogin_invalidcount [ENG], C-116
- itemcacherefreshrate, C-102
- itemuidmap [ENG], C-58
- keepresourceswincaldb [AUTHENTICATION], C-151
- language (ocas.conf), E-13
- languages (ocas.conf), E-19
- lck_dedicated [YOURNODEID], C-165
- left_ban_width (ocwc.conf), E-47
- limitremindercheck [NOTIFY], C-31
- linkdbencodefilename (ocas.conf), E-13
- linkdbstorebasepath (ocas.conf), E-14
- localcharset [ENG], C-40
- localnodes [YOURNODEID], C-109
- log_activity [CWS], C-41, C-42
- login_fail_timeout (ocwc.conf), E-29
- logout (ocwc.conf), E-36
- logout_docname (ocwc.conf), E-24
- mail [LIMITS], C-120
- mailfiledelete [CWS], C-65
- mailhdroriginatorfromuser [CWS], C-66
- mailhdrtoname [CWS], C-66
- masternode [CLUSTER], C-73
- max_addrlogons [ENG], C-168
- max_attach_file_size (ocwc.conf), E-43
- max_login_attempts (ocwc.conf), E-29
- max_login_attempts_url (ocwc.conf), E-25
- max_socket [SNC], C-34
- max_userlogons [ENG], C-167
- maxattachmentsize [LIMITS], C-99
- maxattende (ocws.conf), E-54
- maxattende (ocst.conf), E-62
- maxfavorites [LIMITS], C-134
- maxfavourite (ocwc.conf), E-25
- maxfolderentryperuser [QUOTA], C-132
- maxinstances [ENG], C-104
- maxmaildistr [LIMITS], C-122
- maxnodepertask [CWS], C-27
- maxnodesperlistener [LCK], C-164
- maxpasswordage [LIMITS], C-113
- maxpersabentries [LIMITS], C-132
- maxrecur [LIMITS], C-103
- maxremleadtime [LIMITS], C-105
- maxresults (ocws.conf), E-54
- maxsearchresult [LIMITS], C-123
- maxsessions [ENG], C-165
- maxsessionsfornode [ENG], C-166

maxsessionsfornode [YOURNODEID], C-167
maxtimepernode [CWS], C-26
maxwinopen [LIMITS], C-108
messaging_maxtime [CWS], C-26
messaging_waitonerror [CWS], C-27
mgrdn [LDAP], C-90
mimecontentcharset [CWS], C-67
mimecontentcharset_force [CWS], C-69
minbufsizetocompress [ACE], C-148
mincharsearch [LIMITS], C-123
mini_calendar (ocwc.conf), E-42
minrefreshrate [CLIENT], C-100
mobile_phone (ocwc.conf), E-26
mode [WEBLINK], C-134
modify_emailadd (ocwc.conf), E-41
multi-day-event [OUTLOOK_CONNECTOR],
C-128
name [PRODUCT], C-15
name [YOURNODEID], C-54
needsauthenticate [ENCRYPTION], C-155
Nokia 3650 (ocst.conf), E-66
Nokia 6800 (ocst.conf), E-67
Nokia 7650 (ocst.conf), E-65
Nokia 9210 (ocst.conf), E-64
Nokia 9290 (ocst.conf), E-65
Nokia Corporation V1.1 (ocst.conf), E-69
Nokia V1 (ocst.conf), E-67
Nokia V1.1 (ocst.conf), E-68
noreqsleep [CWS], C-24
noreqsleep_replication [CWS], C-25
numconnect [YOURHOSTNAME,unidas], C-32
numsessionsstoppedpersecond [ENG], C-168
oc_minidlerefreshrate [CLIENT], C-101
oc_minofflinerefreshrate [CLIENT], C-102
ocheckleventlog (ocas.conf), E-15
offlineab [LIMITS], C-131
offline-source-mac [WEBLINK], C-140
offline-source-version [WEBLINK], C-141
offline-source-win [WEBLINK], C-139
online-url [WEBLINK], C-139
Oracle SyncML (ocst.conf), E-73
page-backward [LIMITS], C-125
page-forward [LIMITS], C-125
paper_key (ocwc.conf), E-52
password [CSM], C-20
passwords [ENG], C-110
pdv_notes_top_task_bottom (ocwc.conf), E-51

plugins (ocas.conf), E-20
port [CSM], C-20
port [DAS], C-23
port [ENG], C-17
port [LDAP], C-81
port [SNC], C-22
portal [URL], C-136
prefs (ocwc.conf), E-37
prioritizedjobs [CWS], C-28
pubgroups [LIMITS], C-119
publishab [LIMITS], C-131
quickCreateEndTime (ocwc.conf), E-48
quickCreateStartTime (ocwc.conf), E-47
readlocktimeout [ENG], C-171
readmaxlocktime [ENG], C-172
realm (ocws.conf), E-55
remotemasternode [CLUSTER], C-73
remotemaxretry [LIMITS], C-174
remotewait [LIMITS], C-173
request_chunk_size [SNC], C-35
resourceconflicts [LIMITS], C-105
resourceemailmap [ENG], C-56
resourcerelatedn [LDAP], C-89
restore_timeout [UTL], C-51
rules [TIMEZONE], C-72
sec_left_banner (ocwc.conf), E-45
secure_login (ocwc.conf), E-30
secure-login [LIMITS], C-115
secure-port [LDAP], C-96
security [LDAP], C-96
securitycacherefreshrate [CLIENT], C-103
sendmailpath [CWS], C-63
serverlist_login (ocwc.conf), E-39
servicedefault [AUTHENTICATION], C-151
servicedefault [COMPRESSION], C-154
servicedefault [ENCRYPTION], C-156
sessionpath (ocas.conf), E-16
sessiontimeout (ocas.conf), E-15
settimezone [LIMITS], C-120
showicalvcal (ocwc.conf), E-40
showQCCompletion (ocwc.conf), E-48
signinmaxattempts [LIMITS], C-114
singlelst [LIMITS], C-118
siteauthkey [CONFERENCING], C-143
siteid [CONFERENCING], C-143
slibcachecount [ACE], C-147
sms [NOTIFY], C-122

smsc_phone (ocwc.conf), E-26
 smsignoreerror [CWS], C-71
 smsnotifyprogram [CWS], C-70
 smsnotifyprogramparam [CWS], C-70
 smtpmailhost [CWS], C-63
 smtpmailmaxcommandlinesize [CWS], C-65
 smtpmailmaxrecipients [CWS], C-64
 smtpmailpath [CWS], C-62
 smtpmailprogram [CWS], C-61
 snc_so_keepalive [SNC], C-39
 snc_so_rcvbuf [SNC], C-38
 snc_so_sndbuf [SNC], C-38
 snc_tr_block [SNC], C-36
 snc_tr_rcv_timeout [SNC], C-37
 snc_tr_send_timeout [SNC], C-37
 Sony Ericsson 2 (ocst.conf), E-71
 Sony Ericsson (ocst.conf), E-70
 Sony Ericsson P800 (ocst.conf), E-72
 ssignin [LIMITS], C-112
 ssigninrestrictions [LIMITS], C-113
 ssn_timeout (ocwc.conf), E-27
 sso_user_env_key (ocwc.conf), E-28
 sss_cacheexpiredelay [ENG], C-146
 sss_cachesize [ENG], C-146
 standalone (ocas.conf), E-14
 standards [ENG], C-18
 startupsleep [CWS], C-24
 stats [ENG], C-40
 style_sheet_prefix (ocwc.conf), E-23
 supported [AUTHENTICATION], C-149
 supported [COMPRESSION], C-152
 supported [ENCRYPTION], C-154
 syncrangeback (ocst.conf), E-58
 syncrangeforward (ocst.conf), E-59
 sys_owner [SYS], C-19
 timelimit [LDAP], C-95
 timezone [YOURNODEID], C-55
 tmp_attach_file_loc (ocwc.conf), E-44
 top_ban_height (ocwc.conf), E-47
 unidbfix_logfile [UTL], C-52
 unixmail [CWS], C-61
 unixmailprogram [CWS], C-62
 upload_enable (ocwc.conf), E-43
 url [CONFERENCING], C-144
 url [RESOURCE_APPROVAL], C-107
 userlist_login [LIMITS], C-114
 userlist_login (ocwc.conf), E-39

userlookthroughlimit [ENG], C-59
 usermailmap [ENG], C-56
 usermobilemap [ENG], C-57
 usermobiletypemap [ENG], C-57
 usersearchmaxreturn [ENG], C-59
 usersmsprefmap [ENG], C-58
 utf8_autoconvert [ENG], C-45
 utf8_onfailprintmesg [ENG], C-45
 version [PRODUCT], C-16
 version [YOURNODEID], C-48
 wait_sbh [SNC], C-35
 walletfile [CONFERENCING], C-144, C-145
 walletpassword [CONFERENCING], C-144, C-145
 wantattendanceintitle (ocst.conf), E-60
 wantcalendars (ocst.conf), E-58
 wantcontacts (ocst.conf), E-57
 wantlocationintitle (ocst.conf), E-61
 wantnoattendees (ocst.conf), E-62
 wantownershipintitle (ocst.conf), E-60
 wantrefusedentries (ocst.conf), E-59
 web_attribute_name [ACE_PLUGINS_CLIENT], C-159
 web_attribute_type [ACE_PLUGINS_CLIENT], C-159
 web_attribute_valuemax [ACE_PLUGINS_CLIENT], C-160
 web_cacheexpiresec [ACE_PLUGINS_CLIENT], C-160
 web_cachesize [ACE_PLUGINS_CLIENT], C-161
 web_CAL_sharedkey [ACE_PLUGINS_CLIENT], C-161
 web_CAL_sharedkey [ACE_PLUGINS_SERVER], C-163
 web_custom_script [ACE_PLUGINS_CLIENT], C-162
 web_tmppath [ACE_PLUGINS_CLIENT], C-162
 webconferenceindetails (ocst.conf), E-61
 workbufsize [ACE], C-148
 writedn [LDAP], C-91
 writednpasswd [LDAP], C-92
 writelocktimeout [ENG], C-172
 writemaxlocktime [ENG], C-173
 wsdl, calendaring (ocws.conf), E-55
 wsdl, Web Client (ocws.conf), E-56
 セカンダリ・ページ属性 (ocwc.conf), E-46
 ファイル拡張子およびタイプ (ocwc.conf), E-44

ひ

ビッグ・エンディアン, F-27, F-124

表示

サインオン / サインオフ・アクティビティ, F-127

サインオンしているユーザーの情報, F-235

標準

インターネット, C-18

ふ

ファイル・システム

確認, F-31

クリーン・アップ, F-34

ファイルの書式

unicpr, F-59

unicpu, F-63

プロセッサ

ビッグ・エンディアン, F-27, F-124

リトル・エンディアン, F-27, F-124

へ

変更

イベント・カレンダー, F-215

ユーザー, F-215

リソース, F-215

ほ

ホスト, C-17

ゆ

ユーザー

移動, F-139

移動後の削除, F-40, F-46, F-57

コピーによる移動, F-40, F-53

サインオン, F-235

削除, F-215

追加, F-215

デフォルト・プロファイル・パラメータ, A-2 ～

A-5, B-2 ～ B-9

バックアップ, F-166

複数を1回で移動, F-40, F-47, F-58

変更, F-215

ユーザー管理権限の付与, F-16

予定表を別のリソースの予定表に追加, F-45

リストア, F-166

リスト作成, F-215

ユーザー・データ, コピー, F-40, F-53

ユーティリティ, E-1 ～ E-73, F-1 ～ F-238

uniaccessrights, F-4

uniaddnode, E-21, F-12

uniadmrights, E-21, F-16

uniarch, F-25

unib2lendian, F-27

unicheck, F-31

unicksum, F-33

uniclean, F-34

unicpinr, F-35

unicpinu, F-40

unicpoutr, F-48

unicpoutu, F-53

unicpr, F-59

unicpu, F-63

unidb2ldif, F-68

unidbbackup, F-74, F-168

unidbfix, F-79

unidbrestore, F-88

unidsacisetup, F-92

unidsdiff, F-94

unidssearch, F-97

unidssync, F-99

unidsup, F-104

uniencrypt, F-105

unigoup, F-106

uniical, F-113

unil2bendian, F-124

unilogons, F-127

unimvuser, F-139

uninode, F-144

unioidconf, F-152

uniping, F-158

unireqdump, F-162

unirestore, F-166

unirmold, F-169

unirndel, F-175

unirnsynch, F-176

unisizeof, F-178

unislice, F-180

unisnapshot, F-182

unisncdump, F-185

unistart, F-188

unistat, F-191
unistats, F-193
unistatus, F-200
unistop, F-205
unistrconv, F-209
unisyncrefresh, F-211
unitzinfo, F-213
uniuser, F-215
universion, F-234
uniwho, F-235

よ

予定表

アクセス権, F-4
別の予定表に追加, F-39, F-45

り

リスト作成

イベント・カレンダー, F-215
ディレクトリ・サーバーの非カレンダー・ユーザー,
F-97
ユーザー, F-215
リソース, F-215

リソース

移動後の削除, F-40, F-46, F-57
コピーによる移動, F-35, F-48
削除, F-215
追加, F-215
バックアップ, F-166
複数を1回で移動, F-40, F-47, F-58
変更, F-215
予定表を別のリソースの予定表に追加, F-39
リストア, F-166
リスト作成, F-215
リソース管理権限の付与, F-16

リソース・データ, コピー, F-35, F-48

リトル・エンディアン, F-27, F-124

リフレッシュの設定, A-7, B-6

リマインダの設定, A-7, B-6

る

ルール, タイムゾーン, C-72

ろ

ログ・ファイル, C-39 ~ C-45
情報の抽出, F-180